
とある伝説の勇者と禁書目録

キリト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある伝説の勇者と禁書目録

【Nコード】

N4561L

【作者名】

キリト

【あらすじ】

あるとき万年昼寝王のライナ「リユートは相棒のフェリス」エリスと一緒に『勇者の遺物』を発見した。それは異世界に人を跳躍させる遺物であり、巻き込まれたライナは一人、異世界へと飛ばされる。飛ばされたところは科学の発達した“学園都市”という場所で、彼はそこで一人の不幸な少年に出会う。

伝説の勇者と禁書目録と幻想殺しが交差するとき、物語は始まる -

- - - - -

プロローグ（前書き）

書き間違い、おかしい文法表現、つたない文章があるかと思いますが、温かく見て楽しんでいただけると幸いです。

プロローグ

ある草原に二人の男女がいた。

男の方は、妙に整えきれていない、まったくやる気というものに欠ける緩んだ黒い瞳。

脱力した長身瘦躯からは、覇気というよりも眠気がにじみだし、緊張感ゼロの雰囲気をもとわりつかせている。

年は17か18ぐらいだろうか。

名は、ライナ＝リユート。

かつてはローランド三〇七号特殊施設で育ち、軍事教育を徹底的に施されているにもかかわらず、今の彼の姿からは想像することはできない。だがよく見ると、彼の瞳の中央にはうつすらと真紅の五角星が浮き上がっているのがみてとれる。

アルファ・ステイグマ
『複写眼』

その言葉はいつも、畏怖と、嫌悪の感情を持って口になされる。相手が使った魔法の構成、形式、性質、威力、全てを見抜き、それを複写してしまう。普通は何年もかかって修得するはずのものを、一瞬でコピーしてしまうのだ。それは他国の魔法であっても例外ではない。いつ暴走するかわからないという欠点を除けば、この世界ではある一定のステータスをもっているともいえる。

対して女の方は・・・とんでもなく美人だった。

艶やかそうな金色の長い髪。信じられないほど整った顔。冷たい瞳に、スタイルのいい体を、動きやすそうな革の鎧で包んでいる。腰には、その華奢な腕からすると、飾りとは思えないような長剣。年は隣りに立っているライナと同じぐらいだろう。

名は、フェリス＝エリス。

彼女はローランド国王の護衛を任されてきたエリス家の長女だ。

別名を『剣けんの一族』。あくまで王の護衛を任務とし、戦争には参加しなかったためにその武名はあまり知られていない。

だが最強と称される剣士を生み出し続ける名家と言われている。

二人は二年前程に王に君臨したライナの親友シオン「アホターレ（アスタール）の命令のもと、『勇者の遺物』を探していて、次の目的地であるこの草原で勇者の遺物探しを行っていた。

勇者の遺物というのは、大昔に存在していたらう魔王を倒した勇者の武具のことだ。それらは強大な力をもっており、すぐさま手に入れるとことで、万年『昼寝』をしたいライナと『だんご』さえあれば生きていけると自負するフェリスは、スコップ片手にこの広大な草原でクレーター作りにいそしんでいた。

「まったく、シオンのやつ。この俺に向かって遺物探しを命じるか？ふつつ……。帰ったらボッコボコにしてやろうな、フェリス！！！」

今にも仕事放棄してそこらに寝ころんで昼寝しますというような表情と物言いでライナは隣りで一緒に穴を掘っているはずであろうフェリスに言った。

「ああ、そうだな。それとユニットだんご店のおだんご詰め合わせセットを100セットは買わせることにしよう。」

その国家の財政をまったく考慮していない傍若無人な言い方に、ライナは苦笑を返す。

「おいおい、いくらなんでもそれはいくらお前でも食えないんじゃないか？」

「ムッ、私を馬鹿にするなよライナ！！この私がだんごを残すは

ずがないだろう?。」

あいかわらずフェリスはフェリスだなあ・・・と思いつつ振り返りながら言葉を続ける。

「でも100セットも食べたなら太るぞ・・・っておおおおおおおおおおいッッ!!なんで手え休めてんだよ!?それに何こんなところで一人勝手にだんごにばくついてんだ!？」

「うむ。さすがはウイニットだんご店。ここまで持つてきても味がまったく変わっていない。こんなところをもつと見習うべきだぞ、ライナ。」

「って人の話を聞けええええええええッッ!!俺の質問、全無視じゃねえか!!それに俺がそれを見習って一体何になるってんだ!？」

「そんなことより手を休めるなライナ。日没までに終わらなくて、こんなところで野宿するのは遠慮したいぞ。」

「俺だつて嫌だよ!!じゃあお前も早く手伝えて!!！」

必死の形相で穴を掘り続けるライナからの願いに、フェリスは手に持つているだんごを見ながら一言。

「無理だ。」

「何でだよ!？」

「私は今、だんごを食べるのに忙しい。」

ぷちつとライナの頭の何かが切れたようだった。

ん?とフェリスがライナの方を見ると、ぷるぷるとライナの肩がふるえている。どうやら我慢の限界に達したらしく、手に持っていたスコップを放り投げると、「フェリス!!てめえぶつ殺ああおすすッ!!！」と叫びながらフェリスに向かって猛ダッシュしてきた。

フェリスは無表情のまま立ち上がると、口の中で「どうやら久しぶりにおしおきが必要のようだな・・・」と物騒なことを呟きながら、走ってきたライナに向かって腰の鞘さやから剣を引き抜くと、常人には見えない速度で剣の腹を横薙ぎにはらう。

が、今までさんざんやられてきた経験をもつライナは、予想通りにはらわれた剣を、かがみ込むような形でよけ、フェリスの懷に飛び込み掌底を放つ。

それをフェリスはぎりぎりでよけ、よけた動作を利用してコマのようにぐるりと回転し・・・見事にライナの腹に着弾させた。

「うごはっ!？」

と、奇怪な叫び声を上げて吹っ飛んでいくライナを尻目に、フェリスは『一人だんごパーティー』を再開した。

一方、飛んでいったライナは草を踏みつぶしながらバウンドしたのち、ぐったりと転がる。

「やっぱフェリスにやかなわねえ」。

と、当たり前の事実を再度確認するライナ。それでもって、意外に感触のよかった草の上での寝転がりに驚きつつ、まあなんかこのまま寝ちまおうかなあゝと、すやすやと寝息を立て始めたライナだが、その耳に、

「あと5秒で穴掘りを始めなければ、そこで永遠に寝かせてやる。」

なんて言葉が聞こえ、それが冗談ではないことを知っているライナは、ぶわあっと全身から冷や汗を出しながら、「はい！喜んでやらさせていただきます！！」と即座に捨ててあったスコップを拾い上げ、作業を再開した。

ばっくん、ばっくんとあと残り数秒だった命をかるうじてつない

だライナだったが、そこでふとかつんとスコープが異質な音を立てた。

なんだ？と思って慎重に掘り出してみると、それは何か黒い円筒形の入れ物のようで、長年土の中にあつたせいかな古ぼけている。まるで学校の卒業証書を入れるやつみたいだ。

とりあえずフェリスを呼ぼうと判断し、

「おい、フェリス。なんか見つけたぞ。」

と、叫ぶと一人パーティーに飽きていたフェリスがものの数秒でやってきた。

「ふむ。やつと見つけたか。で、それは何なんだ？」

「え」と、見た目は普通だよな。ちよつと待て。今、こいつで見える。」

そう言つてライナは一度目を閉じ、そしてゆっくりと開いていく。
アルファ・ステイグマ
『複写眼』はその円筒形のものの仕組みをすぐに解析・・・できなかった。

瞳に映るその物体は少しも不思議なところはない。

「やつぱり、解析はできねえかあ。まあ、前のやつも全然わかんなかったしな。」

「あいかわらず、使えない目だな。やはり、お前には変態色情狂しか取り柄がないな。」

フェリスは目に見えて落胆してみせる。

「いいじゃねえか！だいたいそんな簡単に解析できたら苦労はしねえよ！！それと俺は変態色情狂じゃねええええええッッ！！」

うつつと少し涙目になるライナだが、当然フェリスが気にするはずもなく、

「いいから、開けて見る。・・・能なしが。」

「ここまで言われて泣き出さない人なんているんでしょうか？」と本気で落ち込みモードのライナに、気分をよくしたのか、フェリスは無表情の中にわずかに笑みを浮かべた。

「・・・じゃあ、開けるぞ！」

ごくりと二人は息をのむ。未知の強大な力がもしかすると発現しかねない状況で、しかし二人はたいへん興味をもっているのか、あるいはフェリスはいざというときはライナを盾にしようと考えているのか、割と平然とした態度でふたを引っ張った。

きゅぽんつとしたかわいらしい音とともに、中には一枚の紙がくるくると巻かれて入っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「。。。」

なんかほんとに誰かがここに無造作に捨てた卒業証書に思えてきた二人である。

いやいやでもまだ希望を捨てちゃいかんとライナは勇敢に中の古ぼけたおうど色の紙を取り出す。

でもまさかこれがほんとに勇者の遺物だったとは、このときは二人とも夢にも思わなかった。

ライナは手に取った紙を慎重に開いていく。

中身は白紙・・・かと思いきや、すべて開いたとたん、ライナの頭脳をもつても解読不能の文字列が一気に出現し、それは紙を離れ、ライナの周りを取り巻いていく。金色に描かれたその文字の渦に巻き込まれているライナはさながら、どこかヘワープする一歩手前のようで。

「ライナッツ!!?」

あわてたフェリスがライナを閉じこめている黄金の文字を切ろうとするが、フェリスの剣をもつてしても、切り裂くことはできなかった。

ライナも懸命に光の外に出ることを試みるが・・・明らかにできそうにない。『アルファ・ステイグマ複写眼』も効果をなさなかった。

「なんつーか、フェリス。俺、どうやらひっかかったようだ。まあ、お前が巻き込まれてないだけまだマシか。」

光はだんだんとその強さを増していく。

と、こんなときになってまで、フェリスを心配しているライナを

間抜けさを見て。フェリスを安心させるように微笑みかける彼のその表情を見て。

フェリスは泣き出しそうになるのを懸命にこらえる。

「馬鹿がつー！お前がもしいなくなったら、私が寂しいだろうがつー！お前は私の相棒なんだぞー！勝手にどこかに行こうとするな！ー」

「俺のせいじゃないと思う、ってか普段からそんだけ素直だったらなあ。さらにポイントアップだったんだけどなあ。」

フェリスの意外な一面を見て、彼はそれでも軽口を返す。それは彼女の顔をほんの少しだけ赤く染めるのに十分で。しかしそれはまるで、もうこれから抜け出すことが不可能だと言っているようで。

フェリスは焦る。

が……しかしフェリスには剣しかなく、それが通用しないとなると完全にお手上げ状態であって。

光の文字列の王国に閉じこめられているライナは、そんなフェリスに、

「そう、心配すんなってフェリス。だいたいまだ死ぬって決まってるわけでもないだろ？もしかしたらどっか別の地域にとばされるだけかもしれないしさ。あつ、でも一応シオンのやつには報告しといてくれよな。」

ライナの足下に魔方陣が生まれる。五方星と六方星が幾重にも重なり、だんだんとライナを包み込むように文字列はライナとの距離をじりじりと詰めていく。

ライナはそれをもう一度『アルファ・スニグマ複写眼』で見るが、あいかわらず解析はできずに。

泣いているフェリスに、優しく微笑みかけて、

「ああ、なんだ。その、フェリス？ごほん。一応約束しとく。」

「約束・・・？」

「そつ！約束。柄じゃないのは百も承知けどさ。・・・俺はぜったいお前の元へ帰ってくるよ。たとえこの世に【絶対】なんてのがなかったとしても、俺は【絶対】に帰ってきてやるからさ。だから・・・心配すんな。」

魔方陣はいつそう数を増やし、光はいつそうその強さを強め、ライナの姿が光のベールに包まれる。

「おいっ！！ライナーーーーーッッ！！？」

何物も切り裂く刃は彼を助けることはできず、叩く拳は彼に届かない。

それゆえに彼女は絶叫して。

私の剣では彼を救うことはできないと泣き叫んで。

彼がいなくなることがこんなに悲しくて寂しいことだとは思わなくて。

強いと思っただけに自分の無力さが余計に堪える。

だんだんと消えかかっていく光の向こうから最後の声がする。

「いろいろとめんどろだけどさ・・・。」

俺は約束を守るぞ！

だから・・・お前もそれまで元気でいろよ？

人様に迷惑かけるなよ？

シオンのやつだけにしとけよ？

．．．また一緒にユニットだんご店に行くのをた．．．し．
．み．．．．．に．．．．．し．．．．．
．．．．．。」「

絶世の美女が泣き叫ぶ中。

ライナ＝リユートはこの世界から消えた。

プロローグ（後書き）

ライナが異世界に飛ぶまでの話を書きました。

次からはいよいよ異世界でのさまざまな出会いがあります。

基本は原作に忠実にいつてみよーかなーと思うので、何卒よろしく
お願いいたします・・・。

第一章 とある不幸な少年との出会い（前書き）

時間軸は『とある魔術の禁書目録』をベースにしていきます。
多少、この作品を知らない方にとっては意味不明な単語が出てくる
かもしれませんが、できるかぎり注釈を入れていきたいと思っています。

第一章 とある不幸な少年との出会い

上条当麻――。

『学園都市』に生きる学生である彼は今日も街の中を疾走していた。逃げ足だけなら、彼はそらのチンピラに捕まりはしないほどの速度をほこる。

『学園都市』は、東京都の3分の1ほどの大きさを持ち、街のいたるところに風力発電が立っていたり、自動掃除ロボが街中を走っていたり、住民のほとんどが『学生』であつたりといわゆるフツ―の場所ではない。

周りを壁に囲まれ、学園都市の『中』のほうが『外』より、文化レベルが2〜30年進んでいるといわれている。

ここは『記憶術』とか『暗記術』とか、そんな言葉でごまかして『頭の開発』を平然と時間割りに組み込んでいる場所である。

しかし、230万もの『学生』全てがマンガの主人公みたい人間をやめる訳でもない。全体で見れば6割弱が、脳の血管千切れるまで気張った所でようやくスプーンが曲がる程度の、まったくもって使えない『無能力』ばかりなのだ。

そしてこの上条当麻は無能力者だつたりするわけだが・・・。

なぜ、彼が今こうして全力で走っているかといえば、「追われているから」である。

チラリと後ろを振り返れば、いかにも柄がらの悪そうな不良のにーちやんが自分を追ってきているのが見える。

「ちくしょーっ！不幸だ――っ！！」

月明かりが満ちる中、彼は一人でも追っ手を撒まこうと全力で走り

ながら絶叫した。1対1ならまだしも、1対3なら迷わず逃げる上条は、タバコや飲酒で体を悪くした不良どもに捕まるわけではない。さらに一度も能力を使ってきてないことから、彼らも自分と同じ無能力者^{ベル}なのだとわかる。だとすれば逃げ切れるのは確実であることが分かるのだが・・・。

今日は七月十九日であって、ここ学園都市では明日から夏休みなわけである。

当然そこいらの道にはラブラブなカップルが何組も幸せそうに手をつないで歩いているわけであって。

「うう。なんで俺とあんなやつらと夜の街で鬼ごっこをしなければいけないんだ——っ!!」

半分涙目になりながら走り続ける上条。

「それもこれも今日という日がいけないんだーっ!!」

明日から夏休みだった上条にとって、今日、尋常ではないハイな気持ちになったのは仕方が無かったことなのかもしれない。書店では明らかに地雷だと分かる本を手に取り、お腹もすいてないのに一丁豪華に食うかーっと、近くにあったファミレスに入り、明らかに酔っ払った不良に絡まれていた中学生の女の子を見て、思わず助けてやっかなーと思ったとしても仕方がなかったことなのかもしれない。

まさかトイレからぞろぞろと仲間が出てくるとは思わなかった。女の子かつ!!と思わず突っ込んだ上条はそのまま踵^{かかと}を返し、夜の街へ走り出したのであった。

1時間ほど走り続け、都市部を離れた大きな鉄橋へと出た。

何回目になるか分からない、後ろを振り返る動作をした上条はようやく足を止めた。もう一人も追ってきてはいなかったからだ。ほぅっとうと息を吐く。誰も殴らずに問題を片付けられた自分をほめてやりたい。

「まったく、何やってんのよアンタ。別に私はアンタに助けてもらわなかったって、あんな雑魚の一人や二人や集団なんて、どうとでもできたつてのに。」

刹那、上条の勇氣ある行動をけなす言葉が前方から放たれ、ギリと体が凍りついた。暗がりでは気づかなかったのだ。

見ると、さっきの絡まれていた女の子が立っている。灰色のプリースカートの半袖のブラウスにサマーセーターの何の変哲も無い中学生ぐらいの女の子だ。

「えー……まさかー……。」

疲弊した上条の口から溜め息と呟きが洩れる。

「お前が後ろのヤツラを？」

「ええ、そうよ。めんどいから私が焼ヤッいた。」

バチンっという明らかに電撃チックな音が夜空に響く。

それは彼女がスタンガンを持っているわけではなく。その茶色い髪から電極みたいにバチバチと火花を散らしているのだ。

落ちていたコンビ二袋が彼女の顔の側に飛んだ瞬間、迎撃装置のように青白い火花がコンビに袋を吹っ飛ばした。

上条は『女の子を助けよう』といった覚えは無く。むしろそのまま手を出していたと必ず再起不能にされるであろう

少年たちを助けようと思ったただけだ。

その女の子の名前は御坂^{みさか} 美琴^{みこと}。

電気を自由自在に操る彼女は、常盤台中学のエースにして学園都市に7人しかいない超能力者《レベル5》。上条とは因縁の仲である。

なにしろ……。

「まあ、そんなことはどうでもいいわ。とにかく決着をつけるわよ！―」

決着というよりもむしろいつも一方的にやられている上条にとっては『迷惑』の一言でしかない。しかし、戦績は上条の全戦全勝だった。

今宵も美琴は上条から『勝利』の2文字を勝ち取るため、メダルゲームのコインをつかみ、親指で真上に弾き上げたそれを再び親指に乗せ……。

「っ！―」

直後。

いきなりオレンジ色に光る槍が上条の顔のすぐ横を突き抜けた。

レーザー光線に近いかもしれない。

技の名は『^{レールガン}超電磁砲』。

美琴の必殺の一撃。理屈はリニアモーターカーと同じで超強力な電磁石を使って金属の砲撃を打ち出す艦載兵器である。

上条に見えたのは後に残る光の残像だけ。後ろでは鉄橋の路面が轟音とともに大きく吹っ飛んでいた。あまりの熱量に一部が融解し

ており・・・。

（正直、あんなのを人間に使ったら、跡形も残らねーだろっ！！）
と、上条は一人衝撃を受ける。

そんな彼を見て、美琴はニヤリと笑い、

「じゃあ、本番いつてみましょーか。」

と、まるで『今から買い物にでも行きましょー』という軽いノリで、上条の死刑が宣告される。

「いやいやいやいや。待てってビリビリ。さすがに今の俺に打とうだなんて馬鹿げたこと、考えてないよな？」

とりあえず相手を落ち着かせようと確認を取りに行く上条。誰でもそう簡単には死にたくはない。しかし彼の言葉は、

「ビリビリって言うなーっ！！！」

という言葉とともに問答無用で超電磁砲レールガンが発射された。

「うおわっ！！！」

とっさに右手を前に出し防ごうとするが、相手はアスファルトをも破壊する凶悪な一撃であつて。

すぐさま彼は轟音に包まれ、物理的にこの地球上からおさらばする運命だったのだが。

パキンツと何かが壊れる音が聞こえ、

「で、何でアンタは傷一つないのかしら！？。」

その言葉どおり、爆炎がはれた先に、美琴の瞳は、さっきと同じところに突っ立っている無傷の上条を捉えた。

『イマジンプレイヤー
レベル0 幻想殺し』。

無能力者の上条当麻が持つ唯一無二のチカラ。

上条の右手に宿っているそれは、超能力だろうが何だろうが、『異能の力』を使うモノなら、それがたとえ神様の奇跡^{システム}であつても問答無用に打ち消す異能力。学園都市の書庫^{バンク}にも載っていないその能力はある意味最強なのだが、残念なことに右手にしか宿っていない。つまり右手以外の場所に当たればフツーに攻撃喰らうということであり、しかも異能力でないもの——つまりコンクリの破片などは防げないわけで。

上条は余裕^{余裕}綽々の顔をビキビキに引きつらせていた。

（死ぬーっ！！マジで死ぬー！！きゃーっ！！）

右手に当たったのはただの偶然で・・・、心臓をバクバクさせながらも、必死にオトナな笑みを取り繕ってみる。

「なんていうか、不幸っていうか・・・ついてねーよな。」

まもなく深夜になる。上条は今日、7月19日の終わりをこつ締めくくった。

たった一言で、本当に世界の全てに嘆くように。

「オマエ、本当についてねーよ。」

「やっぱり、俺は不幸なんだな。」

七月20日、夏休み初日。

なぜか上条は自らの不運さを嘆いていた。

昨日夜中ずっと続いた御坂の攻撃&鬼ごっこは、上条が御坂を必死で撒いたことで終わり、自身の寮へ帰ってきていた。第7学区が上条の学生寮がある地区である。

朝、いつもどおり遅めに起きた上条は、エアコンが壊れ、うだるような熱気が支配する一室の冷蔵庫の前に座り込んでいた。

どうも昨日の夜に雷が落ちたらしく電化製品の8割がやられていて、エアコン含めもちろん冷蔵庫も例外ではなかった。それは冷蔵庫の中身が絶滅していることを意味していた。

「雷って……。原因は明らかにあいつだろーっ!!」

上条はこの場にいないビリビリ中学生に向かって叫ぶ。

さらに不幸体質である上条の不幸はこんなもんで終わらなくて、キャッシュカードの破壊と担任からの補習ラブコールが待っていた。だが、それは今に始まったことではなく。

すでに慣れてしまった上条は行動を移すことに決め、

「さて、いい天気だし布団でも干しとくか。」

青い空と、降り注ぐ太陽の暑そうな日差しに目を向けながらベランダに向かい。

白い布団と、カラフルな布団が干してあるのが見えた。

（・・・カラフルな布団！？）

「いや、待て待て。おかしいな。白い布団はまだしもカラフルな布団なんて俺は持ってないはず。」

上条は首を傾げながら、ベランダに近づいていき、バツと窓を開ける。

白い布団とカラフルな布団はよく見れば・・・。

どちらも人間だった。

瞬間、上条の思考はフリーズした。は？と目が点になる。

意味不明だ。思わず手にしていた布団を落とす。

手すりに乗っかり、両手両足をだらりと下へ下げていた。

白い服を着ているほうはどうやら『純白』の修道服らしきものを着込んだ女の子であって、しかも銀髪の外国人——。要所要所には金の刺繍が織り込まれている。

歳は14、15ぐらいか。

（ほんっ、本物のシスターさんっ！？）

少し感動する上条。すると窓を開ける音に気づいたのか、顔がゆっくりと上がる。

（うわっ！すげっ……！！）

白い肌に緑色の瞳が海外スキルゼロの上条にとってはこのうえなく新鮮で、お人形めいた印象がある。

（はっ！！）

ここで上条は重大な事実を発見した。一人鎖国状態の上条にとって、『外国人』は未知の世界のお人であり、もちろんそんな人と会話がスムーズにいくはずもない。

（ど、どどど、どうしよう。土御門を呼ぶか！？いやあいつは確か用事があるとかでどこかに出かけてたな。だとすれば頼めるひとは……。）

土御門は上条と同じ学校に通っているクラスメートであり、彼の部屋は上条の隣である。いつもはくだらない話ばかりしているが、時たま助け合う仲だ。

が、そう簡単に思いつくはずもなく。

「オ、――、――」

目の前の可愛い女の子が、可愛い唇で言葉を紡ぐ（つむ）ようにし、

（うわあーっ！ちょっとタンマだー！！）

という上条の心のシャウトをあっさりと無視し、少女ははっきりと声を出す。

「おなかへった。」

「……。」

自分があまりに馬鹿だから、外国語を勝手に日本語に置き換えたのかと上条は思った。

「おなかへった。」

「……。」

「おなかへった。」

「……。」

「おなかへった、って言ってるんだよ？」

どうやら聞き間違いではなかったようだ。超日本語ぺらぺら少女で助かった。

「だから何か食べさせてくれるとうれしいかも。」

「……。」

上条は無言で後ろを振り返り、今はただの箱と化している冷蔵庫
へと目を向け。

おもむろに歩き出し、その中から腐っているだろう焼きそばパン
を取り出し、「ほれ、食え」とばかりに少女の鼻先へと差し出す。
少女はそれを見てぱあつと顔を輝かせ、

「ありがとうございます。」

がぶつと焼きそばパンは食われた。
上条の腕ごと。

「ギヤ————つ!!!!!!!!!!」

夏休み入って最初の悲鳴が学生寮に轟いた。

ちなみにもう一人のカラフルなほうは、いかにも冒険者ですつて
いっ感じの鎧やマントを着ており、歳は16、17ぐらいの長身で
瘦躯で茶色がかった色の髪をした青年風な男だったが。

青年はは、上条と白服の少女の騒ぎにも起きず、爆睡していた。
折り曲げた体勢でありながら、幸せそうな顔で涎を垂らしていて

「こんな状況で寝れるやつが、存在するんだな。」

と、軽く尊敬されつつ、あっさりと警戒心を解いた上条の手によ
って布団に運ばれたのち、ふと寝言を洩らす。

「だあゝかゝらゝ、俺は変態色情狂じゃないって言ってるだろフ
エリス!? むしろお前のほうが迷惑暴走だんご娘・・・悪い! 俺が
悪かったフェリス!!! だから無表情で剣を抜こうとすぐぎああああ

あああッッ！！」

青年はそこで目を覚ました。

首をぐるりと回し、あたりにフェリスがないことを確認してほつと息を吐く。

そしてもう一度軽く部屋を見渡し、寝ぼけた眼差しで、白服の少女と上条を見つめ、

「え」と、ここがどこでどういう場所でお前らが誰なのか教えてくれないか？？って聞こうと思ったけど、面倒だしせっかく布団の上なのでこのまま寝ることにするよ。おやすみ。」

「この状況で睡眠を取るのっ！？」

さしもの空腹少女も、さしもの不幸少年もこれには突っ込まずにはいられなかった。

第一章 とある不幸な少年との出会い（後書き）

最後にやっと真打ち登場しました。

次は自己紹介の場面を書こうかなと思います。

ってか設定説明みんどくせーっ！！

そしてところどころ本編とかぶらさなきや話進まねええええええ！！

第二章 とある三人と三つの世界（前書き）

ついに上条当麻、インデックス、ライナ＝リユートが邂逅します。

第二章 とある三人と三つの世界

学園都市、第七学区にあるアパートの一室にその三人はいた。

時刻は朝。ベランダから下を除けば、学校へと急ぐ学生がちらほら見えるはずだ。

一人は、この部屋の正当な住人である上条当麻。黒髪のツンツン頭が特徴的な、どこにでもいる普通の高校生だ。今、彼は、残り二人の人物へ、この学園としについての説明を終えたところだ。ちなみに彼の右手には幻想殺しなる能力が備わっており、そのチカラはありとあらゆる『異能』の力を打ち消すことができるのだが・・・。

何故か今、彼は、ベッドの下であぐらをかいていた。それというのも、ベッドの上にはすでに先客がいたからだ。

いや、珍客と言ったほうがいいのかも知らない。

なぜなら、そのうちの一人は明らかに『しすたー』さんであることが一瞬でわかるような真っ白な修道服を着ていた。不覚にも、その普段ではあまりお見かけしないシスターさんを間近に見れて、少し感極まった上条であるが、まさかそんな大食いだとは思わなかったというのが、せつかく冷凍機能がなくても食べられる類のお菓子や缶詰を目の前の暴食シスターに全部食されてしまっている上条の感想だ。

今も口を真剣に動かしながら、

「もぎゅむぎゅ。私のもぐ、名前はむぐ、インデックスがつがつてゴクゴクいうんだよ?」

「せめて全部食べてから言えやコラ!!」
即座にツッコんだ。

(ああ・・・、俺のいざというときの保存食たちがー。ちくしょー!!！)

少し涙目になる上条であったが、ようやくあらかた食べ終えたのか、満腹そうな顔で口を開く。

「私の名前はね、インデックスっていうんだよ？食べ物ありが」
「偽名じゃねーかつっ!!」

お礼を言おうとしていたインデックスの言葉を遮る形で上条はツッコむ。お礼をいうチャンスをつぶされたインデックスは、ぷくぷくと頬を膨らませて、

「確かに偽名だけど!!人のお礼を途中で遮るなんてひどいと思うんだよ。」

「ああ、そりや確かに悪かったな。で？」

「正式名称はIndex-Librorum-Prohibit
orum。こつちの言葉だと禁書目録かな？イギリス清教内、第零^{ゼロ}
聖堂区『必要悪の教会』^{ネセサリウス}所属の魔道書図書館なんだよ。」

・・・はい出ましたよ、不可思議ワールド。いつかは出るんじゃないかなとは思ってたけど、すぐ目の前にっ!？と上条は慌てふためく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

「とうま？」

「もはや、どうツッコむべきかわかんねえな・・・。」

軽く遠い目をする上条は、どうやら本気で考えることを放棄した

らしく、まるで老後にのほほんと余生を過ごすおじいさんのようだった。

しかし！と上条はもう少しだけ話を聞く努力をしようと思う。

「えーと、じゃあまずはなんでそんな名前なのか教えてくれ。」

「それは私が10万3000冊の魔道書を持つてるから。その魔道書の全てが、常人が見ると発狂するほどの毒をもった『禁書』だけど、私は完全記憶能力と特殊な術式があるから、頭の中にその知識の全てをもっているんだよ。」

オカルト
非現実。

学園都市の対極に位置するであろうもの。当然、上条は信じていなかったのだが、

「えっ！まじで！？この世界にも魔法ってあるのかッッ！？」

いきなりこの場でただ黙って話を聞いているようで実は半分夢の中だった、上条よりもいくらか年上であろう、長身痩躯で常に眠気を漂わせた男が驚いた顔をしていた。

「魔法というより魔術っていったほうがいいかも。十字教では歴史の中でさまざまな「聖人」や「君子」や「天使」やらのエピソード、伝承をもとにして術式を組み上げるんだよ。十字教も今ではイギリス清教やローマ正教、ロシア成教とかに分かれちゃってるけどね。私が属してるのはその中でもイギリス清教の中にある必要悪の教会。^{ウエス}一般人に危害を加えたり、裏切ったりした魔術師を処罰や捕縛するための組織なんだよ。」

「うーん。それだけじゃいまいちよくわかんないな。」

いつもの彼を知る者が見たら驚くほど真剣な表情で男は言う。

「とばされた場所はめちやくちや文明が発達してて、おまけに科学なんてのがひしめき合ってるのかと思いきや、そうか魔法も実在するのか・・・。」

などと一人ごちる男に対し、なんでそんな話にノれるんだと上条は思いながら、男に尋ねる。

「で、お前は誰なんだ？」

「あゝ、名はライナリリユート。好きなのはふつかふかの布団と枕。そして昼寝。よろしく。」

ほわほわした雰囲気得上条に話しかけるライナ。

「俺はローランドっていうところから来たわけだが。当然この世界じゃない。異世界から来たんだ。まあ、とばされただけだな。目下の目標は元の世界に変えるための方法を探すってことかな。」

はあ・・・、と上条はため息を吐く。また出たよ、今度はもはやこの世界でもねえのかよと衝撃を受けるが、インデックスにいたってなぜか目をきらきらさせている。

「どうりでそんな冒険者みたいな格好をしているんだね！でもそんな異世界にとばすような魔術は私の知識からは見つけれないかも。」

「うげっ！10万3000冊もの中、しかも禁書にもないってことか。こりゃ戻れる可能性が一気に低くなりそうだなあ・・・。」

遠い道のりに思わず何もかも投げ出してこのままずっと昼寝を続けていたい衝動に駆られたライナだが。

フェリスとの約束もあって、少しやる気を見せることした。

彼は、自分には到底信じられない話で勝手に盛り上がっている二人をただ呆然と見ていた上条に向かって問いかける。

「なあ、ここらの近くに図書館はあるか?? できれば大きいところが嬉しいんだけど。」

「それなら第14学区に学園都市で一番の広さを誇る図書館がある。あそこなら学園都市の『外』よりも圧倒的に情報が集まるはずだ。駅を乗り継げば30分ぐらいで着くぞ。」

「おお、そりゃいいな。あとできれば・・・。」

「ん? 何だ??」

「お金を貸してくれねえ?? 俺ってば、無一文でさ。」

「・・・まあ少しならいいけど。」

「さんきゅ。助かる。んじゃま、ちよつくら行つて来るよ。」

まるで散歩にでも行つて来るよとも言いたげな感じで部屋を出ていこうとするライナ。

その意外な行動力に、インデックスと上条は目を見張り、この部屋の正當な住人はライナに告げる。

「俺も、これから学校行かなくちゃだから、鍵は扉の横の隙間んとこに隠しとくから。」

こちらも意外な優しさを見せた上条である。

「おお、泊めてくれるのか。まあでも三日ぐらいは帰れないかもな。うわゝめんどくせ。」

と、言いながら実にあつさりと出ていったライナ。第14学区への行き方などは分かっているのだろうかと不安になる上条だが、行つてしまったものは仕方がない。

自分のことは自分でなんとかするだろう。

つまりなにが言いたいかというと、

「眠そうな人。」「眠そうなヤツ。」

見ているこつちまで眠気をさそう奴だと、違う意味で恐怖を感じる上条達。

そのあと、インデックスが実は魔術結社に追われているという話を聞き、来ている服が実は魔術的に『法王級』の防御力を持っている『歩く教会』であることを教えられ、さらに右手を馬鹿にされた上条がインデックスの魔術がかかっている修道服にさわって案の定『歩く教会』は分解し、・・・怒ったインデックスの噛み付き攻撃を発動させてしまったことはここには書かないでおく。

上条は、危険な目には遭わせられないと出ていったインデックスと別れ、補習へと向かう。

（そういや、インデックスが頭に乗つけてた、一枚布でできた白のフードを、部屋に置き忘れたままだったような気がするんだけど。まあ、いいか。）

その帽子のフードは、独立していたせいか上条の右手の一撃から免れており、当然、その魔力はサーチされる。つまり、上条の部屋から魔力が感じられるという状況が続くわけであって。

第二章 とある三人と三つの世界（後書き）

時間めちやくちや過ぎるのはやいですよね!!

第三章 とある勇者と第三位（前書き）

ライナ側の話で書きます!!

第三章 とある勇者と第三位

（何か、暇だなー。面白いことでも起きないかしら？例えば私の目の前で何か事件が起こるとか♪）

そんな物騒なことを考えている少女。

名は御坂美琴。

学園都市第三位の超能力者^{レベル5}。

超電磁砲^{レールガン}と言われている彼女は灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターという出で立ちだ。ようは常盤台中学の制服である。

今は学校の帰りだ。明日から夏休みということもあって、学生が大半を占めているここ学園都市は軽くお祭り状態になっている。見れば道にはそこそこの学生たちが友達と楽しそうに話しながらあるいたり、カップルが腕を組んでらぶらぶしていた。

そんな道を少しの邪悪な期待とともに歩いていた美琴だったのだが・・・偶然にも事件は起こった。

「きゃーっ！！」

どこからかここからそう遠くない場所で悲鳴が聞こえたからだ。あまりの偶然に・・・本人にとつてはよっぽど迷惑だろうが・・・暇をもてあましていた美琴には天から授かったプレゼントのように感じた。

「うわお♪事件の予感♪」

おそらくは美琴もどこか周りの空気に感化されていたんだろう。いつもの3倍ものテンションで声のした方に走っていった。

「きやーっ!!」

悲鳴をあげたのは、中学校3年、もしくは高校1年といったところか。この近くの場所にある高校の制服を着た女生徒で、友達と一緒に買い物でもして帰るところだったんだろう、おそろいの紙袋を手をしている。

彼女たちは今は見るからに荒くれ者とわかる少年の集団に囲まれていた。

彼らはスキルアウト。そのほとんどが無能力者であり、能力者やジャッジメントアンチスキル風紀委員、警備員に敵対している不良グループだ。

計八人が買い物帰りの彼女たちを取り囲んでいた。

「どうだ？嬢ちゃんたち、俺らと遊ぼーぜ。」

「そうだそうだ。楽しいよ。」

彼らはしきりに誘っているが、もちろん彼女たちは首を縦に振ることはなく。

「ちっ！面倒だ！！俺らがこんだけ誘ってるのに拒否するってか？」

「どーやら痛い目見るしかなさそーだな！」

八人のうち二人が、彼女たちの手をつかむ。当然周囲にも人はいるのだが、ある者は関わり合いたくないとばかりに通り過ぎ、また正義感の名のもと、勇敢に立ち向かってきた少年は不良の何人かに阻まれ、彼女たちのところまで届くことは無かった。

美琴はそんな場面を前方に捉えながら、全力で走っていた。彼らは遠目から見ても無能そうなので助け出すのは問題ないとしても、早く行かねば壁に追い詰められている彼女たちに暴力が振るわれる可能性がある。同じ女性である美琴にとって、もしそんなことになったら彼らを殲滅してしまいかもしれない。冗談じゃなく。だから走っていた。

（あと80メートル。）

通行人の隙間を縫い、一直線に走る。そうしている間にも、不良少年たちは包囲の輪を縮めていく。

（あと50メートル！）

目の前の光景がしだいに大きくなってくる。美琴の前髪からはすでにバチツという音とともに雷撃が飛び交っていた。

（あと30メートル！！少し間に合わない！！）

大きく舌打ちしつつも走る美琴の前では・・・まだ彼女の接近に気づいてないらしくこちらに背を向けたままだが・・・少女たちに向かつて大きく手を振りかぶる！！

なすすべも無く彼女たちは殴られ——られ——はしなかった。

いつの間にそこに現れたのか。

少なくとも少年たちの目には映らなかった。

「ったくよく。ただでさえこれからめんどいことしなきゃなんないのに、お前ら仕事増やすなよ。」

その男は、振るわれたはずの少年の腕をがっちりつかんでいた。少年が腕を押しても引いてもビクともしない。その男の年は少年たちと同じかそれより上にも見える。長身痩躯で猫背ぎみのやる気のなさそうな瞳をした男だ。

何より奇妙なのは男が着ている服だ。どこの本から出てきたのか、冒険者のような・・・それでいてそこそこ様さまになっている。動きやすいにもかかわらず強靱な糸で織られている服を着て、その上から魔道士が着るようなローブを羽織っていた。肩には（今はローブで隠れていて見えないが）この世界には存在しないローランドの紋章が付いている。（本当は魔法に対する防御機能を上げる魔法もかけられていたのだが、それは上条の右手に触られたことによって四散していた。今、かけているのは男自身の魔法によるものである。）

「何もんだ、貴様あッ!!」

「何もんって言われると、そりやおまえ、ライナリリユートって言うんだが。」

「どこの国のやつだ、てめえ！俺たちを馬鹿にしてんのかッ!? ああ!？」

「馬鹿にも何も、こんな人数で少女を襲なんてことするのは馬鹿以外の何者でもないだろーが。それと俺の国はローランドってところ。」

律儀に答えてくれたが・・・『ローランド』ってどこ??と周囲にいた男たちだけでなく二人の少女も思ったが、まあ世界は広いし自分たちが知らない国だってあるさと、状況が状況だけに無意識のうちに忘れられてしまった。

今の彼は、ふだんの彼を知る者では想像できないほど、真剣な空気を纏まとっている。それこそ刃を切り裂くような・・・。

だが不良とは言っても、戦闘に関しては多少知っているだけの『素人』では、ライナの放つ空気に気づくものはなく、

「おら！てめえ！たった一人で俺らに敵^{かな}うと思ってるのかッ！？」
「ああもう、ほんとめんどくせーなー。」

少年の腕をいまだ掴んでいるがイマイチやる気をみせないライナに、少年たちの方がしびれを切らして殴りかかってきた。

それを冷静に見ながら、まずはライナが腕を掴んでいるやつを足払いをして浮かし、そのまま一番近くまで来ていたやつに放り投げる。メキヤツと嫌な音を立てながら吹っ飛び、地面を数回バウンドしやっと止まった。

次にナイフで切りかかってきたやつには、半歩横によって避け、腹にまわし蹴りを放つ。そいつもちょうど真横にいた奴を巻き込んで彼方へ吹っ飛んでいった。

「ば、化け物か！？」

ライナの体術のすごさに（というよりもあまりの豹変振りに）恐れ慄^{おのの}いたのか、残る4人は仲間を見捨てて逃げようとするが、

「逃がしやしねーよ。」

そう言っ^てライナは空中に手を踊らし、空間に魔方陣を描き始めた。

光り輝くそれは瞬く間に完成し、

「求めるは雷鳴>>>・稲^{いね}光」

魔方陣の中央から生み出された雷撃は逃げようとしていた4人の

背に見事直撃した。あつ！？だの、ガツ！！だの言つて4人は倒れ、一人立ち尽くしていたライナは、戦闘のせいで縮こまっていた女の子二人に対し声をかけた。

「もう大丈夫だから行つていいぞ。あ、あと一応警備兵的な立場の人呼んでこいつら捕まえてもらつてからな。」

無能力者の集まりとはいえ、そこそこ凶悪な連中をたつた一人で倒したライナに肩がびくつと震えた彼女たちだが、助けてくれた事実は変わらないし、まして雰囲気的に怖そうでもなかったせいか、素直にお礼を言うことを決意した。

「助けていただいてありがとうございます。」

「いんや、大したことはしてないから。まあ、これからは気をつけろよ？」

「はい！」

本当にありがとうございましたと言いながら去っていく二人を見ながら、ライナは後ろを振り返りつつ言った。

「で、戦闘中ずっと見ていたお前は誰なんだ？？」

気配をずっと感じていたライナが目に向けた先には――
美琴が、驚いた顔をして立っていた。

美琴はその戦闘を始めからずっと見ていた。

いや、もちろん傍観者になどなるつもりはなく、駆けつけた瞬間に雷撃の槍を繰り出そうと思っていたのだが、あろうことか一人の男が横合いから飛び込んできて、殴りかかっていた男の腕を掴んで止めたので驚いていたのだ。

しかもその動きは明らかに一般人のそれじゃなく————も
っと何か洗練されていて……

（ぶっ！何よあいつ。どこの冒険者よ！？でもあの動き、どうみても素人じゃないわね……。それどころか余裕さえ見えるってことはとんでもない実力者なのかしら……？）

思わず立ち止まり考える美琴の思いはほとんど中していた。数分と待たず戦闘になった飛び込んできた男とスキルアウトたちは、ライナと名乗った男のほうに瞬く間もなく半数をやられ、残りの者は逃走に移ってしまった。

（仕方ないわね。ここは私がやってあげようじゃないの。）

まだ毒気は抜かれてもやる気はそこまで抜かれていなかった美琴は、逃げる男どもに容赦なく雷撃の槍裁きの鉄槍を放とうとしたのだが、

「ッッ！！！」

今日一番の驚きが美琴の体を包んだ。

逃がしやしねーよと男ライナが言ったかと思うと、高速で空中に何かを描き始め、瞬時に完成したその中心から、なんと『雷撃』が放たれたからだ。同じ電撃使いから見ても自分とあまり遜色そんしょくの無いほどの威力。

手加減はしていたのだろう。倒れた男たちはみな一様に手足をひくひくさせているか呻き声をあげている。しかしその余裕が美琴の

何かを刺激した。

（まさか、このライナって男。私と同じ系統の能力者かなの？それにしてはなんか魔方陣っぽい幾何学模様を描いていたようだったけど……。あーもう、気になるじゃない！！）

そいつは二人の少女たちと会話をしたあと、ふとこちらに向き直り告げた。

「で、戦闘中ずっと見ていたお前は誰なんだ？」

美琴は軽く寒けを覚えた。あの程度の輩、自分なら余裕で速攻で蹴散らせるだろうが、周りの状況を正しく知覚できるかどうかは疑問だ。

（こいつ、あの戦闘中に私の存在を認識していた！？）

「私の名前は御坂美琴。この学園都市に七人しかいない超能力者^{レベル5}の第三位よ。で、アンタは？」

聞いた男「ライナはなぜか美琴の返事を聞いて思いつきし脱力してしまった。」

「はあ。」

「ちよっと！なんでそんなため息ついてるのよ！！」

「いや、だってほら、考えてもみるよ。俺はものすごく昼寝が大好きなのは知ってるだろ？」

当然ながら美琴はライナとは初対面なわけで、

「知らない。」

「大好きなんだよっ！！そんなわけで俺は昼寝をしていたいわけ。オーケー??」

あっさりとスルーされた。軽くぶちん。

「.....」

「そんな俺が少しやる気を出そうとしてんのにさ。途中で女の子囲んでる連中がいるしよ。仕方なく、仕方なく助けたと思ったらさ。」

無言を保つ美琴にライナは力説する。少しぴきん。

「.....」

「つまり！！学園都市第三位だか知らないが、要は強いんだろ？俺が戦う必要もなかったわけじゃん？だから早く代わってほしかったんだよちくしょー！！」

つまり美琴も弱そうな女の子の一人であつたから、だあーっ、周囲にいるのが女の子だから俺がやるしかねーッッ！！的な感じで頑張ったのにライナだが、まさかそのうちの一人はガチに強かったというこの事実。

おそらくフェリスに対しても同じようなセリフを吐いたライナである。まあ吐いた途端、視界が暗転するのは目に見えているのだが。

一通り力説して沈静化したライナだったが、ふと会話の途中から握り締めていた美琴のこぶしがぶるぶる震えているのに気が付いた。

（まずい！？一氣にいろいろ言っちゃって泣かせちゃったのか！？）

我に返っているいろと猛省し始めるそのライナの耳に、美琴の声が聞こえた。

「し——」

小さくてあまり聞こえない。「し？」とライナが聞き返す。

そんな彼を美琴はきつと睨みつけ——

「死ねッッ！！このヘタレ他力本願野郎おおおおッッ！！！」

言葉とともに突如として美琴の前髪から火花が散り、電撃がライナに向かって一直線に迸^{はなは}った。

「うおおっ！！！！！」

それでも避けられたのはフェリスのおかげか。いつどこで迫ってくるかわからない彼女の剣のおかげで、ライナの反射神経は並大抵のものではない。今のは魔術か？と『複写眼^{アルファ・ステイグマ}』で解析を試みるが、当然魔術ではないので構成その他もろもろは読み取れず。結果、避け続けるしか選択がなくなった。まさか女の子相手に本気を出すのも忍びないというライナの優しさもあるわけだが。

「って、あぶねーじゃねえかつっ！！今の食らってたら頭吹っ飛んでただろ？確実に！！俺が避けてなかったら、お前殺人者だぞ？」

「うるさいわね。この昼寝ヤロウ。私だって助けようとしてたつてゆーのに何その態度！？しかも同じ雷撃使いみたいだし、ちょっと相手してもらおうと思ったっていいーじゃない！！！」

「馬鹿かお前は！？今のは相手するっていうより殺す勢いだっただろーが！！」

「さっきの実力で避けられないわけないでしょーが！！いい！？基本的にわたしは自分より強い奴がいるのが許せないのよ！！」

なんだよその理不尽な理由はあああああつっと言うライナへ問答無用で雷を放つ美琴。無論ライナは体力を総動員させて逃げに徹する。

「おのれ、ちょこまかと！！アンタも闘いなさいよ！！」

「ふざけんな！何で俺がそんな面倒くさいことしなきゃいけないんだ！？俺のモットーは、一に昼寝で二に平穩。三四も昼寝で五も昼寝なんだああああ！！」

「ほとんど昼寝じゃないそれ！？どんだけ昼寝がしたいのよアンタ！！つかもう永遠に昼寝させてあげるわ！！」

「それ死ぬよね！？もう幸せ気分どころじゃないよね！？」

「（笑）」

「怖っ！！」

辺りは雷撃によって道が抉れ、クレーターを山ほど生産していた。しかし、ライナにあたる気配はない。

（なんで一発もあたらないのよ？こいつは化け物！？）

そんな美琴の攻撃を必死に逃げ続けるライナだが、そのうち我慢の限界に達したのか、

「ああもういつ！俺は逃げる！！んなわけで、さらばだ！！」

言って空中に指を躍らせる。薄い光を纏ったその指はまるで生きているかのように空中を踊り、一つの魔方陣を完成させた。

『求めるは水雲>>>・崩雨^{みすみ}』
「なっ!?!」

魔方陣の中心から吐き出された大量の水は、今まさにライナに電撃を放とうとしていた美琴を巻き込み、自身のチカラで感電させられた美琴は為すすべもなく、にやわわと奇怪な声を上げ遠くへ流されてしまった。

ふう、っとライナは大きく息を吐く。もちろんこの程度で疲れたわけではない。

（まあ、あいつは電撃使いだっだし感電しても大丈夫だろ。崩水^{みすみ}も威力弱めておいたし。さて、さっさと図書館へと急ぐか。）

ライナは潰された時間を取り戻すべく14学区へと走り去り、流され取り残された美琴はメラメラと心の内で再戦を誓う。

「今の昼寝バカといい、あのツンツン頭といい、今度会ったらタダじゃおかないわよッ!」

第三章 とある勇者と第三位（後書き）

いまいち戦闘部分の描写が弱い。

あと、会話へのもっていき方が難しいです><

「とある魔術のイン。ックス」の作者さんには本当に尊敬しています。

第四章 とある事件と物語の始まり（前書き）

もうライナ視点で書いていきまーす。

第四章 とある事件と物語の始まり

第14学区のとある図書館。

そこではいかにもやる気なげな青年が本の山に埋もれるようにして知識を吸収していた。時刻はもうそろそろ夜の8時というところか。そろそろ帰らなければここももうじき閉まってしまう。

（ぐあああーっ！！眠い！！やばいやばいよ死んじゃうよ。）

キャバシティー

彼の能力の限界を超えてしまったためなのか、それともたびたび襲われる睡魔に必死に抵抗していたためなのか、彼の自己同一性は崩壊しかけていた。

アイデンティティー

彼の名前はライナ・リユート。

あいかわらずローランドの特殊な装備のままで、椅子から立ち上がってその長身瘦躯をぐぐつと伸ばしてあくびをした。

ライナがここに来たわけは当然見知らぬこの世界のことを少しでも学ぼうとしたからであり、今来ている第14学区の図書館はなかなかの情報量があった。

へえ、さすがは『学園都市』だなと感慨深く呟き、本をだるげな動作で片付け、よろよろとした様子のまま図書館を出た。

（つてか、むしろそのまま図書館で寝ればよかったんじゃない？空調も利^きいてたし、受付の人にはねけりゃいけたかもな。ああ、惜しいことをしちまった。三日ぐらい帰ってこないって当麻には言っちゃったけど、自分でどっかに泊まるのもめんどくさいしな。）

面倒くさい精神を充分に発揮し、ライナは上条の家へと急ぐ。途

中、電車というよりもリニアモーターカーに乗り、上条の学生寮がある第7学区へ。こうしてまざまざと技術力の違いを見せつけられると、ローランドでの日々が少しあほらしく思えてくる。

（何？このリニアモーターカーっての？めっちゃくちゃ便利じゃないか。ちくしょー、これが向こうの世界にもあれば『勇者の遺物』なんてもっと簡単に探しに行けただろーによ。）

少しばかり己の不運を嘆きつつ、まあ健康のためにいいことだったじゃないかとプラス思考で考えてみる。

考え事をしているうちにそれは第7学区にたどり着いた。そこからは歩きで一人夜道を学生寮へと歩いていく。周りには夜の街へ繰り出す少女達が青春を謳歌していた。自分の格好を見て少し驚いた顔をするヤツもいれば、指さして笑いながら通り過ぎていくカップルもいる。なんだ！？なんだ！？俺のカッコはそんなに変なんですか！？と少し落ち込んでみる。他にもホントに学生かと思うほどの柄の悪いやつもいるにはいるが、彼の目には少なくとも平穏が映って見えた。

（この街も学生しかいないとはいえ、平和なんだな。統括理事会だっけか？なかなかうまく機能してんだな。）

ひとしきり感心しながら帰り道をゆくライナだが、しかしまさか自分には不幸が降りかかってきているなど、このときは思いもしなかった。

「なんじゃこりゃあああああッッ！！！！」

そんな悲鳴が辺りに響き渡ったのはその数分後といったところか。自分ち（上条んち）へと行き着いたライナがその上条んちがある学生寮を見たときに、彼の口から出た言葉だった。

・・・学生寮が燃えていた。

「おいおい、嘘だろ？俺の安眠場所は？まさか数時間いただけなものにもうなくなっちまうとかないだろさすがにっ！！」

燃えさかる炎をしばし呆然と見上げていたライナだが、彼の視界に上から降ってくる物体が映った。

「うううおおおおおお！！」

奇声を上げながら落ちてきたそれは・・・見事ライナの顔面にクリーンヒットした。

「うぎゃあああああ！！」

ライナも悲鳴を上げ落ちてきたそれと一緒に地面を転がる。しばし悶絶。

（なんだなんだ、何が落ちてきたんだ？人か？？）

いやそりや声を上げてたし当たり前かと意外に何事もなかったように立ち上がり、落ちてきた人へと目を向ける。

「なんだ、当麻か……。」

それを聞いて上条はくわつと目を見開きながら反論してきた。

「『なんだ、当麻か……。』じゃねえよっ！！もつと他にこの状況を見ていうことがあるだろっ！！」

「まさか！！最近では学生寮からの飛び降りが流行ってるのか！？」

「んなわけねーだろ！？好きこのんで飛び降りるやつなんていないよ！！」

「ふむ。じゃあ貴様はあれか。若者にありがちな欲求がために我慢できなくなつて、学生寮に火を放ったあげく、大空に飛びだしてしまったと。」

相棒に似せ、無表情にライナは当麻に言った。

「思いつきりそいつダメ人間だろ！？つてゆうかそこまでやるやつはあんまりいないだろ！？つて誰の真似だそりゃ！？」

「俺の相棒のフェリスつてやつ。いつも無表情で剣を振り回すだんご娘でさ、困つてんだよね。」

「そうか……。お前も苦労してたんだな……。ハッ、違う！そーじゃねえ！！今のこの状況だよ問題は！！現実をみるよ現実を！！」

そろそろやめにしないと状況は悪くなりそうだなーと思い、ライナは上条から事情を聞く。出ていったインデックスが帽子を取りに帰ってきたと思ったら、背中をばっさり切られてて、しかもそこに

エセ神父なステイルと名乗る魔術師が出てきてインデックスを回収するだの言って、しかもそこでインデックスの様子が機械のようになっちまうわ、その赤髪野郎が炎剣を振り回してくるわ、炎の巨人『魔女狩りの王』を繰り出してくるわで堪えきれなくなって飛び出してきたんだよと上条は言った。

「うげっ！再生するとかマジでめんどくせーヤツだなそれ。んで、何か解決策は思いつきそうなのか？」

「警備員に連絡・・・はダメだな。お前もインデックスもこの学園都市には不法入国っぽい形になってるから、それ呼んじまったらあとあと面倒なことになる。」

そう。学園都市に住んでいる人々は一応個人情報登録している。それはひとえにこの学園都市の特性によるもので、それはここが能力者開発機関だからである。能力者を生み出すそのシステムの情報は外部に漏らされると学園都市側にとってはたいへん都合が悪い。周囲を石の壁で囲い、さらには自動警備ロボットが絶えず巡回しているのもそのためだ。学園都市を出るときにはいくつかの手順を踏んでからでないと出られないという鉄壁ぶりである。

その点、ライナもインデックスも正規にこの都市に入ってきたとは思えない。今回のことが警備員によって無事に済んでも、彼らが事情を聞かれることは目に見えている。そのため、安易に警備員を呼ぶのは控えなければならない。

「んじゃ、力押しでどうにかするか？俺は魔術を使えるし、お前の右手もその魔女狩りの王とやらに対抗できるんだろ？」

「いや、ちよっと待ってくれ。ひとつ試したいことがある。まあそれが失敗したら力押しでいこうぜ。」

「了解。んじゃまめんどくせーけどいっちょ行くか。」

「その性格はもうちよっと直したほうがいいんじゃないか？」

このときなぜだか二人は長年一緒に戦ってきたような感覚と、
して笑みを浮かべていた。

『最弱』と『悪魔王』は。

『イマジンプレイヤー』と『アルファ・ステイグマ
幻想殺し』と『複写眼』は。

一人の少女を助けるために。

炎が渦巻く学生寮へと。

—————突入した。

第四章 とある事件と物語の始まり（後書き）

もう少し書きたかったですが・・・。

多少の笑いを含め、でも感動できるような話に仕上げたく思います。

いろいろと語彙だわからない人はすみませぬ。

今ひとつ説明不足ながしてならないんですが。

w i k i を参照して理解してください。

第五章 とある魔術師と異国の魔術師（前書き）

ライナ&上条VSステイルという展開でいきます。
はてさてどうしましょうか・・・。

第五章 とある魔術師と異国の魔術師

「————世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。」

ステイルは自分ができる最大の魔術を唱えていた。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。」

その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を食らいて力と為せ——————
「————ツ！」

体の奥底から何かが這い上がってくるようなそんな違和感。この世のものではない何かを呼び出す魔術。

彼は今、自身最強の魔術を使おうとしていた。

目の前にいる不思議なチカラを持った黒髪の少年に向かって。自分の魔術をいとも簡単に消し去る化け物に向かって。

「魔女狩りの王ツ——！」

目の前に炎が巻き起こった。真紅に燃え、黒く重油のような、何かドロドロとしたモノが『芯』になっている。永遠に燃え続ける人型の炎。

その意味は【必ず殺す】。

必殺の炎を背負う巨神は両手を広げ、それこそ目の前の少年——上条当麻に向かっていった。

結果としてそれは予想以上の結果をもたらしてくれた。魔術を一撃で消し飛ばすその少年の右手を、その再生速度でもって封じ込んだのだ。

あとは炎剣でもって斬り飛ばすだけだったのだが・・・。

運悪く魔女狩りの王の背中を突き破る形で攻撃を加えようとした一瞬の隙に、そいつは手すりから飛び降りてしまった。

ここが7階だというのにたいしたものだと、上条を殺そうとした赤髪の魔術師ステイルは少し感心したものだ。

おそらくそのまま逃げ去ったに違いない。魔女狩りの王には自動追尾をする術式を組み込んである。どのみちこの学生寮にいたのは彼の命はそう長くは持ちはしないからだ。

「さてと、そろそろお暇いとまするでしょうか。何よりこのままじゃ禁イ書目録は死んでしまいそうだし。早いとこ神裂のやつに診せないと。」

そう言っただけで彼はエレベーターへと足を向けて歩き出した。もちろん肩にはインデックスを担ぎ上げている。多少服が汚れるが、まあそれは洗うでしょう。

「エレベーターが止まってないことを祈ろう。さすがの僕でも女の子を担いだまま一階まで歩くのは疲れるからね。」

こんなことなら魔女狩りの王に、エレベーターの近くには近寄らないようにする術式も仕込んでくだったとぶつくさ言いながら歩いていく。

（それにしても。）

とステイルはさっきの少年のことを思い出す。
ツンツン頭をしたどこにでもいそうな普通の学生だった。少なくとも見た目は。

自分の魔術を消したあの能力。学園都市にはあんな化け物もいるのかと思うと、少し眉間に皺しわがよってしまふ。

「そういえば、インデックスの『歩く教会』をぶち壊したとか何とか言ってるけど。だとすればインデックスに傷をつけることができたのも納得できるかな。」

インデックスの『歩く教会』は、拳銃でも傷一つつかないぐらいの魔術的防御がふんだんに織り込まれている修道服のことだ。最強の防護結界をもった礼装なのがある。それにより普段はステイルたちの攻撃もほとんど効かなかったのだが、数十分前に神裂が放った一撃が、インデックスの背に真一文字の傷を付けたときはステイルも心底驚いた。死んでいなくてほっとしたものである。なぜなら今回の目的は禁書目録の抹殺ではなく、あくまで保護だからだ。

上条の右手はそんな強度を誇る礼装を破壊するほどのチカラを秘めていたのだ。

気を付けなければなどと呟きながら、エレベーターの前に行き着いたところで、ふと学生寮に警報が鳴り響いた。

ステイルはいぶかしげに辺りを見渡す。
おかしい、とステイルは疑問を浮かべる。

（確か自分は警報を切っていたはずだ。一応、人払いのルーンを張ってあるから人が集まるようなことはないんだけど、だとすればこれは一体誰が・・・？）

とお次は頭上から雨が降ってきた。

（いや、これはスプリンクラーか？確かこれも作動しないようにしていたはずだけど・・・。ふうん。スイッチを手動で押したのか？）

手動でスプリンクラーを作動させるボタンは1階にあったはずで、だとすればあの野郎が何か仕掛けてこようとしているのかもしれない。

少しステイルはイラツとした。
嫌がらせのつもりかもしれないが、せっかく無事任務達成したというのに、そんなしょうもないことで服が濡れることを思うとあまり笑顔は浮かべられない。

ウィーンとどこかで機械が動くような音が聞こえた。ん？とこちらに目を向けるとどうやら目の前のエレベーターが作動しているようで、階数を示す数字が1階からだんだんと自分たちがいる階まで上がってくる。

これは別段、驚くべきことではない。なぜならエレベーターというものはそういうものであるからだ。

だがステイルの顔には驚きがあった。口元も少し引きつっている。それもそのはずで、彼はボタンをまだ『押していなかった』のだ

から。

それなのに目の前の乗り物が作動しているということだ。

（誰かが乗っている!!）

彼の予想を決定付けるように、7階の前でピタリと止まったその箱の中に乗っていたのは――――不敵な笑みを浮かべた上条当麻であった。

「よお」

上条当麻は目の前で固まっているやつに声をかけた。本日二度目の、日常で出会えばおそらく自分とはは関わり合いにならないようにしようと心がけたはずのやつ。神父の服装はしているのだが、髪の色は赤く、目元にはバーコードっぽい刺青^{いれずみ}を入れており、すべてを台無しにしている。

上条は知らないだろうが、たばこまで吸うやつなのだ。

名はステイル「マグヌス」。

何人だよっ！と思う方がいるかもしれないが、偽名ではない。

すると氷漬けだった彼がやつとのことで口を開いた。

「な、なぜお前がここに！？^{イノケンティウス}魔女狩りの王はどうした！？あれは自動追尾のはずだぞ!!」

口で答える代わりに上条は自分の上を指さす。あたかもそちらを見るだけでも言うように。

目線をそちらに上げたスタイルだがすぐに上条に戻し、すぐさま声を張り上げる。

「馬鹿な！魔女狩りの王イノケンティウスがこの程度の水で消えるはずはない。あれは僕の魔力とルーンが存在する限りは水だろうが蒸発しつくすはずだ。」

しかし、さも上条はおもしろそうにスタイルを見て笑う。

「お前、今何て言った？」

「だから魔女狩りの王はこの程度の雨で消えはしないと……。」

「ちがう、もう少しあとだ。」

「あと？……僕の魔力とルーンが描かれたカードが存在する限り消えはしないと……まさか!？」

「そう。そのまさかさ。いやあーテメエは天才だよ。さすがに壁にでも彫り込まれてあつたら手の出しようがなかったからな！。でも少し詰めが甘かったな。しかもだ、今は頼れる仲間もいるからよ、コピー用紙の百枚千枚なんていちころだぜ？ほら、耳すまして聞いてみる。」

言つて上条は耳をすます仕草をした。無意識のうちにスタイルも何かを聞き取ろうとする。

（……？響くのはスプリンクラーから吹き出す水の音ばかり……なんだこの音は!？）

ズゴゴゴゴゴーツツ。

ステイルの耳に聞こえてきたのはあたかも洪水のようで。

しかしスプリンクラーの水が集まって洪水引き起こしましたゝなんてことがあるはずもなく。（まずあったとしたらさすがにその会社は倒産だ。）

（だとしたらこれは・・・？）

「いや、俺もさすがにライナがあんなことできるとは思ってもみなかったっていうか。むしろあいつは一生ニートしてんじゃねえかって思ってたんだが。まるでお前と同じ魔術師のような感じだったなあれは。」

うんうん、と何か息子がダメダメ人間だと思ってたけど実はすごい才能があることが判明した父親の心境で、上条は頷いていた。

（ってゆうーか目の前でまじで魔方陣描いて発動されたしなー。なんかスプリンクラーの水で消せねえところもあるだろ？とか言ってるに魔術乱発してくれてたし。）

後日上条に話を聞くと、このときあいつ（＝ライナ）はやればできる子なんだと認識を改めたそうだ。

「なんだと！？くそ、魔術師がついてるなんて情報はどこにもなかったっていうのに！」

事実を知って切り札がなくなったステイルは上条から数歩後ずさりした。もちろんインデックスを無意識のうちに脇へと滑り落としていたのには気づいていない。

そんなステイルに上条は大きく一歩踏み出して「……………」。

「甘えーなっ！！人は常に進化してんだよッッ！！昨日の情報は所詮昨日の情報にしか過ぎねーんだっ！！」

・・・ただ味方に一人魔術師が増えたわけであって決して上条が進化したわけではない。

「っ！？」

それでも勢いに圧されたのか、ステイルは一瞬目を見張った。案外その通りだなと思ったのかもしれない。

だがステイルだって一流の魔術師なわけで、それはつまり体勢を立て直すのは速かった。

「……………^{kenaz}炎よ……………^{Purissaaupiz Gobo}巨人に苦痛の贈り物を」

上条が拳を振り上げるより速く、ステイルはロープの内側から残っていたカードを吐き出しながら炎を繰り出してきた。

摂氏3000度もの炎。

普通ならこれで死ぬはずなのだが。

「ちっ、またか！」

標的に向かっていったはずの炎は相手を蹴散らすことなく消え失せ。

右手を前に突き出している上条の姿にはどこにも傷は見あたらな

い。

「なかなかやっかいなものを持つてるね。あ、言っておくけど誉め言葉じゃないからね?」

冷や汗を垂らしながら、照れくさそうに頭を掻こうとした上条は、手を中途半端な位置で止められた。

実際問題として、上条の右手はありとあらゆる異能をうち消せるのだが、それ以外の部分、つまり右手以外の部分は普通の生身なのだ。えてして上条の対抗手段としては、先ほどのような一直線で向かってくるものを消すぐらいしかできない。

右手以外の部分に3000度など食らえば一発であの世行きた。

(あぶっ!あぶねっ!!ちくしょーあと一歩だったってのに!!)

少し涙目になりつつ、隙について一気に懷まで駆け入ろうとする上条だが、このえせ神父はそこにたどり着く前に再度炎を放ってきて、なかなか近寄れない。

「はは、さっきまでの威勢はどうしたんだ?この僕を倒すんだろう?そこがやはり僕ら魔術師との違いかな。一般人が僕らをどうこうしようなんてできるわけがない。あきらめなよ。」

「そんなことができるかばかやろーツツ!!」

「そうか・・・『Fortis931』」

「ツツ!?!なんだそりゃ?」

「名乗るのが後れたね。僕の魔法名だよ。日本語では強者とでもいうんだろっけど、まあ語源はどうだっていい。言うなれば――殺し名かな?」

「さて、そろそろ片を付けよう。」

Ash To Ash Dust To Dust Squeamish Bloody Road
灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字！！」

ステイルは手に炎剣を生み出し、上条へと叩きつける。

それをぎりぎりのところで飛びずさってよけた上条だが、あんな振り回してくる武器にうまく右手を合わせられるわけがない。

劣勢なのには違いなかった。

しかし視界の端で上条は下の階から飛び上がってきたそいつを捉えた。まさにこの状況を覆す究極の人物を。

「避けないでくれないか。こちらとしても本当に時間がないんだ。インデックスを死なせたくないのなら、君はおとなしくここで消し炭になってくれると嬉しいんだが。」

そのステイルの言葉にぷちんとどこかがキレて、理性が吹き飛びそうになった。

（あとで殺す！！）

と、普段は温厚で通っている上条当麻らしくない黒い感情を秘め

たまま、しかし我慢を重ねてステイルがいるそのさらに奥に視線を向けた。

・・・そこにはライナリリユートが立っていた。

ステイルはまだ気づいていない。そもそもそちらに階段もエレベーターもないのだ。後ろに目でもなければ気づく者はいないだろう。

寝ぼけ眼なライナはさつと状況を確認する。

（インデックスがそこで、魔術師と当麻は目の前で交戦中と。魔法で一発だろうけど、殺傷性の高いヤツはインデックスも巻き込むかもしれねーしな。ここはひとつ当麻にがんばってもらおうとするか。）。つてかホントに当麻の言ったとおりのヤツ変人がいるとは・・・。派手だな。）

「おい、その魔術師。」

後ろから聞こえてきた間延びした声に呼ばれた魔術師は驚いて振り向いた。

（な、どっから現れた？こいつがさっきあいつが言ってた仲間っていうヤツか。挟撃とはなかなかやってくれるね。先にこの弱そうなヤツから始末するか。）

そう結論付けて、ステイルは上条に向けていた炎剣をライナへと向けた。

「ば、バカヤローっ！！せっかくステイルに気づかれてなかったのに何でわざわざ自分からばらしたんだバカヤロー！！！」

その上条がマジで憤激している。
言ったことは至極もつともだが、それにしてもバカヤローって二
回言ったのは本人の故意に違いない。

「いやあゝ、だつてほら、今ここから俺が魔法使うとインデック
スにも影響出るかなと考慮しての“ナイス判断！”なんだぞー！」
「だったら接近戦で戦えばいいじゃねえか！お前できるだろ？
？」

「それはできなくもないけどさ、俺つては魔法の使いすぎで少し
疲れちゃったし。ここは当麻にやつてもらおくかとね？」

「何が『やつてもらおくか』だよっ！！思いつきり俺任せじゃね
ーか！お前に期待した俺の気持ち返せよ！！」

「まあまあ、しつかりフォローはしてやるから。」

言い合つてゐるうちにも、ステイルは炎剣片手にライナに向かって
駆けだしていて。

しかしライナは何をすることもなくじつと炎剣を眺めているだけ
だった。

（見た目どおりのヤツなのか？魔術を使ってくる気配もない。な
らこのまま殺らさせてもらおう。）

ライナまであと五歩というところまでステイルは迫る。

ふとライナの目が輝いていることに気づいた。

それも真紅に。

さらには五方星が浮いて見えた。

その奇怪な現象に思わず足が止まる。

「その目はいったい・・・??？」

疑問には答えずライナはその忌み嫌われた能力を最大限に使う。
すなわち『アルファ・ステイグマ複写眼』。

魔術の構成、性質、威力などの全てを解析し、自らも使えるようになるというまさに複写の能力。

（でも今回はコピーするだけにとどめておいてつと。おお、なかなか使い勝手のいい魔術だな。しかしなんとなくいけそうとは思ってたけど、まさかこの世界の魔術も読みとれるとはな。少しこの力に感動したかも。）

ライナは解析した魔術を元に魔方陣を即座に組み上げて。

「求めるは侵入>>>・蝕走^{いし}。」

魔方陣の中心から出た紫煙はステイルに向かってのびていき、手にあった炎剣を何の抵抗もなく破壊してしまった。

はっと気づいたステイルがもう一度それを生み出すが、今度もライナの魔法によって空気にとけていつてしまった。まるでゲームの中で倒された敵がポリゴンとなって破散するように。
そしてライナは声をかける。

「ほら、お前の番だぞ。」と。

ステイルは背後に迫ってきていた上条に反応するほどの余裕もなく。
く。

「おおおらああああッッ！！死にさらせ！！」

上条の何の変哲もない拳がその右頬に突き刺さった。

多少上条の感情に先ほどの恨みが入っていたかもしれないが、それはご愛敬だろう。

吹っ飛んでいったステイルはそれほど耐久力があるわけではないのか、手すりにぶつかって気絶してしまい。

ライナがそれを縄でぐるぐる巻きに芋虫状態していたのもご愛敬だった。

第五章 とある魔術師と異国の魔術師（後書き）

あとで修正で追加します!!!

と書いておりつつも（上記）、最近まったく更新できず申し訳ありませんでした!!

（>0<）――

そして多少ここでライナの設定登場。

まあ予想はできたでしょうが、もちろん『複写眼』のことです。インデックスの世界の魔術も解析できるということになっております。

能力者たちのほうについてはどうか対策を考えようとは思っていますが、いつそのこと能力も解析できるようにするとか？

↓↓ライナが最強になってしまいます。

そして原作を知っている方へ

たいへん散文化しており、また要領をえず、原作と大きくかけ離れてしまい申し訳ありません。

やはり本職の方が書くものは話や設定が深いと改めて感じます。ですがどうぞ最後まで見てくださると嬉しい限りです。

第六章 とある先生と救命措置（前書き）

ちよつとインデックスを放置しすぎてました。

そしていよいよあの学園都市7不思議の一つと出会います（笑）

第六章 とある先生と救命措置

今、ライナと上条は街の裏通りを走っていた。

魔術師ステイルを倒したことで、【人払い】の魔術も解け、上条が住んでいるアパートにはすぐさま警備員だの野次馬などが集まってくるだろう。

そうなるとここ学園都市に不法侵入しているインデックスやおそらくはライナが捕らえられる可能性は高い。

インデックスのほうは一刻も早く治療しなければいけないのだが、上条だつてこの街を完全に信じ切っているわけでない。治療はしてくれるだろうがそのあとでどう扱われるかは分からないのだ。

だとすれば自分たちの手でどうにかしなければならぬのだが・・

「おい、どうするんだ上条。いくら俺でもこの傷を治すことはできねえぞ。」

アパートからだいぶ離れた一つの路地でライナは上条に話しかけた。インデックスの背中にできている真一文字の傷は、玄人のライナの目で見ても深刻と言えるレベルで、もはや一刻の猶予もなさそうに見える。

「そうは言っても、ここそのままじゃまずい。匿ってくれてなおかつこの傷を治してくれるヤツなんて、知り合いにはいねえんだ。」

苦虫をかみつぶしたような顔で上条が唸る。

「そうだライナ、お前、傷を治す魔法とか使えないのか？」

今度はライナが苦虫をかみつぶした。魔法だって万能ではない。あまり期待されても困るんだが、

「開発中だったヤツならあるにはあるけど、それはあんまり効果が期待できないんだよね。」

そう、あるにはあるのだ。ただまだ完成にはいたっておらず気休め程度にしかない。インデックスの傷に対してはおそらく出血の勢いを弱めるぐらいがせいぜいだ。

「まあ、何もしないよりかマシか。・・・求めるは安息>>>。
やぐし
夕白。」

描いた魔方陣の中心から緑の聖なる光がインデックスの傷に舞い降りた。降り注いだ光は傷を包み、出血を押しとどめているように見えた。

魔法に気づいたのか、そこでインデックスが目を開けた。

「体内に不可思議なマナを確認。10万3000冊の魔導書を用い、詳細を解析。失敗。しかし体に異常はないため放置します。」

無機質な声だった。まるで傷を負っているのにもかかわらず、機械のような淡々とした声音で言ったインデックスを初めて見たライナが、しばし呆然としていた。すでに見ていた上条でさえも慣れることはできない。

瞳に冷徹な光をたたえているインデックスに先に硬直から立ち直った上条はおそろるおそろる聞いた。

「気がついたか、インデックス。ところでお前は今、大変危険な状況にいるのはわかるよな？その背中の傷を治すような魔術はあるのか？」

問われたインデックスはあくまで冷静だった。

「存在します。しかしあなたが使うことはできません。」

どうして！？と思った上条だが、インデックスの視線が自分の右手に注がれているのを見て、はっと思い当たる。

自分の右手が幻想殺しイマジンブレイカーを持っていることに。

「それもありますが、超能力者では魔術は使えません。」

「どういうことだよ？」

「回路が違うからです。」

インデックスの説明をまとめるとこうだ。

幻想殺しイマジンブレイカーを抜きにしても、『超能力者』ではたとえ完全に模倣したとしても、絶対に魔術は使えない。

なぜか？

それは超能力が『才能ある人間』が使うものなのに対し、魔術は『才能のない人間』が『才能のある人間』と同じことをするために生み出されたものだからだ。

つまり回路が違う。

『才能のある人間』が『才能のない人間』が使う魔術システムを使うことはどうやってもできないのだ。

学園都市は学生の街で、その学生達全員が超能力を使うためになんらかの開発カリキュラムを行っている。

上条の友達である青髪ピアスや土御門、ビリビリ中学生には頼ることができない。

絶望的かと思われたが、

「じゃあ俺なら使えるのか？」

横合いからライナがインデックスに確認をとる。

（俺は超能力者じゃねえし、むしろ魔術師だからな。ものすごい好条件のはず。）

「確かにあなたならば使えます。」

「おつし。で、どーすればいいんだ？」

「魔術を使うためにどこかの部屋の中で行う必要があります。」

「ん、りょーかい。じゃあ上条、誰か知り合いんちに急ごうぜ！

」！

「そうだな。誰がいいか・・・。」

（俺らに味方してくれそうな人で一人暮らしのーーーー）

「おつ、ちょうどよさそうな人がいるじゃねえか。行くぞ！」

そうして夜闇に向けて上条は走り出す。

ライナはそのあとをインデックスを背負って付いていく。

（・・・あの先生、この時間でもう眠ってるなんて言わねーだろ
うな。）

上条当麻は一人の教師の顔を思い浮かべる。

クラスの担任、身長135？、教師のくせに赤いランドセルがよ

く似合う一人の先生、

つくよみ こもえ
月詠小萌の顔を。

「こんなとこにそのコモエ先生とやらが住んでるのか？」

ライナは同じく隣りに佇む上条に問いかけた。

二人は今、超ぼろいアパートの前で立っていた。そのアパートは木造の二階建てで、見た目はもう東京大空襲でさえ乗り切りましたといわれても信じるほどの景観を保っていた。

あまりのぼろさに階段の途中で崩壊するんじゃないか？とライナに思わせたほどである。

「ああ、青髪ピアスからの情報だ。」

青髪ピアスというのは上条の友人らしく、ここに来る途中にあった公衆電話で上条は電話をしていた。それはともかく、なぜ生徒が教師の住所を正確に把握しているのか？

余談だが、あとで上条に聞いたところ、「ああ、あいつは自分が気に入った女性なら、名前とか住所とか全部知ってると思うぜ」などと上条自身の交友関係にも疑問をもつことになった。

二人して階段を駆け上がり、一番奥の部屋へと直行した。それもひとえに青髪ピアスの情報によって、である。

ぴんぽんぴんぽーんと、上条がドアの横に付いていたチャイムを鳴らす。

すると中から、

「はいはいー、どなたですー?」

なんとも舌足らずな声が聞こえてきた。思わずライナは上条に突っかってしまった。

「おい、部屋間違えてるんじゃないか?」

明らかにちっさい子どもの声だったとライナは自分の耳に聞こえてきた情報を頼りにする。

そんな小さな子がいる部屋に高校生である上条とそれより年上の自分が訪ねるといろいろとまずいんじゃないかと危惧したのだ。

「だって中から子どもの声がするし、明らかにまずいだろ?」

その問いに上条が答える前に、目の前の扉の向こうから声が飛んできた。

「先生を子ども扱いするとはいい度胸なのです!一度その顔を拝んで説教してやる必要があるのです!」

い!?!マジで先生なのかよ!と上条が心のなかで突っ込んだあたりで扉が開いた。

「ん?誰も出てこねーぞ?おい上条どうなってんだ?」

振り向くと、なにやら上条の目線がやたら下にいつているのに気

が付いた。再度開いた扉を見て、視線を下に下げた。

・・・いた。シオンが王になったときや、フェリスに妹がいたのを見たとき以上の衝撃がライナの全身に駆けめぐった。彼女はウサギ耳のついたまたまたこれも子どもが着るようなパジャマ姿に身を包み、心外だっ！という表情をありありと浮かべている。それも当然で、子ども扱いされた上に、ライナの身長が高いせいかなまじ極低の彼女が視界に入らなかったせいで、居ない者扱いされたのだから。

「世界は広い・・・。これが学校の七不思議の一つか・・・。」

思わずこのとき達観した心を持ってしまったとしても、何らおかしくはない。

「何を黄昏ているんですかまったく！レディに対してたいへん失礼な人なのです！あ、上条ちゃん！この失礼な子は誰なんですー？あとこの人の背中に背負われてる子は？」

今頃気づいたのかあるいは、突っ込むことに必死だったのか、ライナの隣りにいる上条に声をかけた。

「すいません。ちょっと無駄話をしてる暇はないもんですから。あとで説明しますんでちょっとそこどいてください。」

どいたどいたーっとこれまでのロスを取り返すべく、上条は小萌先生の部屋へと突撃を開始した。

「ちょちょちょっとー！？上条ちゃん！？入るなとは言いませんけど、それにしてももう少しあとにしてほしいのです！先生も女性ですね！？決して缶ビールが転がってたり、たばこの吸い殻

が山積みになつてゐるわけじゃないんですけど！」

上条は小萌先生の制止を完全に無視して居間へと躍り出た。後ろからは当然ライナがぴったりとくつついてきている。

「・・・なんて言うか先生、冗談じゃなかったんですね。」

上条の発言にライナが居間を見渡すと。

・・・部屋の至る所にビールの缶が転がり、居間の三分の一ほど占領しているテーブルの上には、たばこの吸い殻が文字通り、山を築き上げていた。

「はあー。だから見せなくなつたのですよー。」

小萌先生は教え子の皮肉な言葉に嘆息しつつ少し落ち込んだように見えた。おおかた、女性としてはもちろん、教師としても教え子にこんな汚い部屋を見せたくはなかったんだろう。

「酒とたばこが好きな女性は嫌いです？」

話がいきなり飛んだ。上条はそれを冷徹に無視し、ライナに向かって頷いた。ライナも小さく頷き返し、背中に背負っていたインデックスを下ろす。

「何してるんですー？つてぎゃああつ！？その子いったいどうしたんですかー！？」

いまさら事態に気づいた小萌先生の顔が蒼白に染まった。暗がりでは見えず長身のライナが背中に背負っていたせいで、そこまで意識が回っていなかったのだろう。慌てて応急処置をしようと近くの

棚をあさり始めた。それを上条が止める。

「先生落ち着いてください。はい、深呼吸。」

上条の声に合わせすーはーすーはーと深呼吸を繰り返し、どうやら落ち着きをいくらか取り戻すことができたようだ。それを見計らってインデックスに心の中で謝りつつ、背中の服をそつとまくり上げた。

「ひっ？」

思った以上に深い傷に、小萌先生はもちろん上条でさえも少し動揺した。

「いいか先生、よく聞いてくれ。この子はいろいろあつて俺の知り合いなんだ。んでもって今はこうして傷を負っているわけだ。」

「ならすぐに救急車を！？」

「いや、この子を見てのとおり宗教関係やつてるんで、それはまづいんですよ。俺の隣りにいるこいつ・・・名前はライナ＝リユートって言うんですけど、こいつがなんとかしてくれるんで場所だけ貸してください。」

「むっ。それで助かるならまあいいですけど、この子は信用できるんですー？」

「できるかなできるだろうできるよ三段活用！！こいつに任せとけば万事うまくいくんで頼みます！もしこの部屋にいたくないならないでいいですから。」

「そういう訳にはいかないのです！生徒の命を守るのが我々教師の仕事なのでから、私は最後までここににいるのが使命とも言えるのです。・・・じゃあ好きに使っちゃってください。」

上条と小萌先生の話を聞きながら上条はふと昔の鬼教官を思い出した。

（くそ、ジェルメめ……。見ろ！！これが本当の教師というやつだ！！）

だが、決して彼女に感謝していないわけではない。むしろその訓練のおかげでこうして今も生きていられるのだから。やっかいな体質も手に入れることになったのだが。

会話が終わると同時、ライナと上条はアイコンタクトをとった。それは一瞬に過ぎないがどちらの目にも強い意志がうかがえた。

「じゃあ先生、俺はちよつと電話してきます。」

と言いつつ、上条はどこに電話するのかもどこで電話するのかも告げずに小萌先生の部屋を退散した。いれば上条の右手がインデックス、もしくはライナの行う魔術に影響するおそれがある。それを防ぐためにも、上条はアパートからできるだけ離れるしかなかった。もちろん、「え？あ？上条ちゃん？電話ならそこに――――――――？」と小萌先生が指差した――なぜか昔懐かしき黒電話があった――のを見無視して走り去ったのは言うまでもない。

「――出血に伴い、血液中にある生命力マナが流出しつつあります。」

突然聞こえた声に、ライナと小萌先生はギクン、として振り返った。上条が走り去ってまだ数秒も経っていない。しかし目を閉じてぐったりとしていたインデックスの瞳が開いていた。その瞳に輝きはなく、機械か、もしくは人形を思わせるほどの生気も持ち合わせではないなかった。ただあるのは冷徹さのみだ。

人の死は多く経験しているライナでも、この瞳には慣れることができない。小萌先生も目の前の少女にビックリした目を向けるのみだった。

「――警告。第二章第六節。出血による生命力の流出ヨハネノペンが一定量を超えたため、強制的に『自動書記』で目覚めます。」

身を起こしたインデックスにライナは声をかける。

「まずいなそりや。で、俺は何をすればいいんだ？」

「現在の時刻は、日本時間標準で何時ですか？それと日付もお願いします。」

「それなら7月20日の午後八時半だけどですけどー？」

ライナと小萌先生の声がハモった。妙に恥ずかしい。しかもライナはこのちっこい先生とは今日が初対面なわけで、気まずいことこの上ない。部屋の狭さもラ自分にプレッシャーを与えてきているように感じた。

「時計を見ていないようですが、それは正確なのでしょうか？」
「合ってるって。何しろ俺の睡眠時計は完璧だからー。」

普通は体内時計のことを言うんじゃないだろうか。睡眠時計とはいかなるものなのか？と疑問に思ったインデックスだが、この状況でツツコミ返すはずもない。

「合ってますよー。何しろ先生の体内時計は秒刻みなので間違いないのです。そもそも先生の部屋には時計なんてありませんし。」

インデックスがもし平常だったならば、ここで大いにため息をついたことだろう。もしくは諦めがありありと顔に出ていたにちがいない。もつとも繰り返すが、今はツツコンでいる場合ではない。

インデックスはちらりと目を窓の外に向けた。

「――・・・星の位置と月の角度から見て・・・時刻は正確なようです。」

そう二人に言うと、インデックスはなにやら呪文のような事を呟き始めた。

「巨蟹宮^{カニミヤ}の終わり、8時から12時の夜半。方位は西方。水属^{スイゾク}性の守護^{イネ}、天使の役はヘルワーム・・・。」

小萌先生が横でひつ、と息をのむ音が聞こえた。目の前でインデックスが自らの血で、机・・・というより古いちゃぶ台の上に奇妙な魔方陣を描き始めたのだからムリもない。同じく魔方陣を発動するライナは少し眉をしかめていた。

（うお！？なんか複雑な魔術だなこりゃ。しっかし血で描く魔方陣がこんなに禍々しいなんてな）。だいたい背中から血があふれてるっていうのによく続けられるもんだ。）

一種の集中状態なのだろう。明らかな重体であるインデックスの様子を、ライナは自前の真紅の五亡星で観察しながら、背中の傷に布をあてて、少しでも止血をしようと試みた。相手の魔術を読みとるライナの魔方阵だが、なぜか中途半端にしか読みとれない。何か特殊な作業をするのか、もしくは道具が必要な魔術なのかもしれない。

（でもこの傷でもし助かったとしたら、それっただいぶすごい魔術だろうな。）

まずライナの世界には存在しない類の魔術だ。

魔方阵を描き終えたあと、インデックスは机（・・・というよりツッコむときに思わずひっくり返してしまいそうな年季を醸し出しているちゃぶ台）の上に食玩のフィギュアを3体、それにメモリーカードやらシャープペンの芯のケースやらを置いていき、さらにはチョコの空き箱や文庫本までも置いた。

「準備が整いました。これより天使を降臨^おろして神殿を造ります。私の後に続き、唱えてください。」

インデックス鼻歌でもが歌うように呟いたのは言葉ではなく『音』で、ライナもしぶしぶ続いて真似してみる。
と、

「うお!？」

「えっ？」

突然、ちゃぶ台の上に置いてあったフィギュアからも同じ音が漏れてきた。それは間違いなくライナの声で、側で見ていた小萌先生

も驚きの声をあげた。

「リンクしました。」

インデックスの声も、ちゃぶ台にあった別の人形から同じように聞こえてきた。

（『リンク』っていうことは、つまりどこかと繋がってるってことだよな。んで、今の俺の声やインデックスの声が目の中のちゃぶ台から聞こえてきたって事は・・・。）

ライナは己の確証を確かめるために、ちゃぶ台の足を少し押してみた。

「!？」

するとガゴンっという音とともに部屋が震動して、まるで地震でも起きたかのような衝撃に見舞われた。

（目の前のちゃぶ台はこの部屋とリンクしてんのか。あれ？ってことはもし今このフィギュアに何かあったら、俺らって死ぬんじゃない？）

と割と深刻な考えに行き着いてしまった。思わず首を振って考えを四散させる。

（まずいまずい。そんなこと考えてホントになったらどうすればいいんだ。よし、無視だ無視。）

そんなライナの葛藤に冷め切った目を向けて（もともとから瞳に

生気はないのだが）、インデックスが叫んだ。

「思い浮かべなさい！！^{イメージ}金色の天使、体格は子供、二枚の羽根を持つ美しい天使の姿！！」

その声の通りに、ライナは目をつぶって脳裏に姿を描き始める。

——魔術を行う上で、^{フィールド}領域を決めることは重要だ。大海に小石を落としてもたいした波紋にはならないが、バケツで行ったら結果はまったく違う。魔術で世界を歪めるのなら、まず歪める場所を区切る必要があった。

その中で、この場合だた『天使』を思い浮かべ、^{イメージ}固定化し、自在に操ることができれば、それだけ限定された領域の中で『不思議な事』を行いやすくなる。

その辺のことは、ライナにとっては推測しやすいものだった。

（えーと、二枚の羽根を持った美しい金色の子供の天使……。金色だから金髪で……。なおかつ美しいって言ったら……。ってなんで^{天使}フェリスが出てくるんだ！？確かにあいつも金髪で見目麗しいが、何もこんな時に出てこなくても！！それとも何か？俺がフェリスに会いたいという深層心理が、今ここで現れてるってのか！？）

目を閉じたライナの横顔をのぞき込んでいる小萌先生の瞳には、まさに苦悶の表情を浮かべているライナの顔が映っていた。

（きつとすごい天使を考えているに違いないのです！ライナちゃんは見えた目からして、あまりそういうの得意そうでなさそうですね！？）

と、感想がなにやらあらぬ方向に飛んでいった。確かにライ

ナは魔導学に関しては天才ではあるが、こういう類の創造に関してはあまりその天才性を發揮しない青年である。もっともこの場合はすんなりと創造できてしまっているのだが、はたして本人にとっていいことなのだろうか。

（うわぁ・・・冗談きついな・・・。まさか自分がそんなだったとは・・・。ま、待て待て。落ち着け俺！！俺は色情狂でも何でもねえ！！そうだ条件を思い出せ！！確か金色の天使で・・・そう！子供だった。よし、フェリスを少し子供化して・・・。）

よし、このままいけば完成だ！というライナだったが、脳内に出
来上がった天使を見て、その顔が絶望の色に染まる。

(・ ・ ・ ・ ・ やっちまった。)

フェリスを子供化しちまえという安易な考えのもと、実行してしまっただけが間違いだっただけだ。もっと、素直にオリジナルの天使でも考えればよかった。

出来上がったのは・・・。

「oh・・・イリス・・・」

・ ・ ・ 思わず口から漏れ出たその単語は、フェリスの妹であるイリス。イリスの名前。正確は姉のイリスとは違い、活発で無邪気で、フェリスを大好きな子である。もちろん顔は美人の域を出ない。

当たり前だったのだ、こうなることは。フェリスに妹がいることをなげ今の今まで気づかなかったのか、自分で自分を殴り飛ばしてやりたい。もちろん痛いしめんどくさいのではないのだが。

見開いた目の前には、正真正銘、どこからどう見ても『イリス』

が立っていた。思わず目を覆いたくなるも、（待て、これはただのイメージだ！！そうとも！本物のイリスがいるわけじゃない。）という信念をもって、現実を直視するライナだった。

しかしそれは目の前の『天使』が、

「じゃーん！イリスちゃんでしたーっ！！」

と口を開く前までだった。アトノコトハシリマセン。

「カタチの固定化、大成功。」

インデックスの言葉に、わずかだが驚きと侮蔑が混じっているように聞こえた。おそらくこう思っていることだろう。「あまりにも具体的にイメージしたせいで、降臨^おした天使が口を開いたのでしょう」と。そしてそのあとはこう続くに違いない。「あれ？ということはそんな具体的にイメージするライナってまさかそういう趣味が？まさかの変態さんだったのですか？」と。

意味ありげに視線をライナに向けた女性陣だが、目の前には一人昼寝をし始めた男が映っているだけだった。もちろん、顔は女性陣には向けていない。

「むむ、お姉ちゃんの背中にに大きな傷が。イリス治してあげるねーっ！！イリスちゃんパーーンチ！！」

おいおいパンチはないだろ！？お前がそんなことをしたら俺はまだしもインデックスの背中碎けるんじゃないかっ！？と、恐怖のあまり昼寝から飛び起きて慌ててライナは後ろへ振り向いた。しかし、やはり魔術だったのだろう。傷に触れた瞬間に、ろうそくのろうのようにドロドロと溶けて、そのままインデックスの傷に入り込み塞いでしまった。

ちなみにこのときライナは、今日一番の羞恥と恐怖とが去つてく
れて、もの凄くほっとしたそうだ。

「――生命力マナの補充に伴い、生命の危機の回避を確認。
『ヨハネノペン』自動書記』を休眠します。」

バチンつと、スイッチが入ったように、インデックスの瞳に柔ら
かな光が戻る。

「あとは・・・降臨おろした守護者を帰して、神殿を崩せばおしま
い。・・・魔術マジックってこんなもの。よく考えれば何も難しいことでは
ないんだよ。」

最後にささやくようにインデックスは歌を歌った。

ライナも真似して歌を歌うと、張りつめていた空気は、見た目は
小学生なのに、あたりには缶ビールが転がり、ちゃぶ台の横には大
量のたばこのすいがらが積まれている、もとのシユールなアパート
の空気にもどった。この場マナに上条がいれば、おそらく3日はネタに
できそうな光景だ。しかし今はライナも反論する。

「それは違うだろ。お前は自分で自分の命を守る魔術を使っただ
けさ。それこそ誰にも背負わせることがないようにさ？はは、すげ
えことじゃねえか！それにこんな魔術は俺のいた世界では見たこと
もなかったし。こっちの世界の魔術マジックってめっちゃ発展してるんだよ
な。」

それに一つ嬉しそうに頷いて、インデックスはバタリと倒れてし
まった。小萌先生が慌てて駆け寄る。

「・・・つと。大丈夫なですかー？」

それにインデックスは疲れた笑みをうかべて、

「大丈夫。風邪と一緒に。治すには自分の体力がいるだけ。怪我そのものはもう塞がってるから心配はいらないかも。」

「そうですか。それはものすごくよかったですー。人は元気が一番ですからねー。」

「そうそう。それに寝るのが一番なんだ。というわけで疲れたから寝るわおやすみ。」

あながち状況に間違っていないセリフを吐いて、ライナは今度こそスリープモードに突入した。

しかしその直前、後ろで聞こえてきた会話が妙に気になった。耳をそばだてて聞き取ろうと努力してみた。

「……寝ている間に襲われるかもしれないので（ライナちゃんに）、一つ壁を隔てた向こうの部屋で寝るべきなのです！」

「それは大いに賛成かも。あ、あと鍵とかその部屋付いてたりするの？」

「……しくしくしく。」

聞くんじゃなかった。

こういつとき、上条ならこう言っただろう。

「不幸だああああああああーッッ!!!!!!!!!!」

第六章 とある先生と救命措置（後書き）

長かった。

そして本編にはあるシリアスモードがなくなっちった・・・（汗）

読者さんからの質問に答えておきます。

Q：とある伝説の勇者の伝説で魔法は【マナ】を使うのですが、とある魔術のインデックスの世界にも【マナ】はあるのでしょうか？
という感じの質問でした。

それは作者も念頭になかった！！Σ

A：ありますあります。そりゃもう「うじゃうじゃ」あります！！
ただ、魔法形態が違うので、禁書目録の世界ではまだ発見されて
おりません。

学園都市は科学の街ですから魔術には疎いのです。しかも魔術な
んてものが存在しているのを知っている人は学園都市にはごくわず
かにしかおりません。

魔術世界のほうも、今の魔法形態を崩してまで、新発見をしよう
とは思わないわけで【マナ】はまだ発見されていない物質なのです。
それこそまさに『未元物質』だったり・・・だったり・・・って
んなわけないだろおがああああーッッ！！

という感じでお願いします。

第七章 とある男と暇な一日（前書き）

一段落した後のライナが過ごす暇な一日。

第七章 とある男と暇な一日

・・・どうにかこうにかインデックスの傷を治すことができ、一安心して寝ていたライナはまどろみの中から覚醒しようとしていた。

夜が明け、すでに日は昇っているらしく、窓からは朝の心地よい日差し、否、蒸し暑い熱波が入り込んできていた。

このアパートにも一応エアコンは付いている。しかし、なぜか今日に限って故障おねんねしてしまっているようだ。この暑さから逃れようと、目をつぶったままりモコンを探り当てスイッチを押しているのだが、うんともすんとも言わない。「おのれこの不幸の原因めっ！」と怨念を近くにいろであるう上条に送ってみるが、自分に超能力や呪力がないのが残念だ。

そんなことを考えているうちに珍しく眠気がどこかへ行ってしまったのか、瞼まぶたが持ち上がるうと努力していた。しかしライナはそんなことはさせない。もう一度、楽園夢の中へ旅立とうと強引に目をつぶって、反対側に寝っ転がった。そしてそのまま惰眠むだみを貪ること30分。

(・・・ムリだ。もうこれ以上寝ていると日干しになる。)

あまりの暑さに寝ていられずに、がばつと起きあがる。周囲を見渡せばなるほど、昨日とほとんど何も変わらない景色が広がっている。

辺りには缶ビールが散乱し、テーブルの上には山盛りの大皿。思わず「山盛りポテトフライかつ！」とツツコンでしまいそうだ。

そんな親父臭い景色を見渡していると、上条とインデックスが何やら話し込んでいるのが目に飛び込んできた。耳をすませば、宗教がどうの、魔導書がどうのとか言っている。そのままぼくと見ていると、何やら上条がよいことを言ったようだ。インデックスの目

からは涙があふれ出し、慌てた上条があたふたし始めた。
そんなことはおいといて、

（・・・暑くないのかお前ら？）

それを聞きたい。布団の横で座っている上条はまだいい。問題なのは明らかに厚手の布団の中で上条と話しているインデックスのほうだ。ヤツは無敵なのか。それともこれが暑さというやつなのだろうか。この自分でさえも暑さのあまり眠れなくなったのに、自分以上の暑さを感じているであろうインデックスがまさに違った意味で「魔人」に思えた。

どうしてどうしてと焦るライナに気づいたのか、それともインデックスを慰めるという気まずい雰囲気になれなくなったのか、上条がこちらに気づき、話しかけてきた。

「おお、やっと起きたのかライナ。もう10時だぞ？」

「いいんだよ別に。俺は一日48時間は眠りたいと思っている男だからな！」

「すでに二日目を突破して三日目に入りかけじゃねーかそれ・・・
。どれだけ眠たいんだよ？」

「それが今は暑さのあまり寝られる気がしねえんだ。お前らは平気なワケ？」

目線で二人に胡乱いっちゃんな目を向けてみた。

「そりゃあ暑いことは暑いが。でもここ最近、あるヤツのせいで電化製品がパーになってたから、そのせいで少し慣れてきたのかも
しれないな。」

（何だよその修行僧みたいな生活！？この世界で電化製品が使える

ないってなったら、ほとんど死んでくれといってるようなもんだと前にテレビで言ってたのに！？大物なのか上条よ。」

「私はほら、シスターだから。大抵のことは慣れてるんだよ。」

布団の中で蒸し風呂状態になっているであろうインデックスからはそんな返事が。

（おっとこっちはガチに修道女様だったよな確かに！！むむ、人は見かけによらない。）

もつとも、昨日までのインデックスはしっかりと修道服を着ているわけで、そのまま見かけどおりではあるのだが。

今は小萌先生の服を貸してもらっているようだ。・・・サイズがぴったりなのが嘆かわしい。

そのことをインデックスに言ってみると、「ピッタリじゃないんだよ！むしろ胸がちよっときついかも。」と反論してきたのだが、それを聞いていた上条が一言、「あれ？お前に苦しくなるような胸なんてあったか？」と、とてつもなく鋭い指摘をしてしまい、すぐさまその失言に気づきスライディング土下座を敢行した上条だったが、案の定、もうそんなチカラあるの？と驚愕させるほどの上条への噛み付きぶりをにライナに披露してくれた。

あぶなくライナもツッコもうとしていたのだが、先に言ってくれて本当によかった。ありがとう上条。

小萌先生はというと、ほとんど何も理由を聞こうとはせずに、インデックスの服やら何やらを買いに行ってくれたので、今は出かけている。「ああ、これぞ大人の鏡だ」とライナはしみじみと思った。とはいえ、小萌先生を巻き込むわけにはいかないということで、我ら魔術同盟（もちろん上条・ライナ・インデックスの三名による同盟である。科学側が上条だけだったので多数決で「魔術同盟」に決まったのだ。）は固く秘密を守ることと一致した。

「しかし……。」

と、ライナはふと思う。

「なんでこんなに暑いんだ……。」

これがこつちの世界で噂の地球温暖化というやつか。「なんて厄介なんだ」と文句の一つでも言いたくなる。こちらの世界に来てそう経っていないが、向こうの世界と比べてこちらの世界のなんと暑いことか。上条の家には壊れかけだがそれでもクーラーがあつたというのに、このアパートにはそれ自体ないように見える。小萌先生はよくこんなところで毎日過ごせるなとライナは皮肉げに呟いた。本人に聞けば「『慣れ』なのですよこんなものは。人間は環境に適応するチカラを持っているのですから、少し我慢すれば以外と快適なのです！」という返事が返ってきてそうだ。

「仕方ねえ。またあの涼しい図書館で知識を蓄えてくるから。」

そう上条とインデックスに言い残してから、ライナはアパートを出て一路、図書館への道取りを辿^{たど}った。

「はあゝ・・・、暑い。」

もちろん道中だつて暑い。ライナはため息を吐いた。行き交うのはやはり学生ばかりのようで自分の格好や存在は浮いているように思えて少し恥ずかしい。ライナもこっちの服に少し興味はあるのだが、あまり上条に頼り過ぎてもいけないだろうという配慮から、今はまだローランドの刺繍が入ったこの服を着ていることにしているのだ。

「学園都市・・・。この暑さをどうにかする発明をしてくれくれよ・・・。むしろすでに開発してるとかいふオチじゃないだろうな？」

学園都市陰謀説をぶつぶつ唱えながら、街道を歩いて行く。ふと前方から見覚えのある制服を着た少女が歩いてきているのが見えた。

確か名前は・・・、

「そうだ！ビリビリっ！！」

「そんな名前のやついるわけないじゃないっ！！」

出会い頭だというのにすでに怒っているようだ。あいかわらずツッコミのキレも凄まじいものを感じる。

「私の名前は御坂美琴だっつってんでしょ！！」

「あゝ、そーいやそーうだった気もするな。で、今日は何してるんだ？」

「見たら分かるでしょ買い物よ買い物！」

確かに美琴の手にはどこかのデパートで買ったであろう紙袋が握られていた。妙なカエルの人形が付いているのはその店のマスコットキャラクターなのだろうか？

「後ろの三人と一緒に・・・？」

「だから見たら分かるでしょーがっ！」

確かに美琴の後ろには三人の女学生たちがいた。彼女たちは美琴と同期ぐらいの年頃で、髪がストレートのやつ、髪をツインテールにしてるやつ、頭にお花畑が広がっているやつだ・・・。

（あれ？最後の部分は聞く人によってはアレな人にも聞こえちまうかな。）

その彼女たちは口論しているライナと美琴から少し離れた離れた場所に立って、じつとこちらを見つめている。なぜか真ん中にいる背の低めなツインが、こちらに殺気を送ってきているような気がして背筋が震えた。

「なんてゆーか。お前にも友達とかいたんだな。」

「アンタねえ・・・、人をなんだと思ってるワケ？」

「いやほら、常に町中一人で爆走してますよ的な第一印象を受け
たから。どつかのお嬢様だったりして・・・？」

「この制服を見ても分からないって言うの？常盤台よ！後ろでな
ぜかハンカチ噛みしめてる子も。ほら黒子一応挨拶しなさい。」

劇の一場面のように、そこにはなぜかハンカチを悔しそうに、い
や怨嗟を込めて噛みしめてるツインがいた。他の二人はせつせとそ
の上から落ち葉をまき散らしている。今は夏だというのにどこから
出したというのか。

「くろこはあゝ・・・黒子はあああゝっ！！！」

「ちよつとなんでそんな瞳に涙まで浮かべてんのよ・・・。」

「だってだって、お姉さまが私が知らないうちにこんな殿方とお
・・・。黒子は嘆かわしいですわ・・・。」

よよよ、と泣き崩れる黒子に、美琴は若干引きながら、それ以上
に引いているライナにむかって紹介し出した。

「名前は、『しやうこくろ白井黒子』。ジャッジメント風紀委員をやってるんだけど、正確が
たまに傷なのが問題なのよねー。他の二人は、ストレートな髪型し
てて背が高い方が、『さてんい佐天涙子』、頭に花飾り付けてる子が『ういは初春
るがざり飾利』。初春のほうも風紀委員やってるわ。ちなみに二人とも前に
あんたに助けられた子たちよ？」

「・・・ああ、あのときの二人か。んじゃま俺の名前はライナ・
リユート。よろしく。」

「あ、あのとときはありがとうございました。おかげで助かり

ました！」

佐天と初春に頭を下げられるライナ。

（こう改まって言われると、なんだか恥ずかしいものを感じるなあ。）

「いや、たいしたことはしてねえから・・・。」

「へえ。あなたがあのときの事件の関係者でしたの。」

突然横やりが入られた。ふと声の方に目を向けるとそこにはシヨックから立ち直ったらしい黒子がこちらをジト目で見ていた。

「服装からしておかしな方ですけど、もしかして『外』から来た方ですか？」

「『外』？ああ、学園都市の外からってことか。・・・うん、おまかには間違っていないな。」

（なにしろ学園都市の外どころかこの世界の外から来たわけだし。

「名前は外国の方のようですね？」

「うん、まあ外国と言えば外国生まれだけど、その言葉はもう忘れちゃってるんだよ。」

（こっちの世界で言葉が通じてホントによかったと安堵したしな。）

むしろ何故こちらの世界でも言葉が通じているのかが、ライナも疑問を感じてならない。それもあの『勇者の遺物』による作用な

のか、はたまた人間の進化の過程が比較的似ていたからかもしれない。

これは調べてみるとおもしろいことがわかるかもしれない、とライナが思考に没頭していたところで、不意にまた黒子が質問してきた。

「それにしても・・・、いくらレベルが低かったとはいえ、『外』から来た殿方にそんな簡単に倒せることができるとは思いませんの。あなたは何か武術でもしていっしょやるんじゃないやありませんこと？」

「ん・・・、まあ・・・な。」

確かに武術とも言えないが、『ローランドの魔術師』としての異名を持っているライナとしては少し複雑な心境だ。

「そーなのよ。こいつ、こんあやる気なさげで眠たそうで、いかにも弱そうな外見してんのに、なぜか強いよねー。妙な術も使うし。ねえ、あれって能力なの？」

「ちよつと違うかな。この街ののやつらみたいに、そんなタイムラグとかなしで使える便利なもんじゃないんだよねコレが。」

そうとも、その能力とやらがとてつもなく厄介なのである。

詳しい原理はまだ分からないが、上条から聞いた話によれば、ほとんど人体改造、脳の開発に近いものがある。電極を脳にぶっ刺して能力を開化させるのだ、各個人によって扱えるようになる能力はたいていは違うものになるのだ、ライナがいた世界にはないほどの高度な科学技術をもつてしての能力開発。

一昔前のローランドでも腐った研究は行われていたが、向こうは安全性なんてものはなく、しかもほとんどが失敗に終わるか、禁術扱いになって研究が頓挫するかのもどろかった。しかしこちらは安全で、しかも明らかに能力を使えるようになる確率がこっちのほうが

高いというのが驚きなのだ。

「ふうん。まあそんなことはどーでもいいわ。アンタ、今から私と勝負しなさい!!」

（は？何をいきなり言ってるんでせう、この女の子は。^{バカ}）

「・・・何で勝負する必要がある？」

「私がアンタに勝ってないからに決まってるでしょーが！」

（おいおいマジかよ、なんというかこいつ・・・、^{バトルマニア}戦闘狂のケがあるのか・・・。）

「今は暑いしめんどくさいから、また今度にしねーか？」

「今度がないかもしれないじゃない！即断即決即行よっ!!」

ライナは周りの子らに目を向ける。

（大丈夫だ。いくら美琴が^{フツ}一般人じゃなくても、きっと他の奴らは^{フツ}一般人に決まってる!!）

この暴走女を止めてくれると思いつつ、目線で合図を試してみた。
すると・・・、

「そうですわ！お姉様っ!!こんなヤツはケチヨンケチヨンにしてあげるのが相応しいですわよ！」

「御坂さんが闘うのが久々に見られるのかー。これは見物のしがいがあるね初春!!」

「そうですけど、でも^{ジャッジメント}風紀委員である私がこんなこと容認しちゃ

「つたらダメな気がするんですが・・・？」

「だ〜いじょーぶだつて！これはケンカとかじゃなくて決闘だから、^{ジャッジメント}風紀委員が取り締まることじゃないしさー。」

「う〜ん・・・、そうとも考えられますけど・・・。白井さん！やっぱり御坂さんを止めたほうがいいんじゃないですかー？」

「甘いすわね初春。お姉様は今からこの人に教育をしてあげるんですの。そこで仕方なく能力を使ってしまっても不可抗力ですよ。」

「そつかー、それもそーですねー。」
「・・・。」

（・・・おいおい！なんで納得してるんだよっ！！初春とやらは止めようと考えてくれてたみたいだが、あっさりと丸め込まれちゃまったし！！）

「お〜い・・・、暴力は反対だぞ〜。んでもって権力を笠に着るなよ。」

「勝った方が正義ですよ。」

「どこの悪代官だよお前・・・。」

「さあ観客も納得してくれたみたいだし！さっさとやっちゃいましょーか！！」

「はあ〜・・・、めんどくせ〜。」

どうやらこの女子四人は常識を持ち合わせていないようだった。さらには権力は持つてるわ、美琴は闘心むき出しだわで、ライナは肩を落として盛大なため息を吐くしかなかった。こう思わずにはいられない。

（学園都市の上の連中・・・、明らかに人選ミスだろ・・・。）

と
.
.
.
.

第七章 とある男と暇な一日（後書き）

毎度のこと遅くてすいません・・・。

最近はいろいろと立て込んで、ちょっとずつしか書き留められなかったもんですから。（><）

できるかぎり一週間に1話は更新していきたいところです。
で、今回はなぜか話がわき道にそれていつてしまいました。次回まで続きます。

第八章 とある少女と二つの闘争（前書き）

ライナと美琴が闘います。

第八章 とある少女と一つの闘争

「まったく、めんどくせー」

ライナの口からはそんなため息が漏れる。今は何をしているのかというと、のちのち美琴と上条が闘う場所でもある河原に移動中だ。美琴を先頭に、黒子、初春、佐天と続き、一番後ろをライナが歩いている。

一度ならず何回か逃亡を図ったライナだが、目の前に現れる黒子に連れ戻され、というか強制的に空間移動させられ、どうにもこうにもできない状況のまま、正反対の方向に向きそうな足を、たいしてない精神力で必死に押しとどめ歩いているのが現状だ。

「ちょっとうるさいですわよ、豚野郎。さつきからそればかりじゃありませんこと？もう少し静かに歩いてほしいですわね」

「豚野郎って……。色情狂よりマシなんだろうか……。ってかお前の能力卑怯すぎるだろっ！！なんだよ空間移動^{テレポート}って。そんなん逃げられねーじゃねーか！！」

「あら？たかがわたくしごときで何を驚いてますの？ここは学園都市ですの。わたくしのような能力者は他にもいるんですよ。それに美琴お姉さまも！」

「やっぱりこの街おかしいだろっ！そんな能力者がゴロゴロいたんじゃ太刀打ちできねーじゃねーか！！あと性格的に！」

「それがこの街の基礎ですので、そうなるのは当たり前ですの。ええ、確かに『外』と比べると技術だって大幅に違いますので、おかしいといえはそうなるのかもしれないわね。」

「だってねー、あまりにも『外』との技術力その他もろもろが違いすぎて、もう一国独裁って感じだもんねー。初春はどう思う？」

「私も、やっぱり他とは異なつた一つの世界が出来上がつてるよ
うな感じがしないでもありませんけど。でも治安的には私たち風紀委
員もいますからそこそこ安全ですし、それによつて暴動が起きない
のが大きなところですねー。まあスキルアウトなどのグループも存
在しますから、改善の余地はまだまだあるんですけどねー。」

「へえー。じゃあ、ここの王様じゃなくつて、統治してるのはど
んなやつなんだ？」

「あたしはよく知らないねー。」

「それならお姉さまが一番詳しいんじゃないやありません？ちよつとお
姉さま！こちらの豚野郎に学園都市統括理事長の話をしてあげてほ
しいですの」

「んー・・・詳しくは私も分かんないわね。でも噂じゃ窓もドア
もないビルの中にいるつて話よ。まあ私は会つたことないからなん
とも言えないわ。もつと理事会に詳しい人物に聞いた方がいいんじ
やない？」

「例えば誰に？」

「そうねー、親船最中おやふねもなかつて人に聞くのが一番かもしれないわね。」

「どんなやつなんだ？」

「学園都市統括理事会の一人よ。まあ理事会の中では一番話が聞
きやすい立場にいる人ね。前に演説してるのをちらつと見たことが
あるんだけど、なかなか人のよさそうな人だったし。」

「ふーん・・・。」

（なるほど。そいつに会つていろいろと話を聞けば、この街のこ
とも少しは分かるのかもしれないな）。でも・・・）

「そこに至るまでがめんどくせー。んで今から闘うのかと思うと
あれだな、ここでふて寝したくなるよな！」

「どこに向かつて力説してんのよ・・・？」

ライナの目線は明後日の方向を向いていた。心なしか太陽が頷いてくれた気がする。しかしそのキラキラと輝く太陽はライナの全身を焦がそうと躍起になっていたので、とてもじゃないが仲良くできそうにない。

（それによくこんだけ常識はあるのに、肝心の決闘に対する常識は持ち合わせてないんだ？ってかモラルはどこいったモラルは！！）

そうこうしているうちに、とうとう河原へと一行は着いてしまい、ライナは思いつきり頂垂れてしまう。

「ちよつとこらー！ーっ！ー！今からやるうってんのにやる気を見せなさいってばー！ーっ！ー！」

「うるせえよ！もともとコツチにはやる気はねえんだよっ！ー！はあ、なんでこうなっちまったんだか。」

「特大のため息をつくなーっ！ー！いいわ、とりあえず黒子が審判をやってくれるから。よろしくね黒子」

「ええ！お姉さま！！この黒子、命に代えましてもお姉さまのために尽力を尽くしますわ！！」

「おい、その審判！明らかにお前のほうに傾いてるぞ！不公平になるんじゃないか！？」

「まあそれもそうね。でも大丈夫でしょ。ルールとしては相手に『参った』を言わせるか、気絶させるとかして戦闘不可能にしたら勝ちでいいでしょ？」

「参った」

「あ、言つとくけど死ぬような攻撃はなしね。もちろん私も手加減はするから。」

「おいちよつと待て。今の俺の言葉が聞こえなかったのか？『参った』って言ったぞ？」

「それじゃあ黒子、開始の合図を。」

「無視ですか！？もう俺の発言なんか全無視ですか！？」

「ええ、では始めますの！」

「。。。。」

「ただいまより、愛する美琴お姉さまと、そこいらのダニほど憎い豚野郎との試合を開始しますわ！！」

「。。。。。。」

「両者準備はいいですわね？」

「。。。。そう、上条ならこういう状況で必ずこう言うよな。ふ

っ。。不幸だあああああああああッッ！！！！

「！」

「それでは始めッ！！」

（ようやく始まったわね。待ちに待ったコイツを叩きのめすチャ

ンスが。だいたいコイツが何者なのかは未だに分かんないけど、前にやられた分はしっかりとやり返さないと。それに久々の勝負だから楽しみなのよねー。」

美琴はじつと相手の様子を探る。向こうもまだ何かを仕掛けてくる様子はなさそうだ。お互いに相手の出方をうかがっているってところだろうか。

「どーしたのよ？早くかかってきなさいよ。」

声をかけ挑発してみるが、相手は少しも動こうとはしない。ただただじつとこちらの動きを観察しているようだ。相手の頭が美琴の上から下までを眺めているように見える。そう、こっくりと・・・。

「って寝てんじゃないわよっ！！」

ツツコミとともに美琴の前髪から火花が生じ、一本の雷撃が相手に向かって一直線に放たれた。尾を引きながら打ち出された雷撃は相手の胴体を直撃する弾道だったのだが、直前で危険を察知したのだろうか。はつと目を見開いてその場から素早く横に飛び退き、こちらに目を向けた。

「あぶねーあぶねー。危うく眠りにつくところだったぜ。二重の意味で。」

「何うまいこと言ってるのよ！？しかもすでに眠ってたしアンタ！！」

「不幸だと叫んだせいで体力を消耗するという更なる不幸に陥っていただけだ。」

「もういい！永遠に眠れっ！！」

またもや美琴から今度はさっきの数倍のチカラが込められた数本の雷撃が放たれたが、ライナはそのどれもひよいひよいと避ける。

「おいおい……。死ぬ類の技は、ダメなんじゃなかったのか？」

「今思ったらここは学園都市だから、そんな必要はいらないのよ。ここの医療班が、なんとかしてくれるでしょ。腕の一本や二本、すぐに繋げてくれるわよ？」

「……。恐ろしい場所だなやっぱりココ。」

美琴は少し息が切れてきているようだ。しかしそんな会話の間にも雷撃は続き、今度は一直線ではなく多方向からの雷球に変えて攻撃してきたが、どれも直撃には至らない。ライナは隙をみせないよう、最小限の動きで避け続ける。

「なんで、当たらないのよ!？」

「うーん、まあこっちの国にも雷の魔法が普通にあつたし、慣れているのが大きいかな。それにフェリスの剣のほうが早いし。」

「フェリス? 誰?」

「まあ、俺の相棒かな。美人で、だんご好きで、剣の腕が凄くて、頼りにはなるけど、性格は、悪魔級、っていうやつ。」

「いいのか、悪いのか、判断に困るわね」

お互いに決定打には至らない。というか、ライナの方はまだ攻撃さえしていないが。

(ちょっと『眼』で見てみるか)

呪われた瞳『アルファ・ステイグマ複写眼』。相手の魔法の、あらゆる情報を解析し、構成を読みとり、自分のものとしてしまうもの。眼には深紅の五方星が浮かび上がる。

（あれ、やっぱり解析はできないか。美琴が使ってるの能力だし。あの変なルーン魔術使うヤツのはコピーできたんだけどな。）

「さつきから、避けてばっかじゃない！もしかして、ビビって攻撃できないとか！？」

「んなわけねーだろっ！！」

「じゃあどーしたのよ？」

「いやほら、だって、お前さ、そんなにがさつに見えてもやっぱり女の子なわけだろ？そう思うと、こう・・・なんていうか攻撃しにくいものがあるじゃん？」

「・・・・ぷち」

（ん？なんか今変な音が聞こえたような・・・？なんか・・・堪忍袋の緒が盛大にキレたような音が・・・？）

「アンタねええええ！！！」

ライナが見た美琴の顔は・・・修羅だった。

「のわっ！おい、美琴。お前顔がやばいって将来お嫁行けなくなるって！」

そういうと美琴は思い直したのか、今度はとびっきりの笑顔になった。まるで見た者を震え上がらせるようなそんな笑顔に。

（目がっ、目が少しも笑ってねえ！！！）

まるでここが死に場所と決めた武士もののふのようなそんな威圧感が美琴から漂ってくる。まあこの場合、殺されるのは主にライナだろうが。

（仕方ない、反撃するか）

意を決したライナである。なにしろこのままでは本当に命の灯火が消えてしまう。たださえ太陽のせいで焦げているような気がしてならないのに、それを数十倍も上回る雷撃で焦げさせられたらたまらない。一瞬で消し炭だ。

ライナは自分が消し炭となって、それが消し炭となってこの街の医療スタッフに一つずつなぎ合わされている幻想を見た気がした。そんなことさせてなるものか。

「ならまずほ……、『求めるは水雲>>>・崩雨^{みすみ}』！！」

描いた魔方陣から水の奔流が美琴に向かってあふれ出した。

さすがに怒り心頭だった美琴もすぐさま大きく下がって距離をとった。

「やっと反撃してくる気になったわね!？」

「ああ、仕方ねえ。めんどくせーけどな。得体の知れない奴らの手にかかるのはご免被るぞ!!」

「……? まあいいわ! それじゃコツチもちよつと戦法変えてみよう!」

言うが早いか、美琴は地面に手のひらを向けた。するとなにやら黒く細かい者が美琴の下の地面から巻き上がり、長大なムチみたいなものができあがった。よく目をこらすと何やらその細かい粒でできたムチの表面は少し震動しているらしい。どこかからか飛ばされてきた落ち葉がそのムチに近づき、まるで何の力もいれずスライスされてしまったチーズのように、その身をふたつに分けた。

（なんてエグい武器だよおい。俺の体がトバされるじゃねーか。）

「さあゝて、いつまで耐えられるかしらね？」

「ゝゝツ・・・この殺人鬼っ！！」

（まずい。このままじゃ避けきれねえ）

「『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』！！」

空間に刻んだ文字が光を発し、ライナが光に包まれる。

「ッ！？スピードが上がった！？」

使用した者の脳の抑制を外し、身体能力を一時的に向上させる魔法。ただし、効果が切れると、体力を一気に消耗するという反動の大きさが欠点でもある。高等魔法に位置し、エスタブル王国の一部のエリートのみが習得できたものだ。

それにより、美琴が振り回した凶器はライナには当たらず、ライナは隙間を縫って美琴にだんだんと近づいていく。

（私の攻撃が追いついてない！？なんなのよコイツ）

改めて思い知らされる目の前の男の底知れなさ、美琴に少し恐怖を与えた。これほどに相手に翻弄されたことはない。美琴はレベル5であって、その攻撃を避けられる者などほとんどいなかった。ましてや、余裕で反撃してくるほどの実力者には。

（あれよ、一方通行とか第二位とかは抜きにしてくれど、でもこんなに強いヤツは他にいないかもしれない。もう一人のアイツは防ぐのに精一杯だし）

もちろんもう一人の『アイツ』とは上条当麻その人である。悲しいかな、彼は特殊な右手がある以外は普通の学生でしかない。ライナのような特殊な訓練さえ彼は受けていないのだ。だからこそ右手で防ぐだけで精一杯なのだ。

それに比べてライナには特筆すべきものがある。魔法が使えることもそうだが、なにより今まで培ってきた経験と実力がそもそも美琴とは大違いだ。ライナはホントの殺し合いを知っているだけ、美琴に対してアドバンテージがある。

美琴の攻撃を避け続け前進しながら、ライナは考えていた。

どうやって美琴に降参させるか。

問題はただその一点だ。向こうはもうライナの言葉なんて聞いちやくれないにちがいない。「降参する」といったところで脳天に雷が落ちてきて終わりだ。人生ともに。だからこそ美琴にうまく降参だと言わせる必要があった。

（となると、やはり美琴が降参と言わざるを得ない状況を作り出すことが必要だな。

方法その1、美琴をこのままぶっ飛ばす・・・はあんまりやりたくないよな。

方法その2、美琴を魔法でぶっ飛ばす・・・もあんまり変わんないか。

方法その3、美琴を行動不能にする・・・かな、やっぱり。

方法その4、魔法を使つてうやむやにし、この場から逃走する・・・はダメだ。黒子のヤツが目を光らせてやがる。逃走用の魔法を考案してみようそのうち。

よし、ここは方法3を採用するか）

幸いにして、未だにライナは五体満足で美琴の攻撃を避け続けて

いる。なまじ相手の攻撃にフェイントがほとんどないことも、ライナの命をつなぎ止めてくれる理由の一つだ。しかし、今は電気で砂鉄を巻き上げ、砂鉄ブレードというか砂鉄ムチを振り回している美琴だが、もちろん瞬時に雷撃を放つこともできるだろう。せっかく近寄ってもビリビリの前に感電してしまつては元も子もない。となると、

「魔法で捕らえるしかないよな」

そんな魔法あつたかなとライナは記憶を探る。

（ああ、なんかちょうどいい魔法をネルファ王国のやつらが使ってくれたっけ？確か・・・そう！）

「『光の王が無数の時を編み・ライト・キャンサー』！！」

それはネルファ王国の魔法の1つ。

刻み込んだ紋様から、光によって編みこまれた網を出現させ、目標を捕縛するという便利なものだ。

「ちよつ、なにそれ！？」

目の前に広がった光の網に、美琴はすぐさま避けようとするが、何せ捕縛に特化した魔法だ。その範囲は広く、美琴はいとも簡単に捕まってしまった。とっさに雷撃で弾き飛ばそうとするものの、何でできているのかわからないその光のひもは、一向に消える様子になかった。捕まってお縄を頂戴した泥棒のように、美琴の体にはしっかりとネルファの魔法が絡みついていた。

「なんなのこれ！？取れないっ！？」

「はっはっは、それはネルファ皇国の魔法だ。」

「ネルファ皇国ってどこの国よ一体!？」

「それにお前みたいなヤツを捕まえるのには絶好の魔法なんだよなこれが。能力もあんまり効かねーみたいだし。ほら、降参しろ」

「ッ!!こんなんで勝ったつもり?ふっざけんなああ!!」

「うえ!？」

バチツバチツバチーンツツという音とともに、周囲に電撃が走るとてもなく眩しい。どうやら美琴は最大出力でチカラを使っているらしい。

(やばい、いくらなんでもここまでされちゃ保たねえぞ。)

ライナが危惧したとおり、美琴を縛っていたひもは今にも主を解放しようとしていた。

「させるか!!」『光の王が無数の時を編み・ライト・キャンサー』

「!!」

「あ、ちよつと」

さらなる魔法が美琴を襲う。

「もういつちょ」『光の王が無数の時を編み・ライト・キャンサー』

「!!」

「ま、待つて待つて」

「さらに」『光の王が無数の時を編み・ライト・キャンサー』!!」

「うぐぐ」

「それ」『光の王が無数の時を編み・ライト・キャンサー』!!」

「むぐ!？」

「ラストおー」『光の王が無数の時を編み・ライト・キャンサー』

「!!」

・・・ものの見事に光の芋虫が出来上がりました。なんかうねってます。

顔と思われる部分は口元と目元以外ほとんど埋まっており、唯一見える目がライナをギンギンと睨んでおります。呪われそうです。

もう雷撃は無駄だと思ったのか、上空の雲間で巻き込んでゴロゴロといわせていた美琴のそれは鳴りを潜め、ライナは美琴芋虫の上によっこらしよと腰掛けて、しばし大きくため息を吐いたりしてみた。今まで使っていた魔法の反動もぐつと体にこたえてくる。

「ふう。で？降参でいいよな？もうさすがに反撃はできないだろう」
「つてかその前に、私の上に乗るんじゃないわよ！？苦しいじゃない!!」

「いやあ、ちょうどいい椅子を見つけたもんだから。」

美琴に向かって皮肉を放つ。誰のせいでこんなにも疲れたと思っ
てんだ誰の！？とその目が語っていた。

「・・・いいわよ、私の負けで今回はね」

「今回は？」

「だって、また次が会ったときにはやってもらうし」

「おいおい、今回が最後じゃなかったのかよ？」

「そんなわけないじゃない。私が勝つまではやり続けるわよ」

「ってなんでだよ！？こんなことは一回でもう十分だって!!」

この間、美琴はずっとライナの尻に敷かれっぱなしである。

「意地よ意地。私の仮にもレベル5としての矜持がね、許さないのよ」

「はあ？じゃあもう別のヤツとやってくれよ、俺はもう寝るだけで精一杯だからさ」

「寝るだけで精一杯ってどういうことよ！？」

「いいだろ？寝てるだけで人生を謳歌するってのはさ」

「私には自堕落な生活を送ってるようにしか思えないけど・・・、
って早くどきなさいよ！！」

「じゃあ俺にちよつかいをかけてこないと約束するなら、どいてやるが？」

「卑怯でしょそれ！む・・・、今ココでの解放と、再選の機会を逃すのとどっちがいいかしら？」

「悩むなよそこ・・・」

あれこれ悩んだ末に美琴は一つの結論を出した。

「そうよ！なら１ヶ月に１回でいいから勝負しなさいよ！」

「おいおい、なかなか頻度が多いような気がするんだが？」

「毎日のように再選を申し込まれるのとどっちがいいのよ？」

「断然前者だな」

「ならそういうことで決定ね、ほら早くどけ」

仕方なくライナは立ち上がろうとしたところで、耳元で風切り音がした。

（はっ、殺気！！）

思わず前に飛んで、何かを回避した。ぱつと後ろを振り返ると黒子がいかにも回し蹴りをしたあとの格好で固まっていた。

「ちっ、なんで避けるんですの。大人しくお姉さまの上に乗っかってた罰を受ければよろしかったですよに」

思いつきりライナに向かって舌打ちしたあとの罵倒。

「思いつきり確信犯かよ！！だが甘いな！フェリスならその1万倍早い！！」

「テレポート空間移動からの回し蹴りより早いなんて、どんな化け物なんですの！？」

「違うな、ヤツは悪魔だ」

そのときはるか遠くでフェリスがくしゃみをしたとかしなかったとか。

「とりあえず今日は俺の勝ちってことでいいよな？」

「致し方ありませんわね。お姉さまが認めましたもの。わたくしが認めないわけにはいきませんわ。」

「その言い方だとまるで、美琴のヤツが負けを認めない限りは永遠にこの戦いは終わらなかったと受け取っていいか？」

ライナはどこか達観した様子だ。明後日に目を向けている。

「すごかったねー二人とも！御坂さんのほうは当たり前だったけど、まさかライナさんのほうもあんなに張り合えるとはねー。しかも勝っちゃったしさー。」

「そーですよ。まさか御坂さんが負けるとは思ってませんでした。」

「

ここで見物人と化していた佐天と初春が駆け寄ってきた。

（おおっと、そんなに『負け』だ『勝ち』だと連呼しないでくれ。沈静化しているビリビリが再度雷獣と化するのが時間の問題になっち

まうだろ！)

ライナはそんな事態にならないうちにさっさとここから退散することにした。

「それじゃ俺は帰るぞ」

そう言つて、そそくさと4人に背を向けて歩き出したライナだったが、美琴に呼び止められた。

「あ、ちよつと待ちなさいよ。せつかくこの私に勝ったんだから、なんか手伝つてあげてもいいわよ。ちょうど前のときも図書館に行くつもりだったんでしょ？今日も行くつもりだったんじゃない？」

「それをわかつていながら俺を誘うなッ！！おかげでだいぶ時間潰しちまつたじゃねーか！！」

「悪いと思つてるからこうして提案してあげてるんじゃない。どうするの？手伝いあったほうがいいの？」

その美琴の後ろでは黒子が佐天と初春に押さえつけられていた。

黒子は「ダメですわお姉さま！！そんな糞野郎の手伝いなど、お姉さまがすべきことではございませんの！！おのれえ、糞野郎おおおお！！お姉さまに手伝いを提案されるなどと羨まし・・・なんと図々しい輩！！黒子が成敗してやりますの！！離しなさい二人とも！」と盛大にわめいていたが、「ダメですつて黒子さん、落ち着いてください」「そーだよ、ここは大人しく敗者は勝者に従うのがセオリーだよ」と二人によって引き留められていた。

ライナとしてはずっと引き留めていてほしいところである。

「そゝか、じゃあ手伝つてもらおゝかな。一人でやるよりもずっとマシだろうしな。よっし！じゃあビシバシこき使つてやるから

覚悟しとけよ!!」

「ビシバシはちよつと遠慮したいところだけどまあいいわ。迷惑かけた分、役に立ってあげる」

そうして二人は意気揚々と、図書館へ向かって旅立ってしまった。残された三人も暇だし気になるという理由で二人のあとをついていき、結局は御坂さんだけにやらせるわけにはいかないと、全員が本探し&ライナが知らないことを説明してくれたりと協力してくれた。それは大変よかったのだが、悪かったこともある。それは、ライナが眠りかけたときに美琴の電撃が図書館であるにもかかわらず飛んできて、奇声を上げてしまい恥をかいたことと、作業中にずっと、黒子の暗く呪われた視線がライナに降り注いでいたことだ。

その結果、作業は大いにはかどり、ライナはこの世界のことをおまかにほとんど理解したのであるが、胃が痛いというシヤレにならない状況（一応シヤレだが）に陥ってしまったことは言うまでもない。

4人と別れ、小萌先生宅に帰ってきたライナを見ての、インデックス&上条&小萌先生の一言がそれを如実に表していた。

「ひよええ〜!!お化けが先生の家を訪ねてきたのですーっ!!」

「うおっ!!死に神かつ!?!くそ右手で防げる相手なのか?」

「違うかも当麻!おそらくウイルスによってゾンビ化してしまった人に違いないんだよ!!」

当の本人は周囲の動揺になにも反応することがなく、誰も手を下す前に、勝手に玄関で力尽きて倒れてしまったで、その後30分ぐらいこのゾンビ君をどうするかで3人の議論が白熱したことは知らなかったそうだ。

第八章 とある少女と一つの闘争（後書き）

誤文、散文、誤字、脱字、誤表現など多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

とりあえず勝負はライナが勝ったという形に。

美琴が負けるはずないだろと言う方には、大変申し訳ない結果に終わってしまい、ほんと申し訳ないです。

しかも戦闘の描写がこれでもかというほど少なく、また表現がへボなので、まったく緊迫した戦闘にならず、どちらかというと会話が多かったように読者の方も思うでしょう。ええ、作者もそう思います。

それと、魔法の説明文などはWikiから抜粋した部分があります。

話が脱線いたしました。次からは本筋のほうのストーリーに戻す所存でございますので、どうか平にご容赦を。

第九章 とある日常と一騒動（前書き）

本編に少し戻りますが、大きく脱線しそうです。

第九章 とある日常と一騒動

「それにしても、いつまで眠るんだろうね、ライナ」

声を発したのはインデックス。あいかわらず布団の上にいるのだが、今は体を起こしている。彼女の視線の先にはずいぶんと前にゾンビとして帰ってきたライナが、文字通り死んだように眠っていた。たかだか図書館に行くだけでなぜこんなにも疲弊しているのだろうか。おそらく上条ばりの不幸が襲いかかってきたに違いないんだよ、とインデックスは推測した。そしてそれはあながち間違っではない。い。

時刻はそろそろ8時というところか。今日、小萌先生は仕事が残っていたようで朝から出かけている。上条はというと、もちろん補習に出なければならないのだが、インデックスの看病がある！と言って、小萌先生を説得したおかげで今はインデックスの隣に座っていた。

「さあな。何かあったんじゃないか。さすがに図書館に行っただけでここまで疲れないだろ」

上条はそう言うも、どことなく嬉しそうだ。少し顔がニヤついてるのがその証拠である。おそらく、自分以外の誰かが不幸にあつたと雰囲気を感じて、今まで溜まってきた暗い感情の一端が顔を覗かせているのかもしれない。

インデックスはそんな彼の様子を見て、ちよつと笑った。

「で、お前のほうは調子いいのか？」

と今度はインデックスに向かって聞いてきた。こういう優しさが上条のいい所なんだろうとインデックスは心の中で思いながら、上条に視線を戻した。

「うん。だいぶ良くなってきたみたい。背中のはうもほとんど痛みはなくなってきたし、そろそろ動いても大丈夫そうかも」

言っていることは本当だ。ここ何日かの休養のおかげで体力のほうもだんだんと戻ってきていた。

「そうか、ならよかった」

上条のほうも自然と笑顔になる。その顔を間近で見たインデックスは少しドキツとした。インデックスは知る由もないが、これが俗に言う「カミジョー属性」である。すぐそこまで上条の魔の手が迫っているのだった……。

「それにしてもお前もライナも遠いところから来たんだよね？お前は他のいろんな都市を巡り巡ってここに逃げて来たわけだし、ライナから聞いた話だとあいつは異世界から来たんだろ？それにお前もライナも魔法に深く関わってるみたいだし。科学サイドの俺としちゃあ、なんかもう非現実絶賛体験中！みたいな感じなんだが。」

「む。それは当麻が知らないだけで、この街の外には意外と魔術は広まっているんだよ？まあ一般人にはあまり縁がないことなんだけどね。この街は私たち魔術サイドから見ても他の都市と比較しても異質の存在なんだよ」

科学が発展しすぎている。他の街よりも2、30年進んでいると言われているこの学園都市の存在は普通はあり得ない。たとえば一つ

の都市が高度な発展を遂げたとしても、その技術なり思想は、他の都市へ伝播し広がっていくのが普通だ。それなのにこの街の技術は外へと流出せず、中だけで独自の技術を発展させている。情報規制が厳格なのか、それすらもこの街の技術であるのかは不明だ。

なにより注目すべきはこの街が能力開発と称し能力者を生み出し続けていることだ。能力という概念は魔術とは効果としては似ているものの、その本質はまったく違う。魔法が力を持たざる者がそれを補うために行き使用するものであるのに対し、能力は被験者自身の潜在能力を引き出すものだ。「自分だけの現実」を知覚し、自分だけの能力を意識する。つまり、チカラを持っている者が扱うものが能力である。そのためチカラを持つていないものは当然レベルは低く、潜在能力が高く自分だけの現実をしつかりと制御できた者が上位に位置する。つまり魔術とは回路が違うわけだ。

また、他の街よりも何倍も科学が發展しているこの街には宗教関係の建物がない。それはこの街にいるのが学生であるという部分が大いなのかもしれないが、何か心の拠り所となる存在がこの街にはないのだ。あるのは科学と能力だけ。広まるのは科学ばかりで宗教は片隅に追いやられている。おそらく宗教のことをこの街の学生に聞いても、ただ知ってるけどそれが何？という答えしか返ってはこないだろう。学園都市を出ればそこには、大きくないとはいえ、そういった建物や人は存在するのに。

「慣れてしまえばあまり気にならないもんだけど、まあ確かに学園都市を出るのに面倒な手続きは必要だし、それに改めて考えると他の都市にはないことがたくさんあるんだよねー。」

「うん。だいたい自動掃除機ロボットとか、百発百中必ず当たる『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』とか、普通は他の都市にはないんだよ」

「はは、便利なんだけどなとつちも。」

樹形図の設計図とは、世界一の演算能力を持つ超高度並列演算処理器である。例えば空気中の分子1つ1つも完全にトレースすることで、1カ月先の完全な天気予報を可能にするものだ（予報ではなく「予言」とまで称されるのだが）。それすらも他の演算の空き時間を利用して1カ月分まとめてやっているに過ぎない。実際に実験を行う前のシミュレーターとして用いられており、使用には統括理事会の許可が必要な代物だ。

上条としては長年住んでいた土地であるし、当然違和感などは感じないのだが、やはり『外』から来る人間にとっては慣れない場所なんだろうなと思った。

「ところで腹減らないかインデックス？お前ならもうそろそろ何か食べたくなってくる時間だろ？」

「大丈夫かも。そんなに私には食欲なんてないんだよ。」

と、さも当然のように答えるが、ここ数日で上条さんはすでに熟知していた。ちょうど見計らったかのように、インデックスのお腹のあたりからぎゅるゝという音が鳴る。

自分のお腹から聞こえてきたその虫の音はインデックスの顔を真っ赤にさせた。

「こ、これは違うんだよ！修道女たるこの私が2時間前に食べた夕食をもう消化してしまってますでにお腹がすいているなんてことはないはず！そう！きつとライナのお腹が空いているんだね。」

「違うわ！まあ確かに腹は空いてるが、今の腹の音は俺のじゃねえ！」

レム睡眠だったのだろうか。インデックスの言葉に反応して、寝

ていたライナががばつと起きあがりツツコんだ。

「失礼なんだよライナ。人のせいにするとそのうち天罰が下つても知らないから」

「それが修道女の言葉かおい！！明らかにお前に下るだろ天罰！！」

「まあまあお前ら。そんなに腹減つてんなら、なんか作つてやるから。」

その上条の言葉にインデックスの目がキラリと輝く。

「当麻がせつかく作ってくれるんだから食べないとね！」

その少女空腹なり。すでに食べる準備は満タンとばかり、虚空からお箸を取り出してシャキンシャキンと空気を掴んでいる。

「やっぱりお前食べる気満々なんじゃねーかつー！！」

「誰も食べないとは言つてないんだよ」

「……はあ、まあいいか。ところで当麻、何作るんだ？」

台所を漁っていた上条は、インデックスとライナに顔を向けた。心なしか浮かれているようだ。

「いいものがあつたぞ！聞いて驚け！！なんと「特別スペシャル焼き肉セット」があつたのだー！！」

上条はどこぞの戦国大名のように偉そうにそう告げた。途端にインデックスもお肉の歌を歌い出す。

「お肉！？らっきーなんだよ！！おにく〜にくにく〜おにくにく

」

「おお、いいなそれ、じゃあ今夜は焼き肉か!？」

「そうだとも。さて諸君、準備に取りかかるうではないか」

3人とも焼き肉ができるということでテンションが上がったよう
で、すぐさま準備を終えた。

ボロツちいテーブルの上にはホットプレートや肉をを初め、皿や
焼き肉のタレ、はたまたほっかほかのご飯が乗っている。

さあそれでは始めようではないか、と上条が鍋奉行ならぬ焼き肉
將軍となったところで、まずは焼き肉を焼く前にまずはタレを皿に
入れようと試みたのが、そのとき彼の持ち前の不運さが発揮される
ことになる。

インデックスのお皿にタレを入れようとしたところで、手が滑つ
てそれはそのままインデックスの方向へ。

あっと思う間もなく、インデックスの上にそれは落下し、中身を
盛大にぶちまけた。頭からは被らなかったものの、腰からしたあた
りに茶色っぽい大きなシミをそれは作った。

「……私の修道服が茶色に染まったんだよ……」

インデックスの顔にはタレはかかっているはずなのだが、なぜ
かその表情は暗い。身の危険を察知しすぐさま上条は台所へとつて
返し、布巾やらティッシュやらを持ってインデックスの元へ。とに
かく事態の収拾を図らなければならない。

ごめんインデックス!と謝りながらとりあえず真っ白な修道服
の上に落ちたタレを、丁寧にふき取ろうとするも、さらに不幸は襲
う。膝についてインデックスの服を拭いていた上条だが、今度はそ
の足がスリップ。どさっという音とともにインデックスの上に覆い
被さってしまった。

「当麻がどさくさで私を襲おうとしてるーっ!!」

キヤーと叫ぶインデックス。違う違うそんなつもりは微塵もミゾンコもなかったと、上条は言い訳をしてすぐさまその上から退くと同時にこの部屋にいるもう一人に助けを求める。もうお前に頼るしかないんだと目をやるが、そのもう一人であるライナは玄関へと逃亡していた。

「当麻、任せろ！新しいタレは俺が買ってきてやる!!」

言っていることは正しいのだが、今のこの状況でそれを行うのは明らかに裏切り者がすることだ。上条は怨嗟を込めた声で言う。

「おい、待てライナ!!この状況で俺を残して一人だけ逃亡か!」

「うるさい!ってか原因はお前にしかないだろーがっ!!」

まったくもってその通りなのであるが、・・・なんか納得しきれない上条である。

「とにかく俺は行つて来る!あとはしっかりな!」

親指をぐつと立て、最高の笑みを向けたライナは一瞬で扉の向こうへと、夜の街へと行ってしまった。

インデックスと二人きりで残された上条。トラの檻に入れられた新米飼育員のようにビクついていた。目の前では倒れていたインデックスがむくりと起きあがった。すぐさま十八番である土下座を実行するものの、インデックスから放たれた言葉は夏であるというのに冷たかった。

「遺言は？」

「え・・・と、そうだな・・・、」

その目は絶対零度。おかしいな、と上条は首を傾げざるをえない。どうしてさっきまではあんなにも和氣藹々わきあいあいと焼き肉パーティーの準備をしていたというのに、一体この状況はどうなっているのか。は、ここまで不幸だともはや笑うしかない。

「はははははー！ふ、不幸だあああああああ！！！！！」

・・・上条の前にいた猛獣によるかぶりつき攻撃は、ゆっくりと買い物を行っていたライナが戻ってくるまで続いた。

もつとも、この日一番不幸であったのはやはりこの人だろう。盛大に（とはいっても一名は瀕死の状態だったが）行われた焼き肉パーティーの残骸を、帰ってきて発見した小萌先生である。

「せつ、先生がせつかく食べようと思って買ってきておいた特別スペシャル焼き肉セットがーつつ！！帰ってきたらもうすでに全滅とかあんまりなのですーっ！！！」

・・・小萌先生はこの日以来、焼き肉セットを買ってきたらすぐに食べるようにしたとか。

・・・合唱。

第九章 とある日常と一騒動（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

少し短めだったのが微妙なところです。

しかも全然本編進まなかった！！Σ（ー□ー）

次こそ進みます。。。。

第十章 とある事件と温泉帰り（前書き）

本文に少し戻ります

第十章 とある事件と温泉帰り

「何やら楽しげなようですね。」

とあるビルの一室を双眼鏡で覗き込んでいる男の背に、その言葉が掛かった。

「・・・。」

それに男は何も応えない。ただ、その顔をしかめているからには、何かしらの感情は持っているのだと推測できる。

時刻はもう夜。そろそろ健全な子どもたちは就寝する時間だ。さすがは学園都市と言うべきなのか、街頭や建物についているライトによってまだ真っ暗というには少し遠い。

「彼らについての情報は集めました。上条当麻についてはどこにでもいる普通の高校生のようにです。もっとも、学園都市が故意に情報を隠しているのではありませんが。」

言葉をかけているのは女。どこにでもいそうな少し大人びた顔立ちをしている。だが、長い髪を頭の上部後方で結んでいるのは普通なのだが、その女が奇特なのはその服装。術式のために左右非対称のバランスとして、ジーンズの片方は太腿の際どい所まで切断させて露出させ、Ｔシャツの片方の裾も根元まで切断している。

さらに他人の目を引くであろう、腰にぶら下がっている長大な刀。明らかに見た目からして振れそうにないにもかかわらず、女が醸し出す雰囲気違和感はなかった。

今、彼らがいるのはとあるビルの屋上。そして眼下には上条たち

がいるボロアパートが存在していた。未だに、上条が住んでいたマンションは修理中であるがゆえに、当然彼らが見張っているのは小萌先生のアパートである。

「じゃあ何かい？何のチカラもないただの高校生に、僕の『魔女狩りの王』がやられたって？冗談じゃないね」
ケンディウス

女から発せられた言葉に、男は反応した。長身に赤い髪、右目のしたにはバーコードの刺青があり、耳にはピアス。全体に神からは縁がなさそうな出で立ちをしてはいるが、それでも彼は一応神父である。

名はステイル・マグヌス。先日インデックスを攫おうとした男であるが、今は眼下に見える光景——もとい上条たちの様子を見張っていた。

「さらに、あなたが言っていたもう一人の男・・・、ライナリユートについては名前以上のことはわかりません。魔術を扱うことからこちら側の人間かと思い、その線でも探ってはみましたが記録にはありませんね。そしてどうも彼の使う魔術は、魔術サイドでもあまり見かけられないものであると推測します」

ちっ、とステイルは吐き捨てて、女を振り返っていった。

「ふむ。どこかの組織がバックについているんだろうか。それとも学園都市とグルになっているのか。この街がおいそれと素性のわからない人間を街中に放置するとは考えられないしね。神裂はどう考える？」

そう問われた女はしばし逡巡した。

彼女の名は神裂 火織。ステイルと一緒に任務に就いている。

「そうですね。その考えは否定はしませんが、しかし我々と同じようにこの街に入る方法はいくらでも存在します。問題なのは彼らの能力のほうだと思いますが。上条当麻のほうもよくわからない能力を持っているようですし、相手を軽く見ないほうがいいかもしれませんね。・・・ところであなたは彼らにルーンの弱点をつかれたそうですね。・・・？」

「その点は問題ない。すでにルーンを書いたこのカードの加工は終了済みさ」

ステイルはそう言いながら懐からカードを取り出した。前はただの紙であったそれは、現在、もの凄い変化を遂げていた。目を凝らさなくてもわかるほどのラミネート加工。もはや雨の1滴や2滴、豪雨になったとしてもそれらは耐えきるに違いない。

さすがの神裂もステイルの行動の素早さ、そして光沢を放つカードに驚いていた。

「まあ、もう一度彼らにはあのときの借りを返させてもらうでしょう。こちらとしてもあまり時間はないことだしね・・・」

最後に呟いた言葉は、深い夜の街に消えていった。

上条当麻はあいかわらず不幸の中にいた。

外から照らす光は、すでに今日一日が清々しいものと約束してくれているのだが、上条たちのいる一室には暗雲が立ちこめていた。・・・物理的な意味で。

「げほっ、ごほっ。おい、まずいぞ当麻！！この煙おさまらねえ！！」

ライナの悲鳴が室内に響き渡った。

天井を見上げれば、起きたときには燦然と輝いていたはずの電球が、今は無情にも真っ黒な煙の中に飲み込まれていた。

「えーと、あれだ！とりあえず換気をしよう！窓開けて窓！おい、そんなとこであわあわしてないでインデックスも手伝え！」

「わ、わかつたんだよ！」

上条に命令されたインデックスは即座に部屋の窓を開けた。途端に中に立ちこめていた暗雲は解放されるように大空へと広がっていった。

「ライナ、ホースを取ってくれ！」

「はい！」

ライナから投げられたホースを上条は受け取ると同時に蛇口にセツトし、一気に水を放出した。

「消えろおおおおおおお！！」

なぜこのような事態に陥っているのか。事の元凶は、何を隠そうインデックスにあった。それは3人が朝食を終え、小萌先生は日曜

日だけど仕事が溜まっていて出かけてしまい、日曜日ということでは補習も休みだった上条が「小萌先生にはお世話になってるし少し部屋の掃除とかして恩返ししよう」と言い出した今から2時間前にさかのぼる。

「それじゃあ、ライナは皿洗いとか台所をやってくれ。俺はこの部屋をきれいにするから。・インデックスは風呂場担当だ。」

と上条が言った。

（料理スキルはもとより家事スキルゼロなインデックスでも、風呂場の掃除ぐらいできるだろう）

その考えはインデックスに言うことはない。心の中だけで思っただけだ。さすがに女の子に対して、お前は家事スキルが全くダメだね、と言つのはさすがに抵抗があったからだ。

そして各々は掃除に取りかかった。

上条に頼りにされたインデックスは嬉々として、お風呂場用洗剤を両手に持って風呂場へ、ライナは眠たそうにしながらもだるそうに台所へと向かった。

それから数分が経過したときだ。

もちろんライナの方にも少し問題はあった。何かというとそれは、血洗いを寝ながら行い、途中で手からすべって何度もパリーンと、皿達が悲痛な叫びを上げていたことだ。

おいおいどんだけ割ってるんだよ、と上条は不安に思っただけだが、何も皿を全部割っているわけではないしなと思いついてライナのことは放っておいていた。

ライナ以上に問題だったのが、お風呂場へと突撃したインデックスである。彼女には家事についての知識——基本的なことさえも——ほとんど知らなかった。それゆえに、二本ある洗剤を両方とも使ったらよりきれいになるかもと考え、良い子は決してやってはいけないこと——それをする人はおそらく樂園の園へ行きたい人だけだ——を実行した。

それすなわち錬金術。

『塩素系漂白剤』と『塩酸系汚れ落とし』を混ぜるという愚行。人はこう言うだろう……『まぜるな、危険!!』と……。

だが、しかし。彼女は知らなかった。彼女の世界には科学も化学もなかった。科学サイドから見れば、どつぷりと魔術世界へ浸かっていた人間だったのだ。

あるいは魔術サイドの人間でも知っている人はもちろん知っている。

だが、悲しいかな……。彼女にはそういったものに縁がなかったのだ。それが今回の惨劇を引き起こした……。

塩素ガス。それは人を死に至らしめる脅威のガス。それが小萌宅で発生した。

「う、うわー!!」

インデックスの悲鳴が部屋のお掃除を不幸に見舞われつつ行っていた上条と、台所でうつらうつら皿洗いを行っていたライナの耳に届いた。

・ ・ ・二人とも嫌な予感がした。

「どうした？インデックス・・・うおっ！」

駆けつけた二人が様子を見ようとドアを開けた瞬間、黒煙が二人を襲った。上条はこの時点でインデックスが何をしたのかを悟った。

「げほげほ。おいこの煙は吸うな！！インデックス！ライナ！」

上条は体勢を低くして、清浄な空気を大きく吸い込んでから、風呂場へと入り、同じく口元を手で覆い、何が起きたのかわからない様子のインデックスを抱きかかえ、居間へと飛び出した。

「なんだあれ、当麻？」

「おそらく塩素系ガスが発生したんだと思う。人間には猛毒のガスだから絶対に吸うなよ！インデックス、大丈夫か!？」

「う、うん。なんとか。すぐに息は止めたからそのがすとかは吸ってないかも。」

「よし。じゃああとはソレをどうにかしよう！ライナ、インデックスも手伝ってくれ！」

ようやく煙がおさまったのは、上条がホースでそれらを全て押し流した30分後のことだった・・・。

「はあ……。なんとかおさまったか」

上条含め他の二人の様子は、その作業でいかに疲れたかを物語っていた。いや、ライナはもとからこんな感じだったかもしれないが、とりあえずわかること、それは……、

「「風呂が使えないな」」

「風呂が使えないんだよ」

つまりはそういうことだった。せつかくこのボロアパートの中でもきれいでしかも使える部類に入っていた風呂のまさかの大破、とまではいかないが修理をしなければならぬのは確かである。

3人の心の中では「やってしまった……」という思いが強いのか、掛かってきていた。

ただでさえ住む場所もご飯も提供してくれているのに、拳げ句の果てに日本人が心から愛する文化であるお風呂を壊してしまったのだ。小萌先生の泣きそうな顔が目に見え、浮かぶようだった。

「ご、ごめんなさい……！」

さすがのインデックスも悪いと思ったのか口からそんな言葉が漏れた。

「誰に言ってるんだよ、せめて小萌先生が帰ってきてから謝ろうぜ3人で」

上条が落ち込み気味のインデックスの頭をぽんぽんと叩き励ました。

「それにそんな些細なことでもいつも悔やんでたら、わたくし上条さんなどは毎日絶望する羽目になりますよ」

自虐ネタをかましてくる上条。インデックスもこれには苦笑いを浮かべるしかなかった。

「うん、ありがとね。」

インデックスがシスター然とした雰囲気^{幻想}で謝り、何やら気まずいような気恥ずかしいような、そんな空気に陥る室内。

とそこで、ごほん、とライナがその空気をぶち壊した。いや、どうせなら放っておいてもよかったのかもしれないが、それで後悔するような事態になったら悔やんでも悔やみきれない。ライナは自分を勇者だと思った。

「そ、それじゃあ今日の夜は銭湯か温泉にでも行くか!!」

はっと目が覚めたように無理に元気に装って提案する上条に、インデックスもこくこくと頷いた。

ライナは危機を脱したことにほっと一息ついたのであった。

「はあ、いい湯だったんだよ」

「ああ、たまにはいいよな」

時刻は夜。朝に決めたように、先ほどまでアパートの近くにある銭湯に行つて来た上条達一行。

すでに小萌先生には連絡を入れてある。過程を上条が話している間、小萌先生は静かに聞いていたが、上条が話し終わると同時に向こうはほつと息を吐いた。

「つまりは誰も怪我などはなかったんですー？」

「ええ、そうですよ。それでですね・・・、お風呂が使えなくなつてしまったのでありますが・・・」

「そんなことはどつちでもいいですよー。とりあえず皆さんが無事のようなので先生は一安心なのです。先生、今日はお仕事のほうがまだ片づきそうにないので、先に皆さんで銭湯に行つておいてくださいー。修理業者は先生の方で呼んでおきますから」

・・・小萌先生が神様に見えた上条であつた。

帰り道、インデックスがなにやら道ばたで段ボールを見つけた。

中には猫が一匹ちょこんと座つていて、段ボールには「拾つてください」の文字がばつちり書かれてあつた。

インデックスの目がきらりと光つた。

「わ、わ、猫が捨てられているんだよ！ここはシスターとして、このスフィックスを保護する義務が！？」

「ないだろんなもん！しかも名前付けるの早いし！」

「スフィックスってどんな名前だよ・・・」

男二人からツツコミと呆れた言葉がかけられたが、インデックスの決心は固かった。

「もう飼うって決めたんだよ、ねー、スフィンクスー」

スフィンクスを抱え上げ、その場で猫と踊る一人のシスター。

「まったく俺が住んでるマンションじゃあ、猫は飼えないってのと上条がぼやいているが、あの状態のインデックスを説得するのは至難の業なんだろうーな」と、ライナは寝ぼけ眼のまま考えていた。が、そこで体を違和感が駆け抜けた。世界が塗り変わるような感覚。ふと気が付いて周りを見渡せば、先ほどまで歩いていた人の波が消え、少ないが行き交っていた自動車などもまったく見あたらなかった。

前を歩く上条とインデックスはまだ異変に気づいてはいない。

（なんだこりゃ・・・、これも何かの魔法、いや魔術の一種なのか？）

判断する術が見つからない。やはりここは本職の人間に聞くのが一番手っ取り早いだろうと考え、インデックスに目を向けたが、そこにはインデックスはおらず、彼方で白い『歩く教会』が翻るのが見えたのみだった。

「・・・」

少しまずい状況に陥っているのかもしれない。上条はまだ視界にはいるが、突然駆けだしたインデックスを追いかけてここからはだいぶ離れてしまった。

声をかけて呼び止めてもいいがそれよりも・・・、

「あんたに聞いた方が早そうだなあ。」

視線を向けた先の闇の中には誰もいないように見える。しかし、ライナは誰かが絶対にそこにいると確信していた。再度声を投げかける。

「おい、そこに誰かいるんだろう？お前か？この異常な世界を造り上げたのは」

すると暗がりから一人の女が進み出てきた。

「・・・驚きました。気配は完全に絶っていたつもりだったのですが。やはりまだまだ甘いと言っべきなのでしょうが」

一瞬、ライナの思考が止まった。出てきた女の見た目に度肝を抜かれたからだ。まさか女が出て来るとも思っていなかったのだが・・・、

「それ、あんたの趣味か？」

女が着ている服装を指さしてライナが言った。すると、女は少し恥じるように頬を染めた。

「違います。これは一応魔術的に必要であるので身につけているだけです」

「それはよかった。悪いな。一瞬あんたを変態さんか何かかと思っただけ」

そのライナの発言に女はじろりと一つ睨んで、

「まあこの話はそれくらいにしましょう。．．私の名前は神裂^{かんざき}火織^{かおり}。すでにステイルのほうには会ったとは思いますが」

「すている？ああ、あの赤い髪をしたいけすかない魔術師のことか。で、用は何なの？」

「もちろん、彼が言っていたことと変わりはありませんよ。もう一度言うなら、禁書目録^{インデックス}を保護しに参りました」

「．．．詳しいことはあいつからは聞かなかったんだが、話してくれる気はある？」

「まあいいでしょう。あなたには話が通じそうに思いますし、それで納得していただけるならこちらとしても好都合ですから」

そうして魔術師、神裂火織は話し出した。インデックスについての最悪の物語を。

第十章 とある事件と温泉帰り（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

うむむ、まったく進まない。

いらない描写は省くべきなのか。

しかしどうしても文章が多くなっていつてしまう今日この頃……。しかし全体的にはそれほど長くない文章……。

どうしましょうかねー。

前回の投稿から大きく日があいてしまい申し訳ないです。

先週は特に忙しかったものですから、パソコンを開く時間がなかったでございます。平にご容赦を。

次回はやはり戦いになるでしょう。間違いなく。

第十一章 とある闇夜と一刀の刃（やいば）（前書き）

ライナVS神裂の流れです。

第十一章 とある闇夜と一刃の刃（やいば）

「先に申し上げておきますが、この周辺はすべてステイルが人払いのルーンを刻んでありますので、誰かに聞かれる心配は無用です」

誰もいない街道で、ライナは魔術師と向き合っていた。暗闇の中にあっても相手の体から発せられるプレッシャーは、常人には耐えられないほどの重圧を与えてくる。周りの景色もそれに拍車をかけていた。

「んで？何を言いたいんだ？」

人払いなどライナには関係ない。それよりも彼女の口からこれから放たれるであろう言葉に注意を傾けていたのだが、

「まず最初に、私やステイルとあの子は友達です」

・・・彼女の発した言葉の意味がわからなかった。

「はあ？どういうことだよそれ？」

魔術師である神裂も、この話はあまりしたくないというように重々しく話を紡ぐ。

「つまりインデックスと私やステイルはかつて親友という間柄にいたということです。今でも私たちはあの子と同じ組織『必要悪の教会』に所属しているんですよ。」

「それだとますますワケがわからねえ。どうして仲間を追ってるんだよお前ら？」

「・・・あの子が禁書目録と呼ばれる由来は知っていますか？」

「ああ、それは最初に会ったときに聞いた」

「では10万3000冊の魔導書を保管していることも、完全記憶能力をあの子が持っているということも？」

マジックキャバル

「それも全て聞いた。自分が魔術結社に追われてるってこともな」
「では聞きますが、すでに膨大な魔導書の知識を持っている完全記憶能力者がいるとして、その者は何年生きていられると思いますか？一週間前に食べたご飯も、行き交う人々の顔も、降った雨の一粒一粒まで“覚えている”者が。そのようなゴミ記憶が溜まり続けてしまえば、いずれ脳に異常が出るでしょう。私たちはそれを食い止めようとして居るんですよ・・・彼女の記憶を一年ごとに消すことだね。」

「・・・」

言葉が見つからない。魔術師が言っていることはたとえ脳医学に素人なライナでも、どこか納得できるところがあった。だからこそ頭ごなしに否定はできない。

「もちろん、私たちだって他の助かる方法を探しましたよ！！けれど、どれも完全に治せるかどうかからなかった。そんなことで私たちはあの子を失いたくはなかったんです！！それがこの学園都市の医者にも診せない理由なんですよ！！」

確かに、この学園都市は『外』と比べて科学がとても発達している街だ。『外』では不治といわれている病でも、もしかするとここですら治る可能性はあるかもしれない。だが、親友を得体のしれない医者に診せることが最善だとはライナにも思えなかった。

「だから連れて行って、また記憶を消すって？・・・魔術の意識

だけが残った真つ白な頭で、彼女にまたお前から逃げ隠れさせるのか！？」

「だって仕方がないんです！私たちだって努力はしました。思い出を作り、写真やアルバムにしたりして……。でもあの子は何も覚えてないと、ごめんなさいと私たちに告げてくるんです！もう私たちには、記憶を失ったあの子を笑顔で迎えることには耐えられない！！だから……。私たちは心を鬼にして冷血な魔術師としてあの子に接することを誓いました」

それが親友から魔術師へとなった理由。そうでもない心が折れそうだったから。でも、

「ふざけんなよてめえ！！そりや俺にだってお前らの気持ちは理解できる！でもな、要はお前らが弱かっただけじゃねーのか！？自分がおかしくなってしまうそうだったから、こんなことの繰り返しは嫌だとそこで諦めちまったお前らが悪いだろーが！！たえ何回自分が忘れられようと、何回インデックスの記憶が失われようとも！何度でも友達になってやれば良かったじゃねーか！！あいつだってそれを望んでいるはずだ！！目が覚めたインデックスの目の前で、お前らが笑ってインデックスを笑顔で迎えてやれることができるば……。少なくともあいつにとっては不幸なことじゃないだろ？」

「・・・・・・・・・・」

自分も境遇では同じ。忌み嫌われし化け物。どこへ行ったとしても仲間にはなれず、時が過ぎたとしても友に声をかけられることはなかった。いつでも化け物呼ばわりされ、飼い殺されていた日々。毎日を生き抜くことだけで幼いときは精一杯だった。

しかしそんなライナに光を当ててくれたのが、シオンやフェリスだった。自分の存在をしつてもなお、近づいてきて気軽に声をかけ

てきてくれたし、一緒に馬鹿騒ぎもした。彼らのお陰で、ライナも世界はそんなに悪くはない事をしることができたのだ。

インデックスにも同じ事ができれば。彼女を救うことができれば。この世界に来て初めて人の役に立つことなのではないか。

「期限はいつだ？」

「・・・今日から3日後。深夜0時ちょうどに行わなければなりません。ですからインデックスは保護させていただきます」

「俺がなんとかすると言ったら？」

「・・・あなたには不思議なチカラがあるそうですが、信用するに値しません。もし邪魔をするというのでしたら全力であなたを排除させていただきます」

とたんに強大になるプレッシャー。実力者だけが放てるその重圧を、ライナは持ち前のやる気の無さとともに受け流す。

「まったく、めんどくせー。なんでこうも闘う必要があるのかね」

だが、とライナは顔に笑みを浮かべた。

（こいつを倒せば、インデックスを見るチャンスがあるかもしれない。科学方面のことについては上条を頼って、あとは自分の知識を総動員すれば希望はある！）

それはつまり、

「俺がインデックスを治してやるよ」

魔術師に対しての宣戦布告。と同時に今までにはない覚悟を、自分の中に刻みつけた。

その言葉に魔術師は・・・、

「・・・戯言を」

一言呟いただけだった。

「『求めるは雷鳴>>>・稲光^{いとう}』！！！」

闇夜を切り裂く一陣の雷鳴。魔術師へと伸びていったその一撃は、簡単に避けられてしまった。相手の魔術師の身体能力が驚異的なことを知る。

「それが、ステイルが言っていたあなたの魔法ですかライナ。当たらなければ意味がありませんよ」

（フェリス並みの動き……。こりゃあ厳しい戦いになりそうだなあ〜）

「まだまだこれからだ神裂。むしろ今のウチに俺の提案に乗るってのはどうだ？」

「それはありませんよ」

ライナはじつと神裂の動きを注視する。一目見て危険視に値するのは、彼女の腰にぶら下がっている長大な刀。名刀といってもいいほどの雰囲気とその刀からは漏れだしてきている。とりあえずそれ攻撃には気を付けていなければならない。

と、そこで神裂が手を振った。ライナは体の周囲に違和感を感じ、その場から大きく飛びすさった。一瞬後にその場を何か細い物が幾筋も通り過ぎたのが見えた。

（暗器……。鋼系の類か？5本、いやもう少し扱ってるな……。）

状況はどうやらかなりまずそうだ。相手は離れた場所にも攻撃できるし、あの腰の物だってまさかお飾りではないだろう。自身が今持っている武器で危なくなったら容赦なく振り回してくるに違いなし。

ここは、

「ちっ！『光の王が無数の時を編み・ライト・キャンサー』！！」

ビリビリには通じた魔法。だが、

「甘いですね」

いとも簡単に切り裂いてしまった。

（おいおい。魔法を切り裂くって、お前もまたずいぶんと規格外なヤツが相手だな）

そんなヤツとどうやって戦えって言うんだ、とライナは一人ごちた。

残るは遠くからの攻撃魔法か、近接戦闘だろう。

（稲光^{いしち}は向こうの武器が金属だから、電気を通すだろうし使えるな。ってか攻撃魔法全般は有効そうだ。でもそれには相手よりも早く動き回って攻撃する必要があるし・・・、はあ、またムリをしないとダメか）

考え事をしている間も、向こうは待つてはくれない。雨霰^{あめあられ}と鉄線を振り下ろしてくる。が、まだどれとしてライナには掠りもしていない。

「私の『七閃』をここまで簡単に避ける人間は初めてです。その動き、素人ではありませんね」

その質問にライナはどう答えていいものかと少し迷う。

「あゝ、まあ俺のいた孤児院は少し事情が違ったからな。ほら、なんていうの？教育専門だけでなく、体力専門だったというか・・・まあ複雑なところだったからな」

「・・・あなたも少しは闇を知っているようですね」

あれがただの闇であれば、ライナとしても気が楽だったに違いな
い。それほどひどい場所だったのだが、

「ああ、そうだな」

この世界にも存在している惨状を少し知った今となつては、苦笑いしか浮かんでこなかった。

でも、だからこの世界の悲劇に少しでも干渉し改善するために。

「本気を出すとするか・・・久々に」

かつて『ローランドの魔術師』と呼ばれた男が、そこにいた。

目の前の男の雰囲気が変わった。

さっきまでのどこか気の抜けた雰囲気が消え、代わりにその目に鋭さが増したように見えた。

それは幾度とない戦場を越えてきた神裂といえども、背中に冷や汗を感じるほどのもの。

（聖人である私が怯えている・・・？）

冗談ではない。相手は一応魔術師ではあるが、それは神裂にとつて怯えの対象になるはずがないのに。

知らず知らず、腰の刀『七天七刀』しちてんしちとうに手が伸びそうになっている自分に気づく。

（しかし、私は負けるわけにはいかない）

かつて天草式十字凄教の女教皇だった誇りの為にも、インデックスを助けるためにも、こんな相手に負けていられるはずがない。

「・・・いいでしょう。あなたが本気だと言うのでしたら、こちらもそれ相応の覚悟で挑ませていただきます。——魔法名『Salvator 000』！！」

神裂が最後に言った言葉。それはいわゆる殺し名であり神裂の覚悟。

「へっ、上等だ！ここで腹くくってインデックスを救うヤツが一体誰なのかを決めようぜ！！」

「できれば降参していただきたいのですが」

「それはこっちのセリフだ！！『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』！！」

相手が魔術らしきものを使ったとたん、相手のスピードが増した。それまで避けて続いていた『七閃』の隙間をくぐり抜け、神裂の方へと走ってくる。さらに両手にそれぞれ魔方陣を展開させながら。

（身体強化系の魔術ですか！？かなり動きが早い！）

それは神裂に匹敵するほど。しかも既に相手は魔方陣を完成させていた。

「『求めるは水雲>>>・崩雨』！！」

相手の魔方陣から濁流が吐き出された。神裂は大地を蹴ってその

場から飛ぶ。

「かかったな！『光の王が無数の時を編み・ライト・キャンサー』
！！」

空中にいる神裂には避けきれないだろうと踏んでの一撃。

「っ！！『七閃』！！」

飛んでくる光の網を切り裂き、ライナから離れた場所に着地する。
その間にもライナは次なる魔方阵を発動させる。

「いくぜオリジナル魔法！『求めるは大雲>>>・雲霧』！！」
くもぎり

ライナが描いた魔方阵から吐き出された霧が周囲を覆い尽くした。
自分のすぐ前でさえ濃い霧に覆われ、歩くこともままならない。

「小癩な！煙幕のつもりですか！？」

だが、神裂には通用しない。ずっと目を閉じ、空気の乱れを感じ取る。

（気配を感じない？相手も動いていないということでしょうか）

ならば、こちらから突破を図るのみ。そう思った神裂は、先ほどまでライナがいた地点へと瞬時に移動し、辺りの気配を探るが、

（ここでも気配を感じないとは……。まさか逃げましたか？）

これまで相手していた限りでは、その可能性は大いにあり得た。が、彼の先ほどの決意は、彼自身をこの戦場から立ち去らせることではないはずだと神裂は考える。だとすれば……、

「……、『始祖の念と堪えぬ雷の轉り』」
こえす

どこから聞こえてきたライナの声とともに、光が明滅し目の前で雷光がはじけた。すぐさま避けようとした神裂の右肩にそれが掠った。

（少し当たりましたか。しかし目くらましと同時に攻撃を行うとは。やはり素人ではないようです）

「今のが当たんなかったか。いや、実にいい作戦だと思ったんだが」

霧で遮られた向こうから、そんな声が響いてきた。

今。ライナが使ったのはイエツト共和国の魔法。詠唱と光の円を構成することで発動するのがイエツト共和国の魔法だ。光の円の中から灰色の靄もやを生み出し、それを放って弾けさせ、明滅とともに雷光を閃かせて攻撃する魔法であるが、そんな他国の魔法を簡単に使うことがどれほど凄いことなのかを神裂は知る由もない。

「はあ、仕方ねえな。最終手段だ。」

言葉と同時に、霧の中からライナが飛び出して来た。この近さまで来るのは、やはり近接戦闘を行うためだろう。

「させませんよ」

神裂はようやく刀に手を使った。自分の愛刀である『七天七刀』へと手をかけ、ライナへと真一文字に斬りかかった。それをライナは紙一重のところで避ける。

「うお！危ねええええええ！」

神裂は止まらない。ライナを仕留めるべく縦横無尽に七天七刀を振り回す。どれもが一撃必殺を誇る代物であり、そんなものをもし首に食らった日には、ライナの首と胴体は永遠におさらばしてしまいかもしれない。いや、そういうば過去にもフェリスにそうされかけたことがあつたことを思い出し、ライナは今がどんなに危険な状況にいるかを改めて知る。

（どうにかしてこの刀を防げないか！？）

避け続けながら、ライナは必死で考える。一瞬でも防ぐことができれば、自分の体術でもってなんとかできそうな気がするライナであるが、攻撃魔法を放つにしても、相手に避けられたらお終いであり、さらにフェリスのように魔方阵ごと自分がバツサリ斬られるかもしれないことを思うと、迂闊には魔法を使うことはできない。しかもそろそろ身体強化によって、体が悲鳴を上げてきていた。

(だったら・・・)

「西、無、陣、陽の向きから光輝を生み出す」！！」

敵国であるガスタークの魔法。

手を縦横に動かして、光の格子を作り出し、そこから光の槍を放つ。

いきなり現れた槍に少し驚き、防御の構えを神裂は取り、次の瞬間にはそれをはじき飛ばしていた。だが、

「十分だ」

一瞬できた神裂の死角をつき、そこから掌底を脇腹へと打った。

「ぐう!!」

ライナの攻撃はクリーンヒットし、神裂はその場から大きく飛ばされる。

空中で体勢を立て直そうとする神裂だが、着地と同時にライナは彼女に肉薄し、拳打を放っていた。

「もうお前に攻撃はさせないよ」

これ以上、刀を振り回す機会を神裂に与えはしない。

「っ!!」

神裂は防御に徹するが、どうしても長大な刀を持って守っている分、分が悪かった。すでにあちこちに攻撃を食らっていて、聖人としてのチカラも発揮することがない。七天七刀を使った抜刀術『ゆい唯閃^{せん}』を放つことさえできていない。

（このままでは・・・しかし肉弾戦は相手の方が上手ですし、反撃のしようが・・・）

神裂は自分にここまで対抗できる人物は知らなかった。天草式十字凄教にいた時でさえも、自分と対等に戦えるものなど皆無だった。それなのに。

（私と同じスピード。私よりも戦略がうまく、なにより魔術がこんなにも多彩だとは。そして近接戦闘にも強い・・・！）

もちろん、神裂のほうスペックが身体能力的にはライナの遙か上をいつている。それを押さえ込むほどの技術、戦いのセンス。間の取り方。神裂の力を出させないようにする攻撃の仕方。

軍隊を一人でも壊滅させることができる自分と張り合うライナには、正直なところ驚きが強かった。なまじ最初のイメージに比べると余計に。

「そろそろ終わりにしよう」

ライナからそんな声がかかった。

自分はもう防戦一方であり、反撃することはできそうにない。

——七天七刀がライナの蹴りではじき飛ばされる。

負けるのは必然だったのかもしれない、と神裂はふと思った。

彼は眠たそうな雰囲気をし、やる気が微塵もなさそうに見えたが、それでも他人を不幸にするような人間ではないと感じた。

インデックスのために、この私と殺し合いをするほどに。彼はとても優しい人なのかもしれない。だったら・・・。

——眼前に、すでにライナが迫ってきていて。

ここで負けてもいいのかもしれない。彼には賭けてみる価値がある・・・。

——直後、衝撃が神裂を襲った。

「はあああああああゝゝ、やっと終わったか」

意識を失ったらしい神裂きを見て、ライナは深い深いため息をついた。神裂もそうだが、身体強化の魔法のおかげで自分もボロボロだ。でも、

「闘う価値はあったよな」

どちらもインデックスを救うために。その決意は同じだった。ただ今回は、そのやり方が違っただけ。

そこで、何者かが近づいてくる気配をライナは捉えた。

「おっと、ステイルの野郎かな。だとしたらこの状況を見られると少し面倒なことになりそうだし。・・・逃げるか」

（当麻やインデックスは無事・・・なんだよな？）

そうと決まれば行動は早いライナである。ただそれでも倒れている神裂に立ち去り際に、

「『求めるは癒し手>>>・疲射^{ひしゃ}』」

・・・オリジナルの回復魔法と、

「心配するな。インデックスは必ず俺と当麻で救ってやるからさ」

・・・そう言葉をかけるのを忘れなかった。

第十一章 とある闇夜と二刃の刃（やいば）（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

うーん、神裂とライナのどちらを勝たすべきか悩みましたが、まあこのお話し的にはライナが優勢でいくべきかと思いましたので、今回のような内容となっております。

正直なところ、普通は神裂が勝つと作者は思っておりますが（笑）

少し長文にすることができたかと。

オリジナルの魔法、他国の魔法も今回は大いに使いましたの戦いとなりましたが、書き終わったあとに、あまりいろいろな魔法を最初の内から使いすぎると後々困るような気が致しましたが、あとの祭りです（泣）

そのうちには作者が考えた魔法も登場させていきたいところですね。

第十章も、第十一章もシリアスな雰囲気になってしまいましたので、次は少し楽しめるように書くようにします。

第十二章 とある解呪と残された時間

魔術師、神裂火織と闘ったあと、ライナはどうか小萌宅にたどり着いていた。相変わらずボロボロのこのアパートが安息の地に思えてしまったのは如何せん不思議でならない。せつかく銭湯に言っただけなのに、戦闘によってそれが台無しにされてしまったと思うと、ものすごく神裂に対してふつふつと怒りが沸いてくるライナではあったが、撃退できたことは僥倖なことであつたし、とりあえずはゆっくり休みたいというのが本音である。いつぞや、あの迷惑ビリビリ女と闘った時の数倍、いや数十倍は疲れたと断言できた。

これはもう寝るしかないとアパートの扉を開けたライナを待っていたのは、

「うわあ！！待てインデックス、話せばわかる！だって人間だろう俺達！？」

・・今にも猛獣インデックスに飛びかかれられ、脳天を丸かじりされそうな草食動物条当麻の姿があつた。

「それは違うかもとうま。たとえ人間同士であつても分かり合えないときは分かり合えないものなんだよ。戦争なんてその最たるものの一つだね」

確かにインデックスの言うことは至極最もだが、ただのケンカと戦争を並列に並べて考えるのはスケールが違いすぎるような気がしてならない。

「お前それ修道女が言つてはいけないセリフ、ベスト3あたりに入る言葉だよな！？ダメじゃないか善良なる一市民であるこの上

条当麻に対してそんなこと言っではインデックス君。ましてやどうして君は飛びかかるうとしているんだね？」

はっはっはー、と上条が英国紳士風にインデックスをなだめようとしたが、

「・・・」

最早言う価値なし、と無言を貫くインデックス。上条の丁寧な進言は、一歩ずつと相手をにじり寄せただけであった。

「ちょ、待て待てインデックス！そうだ今度何か奢ってやるから！とりあえず落ち着こう、な！なっ！？」

子どもをなだめる時に言うベスト3を上条は行使していた。大人げないというよりも、まだ高校生である上条当麻にはそんなことは関係ないし、むしろ自分の身と財布の中身を比べれば誰だって自分を優先するに違いない。

とそこで、上条は玄関で呆然と立ちつくすライナに気づいた。上条がこちらを見上げたことでインデックスも自然とこちらに気づく。

「あ、お帰りライナ。無事だったみたいでよかったんだよ」

そーいや、お前らはスタイルを相手にしていたのかと思いつつ、ライナも言葉を返す。

「おー。そっちも元気そうで何よりだ。むしろラブコメを繰り広げてる暇があるなら、少し俺から話があるんだが」

「ラブコメじゃないんだよー！！」

「ラブコメじゃねーよっっ！！」

「そつかそつか。わかつてるってお前らの仲の良さは。そんなツコミも照れ隠し、さっきの見つめ合いもさ・・・愛情の具現化なんだって」

「いやいやっ！それはお前の目が腐つてるとしか言いようがないようだなライナこらあ！！さっきのはどう見ても俺が噛まれる寸前だっただろうが！！」

「そうだよ、それに別に当麻の事なんてこれっぽっちも好きじゃないんだし！」

「へえ、俺はてっきり甘噛みをするインデックスとそれに応える哀れな当麻の図だと思っただけだな」
不幸

「ちげー！ーよっ！！しかもライナお前、今“当麻”と書いて“不幸”って呼んだだろ！思いつきり確信犯じゃねーかよ！」

「あゝまあ俺がいない間にさらに二人の仲が縮まったということだな。でも当麻、インデックスに手を出したら捕まるぜ？」

「ライナ！今、私のことを“幼女”呼ばわりしなかった！？もう私は子どもじゃないかも！！」

「ライナてめえ、俺の社会的地位を抹殺するために現れたスパイだろ実は！！」

「どこから派遣されるんだよそれ・・・」

最終的に収拾がつかなくなってしまった。3人とも言い争って、ライナが最初に言いかけた話はすでに闇の中へと消えていつてしまい、小萌先生が帰宅するまでそれは続いた。

・・・名誉のために言っておくが、これは何も自分があの神裂相手に立ち回ったというのに、帰ってきて、あんなのほんと（ライナからはそう見えた）した状況に陥っていたのを目の当たりにしたからとかでは絶対ない。あくまでも少しいじわるなことを言ってみただけなのである。

「3人とも、今日はちょっとテンションがおかしいのですー？それになんてお風呂に行つて来たはずなのにそんなに汗かいてるんで

すー？」

小萌先生の言葉に正直に答える者はいなかった。しかし、何か答えなければという思いから、上条が口を開く。

「そ、それはですねー、帰りがけに不審者に出逢いまして命ながら逃げてきたんですよ」

うんうん、インデックスがそれに続く。

「そうなんだよ小萌。神父服着てるのはおいとしても、赤い髪に煙草にピアスにバーコードにネックレスにおまけに炎がふぁいやーだったんだよ」

「そ、その言葉だけ聞いても凄い不気味な不審者なんですー・・・」

「

事実、当人からしてみればたまったものではないのだろうが。

さらにライナも違う事実を突き付ける。

「俺は違う不審者に出逢ったぞ。いやー、むしろ露出狂の類だったのかもしれないんだが、ジーンズの片方はほとんど破れてるし、腹も丸出しだし、刀持っててブンブン振り回してきやがったんだよ
そいつ」

「さっきのシスターちゃんといい、具体的すぎるような気がしないでもないですが、被害に遭ったというなら話は別です。聞く限りにおいて放っておくと他にも被害が出そうですし、明日辺り他の学校や警備員スキルアウトにも話をしておくのです」

これで少なくともしばらくはこの辺りを彷徨うろたけまい。密かにガッツポーズをした3人であった。

夜も更けて、深夜をちょうど過ぎたところで、上条、ライナ、インデックスの3人は密談を行おうとしていた。お子様は寝る時間なのだが（事実小萌先生は夢の中だ——）インデックスは起き出してきており、一同は一本の蠟燭の前に3人は集結していた。詳しく言うと、寝ていた上条とインデックスをライナが蹴り起こした形になるのだが、なぜ蹴らなければならなかったかというのは、ライナのそのとき気分ではない。自分がされては怒ることを人にはするなというものだが、ここはあえて行ったライナである。

「さて、お前ら二人に話がある」

「それは明日の・・・つまり今日の朝ではダメなのかライナ？」

上条の言い分も当然であり、今も彼は眠たい目をこすりこすり寝まいと努力しているようだ。

「それにいつもは睡眠優先のライナがこんな時間に人を起こすのにも、イラっとくるかも」

昼間でも寝ているようなライナなのだ。まして夜中は言うまでもなくライナの支配下にあるといっても過言ではない。実際は逆に支

配されているようではあるが。

しかし、今日のライナは至って真面目な面もちで、二人を見渡してこう言った。

「・・・事件は現場で起きているんだ」

「「・・・?」」

いや、ライナの立場からすれば、まったくもってその通りではあるのだが、二人からしてみれば“?”の一言である。

「・・・時間は有限なのだから」

「「・・・(イラッ)」」

吟遊詩人にでもなったつもりなのだろうか。わかるようでわからない事実をなぜ今言う必要があるのかわからない。眠たい彼らの限界は近い。

・・・しかし、ライナが次に語り始めたその事実は彼らの眠気を吹き飛ばす程の威力を持っていた。

一時間後。

周囲は当然のごとく変わらず、窓の外には闇が広がっているだけであつたが、ライナ達の間にも沈黙が舞い降りてきていた。

しかし、衝撃を一番受けたのはインデックスというよりも上条の方だつた。インデックスも衝撃は受けたものの一年以上前の記憶の喪失が、ライナの説明によって明らかになつたことでむしろ納得がいったからだろう。彼女の表情を見る限り、もとよりある程度は想像していたに違いない。

（まったく・・・損な役回りだなあ・・・）

「な——、んだよそれは！？そんなことがあつていいのかよ！？」

我に返つた上条がライナに詰め寄る。上条の発言はライナとしても賛同できる考へだつた。

「ああ。それが奴らの考へだそうだ。・・・たくめんどうなことはかり考へやがるなあ」

だつて、ステイルも神裂もインデックスの元親友だつたはずなのに。いつの間にか敵となつてインデックスの記憶を消すことを目的とするようになってしまつた。それに理由があるにせよ、記憶を消される側からすれば耐え難いことだというのはわかりそうなものなのに。

「本当にね。そんな絡繰りだつたとは少しも気づかなかつたんだよ。そつかあ、彼らは私の友達だつたんだね」

悲しそうに。本当に悲しそうにインデックスは呟いた。それをライナも上条も癒してあげることとはできない。記憶を消される気持ち

を、今の二人には理解できないのだから。しかし、こう言ってやることはできる。

「今回のことが無事にすんだら、またお前から友達になってやればいいじゃねーか」

「そうだな。むしろ俺達は前からお前と友達やってるけどな！
！」

ライナと上条からそれぞれ掛けられた言葉にインデックスは嬉しそうに頷いた。

「で、じゃあこれからどーするんだライナ？」

「んなこと決まってるじゃねーか当麻。俺とお前でインデックスを救うんだよちなみにあと二日で」

「・・・ちよつとタイムリミットが早すぎるような気がするんですが！？」

「・・・どうにかなるし、どうにかするさ。そうだろ？当麻？」

「かつこいい言葉のようで、実はまったくアイデアがありませんって言うてるようなもんだろ、それ！？」

「・・・」

「否定しねーのかよっ！！」

「否定はしないさ、むしろ肯定するぐらい今の俺にはやる気があるな！！」

「ワケわかんねーだろそのセリフ！！それに言いながら枕を手にするな！！今から死ぬ気で行動すべきだろ！！？」

「死ぬ気って当麻、お前そこまでインデックスのことを！？」

「ああ！？例えに決まってるだろ！！さっきからなんだよ？俺らをまるで夫婦みたいに見てさあ！そんな関係じゃないって言うてるだろ！？」

「当麻、あんまり言い過ぎもよくないと思うぞ、現にほら、心な

しかインデックスが悲しそうな表情してるし」

「なんですと！？くっ！大丈夫だ心配するなインデックス！死ぬ気でやるが死ぬ気はないから！！」

「何かの掛詞かそれ？こっちの文化圏はよく知らないがまあ立派な心がけだよな」

「・・・表に出るライナ。俺の右拳が今にも突貫しそうなんだ。つてかそんな時間はねえ！！」

「まあ待て待て落ち着けて。果報は寝て待て、そのうちじいさんが持ってきてくれるから」つて言葉、まさか知らないのか当麻？」

「緊急事態に何言ってるんだライナてめー！！しかも後半部分は初耳だよ！！しかも誰でもいいじゃんそんなとこ！」

「ちつつち、考えろよ当麻。もし持ってくるのがナイスバディなお姉さんだったらどうするんだ？」

「んなことどうでも・・・、おお！なんかいいなそれ。メロメロになっちまいそうだ！」

「だろう？間違つて果報を逃してしまうかもしれないわ。むしろ家宝お姉さんだけ手に入るとかいうオチに！」

「うまいっ！！なるほど！そう考えると確かにじいさんが持つてきてくれたほうが果報に集中できるな」

「そうだろうそうだろう！だから今ココで寝ることも必要な判断なんだよ」

「くっ・・・一理ある——つてやっぱりないわっ！！眠りたいただけだろお前！」

「だって神裂との闘いで疲労困憊でさ、あいつマジな攻撃ばかりしてくるもんだから、こっちも魔法バンバン使って応戦しなきゃならなかったし余計に疲れたんだよ」

「お疲れさん。そういやステイルがあんまり攻撃してこなかったのもそれに起因してるのかもなあ」

「くっそ、そっちはなんか楽そうでよかったな。次からは俺

ステイルと闘うことに決めた！！」

「それはダメだつてライナ！！お前の話を聞く限り、その神裂つてやつと俺の幻想殺しの相性最悪じゃん！？ムリだろ俺が闘うの！！」

「そうやって現実から逃げるから将来二ートになるんだぞ当麻」

「全国の二ートさんを俺は応援する！！」

「それに馬鹿なくらい神裂は強かったしなあ。フェリスに匹敵するぐらいだぞあれは。次やったら確実に負けると確信している！」

「へえゝそんなに強いのかあ。ん？フェリスって誰だ？」

「ああ、それはな「えへへ、私のために頑張ってくれると思うと、少し嬉しいな」」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

男どもの馬鹿話に、今まで聞いていたインデックスから相槌が打たれ、途端、男どもの話がピタリと止まった。何せインデックスはその顔に、妙に作ったような不気味な笑顔を張り付けていたのだから。後ろには般若の幻想が見えた気がした。

（おかしいな・・・、笑顔ってこんなに怖いものだったっけな）

そう男どもは思ったという。これが身の危険を感じ取る本能というものか。

しかしそんな考えを振り払い、

「「おう、任せとけインデックス。絶対に助けてやるから」」

・・・ライナと上条はこの上ない笑顔でそう言い切った。脅した本人であるインデックスが照れてしまっぐらいの笑顔で。

窓からは明るい光が射し込み、外からは可愛らしい鳥の声が聞こえてくる。開け放たれている窓から吹いてくる夏では珍しい爽快な風が、ライナの頬を撫で過ぎ去って行った。

（いい日だなあ）

夢うつつの状態でライナは思う。最近はずっと暑い日ばかりが続き湿度も高かったせいで、心地よい朝方になるのは珍しい。毎日が今日のような日であったならば、自分が起きる日は来ないではないかと困るライナであった。

「・・・ん？朝か？」

どうやらあれから眠ってしまったらしい。時間はないのに呑気なもんだと評価しつつ辺りを見渡す。

（おお、俺の近くに当麻とインデックスも眠ってるなあ。・・・
そうだいいいこと思いついた！）

顔にどこぞの英雄王バリのニヤリ顔を張り付けたまま、そろーりと上条に近寄っていくライナ。幸いなことに小萌先生は出かけているらしい。ライナ達の事情を察してくれた上での行動かはわからないが、この状況でそれは悪いことではない。

（この世界の奴らはまだ向こうよりも普通だよなあ〜）

なぜなら自分がイタズラする側に回れるから。向こうじゃ金髪暴走だんご女のせいでいつも自分一人が巻き込まれっぱなしだったしと過去を振り返り、ライナは密かに笑った。

「よっこらせつと。」

律儀にも小萌先生は毛布をそれぞれ別々に掛けてくれていたのだろ。もちろん上条とインデックスは別々の場所で毛布にくるまっていたのだが、それをぺいっと引き剥がし、眠っている上条をインデックスのところまで移動させる。そうしてドッキング。抱きつく物が無く彷徨っていた彼は白い毛布を掴みそのまま引き寄せて寝入ってしまった。もちろん、白い毛布＝インデックスであるのだが。

許せ当麻、お前の夢見を良くするためだという心にも無いことを思いながら（心には無いと言っておきながら心の中で思っているところだ）、未来に思いを馳せるライナであった。きっと夢見はよくても現実では地獄をみる事ができるに違いないという奇妙な体験をする機会をライナは上条に与えただけだ。

（大丈夫だぞ当麻。俺は起きたお前に『色情狂』なんて言ったりしないから）

上条が起きていたら、当たり前だ！元凶はお前なんだからな！！という言葉が聞こえてきそうだが、しかし彼はまだ夢の中。それは

幻想に過ぎやしないのだ。

「さうて、久々にすっきりとした目覚めを味わえだし、これからおもしろい場面も味わえそうだし、今から起きとくか」

ついでに解決方法を何か考えよ、とライナは呟いて、机の上に放り出していた上条の宿題（小萌先生から新しく特別に支給された）に、鉛筆でアイデアを書き留めていった・・・。

・・・結果としては予想通りの大爆笑だった。偶然にも、いや不幸にも、二人同時に目を覚ましてしまい、お互いしばらく呆然と見つめ合ったあと、状況を理解した上条はおそろおそろ雑魚寝の体勢から神妙な土下座体勢へと。インデックスは臨戦態勢へと。そして上条がそれ以上謝る前に交戦は勃発し、なすすべもなく頭を噛み付かれ、上条は朝から早くも一つ目の「不幸だあああああ！！！！」のフレーズを叫んだのだった。

その一部始終を見ていたライナは、それはもうどこその英雄王のような馬鹿笑いをしていたのだが、上条の処刑を終えたインデックスがそれに気づき、上条と同じ不幸な目に遭わされたのは言うまでもない。むしろ自業自得であった。

「お体のほうは大丈夫でせうか？姫？」

朝食を食べ終えたあとに、少しビビりながら茶化してインデックスに問う上条。食事のあとに切り出すのが、インデックスの取り扱い方必須条件第3項目に記してある（上条作）。

「う．．．ん、今はまだ平気だけどなんか体がだるいかも。頭も少し痛い気がするしね」

残された期限はあと二日しかない。明後日の夜はおそらくステイル達が押し掛けてくるだろうことを考えると、実質的には1日半というところだろうか。

「まずいな．．．。そろそろ兆候が出始めたっていうことなのか？いずれにせよ早いとこ手は打つとかないとな。で、どうするライナ？」

「そうだなあ。まずお前は能力関係で何かできるか探ってくれ。俺はそっちの専門じゃないから迂闊に手出しはできないし。あ、あと小萌先生にもいろいろと完全記憶喪失のこととか聞いといてくれ。俺はこの眼で解析してみるからさ」

「OK。じゃあ俺は電話で頼りになりそうなヤツに聞いてみるよ」「頼んだぞ．．．さてインデックス。お前を今から解析するからそこに立っててくれ」

「うん、わかった」

そうしてライナはその眼を開いた。忌み嫌われる朱の五方星を．．．この世界にはこの眼を知っている者はたぶんいないんだろと思う。魔導書図書館であるはずの10万3000冊でさえ知っていないというならば、それは確実だ。いつ暴走して上条やインデックスや小萌先生、他の大勢の生徒を危険に晒すことになるかわからない。そうなったときに自分を畏れない人間がいるのだろうかと

考える。フェリスやシオンは強さを持っていた。自分には到底ないような芯をその心に。正直にいつて羨ましかったし嬉しかった。・
・自分が化け物だと知ってもまだ好いてくれる人間。その温かさが嬉しかったのだ。

イメージプレイヤー

上条は幻想殺しを持っている。ありとあらゆる異能を打ち消すことのできるチカラ。なれば自分のこの呪われた眼でさえも・・消してくれるのではないか。そのチカラで、この幻想^眼を壊してくれるのではないか。この世界に来て何度も思ったことだ。それが良いことなのか悪いことなのかはまだ判断できない。なぜなら自分は異世界から来た人間で、異世界の化け物も殺すことができるのかはわからないから。あの頭に直接降ってくる声の主を本当に打ち消せるのかわからないから。間違った選択をし、暴走したら元も子もない。だからまだ、そのチカラに頼ることはできない。自分にはできない。

でも今はまだ人の役に立つことができる。こんな化け物でも人を救う力はある。

アルファ・ステイグマ

開いた【複写眼】でインデックスの全身を隈無く見やる。かつて彼女が着ていた『歩く教会』のときには現れた魔術の痕跡が、今のインデックスからは見受けられない。眼に映らないのかそれとも・
・映らないところにあるのか。

（だとすればそれはどこだ？）

期限はあとわずか。インデックスの体調はこれから悪化してゆくのだろう。なんとかしてその前に事を終わらせなければ。

（期待されているなら、それに応えてやろうじゃないか）

ライナと上条の救出劇は続く。

第十二章 とある解呪と残された時間（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

今回は少しコメディ的な要素を増やしてみました、どうも文体が安定いたしません。なるべく誰の主観かはわかるように書いているつもりですが、わからないところがあつたらすみません。

ほとんどがライナ主観で書くように心がけています。一応この物語の主人公的存在であるのでね（上条と共に）。

次回で本編一巻の最終幕を飾りたいなあゝなんて思ってますが、果たして実現するのかどうか……。ではでは。

第十三章 とある嘘と禁書目録

『アルファ・ステイグマ複写眼』で見ても、インデックスに怪しいところは見あたらなかった。もはや機能していない『歩く教会』の術式の残骸を着ている彼女だが、真っ白な修道服はまだしも、ざらりと陽光をはね返している安全ピンが眼に眩しい。自らの神聖さを高めるつもりでそのままにしているというのなら、物理的には成功しているといえよう。

（だって、本当に全身眩しいしな）

そのうち術式をかけ直してあげようかとも思う。少なくとも、『歩く教会』の術式は最初に会ったときにすでに【眼】で見ているのでできないことはないし、そのほうがインデックス自身の身は安全になるからだ。この先も危なっかしい事態に陥るかもしれないということを考えればそれは必要な処置といえるが、

（でもめんどくせえ）

あの複雑な術式を構成するのに一体何日かかることやら。軽く一週間は費やす羽目になってしまうのはライナとしては当然避けたいところである。まあ、そんなことはおいといて、

「異常はなし・・・か」

そう。インデックスには『アルファ・ステイグマ複写眼』に引っかかるところはなかった。となると、もはや上条に頼るしかない。もし仮に、本当に“記憶を消さなければ死んでしまう病”にかかっているのだとしたら・

・、神裂に殺される命運を辿ることとなる。まあステイル達の術式を実行してもらえば一応は命を助けられるが、問題の根本的なところは解決しないことになる。

「そんなに気を落とすことはないよライナ。第一、そんな簡単に見つけることができるなら、あの魔術師達にだってわかっただろうしね。私だって魔術の知識はあるんだから、こっち方面で見破れないものはないかも」

「まあそりゃそうだよな。事はそう簡単じゃないか。」

それにこの眼ですべての魔術を解析できるのか、はつきりとは断定できていない。ステイルの魔術やインデックスの『歩く教会』のお術式は解析できたのだから、ある程度は通じることとはわかつてはいるが、それでも解析できない未知の魔術がないとはいえない。この街の超能力者が使う超能力が良い例だ（美琴など）。ま、あれは別の分野に属するのであろうが。

「おーい上条！そっちは何か分かったのか？」

未だに旧世代の黒電話を使いながら上条は誰かと話し込んでいるようだ。わずかに漏れてくる声は小萌先生のものだとわかる。決して相手が口リだからわかるというのではないと断言しておこう。

「ふむ。なんか重要な話をしてるみたいだな。」

「それはどーかも。確かに一見とうまは真剣そうに話し込んでいるように見えるけど、実はあの顔でこの前スーパールのチラシをガン見してたし。そして私に気づいて『今日セール中だから、一緒にスーパーへ洗剤を二つタダで貰いに行こう！』って真面目な顔して言ってきたんだよ？」

「・・・まあ一人暮らしから3人暮らしへと変わったんだから、

経費もばかにならないんだろーなー・・・」

「仕方なく一緒に行つてあげたら『うおおっ！卵が安いぜえ！』なんて驚いてたし」

「完璧に主婦、いや主夫じゃねーかそれ！！」

「うん。さすがの私もちよつと罪悪感が湧いちゃった」

「じゃあたまには家事を手伝うかインデックス？」

「そーだねライナ！この件が片づいたら当麻を樂らせてあげるかも！」

そうして二人して「うおおお！」と盛り上がつていたところで、チンという音が二人の耳に聞こえた。音がした方を振り向くと上条が受話器を置いた姿が目映った。そしてゆっくりと振り返つたのも見ていたのだが。

——上条の顔はこれ以上ないほど笑っていた。

すかさずドン引きするライナとインデックス。一体、上条はどんな話し合いをしていたというのだろうか。いつからそんな好青年風の笑みを浮かべられるようになったのかと愕然とするほどだ。知らず知らずお互いの頬をつねってしまつても仕方がなかっただろう。それほど・・・上条の笑みは現実離れしていた。

「——おい。おいつてば！！どーしたんだお前ら！？そんな惚けてる場合があるなら俺の話を聞け」

気づけば至近距離に上条が近づいてきていて、ライナとインデックスを怪訝な目で見ていた。すっかりいつもの上条である。「さっきのは幻想だったのだ」と二人は心に刻みつけた。

「お、おう。で、何がわかつたんだ！？」

「小萌先生様々だよまったく。先生様々”ってどんだけ丁寧に言っただっていう気がしないでもないけどな。とりあえず小萌先生から聞いた話によると――」

「……よると？」

「ぐくり、と唾を飲み込む二人。静寂が辺りを支配する。」

「――インデックスが死ぬっていう話はデマだ」

「は？」「え？」

ライナとインデックスには訳が分からない。

（デマだと？というからには確固たる証拠があるんだろうけど、だとするとあいつら達の話は嘘魔術師つてことになっちゃうよな？でも、あいつらの目は嘘は言っていないように思えたんだが。だとすると、俺達全員が騙されていたっていうオチか）

同じ事をインデックスも考えたんだろう。はつとした顔を見ると、上条にはつと向き直った。

「今回の件で本当に不幸だったのは私じゃなくてあの人たちなんだね？」

「ああ、そういうことだ。皮肉な話、インデックスには一年前までの記憶はないが、あいつらにはある。つまりそれは、インデックスと別れる時のつらい経験をあいつらはずっと“覚えてる”ってことだよな。……さらには教会からは嘘を教えられていた。」

上条はインデックスの言葉に応える。

そうだ。インデックスは完全記憶能力がある。だが、一年ごとの儀式でその都度、それまで蓄積してきた経験を“忘れて”しまう。

完全に思い出せなくなる。だとすれば、インデックスが記憶をなくすまでの一年間を共に過ごしてきた仲間達はどんな心境なのだろうか。記憶を忘れる前の彼女と共に生きた仲間。『嘘』を教えられ、それが嫌な任務だと知りつつも、心を凍らし続けた彼らは。・・・ステイルや神裂が、今回の物語の本当の不幸者だ。

「インデックスが助かる方法があつて、でもあいつらはそれを知ることではできなかった。そういうことだな？」

ライナが問いかける。

「ああ。学園都市なら誰でも。無能力者の俺でも知^{レベル}っていて良いような話だったんだよ。要するに、インデックスの記憶は消す必要はねえ。」

それは学園都市ならではの話だったのだろう。・・・あらゆる科学を極めしこの街ならではの知識。上条によると、今回の件では脳医学の分野、『記録術^{かいほう}』の知識が必要だったらしい。小萌先生が得意そうに語ってくれたそうだ。

約すと次のようになる。

- 1、人間の脳は元々140年分の記憶が可能で
- 2、例えば10万3000冊もの魔導書を記憶したとしても問題はなくなぜなら
- 3、人の記憶には言葉や知識を司る『意味記憶』、運動の慣れなどを司る『手続記憶』、そして思い出を司る『エピソード記憶』などといういくつかに分かれているから
- 4、だからどれだけ『意味記憶』を増やしたとしても、『エピソード記憶』が圧迫されることは、脳医学上絶対でない

この時ばかりは、科学一辺倒なこの学園都市に感謝したものだ。

「だとすると、やっぱりインデックスには何か魔術がかけられていると考えるべきか」

「でも俺は何回かインデックスには触れたことあるし、少なくとも今見えている部分にはないってことだよな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

視線を彷徨わせる男達（主にインデックスの服の下に）。怯えをみせるインデックス。なんにせよ、男が二人に女が一人。2対1では完全に力負けしてる。まさしく貞操の危機じゃあ・・・と、インデックスが冷や汗をたらたらとかいていると、

「「いかん。落ち着いて考えよう」」

男達も思い返したようだ。その目には精気が戻っていた。しばし目を閉じて考える3人。

「「「そうだ!!」」」

全員が見事にハモった。そうして上条とライナはインデックスに詰め寄って一言。

「「口開けろ」」

・・・そこには得体の知れない何かがあった。

「まさか本当に私に魔術が仕掛けられていたなんてね。」

鏡を覗き込みながらインデックスが呟く。が、少し調子が悪そう
だ。時々顔をしかめる様子が見て取れる。上条もインデックスに布
団に行くよう促した。自分で解析しようと思っていたらしい彼女は
途中で諦めてすごすごと引き下がり、布団に潜った。

・・・かけられていた魔術は見事見つかった。

インデックスの喉の奥。ぱっと見では理解できない文字が浮かんで
いた。わずかに靄が掛かり、まさに呪いともいえる禍々しい魔術。

これを仲間に首輪としてつけたイギリス清教の考えが理解できない。いかにも合理的な主義であり、科学を知らない『必要悪の教会』ネセサリーウス所属のステイルや神裂には確かに通用する策ではあった。実際に二人は踊らされていたのだから。魔術世界にもさぞかし混沌が渦巻いているのかと思うと、ああこのまま昼寝しちまえば問題ねーんじゃない？と思えてくる。

「ダメだぞライナ。寝ようとしちゃあ」

横になろうとしていたライナの腹を、上条は容赦なく踏みつけた。当然「ぐぼはっ!？」という奇声と共にライナは飛び起きる。そしてそのたるんだ目を上条へと向けた。

「いやさすがにこのタイミングで寝ようとするのは俺もどうかと思うんだが、でもほら、やっぱり体調は万端にしてから事に臨みたいていうか、体が言うことを聞いてくれないっていうかさ・・・」

「お前はいつも目を離れた隙に寝ようとしてるだろ!!ほらさつさとインデックスの魔術を解析して解説してくれ」

「へいへい」

言いつつも布団に寝かせたインデックスへと近寄っていき、インデックスに言つて口を開けさせ中を覗き込んだ。『複写眼』アルファ・ステイグマを発動させた眼で。

「うお・・・」

えげつない魔術だと思っていたがまさかここまでとは。解析してみても改めてその異常性を感じ取ることができる。

ただ決してどうにかできなくもない。複雑すぎる構成だが、二週間もあれば解説できるほどだ。だが、時間が圧倒的に足りない。二

週間どころかリミットは明日の深夜ちようどまで。それまでになんとかしなければならぬ。

・・・上条の右手で強引にやってもらうしかなさそうだ。

（俺にできるのはせいぜいサポートすることぐらいか）

魔術は解析したし、どんなものかも効果もすでに把握した。ならば後はより効率よく効果的に短時間で事を終わらすまで。

（さて、上条の方はうまくやってんだろーか）

ちらりとライナはベランダの方へ目を向けると、そこでは上条が何かを書いた白い大きな紙を、表のビルからでも見えるように窓に張り付けていた。どこかで必ず目を光らせているだろう魔術師達に向かつての合図。それに書かれていたことは――

『インデックスを助けることができる。詳しく知りたければ話を聞きに来い』

ただその文のみ。これはこちら側からあちら側への妥協の印、共闘の証。乗るか蹴るかは相手次第。しかも刃向かうというのなら容赦はしない。例えば相手が強かろうとも徹底的に叩きつぶすまでインデックスを助ける気持ちがあるならば応じてくれることを祈っている。

待つこと数分。

コンコンつと小萌宅の扉が叩かれた。上条とライナが見に行く。扉の前にいたのは、当然ピザの宅配員とかではなく。

――エセ神父と、冷徹な聖人が立っていた。

第十三章 とある嘘と禁書目録（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

今回は少し短めに。佳境に差し掛かってきているというのに一向に終わらない。

「どこまで一巻を引っ張るつもりなんだよっ!!」という読者さん達のツッコミが聞こえてきそうです（汗）

次こそ一巻の終わりを目指します。はてさて（作者もまったく考えていない）どんな結末が待っているのでしょうか。

第十四章 とある物語と伝説の終焉（前書き）

ついに終焉の時。

第十四章 とある物語と伝説の終焉

「で、話というのはなんだい？ インデックスを助ける方法があるとかいうことだそうだけど、もし嘘でそんなことを僕たちに言ったんだとしたら燃やし尽くすよ？」

煙草をふかせながら赤い髪の神父——もといステイル「マグヌスは言った。その隣で立っている神裂も同じように頷いている。

場所は変わらず小萌先生の部屋だ。二人を招き入れたのち座るように促したのだが、彼らはそれには従わず、窓際で立ってこちらと向かい合っていた。インデックスは側にある布団の上で寝息を立てて寝ている。彼女を見る魔術師達の視線は慈しみを帯びていた。

上条とライナは目配せをし、上条のほうが開いた。

「嘘じゃない。にわかには信じられないことかもしれないけど事実なんだよ。まずはお前らの考えを改めてやる」

そう言って、上条は事の次第を魔術師に説明した。

目の前のクソ野郎が話す内容は自分にとっても神裂にとっても信じられないものだった。現にインデックスの口の中にある魔術礼装を見せられなければ信じなかったことだろう。今までの苦勞と悔恨がなんだったのかと思うほど、事實は平凡でありきたりなものだった。しかもそれがイギリス清教の手によるものだ^{はらわた}と知ったときは腑が煮えたぎる思いだった。

（あの女狐めがつー！どうりであつさりとあの子を外へ放すとは思ってたが、まさかこんなプレゼントをしてくれていたとはね。当たり前前といえ当たり前前だけど、帰ったら一発殴ってやらないと気が済まない）

どんな思いで自分や神裂がインデックスを追って記憶を消すことを決めたと思っているのか。それを知りつつあの最大主教は自分たち^{アーケヒショップ}にその任を与えたのだ。

確かにイギリス清教にとつては正当な手段ではある。自ら作り出した^{インデックス}魔導図書館をわざわざ危険に晒すことはする必要など無いし、もしするならば『首輪』をつけても当然だ。

くそ、こんなことにも気づかなかったとはまったく腹立たしい限

りだ、とステイルは毒づいた。隣を見れば同じように神裂も衝撃を受けているようだった。

「話は分かったけど・・・どうやってそれを破壊するつもりなんだい？禁書目録にかけるほどの魔術だ。生半可なものじゃないだろう？」

（問題は見つけたがどうすることもできないんじゃないやあ解決には至らない。助ける方法があるというのなら聞かせてもらおうじゃないか）

「助ける方法は・・・だ。幻想殺し俺の右手とライナの『複写眼』だよ」
「アルファ・ステイグマ」

その答えに、自分たちが不可解な表情を浮かべてしまったのも仕方のないことだろう？

案の定、上条が答えた内容に魔術師達はいまいち理解が及んでないようだった。無理もない。彼らとは闘ったことがあるとはいえ、その正体を的確に看破できたとは思えないからだ。仕方なく、ライナがまずは上条の右手を指さし、補足説明をする。

「こいつの右手はイマジンプレイカー幻想殺しって言うてな？それが異能の力ならばありとあらゆるものをうち消すことができるっていう代物なんだよ。例えば超能力だろうと魔術だろうと関係なくな。だからこそインデックスの『歩く教会』に触っちまったことで機能してなかったからこそ、お前らの攻撃でインデックスは傷ついたわけだ。」

そして、とライナは続けて自分の目を指して言う。

「俺のこの目は『アルファ・ステイグマ複写眼』っつーもので、超能力は無理だが、魔法・・・いや魔術ならその構成を読みとって使えるようになるんだよ。だから相手の魔術の発動方法や、威力、範囲とかまでも分かっちゃうわけ。ほらよく見てみるよ。」

ライナの瞳には平常ではうつすらと五方星が浮かんでいる。魔術師達はライナの言葉と目を見て、少し青ざめたように見えた。

「だとすると、こちらの上条当麻の方はとりあえずおいておきますが、あなたは我々が使う魔術をつまりはコピーできるといこと

でしょうか？」

神裂がおそろおそろ確認してきた。その通りだ、とライナは肯定する。だが、彼らはまだ信じられない面もちをしていた。

はあくライナは息を吐き、ステイルのほうを向く。

「仕方ない、実際に使ってやるよ。なあステイル、お前ってバリンが書かれたカード持つてるだろ？あれちよっと10枚でいいから貸してくれ」

？の表情を浮かべながらしぶしぶといった調子でステイルは懷からカードを抜き、ライナに渡した。おお、なんか前よりも頑丈にラミネートされてる、と少し感動したライナであった。

「じゃあやるぞ。当麻は俺が出した魔術をうち消してくれよ。」

言いつつ、ライナは以前の闘いで写し取ったステイルの魔術を再現する。

AshToAsh DustToDust Squeamish BloodyRoad
「『灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字』」
「『っ！？』」

小さく威力もほとんどないであろうが、それはまさしくステイルの炎剣だった。顕現させられたそれは、バターナイフ程度の大きさだったが、それでも同じ構成で作られたものだった。それに魔術師は息を飲む。

「ま、こんなもんか。もっともカードがなかったら発動なんてできたもんじゃないけどな」

それは魔術サイドにとつては驚愕の事実であるのだが、ライナはその凄さには気づいていない。禁書目録とは違うが似たようなものだろう。向こうは知識でこちらは行使。同じく危険な存在であった。・・・が、今はそんなことを議論している場合ではなく。

さらに、上条がライナの持っていた炎剣に右手を当てると、それはパチツという音と共に消えてしまった。あたかも最初から無かったようにあっさりと。

ライナとは違う意味で驚く二人。しかしそれで納得がいったのだろう。もっと詳しく作戦を教えるよう促してきたので『インデックス救出作戦』の全貌をライナは魔術師達に語った。

「・・・なるほど。僕や神裂、そして君がサポートをして魔術を防いでいる間に、そっちの『幻想殺し』が突っ込むということだね？」

「そうだ。解析したところ、どうやらインデックスの『首輪』を傷つけようとすると、自動迎撃システムが作動して、その10万3000冊もの魔導書の知識と魔術を使って反撃してくるようだからな。だから俺はどちらかってーと反・魔術組み^{アンチ・マジック}上げて対抗するつもりだから、実質お前ら二人にサポートは任せることになると思うんだが。」

「別に僕としては構わないよ。・・・それであの子を助けられるならね。なあ神裂？」

「ええ。私も異論はありません」

「じゃあそういうことでいこー！悪いがスタイルと神裂はこの辺りに人払いの刻印を刻んでおいてくれ。万が一にも被害は最小にすべきだしな。上条は小萌先生に連絡して今日は別のところに泊まるよううまく説得してくれないか？あの人、何も知らずに呑気に鼻歌でも歌いながら戦場の中に飛び込んできそうだし。」

「おーけー。わかった。どうにか丸め込んでみるよ」

生徒に丸め込められて自宅へ帰れず他人の家に宿泊する先生が、
はたして世の中に何人いるのだろうか。

「俺は部屋の中に防御結界を張り巡らせるから・・・そうだな、
今夜10時に作戦開始でいくぞ！」

「了」

各々は各々の仕事へと移り、時計は一刻一刻と時を刻む。一人の
少女の為に立ち上がった4人は己が刃を研ぎ澄おのやいはます。

——魔術と科学が交差するとき、一つの伝説が終焉する。

「そろそろ10時だ。作戦を開始しようじゃないか。・・・神にはもう祈りを捧げたかい？」

エセ神父の皮肉が耳をつく。お前に信仰心なんてあるのか、とライナはステイルを訝しげに見やるが、彼は肩をすくめただけで返事をしなかった。

「そうだな。みんな準備はいいか？」

3人の顔を順々に見渡すとそれぞれ頷き、その彼らの目には固い意志と勇気が込められていた。

「よし。じゃあ当麻、頼む」

任せろ、と小さく呟いて上条はインデックスに近寄った。すでにインデックスには意識はない。しかし先ほど少し起きたときに既に作戦は伝えてあるので、彼女の記憶力をもつてすればいつまでも覚えていることだろう。・・・この作戦が成功すればだが。

上条は自分の右手を眠っているインデックスの口の中へと入れた。口の小ささにそこそこ驚きながら進めた右手は・・・魔術へと触れた。

「ッ!!」

ぶしゅっという音と共に手が事細かく切り刻まれたかのように裂け、ぼたぼたとその地は畳に痕を残す。と同時にインデックスが力

ツと目を見開き、彼女の周囲には衝撃波が巻き起こり、当然のように上条は吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる前にライナがその体を受け止めた。

「警告、第三章第二節、Index-Librorum-Prohibitorum——インデックス禁書目録の『首輪』、第一から第三までの全結界の貫通を確認。再生準備………失敗。『首輪』の自己再生は不可能、現状、10万3000冊の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

……ここまでは予想通り、というかやはり最初の一回だけでは完全に『首輪』を壊しきることはできなかったようだ。

「——『Fortis931』!!」

『魔法名』とともに、ステイルはその漆黒の服の内側から、何万枚というカードを部屋中にまき散らし、

「——『Salvare000』!!」

『魔法名』とともに、神裂はその腰にぶら下げていた七天七刀を抜き放ち、

「——イマジンプレイカー『幻想殺し』!!」

魔術師に負けず劣らず、上条は自らの右手に全てを託し、

「うへ……これってノらなきゃいけないノリ??」

——『ローランド最高の魔術師』!!——

嫌々ながらも、ライナも流れにノって昔の二つ名を叫んで、『複製眼』を起動させた（余談として、やはり自分でこの二つ名を名乗るのはとても恥ずかしかったらしく、この救出作戦後、二度と名乗らないようにライナは心に決めたそうだが。もし次に名乗る機会があるのなら『複製眼』のほうにすると誓ったらしい）。

「防壁を修復・・・不可能。防壁を傷つけた魔術を『書庫』内から検索・・・該当する魔術は発見できず。未知の攻撃によるものと断定しました。」

（上条の右手は10万3000冊にも載ってないのかよ！？）

「侵入者複数と確認。うち、最も難度の高い人物『上条当麻』の破壊を優先し、これより特定魔術『ローカルウェポンセント聖ジョージの聖域』を起動します」

「くつ、やはり魔術は使えるようだね」

呻くようにステイルは言う。これもまたライナの解析どおりの結果だ。だが、どんな魔術を使ってくるのかまではさすがに分かりはしない。

バキンッとインデックスの目の開いた。目を中心として魔方陣が二つ重なるように展開し、彼女の目の動きに合わせてそれは動く。

「――。――。」

歌うように囁くようにインデックスは何かを呟いた。常人には聞こえない領域の、次元の音。

それと同時に、空間に亀裂が走り、中から何か醜くて汚れた闇の亡者のような存在が顔を見せた。地獄をかいま見たようなそんな景

色知らず知らずのうちに冷や汗が背中を流れる。だがそれだけではない。違う感情が四人の心の中から巻き起こってきた。

それは歓喜でもあり。

ステイルや神裂にとつては待ちわびていた事態。

——これさえ倒せばインデックスを救うことができるから。

上条がそれに向けて拳を突き出した。
ベキリっという音と共に空間がはじけ亀裂が一気に開く。

瞬間、インデックスの魔方陣が爆発した。

光の渦。爆弾というよりも光の光線のような莫大な光量と質量をもつて、それは上条へと放たれた。

咄嗟に上条は右手を前に突き出してそれを防ごうとする。が、その前にステイルが喚びだした『魔女狩りの王』インケンティウスが彼の盾となり、光線の前に立ちふさがった。

ライナもすでに行動に移っている。

「『求めるは侵入>>>・蝕走』！！」

インデックスの魔術を解析し放たれた魔法。相手の魔術を侵蝕するように紫煙がまとわりつき、その魔術をそぎ落とす。

（ちっ！さすがに完全には消せねえか。三割つてとこだな）

やはりインデックスが放つ魔術は強大で、自分の魔法は相手の威力を落とすことしかできていない。だがやらないよりかはマシだ。ステイルと上条でなんとかできるほどの威力にすることができただから。

『聖ジョージの聖域』から放たれた魔術をステイルの『魔女狩りの王』が受ける。上条はその炎の巨人を消さないように後ろへ大きく飛びずさった。

「『ドラゴン・プレス竜王の殺息』とはまた厄介だな。神裂！！」

ステイルの言葉と同時に、神裂の七天七刀が煌めいた。

「わかっていますよ！『唯閃』！！」

もちろんその攻撃はインデックスを傷つけることはない。斬撃はインデックスの下のを切り裂き、彼女のバランスを狂わせる。その刀、『光線』ごとぶった斬れるんじゃないかとライナは思うが、まあそんな場合ではない。

当然、上条に狙いを定めていた光線はインデックスが倒れることで狙いからはずれ、夜空に一筋の光の柱を作り出した。

「『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』！！」

ライナも本気を出すべく身体能力を強化する。

「上条、ステイル、神裂、行け！！」

なぜライナは行かないのか。それは今、インデックスが放った攻撃の余波に問題があったからだ。アパートにぽかりと開いた穴からはまるで天使の羽のようなものが何十枚と舞い降りてきて神聖な雰囲気醸し出しているが、『アルファ・ステイグマ複写眼』で見たそれは恐ろしく魔力を、威力を秘めていた。それが例え一枚でも当たったらどうなるのか考えたくもない。だからこそライナはそれらを消し去ることに専念する。

「『ドラゴン・プレス 竜王の殺息』は敵複数に対してあまり効果が出ないと判断し、異なる魔術を使用します」

いつの間にか起きあがったインデックスが次の魔術を紡ぐ。

「警告、第三十五章第十八節、『硫黄の雨は大地を焼く』——
——完全発動まで五秒」

言葉と共に、上空に50ほどの『灼熱の矢』が出現し、吊り天井のように降り注ぐ。上条は右手で、ステイルは『魔女狩りの王』で、神裂は避けることで、ライナは魔法を中断して解析し、それらを回避する。小萌先生のアパートに突き刺さった火矢は容赦なく周辺を碎き焼き尽くす。

休む間もなくインデックスの朗々たる呪文があたりに響く。

「各個撃破に移行。——警告、第二十二章第一節、炎の魔術の逆算に成功しました。曲解した十字教の教義をルーンにより記述したものと判明。対十字教の術式を組み込み中……第一式、第二式、第三式。命名、『神よ、^{エリ・レマ・サバクティ}何故私を見捨てたのですか』……完全発動まで十二秒」

無尽蔵かと思えるほどの魔術。大技。近づくことを拒むかのよう
に次々と発動される魔術を前に三人とも攻めあぐねていた。インデックスを傷つけても良いのなら事は簡単だっただろうが、あいにくこのメンバーの中でそれができる人間はいないのも問題だった。ライナも魔方阵を次々と展開し、夜空から舞い降りる羽に対処するの
で忙しい。

インデックスから、赤黒い光線を発射された。それは『魔女狩り

の王』を易々と噛み千切り、霧散させる。

「ステイル!!」

『魔女狩りの王』を盾としていたステイルがその光線に貫かれる前に、上条が間に割って入り右手を突き出した。

「何をやってるんだ君は！僕を構う暇があるのならさっさとインデックスの『首輪』をどうにかしろ!!」

「うるせーなお前は！助けてやったのに文句言つなよ!!」

「二人とも！ケンカしている場合ではありませんよ!!とにかくあなたは今早くその右手を振るってください！時間もあまり残されていません!!」

三方向から突撃しよう、と神裂は提案した。即座に頷き、三人はそれぞれ別々の方向からインデックスに向けて走りだす。

途端、インデックスの目が正面の上条を捉えた。目の魔方阵に光が収束してゆき、やがて頂点を越えてそれは光の奔流となって上条を潰そうとする。

「させるか!!」

「やらせません!!」

「俺もやる!!」

ステイルは『炎剣』で、神裂は七天七刀で、ライナは『稲光^{いづち}』で、その魔術を真上に弾く。

・・・その隙間を縫って上条は、インデックスへ最後の一步を踏み出した。

——これまでの魔術師二人の思いと、今日までの異郷

の勇者と一介の高校生の思いを乗せて。

上条が繰り出した右手はあっさりと、しかし重い鎖を解き放ったように、パキンっという音を響かせて。

「ううおおおっつ！！！！！」

——インデックスの『首輪』を破壊した。

「——警、こく。最終……章。第、零——……
……。『首輪、』致命的な、破壊……。再生、不可……。
・消」

ブンつとまるでブレーカーが落ちたように、インデックスは気を失って、魔術に関する全てが消えた。

……。夜空から舞い落ちる『羽』以外は。

「おい！まだ羽が残ってる！！」

誰が叫んだかは定かではない。ただ実際に、インデックスに降り注ぐとしていた羽が一枚あった。

上条は当然インデックスを守ろうとしてその右手を振るうが、それはすり抜けて……。

「ッ！！『求めるは殲虹>>>・光燐』！！」

ローランド帝国の魔法の一つであり、命中精度・威力が高く、追尾性能を持つ光線。発動スピードが遅いのが難点であるこの魔法を、ライナは神業的な速度で発動させていた。

上条の顔のすぐ前を一陣の光線が通り過ぎ、それは『羽』を完全に焼き尽くし、ついでに頭を『羽』に差し出そうとしていた上条の鼻にかすって火傷させた。

「熱っ！？っーか痛えええええ！？おいライナ！少しかすったぞ今の！！？」

「あ？そう？ごめんごめん。まあでもアレに頭ぶつけるよりかは良かったんじゃない？」

「うう、それはそうだが・・・」

「大丈夫だつて。ほらそこに修道女さんいるし、こっちには神父さんがいるし、聖人さんもいるんだから」

「何の気休めだよ！？むしろ死に行ける態勢が整ってるじゃないかっ！！」

「アーメン」

「お前、神様とか信じてねーくせに何抜かしてんだ！？」

どこで『アーメン』なんて覚えたんだと呟く上条に神裂も声をかけた。

「ですが、やはりアレに当たるよりかは良かったかと」

「そーかなー。なんか神裂に言われると納得できるなー」

「ま、そのまま死んでも良かったけどね」

「黙れステイル。お前は故国にさっさと帰れ！！」

「当麻落ち着けて。それよりも問題はどっやってこの部屋の惨状を小萌先生に説明するべきかということだ」

「あゝ確かにこのままじゃ小萌先生・・・泣くな」

「確実にそうなるよな・・・。神裂、ステイル、お前らこれ何とかなねえ？人払いと防御魔法のおかげで周りに被害は出てないっぽいのが救いだが」

「・・・ふん。知らん」

「さすがにこの規模を直す技術は魔術サイドにはあまりないですね。それこそ科学サイドならば一晩で直してくれるところがあるのではありませんか？」

「その案を採用しよう！費用は『必要悪の教会』持ちつてことで」
 「なっ！？・・・まあいいでしょう。今回のことはこちらに大きく非がありますし」

「じゃあ上条！すぐさま連絡よろしく！」

「おーけーってまずこの部屋の伝説の黒電話があつちでぶすぶす焦げてるんだか？」

「「「生き残れなかったのか……」」」

「いや、なんで俺以外ハモってるんだ！？たかが電話だろ？そんなもん俺の携帯を代わりに使えば・・・」

そこで不意に上条は言葉を切った。彼の手はポケットの中を探っている。だがそのポケットは……なぜか穴が開いていた。

[illegible]

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

「なんだよお前らその「あーあー」いつものヤツね」
 みたいな目は
 ああああああ！！」

「ゴホン。代表としてライナリリユート言います。だって当麻・・
・お前不幸じゃん♪」

「
・
・
・
・
殺す！！
」

「はっはー肉弾戦で俺に勝てるっても！？あのフェリスの攻撃さえ毎日耐え抜いた俺をなめるな！！」

ぎやーぎやーとステイルや神裂も巻き込んで騒ぐ二人。

今は夜中を過ぎたぐらいで、眠気からか、緊張感から解放されたからか、兎にも角にも、無事に救えて良かったライナは思う。あちらの世界では人の死は日常的なものだったが、こちらの世界では一

人の死さえ重要視されているのだから。それでいいじゃないかと
イナは思っただ。

そして救った彼女が目覚めたら四人でこう声をかけようと考えて
いる。

「インデックス！改めて友達になろう！！」

・・・と、笑いかけながら手を差しのべて。

第十四章 とある物語と伝説の終焉（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

どういふ風な結末にしようかと筆者こと私は大変苦労致しました。

最終的に上条の記憶が残ったままで一巻を終えるという、SSにはあまりないような感じになりましたがどうだったでしょうか？

行き当たりバッタリの思いつきで書き進めたわけで、取りこぼしができる限りないよう注意して書いたのですが、話の意図が通じないところがあるかもわかりませんので今から一言謝っておきます（笑）

次回は外伝でも書こうかなと思ってます。

第十五章 とあるその後と番外編？

「・・・くく、これはおもしろいことになったものだ」

窓のないビルの中で、何やら設置された生命維持槽の中で逆さまに浮いている男の口から、そんな言葉が漏れた。その姿は、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える。だが『人間』。1700年の寿命を持つであろう緑の手術衣を着ているその人間は、今は口元に笑みを浮かべていた。

「『アルファ・ステイグマ複写眼』保持者が・・・。この世界では異質な存在だな。・・・ふむ。私のプランも多少なりとも修正しなければならないようだ」

名はアレクスター・クロウリー。

学園都市統括理事長であり、元世界最高最強の魔術師にして、現世界最高の科学者でもある者。

アレクスターの周囲には機材が乱立しており、おそらくは生命活動を全てそれらに任せているのだろう。

その魔術師はなぜだかことさらおかしそうに笑う。

「何の因果かは知らないが、何人たりとも私の邪魔はさせん。私の『計画』の障害となったときは速やかにご退出願うでしょう」

だが、まだ今のところはまだまだ手を加えるほどではない。許容範囲内だ。しかし今回の件はアレクスター自身が予測していた結末とは少し違った形にはなったが。

「さて、イレギュラーな者にはまあせいぜいこれからも働いてもらおうでしょう」

『計画』が実行されるその日までなら、どんな手駒であろうと使う。なぜならルートは無限にあるのだから。何千手も先を予測しているアレイスターにとって不都合というものは存在しない。存在しようものならすぐに排除されるか、プランに組み込まれるだけなのだから。

暗闇の中、その目はどこか虚空を見つめているようだった。

さて、場所は移り。

ここは小萌先生のアパートである。

上条当麻、ライナリィ、インデックスの三人はなぜか正座をしていた。

・・・小萌先生の前で。

「もう何なんですかこれはー！？何で先生の家は大破しているのですー！？」

そう、彼女はお怒りだった。理由は簡単。なぜなら黄泉川先生のマンションに泊まりに行つて帰ってきたら彼女の部屋がもう見るも無惨な状態だったからだ。上条たち三人は病院に行き、カエル顔の医者診察を受けて帰ってきたところだった。幸いにも診査結果は誰にも異常はなかった。

「上条ちゃんの言葉のとおり、先生はちゃんと言つて違う場所で寝泊まりしたというのに、何で一日でこんなボロボロになっているのですかー！？」

小萌先生の憤慨に上条が冷静にツッコむ。

「あゝ先生？元から先生の部屋ってボロツチかったような・・・？」

「黙ってくださいー！！」

一喝された。どうやら相当にご機嫌斜めのようなのである。ライナもその怒りを少しでも抑えようと声をかける。

「あゝ心配しなくても大丈夫ですよ先生。ちゃんと修理費は出してくれるそうですから」

イギリス清教が、と最後の部分は小声で言ったが。

「せんせーが言いたいことはそんなことじゃないんですよー！！こんな部屋になるほど上条ちゃん達は何をしたんですかーっ！？見

たところ元気そうで何よりですけどー！」

プンプンとお怒りモードはまだ冷めやらないご様子だ。だが、三人はそんな小萌先生の言葉に多少なりとも感動してしまった。いい先生だな、と……。

「そんなに怒らないでほしいかも、こもえ。私たちは無事だったし、しかも今回は私が原因だったんだから」

なだめるような口調で進言するインデックス。もちろん魔術関係のことは口をつぐみ、小萌先生には今回の件については一言も喋っていない。

『首輪』が外れた今のインデックスは至って元気であり、気だるげだった数日前とは全く違う声の張りに、小萌先生もはあ、と大きく息を吐いた。

「もういいのです……。せんせーは生徒が無事ならそれでいいのです」

月詠小萌。見た目は小学生の割に、心は存外広いのである。

「……じゃあとりあえず先生は、俺の部屋に泊まりに来ますか？そろそろこっちのマンションは修理終わっただろうし」

これから住む部屋に困るであろう小萌先生に対しての上条のすばらしい発言。ライナとインデックスもうんうん、と頷いている。

「そーですねー。まあまた黄泉川せんせーの家にまたお邪魔しに行くのも微妙ですしねー。じゃあ数日お世話になるのですー。ついでに上条ちゃんにはみっちりと補習をしてあげましょー！！」

「えっ！？マジでございますか姫？」

ないないそんなこと、俺の気ままな学生生活が毎日補習（しかも
自分の）で潰れるなんて、と顔を引きつらせた上条。ひたすら「
冗談ですー」という言葉が小萌先生の可愛らしい口から発せられる
のを待ったが、あいにく彼女は満面の笑顔を向けてきて。

「ふふーマジなんですー♪空いてる時間は付きつきりで講義してあげちゃいますー」

「おお！良かったな当麻！モテモテじゃねーか！でも飯とかもし
つかりと作ってくれよ！」

「とうま良かったね！そのお馬鹿さんな頭を治してもらった良い機会かも！」

ライナとインデックスからの皮肉に、上条が言えることはやはりただ一つ・・・。

[illegible]

場所は変わってここはイギリス。ステイルと神裂はとある教会内で、金髪の女性と追いかけてっこしていた。

もちろん、身長の2.5倍はあるであろう金髪を頭の後ろで見事に束ねた18歳ほどに見える彼女の名は、イギリス清教の者なら必ず知っている。

ローラ・スチュアート。

イギリス清教の最大主教である。
アークヒショップ

普段ならば協会内では彼女が一番偉いはずなのだが、なぜかこの日ばかりは違っていた。

「ひー！？ステイルと神裂が襲ってきたのよー！？ご乱心！？まさかここにきて裏切りしなのー！？」

「やかましい！この女狐め！！よくもまあ僕らを騙してくれたも

んだ！！仕方がないとはいえ、それが許せるかどうかは別問題だ！」
「まったくです。ああ残念ですよ最大主教^{アークビショップ}。あなたをこの手にか
けねばならないとは……」

そう、ステイルと神裂もお怒りだったのだ。もちろん原因はイン
デックスの『首輪』の件である。イギリス清教としてはさすがに大
事な手駒である禁書目録を、野放しにすることはできなかった上で
の処置だったのだが、彼らにとっては理解はできるが納得はできな
いものであり……。こうして女狐クソ主教に一発くれてやろうと
彼らは剣を持ってローラを追いかけているのである。ただしこちら
の戦力は小萌先生の比ではなく。

「すている！？^{炎剣}そんなもので私を斬ったら跡形もなくなりけるの
ではー！？神裂^{七天七刀}！？そんなもので私を斬ったらとてもグロい結果に
なりけるのよー！？」
「大丈夫ですよ最大主教^{アークビショップ}。あなたなら例えこの剣を受けても死な
ないだろうに」

「そうですね、まさかこの程度で倒れるあなたではないはずす
そんな問題ではなかりしなのよー！？と叫びながら、それでも二
人の攻撃をかわしながら逃げるローラ。

「誰かー！？誰かおらんのかー！？私を助けてくれたる者はー！
？」

「ふふん。あいにく今日はよぼの司教が一人、礼拝堂の奥に
いるだけさ。むしろそこの司教の一人や二人、僕らの敵じゃない
しね」

「さあ、お覚悟を」

「な、なんと！？二人に謀られしなのよー！？」

きゃーきゃー言いながらローラは逃げる。もはや、イギリス清教徒の威厳は微塵もない。それを追う魔術師二人。
．．．彼らを夕日が明るく照らしていた。

第十五章 とあるその後と番外編？（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

今回は短かった。まあ番外編だしいいか、というのが筆者の弁である。

さて次からはいよいよ2巻に突入するよ！お楽しみに！>>>

第十六章 とあるメイドと事件の始まり（前書き）

2巻に突入のはずが、なんとなく日常を久々に書きます。

第十六章 とあるメイドと事件の始まり

「・・・むにゃ？」

ライナはいつものように昼手前まで寝ていた。そろそろ体が食べ物を求めていたのか、そこそこ爽快な気分が目が覚めたようだ。ふあゝと大きなあくびをしながら辺りを見渡す。

もうすぐ昼である。それは部屋の中に差し込んでくる陽の光からしても明らかなのだが、だとすればそろそろ上条が何かご飯を作っているはずだとライナは思ったのだが・・・、どうやら部屋には誰もいないようだった。代わりといってはなんだが、部屋の中に鎮座している机の上には置き手紙があった。

寢床を抜け出してそれをのぞき見てみる。そこに書いてあったのは、『インデックスが遊ぼうって言うてうるさいから、ちよつと外出してくる。昼までに終わりそうにないから、ついでに昼飯を食べて戻ってくる予定だ。お前がいつ起きるかは分からないが、もし起きたならお金を一緒に置いとくから自分でどうにかしてくれ』という言葉だった。インデックスが後で付け足したのであるう『行ってくるんだよ』の文字が隅の方にちょこんと書かれているが、ライナにとっては少々いらつとしただけだった。

「しゃーねえか。外出するのはちよつと避けたいところだけだなあゝ」

なぜ外出したくないのか。それは眠たいからでも、学園都市の街並みに興味が無いからではない。むしろ興味はあるほうだし、上条達に便乗して付いていけばよかったかなと思うほどだ。こここのころ寝てばかりだったし、体を久々に動かすのもいいかもしれない。ではなぜライナは渋っているのか。それは彼の服装にあった。

ちらつと目線を壁に向ければ、ハンガーに掛かっている自分のいつもの服が見える。・・・ローランド特製仕様の服が。いかにも冒険者、もしくは旅人のようだと言えば良いのかは知らないが、つまりは周りから“浮いて”いるのである。上条達と一緒に行動するならまだそこまで注視されることはないが、一人歩きは少々気まずい思いがある。何しろここは“学園”都市なのだから。至る所で出くわすのはほとんどが生徒であって、自分のような青年はあまり見かけない。しかもそれがこんな服を着ていればなおさらである。頭の痛い子、というレッテルを貼られるだけでなく、加えて学園都市のIDだの個人情報なども持っていないので、職務質問されればただではすまないのだ。

「・・・まあ、行くか」

しかし、そんなことライナは気にしない。昼寝王だの、怠け者など、これまで散々な罵詈雑言を浴びせられ続けられていた（半分以上は自業自得である）ライナにとっては、他人の視線はそよ風にも等しい。

さつさと服を着替え、机に置いてあった鉦をポケットに入れ、揚々と玄関を目指す。そして靴を履いて、お部屋とおさらばをしようとしたところで、ライナはピタッとその動きを止めた。

（あれ？そういえば部屋の鍵、俺ってば貰ってたっけ？）

自分の胸に聞いてみるも、もちろん答えは“否”であったのだが、

（ふつ、気にしない気にしない。大丈夫だ一日ぐらい鍵を掛けてなかったってそうそう泥棒になんか入られるわけが・・・）

と、そこまで考えたところで、ライナははつとした。

「アブねえーっツ！！上条の不幸體質を忘れるところだったぜ」

自分にナイスだ！とエールを送ったライナだが、ともすればどうすればいいのか。答えは簡単だった。

「魔法で、っと」

扉に魔方陣でトラップを仕掛けることにしたライナである。何の、どんな魔法にするべきか。

「要は相手を驚かせればいいから・・・面倒だし『稲光^{いづち}』でいいか」

もちろん威力は弱めにしておいて、自分以外の人間が開けようとしたら超特大版の静電気が起きるぐらいだ。さすがにビビるだろうとライナは笑いつつ、細工を終えた。なに、どうせ自分自身は昼飯を食べてくるだけであるし、そう時間もかかるまいと思っていた。この時は。

「完璧だ！・・・よし行こ」

そう言つて、鼻歌でも歌いながらマンションを下りるためエレベーターに向かい、ボタンを押して待つ。舗装し直したばかりできれいなエレベーターの乗り心地はどのようなもんならな、としばらく待って、開いた扉に載ろうとしたところで。

中にはすでに先客が居た。

なにやら学園都市特製自動掃除ロボットに乗ってくるくと回っている女の子。彼女が着ているものを見てライナは思わず口を開き、同じように向こうもこちらの服に驚いたようで感想を述べようと

し、結果的に二人ともほとんど同時に口を開いた。

「まさか、メイドさんかつつ!？」

「まさかー、兄貴の隣の部屋の上条の部屋に一緒に住んでる居候で、しかもほとんど寝てばかりで家事を何も手伝わなくて同居人の手を煩わせて、しかも少し場違いな服を着続けているライナ」リユートって人ー??」

・・・個人情報流出しているようだ。今の長さを一息で言いやがった。だがそれよりも、その幼そうな女の子に言われたことが意外にも胸に突き刺さった。確かに客観的に見たら、ライナのやっていることは迷惑行為にしか映らないことに気づく。上条に静かに感謝を捧げたライナである。

「あゝ、その、なんだ。お前の言うとおりには違いはないんだが、もう少し遠回しに言ってくれることを要求する!！」

事実を突かれたわけだが、なんとも情けない。

「んー、努力するー」

「助かる。ところでお前は誰だ?さっきの話だと隣の部屋——
——確か土御門とか言ったっけ?その人の親類なのか?」

「そうだぞー。一応名前を言っておくと、私の名前は土御門 舞^ま
夏^{いか}。兄貴である土御門元春^{もとはる}の妹で、メイドさん見習いをしてるー」

「へえ、この都市にはそんな学校もあるのか。で、普段からその格好してんの?」

「ふふん、これはメイドとなるための必須条件なのだよー。いつ如何なる時でもご主人様の言葉に対応してこそ、一流のメイドさんというものだからなー」

「・・・メイドさんになるのもなかなか厳しそーだな」

「うむ。しかもウチの学校は実地が基本だからー、こうして街に出て修行をしてるんだぞー」

「そうか。ところで俺のことは当然兄貴とやりに聞いたのか？」

「そうそう。兄貴は上条とは同じ学校で同級生もやってるから、それでいろいろと知ってるんじゃないかなー？」

「ちなみに彼はどんな格好してるんだ？」

「金髪にサングラス、それに金色のネックレスを付けてるなー」

「不良君なのかっ!？」

「いやいや、そんな大層なものじゃなくて、なんかモテたいが故の格好らしー。・・・妹にベッタリのくせにあの野郎」

「ッ!？おゝい、舞夏さん？なんかどす黒いオーラ吹き出してますがー!？」

「おっと、いけない。メイドさんとしてあるまじき醜態を晒すところだった。ところで、ライナはこれから何するつもりなんだー？」

「俺か？今から飯でも食べに行こうかと思ってるさ。上条とインデッ・・・上条はちょっと出かけてるからな」

危なくインデックスのことを話してしまうところだった。上条と自分の社会的抹殺をすんでのところで回避するライナである。

「?？そうなのかー。だったらいいお店を知ってるぞー？教えてあげるから何か奢ってくれー」

「いいのか？メイドさん的には・・・いや、もちろん教えてくれるならそれに越したことはないんだが、金はそんなにないぞ？」

「メイドさん的には、そこは臨機応変に対処していいことになってるから問題ないぞー。それに一人分増えたぐらいのお金は持ってるだろー？持ってるって?？じゃー付いてきてくれー」

そう言って降下ボタンを押す舞夏と一緒にエレベーターに乗り込み、ライナは舞夏の言う店へと向かったのだった。

「お、意外としチャレた店なんだな。ファミリーレストランの
ようなものか？」

店を前に、ライナは隣りにいた舞夏に話しかけた。

「あながち間違つてないけど、この店で出せないメニューはないと言われているほど、たくさんの食材を扱っている店なんだぞー。ピンからキリまでいろいろと揃ってるって評判の店なのだよ。」

そりゃ便利な店だと思いつつ、ライナと舞夏は中へ足を進めた。

店内はだいぶ混んでいるようだった。店員は忙しそうに働いているし、生徒も多く来ているようで喧噪が満ちていた。少し待たないといけないか、とライナが気長に待とうとしたところへ、とことこと一人の店員さんがこちらへ歩いてきた。茶髪に店の制服を見事に着こなしているかわいい感じの子である。

「いらつしやいませ。何名様でしょうか？」

ライナは舞夏をちらつと見て、二人だ、と答える。

「まことに申し訳ございませんが、現在は満席の状態です、お客様には相席になっていただくしかないのですが、よろしいでしょうか？」

やはり満席だったらしい。ライナとしては、学生sの中に自分一人で堂々と入っていいかなどとは当然思わないが、舞夏もいることだし、まあ相席でもいいかと考える。

「あゝ、まあどっちでもいいけど、相手側が構わないなら俺らも気にしないから」

「わかりました。では少々お待ちください」

お辞儀をして、彼女は奥へと消えていき、少しして戻ってきた。

「相席を了承してくださった方たちがおりますので、お席にご案内いたします」

店員さんの後に続いて、ライナと舞夏も歩いていった。

もしここで仮にライナに予知能力があつたなら、おそらくライナは別の席が空くまで待つていたか、あるいは別の店を選んでいただろう。

店員に促されるまま付いていったその先で、席に座っていた女の子の顔を見て、ライナは思わず顔をげつ、と顰^{しか}めてしまった。それも仕方のないことだ。なぜならその席には、

・・・・・・・・・・・・・・・・なんとビリビリがいた。しかも白井黒子

付きで。

「は、はは、久しぶりだなビリビリそして黒子」

不幸だ、とライナは上条ばりに思った。顔が若干引きつって
いて乾いた笑みしか浮かべられなかったのもそのせいだろう。

向こうもこちらが顔見知りであるということに気づき、驚いた様
子で声を掛けてきた。

「ライナ？それと・・・舞夏も？」

「あらあら。昼間からこのような場所に来るなんて仲良しです」と

美琴は驚いているだけだが、黒子は黒かった。その腹の中は。美琴も黒子の言葉にむつとして、ライナを睨んでくる。

「ちよつとアンタ！いい歳して舞夏に絡んでんじやないわよ！！」

どうやら完全に誤解されたようだ。既に臨戦態勢に入っただのか、美琴の髪の毛からバチバチと電撃が乱舞していた。

「いや、ちよつと待て。何も俺から誘ったわけじゃねえし！！しかも歳はカンケーねえだろ！！っていうか二人とも知り合いだっただのか？」

「そうだぞー。美琴のどこにもメイド研修として行くからなー」

「ま、舞夏に手を出したら、シスコンのお兄さんがすぐさま飛んできて殺す勢いで掴みかかってくるっていう噂もあるぐらいだし、大丈夫だとは思っけど・・・」

「土御門元春がか？おいおい、やたらとアブない兄貴がいたもんだな」

「大抵の家では兄妹の仲ってさー、結構険悪になると思うんだけど、ウチの兄貴は特別みたいだからなー」

本人がいなくて盛り上がることはよくあるし、まあこの場合はほとんど事実なのであるうが、本人に聞けばおそらく「事実だぜい。結局ロリに敵う奴^{かな}なんていないんだにゃー」などといった暴論が飛び出ること間違いないのである。

ライナといえば、美琴に「私と勝負しなさい！！」といった言われるのかびくびくしていたのだが、どうやら今日は心配しなくてもい

いようだ。美琴が成長したのだと思いたいが、よく考えれば前に勝負したときからそんなに時間は経ってないだけであると気づく。

ともかく、いつまでも話してばかりもいられないので、とりあえず適当なところで話を中断して、ライナと舞夏は席についた。

そこへすかさず先ほどの店員さんが水の入ったコップを運んできた。相席で申し訳ございません、と一言謝った後、ライナと舞夏にご注文は？と聞いてくる。

「あゝ、じゃあこのハンバーグとポテトのセットを。隣の子も同じで」

まあ定番メニューでいいだろ、と適当にライナは注文をして、それを聞いた店員さんは確認した後、厨房の方へと消えていった。

やれやれと前に目を向ければ・・・なぜか美琴がこちらを睨んでいた。

（またかよ！？俺って何かしたか？）

困惑しつつも一応聞いてみることにする。

「ビリビリ？どうして顔をそんなに険しくして俺を睨んでるんだ？？」

「アンタ。舞夏に奢ってあげる気？」

なんだ、そんなことかとライナは美琴の言葉を聞いて安心した。きつとライナが一人で勝手に舞夏のメニューも選んだことを、不審に思ったのだろう。

「まあそうだな。家の前ではつたりと会って、この店教えて貰ったから、そのお礼にすることなんだが？」

ライナの言葉に美琴もほっとしたようだ。顔に張り付けていた緊張感を四散させて、再度口を開いた。

「それを聞いて安心したわよ。危なくアンタを“舞夏を食事で釣ろうとしている変態”かと思っちゃうところだったし」

「不審に思ったのってそっち！？何を勝手に危惧してんだよ！！
そんな変態に見えるのか俺が！？」

「無理ありませんのお姉さま。このクソ下衆野郎を善人だと思つのは少々——お顔が変態面かと。」

「待てい黒子。お前は顔で人を判断するような奴だったのか！
？そもそも俺ってそんな悪人面はしてねーだろ！！」

「変態面、だとそう申しあげましたでしょう?」

[illegible]

「それに佐天さんが言つてただけど、なんか都市伝説の一つに脅威！少女に迫る変態色情狂！ねらつた獲物は逃がさない！今日もあなたを狙っています・・・」つていうのがあつたのよねー。それで変に疑つちやつたのかもしれないわ。」

うんうん、と頷く美琴に、ライナはなぜか涙目になっていた。彼の直感がこう告げていたからだ。曰く、「フェリスのせいじゃね？」と。

彼女は異世界にいるはずだからありえない、とライナはその直感を否定しようとするが、残念ながらその幻想は壊れてくれなかった。

悪いことは一度では終わらないものだ。負のスパイラルとでもい

うべきか、とにかく今日のライナの運勢は12位という星座占いで
は再開の順位を大きく飛び越えて、おそらく120位ぐらいになっ
ていたに違いない。

—— 事件は、このあと少ししてから起こった。

第十六章 とあるメイドと事件の始まり（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

こうして本文の方は遅々として進まないんだと実感しております。少々、間を空けた投稿となりましたが、それがこんな内容でまことに申し訳ございません。

いろいろと登場人物を主人公（一応ライナ）と出逢わせてみたかったもので。

次回もこの続きになる予定です。

第十七章 とあるメイドと事件の終わり（前書き）

前回の続きです

第十七章 とあるメイドと事件の終わり

今、ライナ達がいる席は出口から考えて奥の方に位置していた。意外な広さを誇るこの店の名は『魅惑の妖精亭』というらしい・・・と、そうライナは美琴から聞いた。もちろん、ここにはオネエ言葉を話すボディビルダー級の体格で女装したおっさんなどはおらず、普通に明るい雰囲気のレストランである。

「それにしてもアンタ、字を読めるようになったのね」

そうなのだ。最初にライナがこちらの世界に来たときは聞いたり話したりすることはできたが、文字を読むことはできなかった。そのため、あの美琴との対戦後、ライナは彼女たちから文字を教わっていたのである。あれから数日しか経ってないが、ライナはメニューをすらすらと読めるようになっていた。それに美琴は驚いたのである。

「まあな。基本的に字を覚えるとかは別に嫌いじゃねえし、古文書とか読もうと思ったたら必然的に文字の読み書きはできなきゃいけないしな」

事も無げにライナは答える。それに他の面々は少し感嘆したようだった。

「最初は全く知らなかったのにね」

「確かに、クソ野郎にしてはなかなか教養がありがたいようですね。」

「でも、ふと思ったんだけどさー、その歳になるまで文字を読めないってありえないかー??」

舞夏の言葉には純粹な興味しかなかったのだが、ライナはその言葉に冷や汗が流れた。核心を突くとはなかなか鋭い。

とてもじゃないが実は異世界人だから・・・などとは口が裂けても言えない。しかもここは学園都市であって、まあもしライナが『外』の人間だったとしても文字ぐらいは基本の基本だ。子どもでも扱える代物である。さて、どう答えるかとライナは思索した。

「・・・え」と、実は俺ってば孤児でさ、幼いときから施設で育ったんだよ。しかもその施設が少々特殊だったのか、言葉は話せるだけで十分だという考えだったから俺は話すことしかできなかったのさ」

幾分かの事実を元に嘘をかぶせる。自虐ネタが入ってしまったのはライナとしても苦笑いだ、あながち間違っではない。あの施設も十分特殊だったという点では。だが、聞いた方の三人は少し気まぐずになったようだった。

「聞いちゃってごめんねーライナー。」

「・・・そんな過去があっただんだアンタに」

「それは申し訳ありませんでしたわ。この黒子、お詫びさせていただきますの」

彼女たちのしおらしい態度に、良い奴らじゃねーか、とライナは不覚にも思ってしまった。

「気にしなくてもいいぞ。こうして俺は元気に過ごしてるわけだし、過去の事はもう終わっちまったことだからな。これからは俺は昼寝しまくって世を満喫するんだ!!」

新たな決意を元に、立ち上がってそう彼女たちに宣言したライナ。力を込めて言ったせいか、周りの席にいた何人かがこちらに訝しげな視線を送ってきたのだが、ライナはそれをスルーして席に座った。

「・・・いきなりそのセリフを聞いた人は思わずアンタを殴りたくなるでしょうね」

「いえお姉様、その前にこの黒子が一発やってやりますの!!」

「昼寝はいいことなだけどな」

なんだか哀れみの視線を向けられた。今の自分のセリフのどこに悪いところがあったのだから、とライナは本気で考えてみるが答えは出ず。彼にとって昼寝＝真なのだから、それも当然である。

そうこう話しているうちに料理が運ばれてきた。おいしそうな匂いと、目の前で湯気をもうもくと上げているハンバーグその他を見て、ライナの目は輝いた。――深紅の五方星はもちろん使っていない。

隣りに座っている舞夏もそわそわしていた。あとは、これを食べて帰るだけである。さらばビリビリ、さらば黒子、さらば舞夏よ、なんて考えつつ、フォークとナイフを手で取ってかけ声を。

「いただきますー」ドカンッ!!!!!!!!!!!!!!」

玄関のほうで爆発音が響いた。客の何人かが悲鳴をあげ、店内中の目がそちらに向けられる。見れば、いかにも強盗ですという格好をした、黒ずくめで顔まで布で隠した者達がいた。数は7人で、おそらくは全員、男。手に銃を持っているところを見ると、どうやらそこまでレベルは高くないらしいことが分かる。むしろ無能力者^{レベル0}なわけではない。

彼らは客に銃を向け、一列に並ぶように指示してくる。店員には

有り金を全部持つてこいと要求し、7人の内2人が店員に付き添い、奥へと消えていった。

（ちつ、どこのバカヤローだよ。人の食事の邪魔をするとはいい度胸だよマジで）

温厚なライナも黒いオーラを吹き出すというもの。俺が昼寝を邪魔されたことだけ怒ると思うなよと、そちらに怨嗟の込もった目を向けた。――深紅の五方星付きである。

ただ、前に座っている風紀委員と、事件に首を突っ込みたがるピリビリがいるのだから、この事件はあつてないようなものだろう。
坂美琴
静かに心の中で合唱し、食事を続けるライナであった。

・・・他の客達は襲撃者達に指示されたようにぞろぞろと並び出す。間もなく、自分達意外の客は全員並び終えてしまい、彼らだけが襲撃者達の注目の的となってしまった。覆面男の一人がこちらに銃口を向け、大声で怒鳴る。

「おい、てめーらっ！！俺達の話が聞こえてなかったのかっ！！死にたくなかったらさっさと言うとおりにしろ！！」

やれやれ、といったように美琴は頭を振りつつ席を立とうとし、黒子もポケットをまさぐって何かを取り出して、それを腕に付けながら美琴に続く。・・・ライナと舞夏は当然のように料理を食べることに勤しんでいるが。
いそし

「――黒子、アンタは奥の2人をやっちゃいなさい」

「了解ですわお姉様、手前の3人は頼みますわよ」

小声で作戦を言い合い、二人は目をきらりと襲撃者達に向けた。黒子が腕に付けた腕章を見せながら、宣戦布告を行う。いや、最後

通牒の間違いであろうか。

「風紀委員ジャッジメントですの。今すぐ投降するなら罪は軽くて済みますわよ？」

その言葉に襲撃者達の顔色が変わったように見えたが、もともと彼らは覆面で顔を隠しているので真っ青になったかどうかはわからないが、少なくとも動揺したようだった。

残っている5人の中で一番体格のよい——おそらくボスであろう——者が、相手が強者だと感じ取り、部下に瞬時に指示を下す。

「ちっ！お前ら、やれ！！！！！！！！！！」

声と同時にボス以外の4人が銃を美琴と黒子に向け、乱射しようと試みた……のだが、なぜか銃が手元から無くなっており、彼らは訝しげに眉をひそめた。

ふっと、前を見るとこれまたなぜか自分たちの銃が、がっちりと空中で固まって浮いていた。そう、まるで何かに引き寄せられたような——

「なっ！？」

驚く男達の目の前で、雷撃が迸っていた。

彼らのうち、果たして何人が目の前にいる少女が電撃エレクトロマスター使いであると感じ、果たして彼らの何人が彼女を常盤台中学のレベル5にして、学園都市第三位の超電磁砲レールガン、御坂美琴だと認識できたであろうか。

おそらく考える時間はなかっただろう。

なぜなら、奥にいた襲撃者2人の視界はいつの間にか天井に向い

ていたからだ。

後頭部や背中から衝撃が走り、彼らは自分が倒されたことに気づく。咄嗟に動こうとするも、それより早く出現した針が男達の服を、体の周りをなぞるようにして縫い止め行動不能にした。

それでももがく二人に対して、^{黒子}悪魔が一言、

「それ以上動いたら、次はその腹の中に針をテレポートさせますわよ・・・」

その眩きは想像以上の力をもたらし、暴れていた二人は行動をぴたと止めて全身で恐怖を体現していた。

同時に、前にいた3人は目の前の美琴から放たれた雷撃によって、避ける間もなくあっさりと床とキスする羽目になった。

そして、それらの音に反応して奥から飛び出してきた二人も、^{テレポート}黒子の空間移動によって瞬時に戦闘不能とされた（当然脅し付きである）。

ここに至るまで実に一分かかるか、かからないか。

それには、舞夏と二人して食事を堪能していたライナも感嘆の目を向けた。

（すげー！！いやまあ強いことは知ってたけど、まさかこんなにあっさりと終わらすとはなあ。っていうか、黒子の能力って体の中に異物をテレポートさせられたら結構危ないよな・・・）

黒子が他に聞こえないようにぼそつと呟いていたのでライナには聞こえていなかったが、事実としてやはり黒子は黒かった。しかも結構どころか、頭にでもテレポートされたあかつきには、即座に一発KOで天国と相見える状態になるんじゃないかとライナは思うのだが、まあ黒子は人格者であるし（一応は）そんなことはしないだろうと気楽に考えておく。

事を終えた美琴は席に戻ってきて、はあ・・とため息を吐いた。
その理由を聞いてみたライナだが、美琴のした発言は、

「弱すぎて話になんないわよまったく・・・」

というものであり、くそ！やっぱりお前は戦闘^{バトル}狂か！？と思わず
心の中で毒づいてしまったのも仕方のないことだろう。

黒子というと、どこかへ電話をしているようだ。おそらくは警^{アン}
備員^{チスキル}にでも連絡して、そこらへんに転がっている少女二人に瞬殺さ
れた哀れな襲撃者の引き取りを依頼しているに違いない。

周りでそれらを傍観していた客達も自分たちが助かったことに喜
び合い、口々に美琴と電話を終えた黒子にお礼を言い始め、それを
美琴はどういたしまして、と手を振って応対し、黒子は当然のこと
ですわ、と見事に風紀委員^{ジャッジメント}さんをやっていた。

そこでライナは、客達から向き直つ、ジトつと自分に目を向けて
きている美琴の視線に気づいた。一応はその理由も聞いておいた方
がいいだろう。

「なんだよ？」

「いや、確かにもの凄く弱かったから、アンタが手を出すまでも
なく終わったのは事実だけど、自分は空気無視して食事を続けなが
ら、私達に戦わすってどうなのよ？」

「だって食事は温かいうちに食え！っていう名言があるじゃん？
？」

「ないわよそんな名言！響きは確かに似てるけど・・・」

「それにお前ら強いだろ？わざわざ俺がやらなくてもいいわけじ
ゃんか。俺はお前らを信頼しての行動だったんだぜ？」

「本音は？」

「正直、めんどくさかった」

「殺す！」

やべ、ついついノセられちゃったと思う間もなく、戦闘は再開され、食後の運動をライナはすることになってしまった。

舞夏と黒子含むその他の客は異常を察知し（すばらしい能力だ）、そくさと店の外への避難を開始した。

店内を走り抜けながら、ライナは美琴に叫ぶ。

「うおい！ここ店内だし！！ほらまだまだ使えるテーブルとか椅子とか並んでるし！！攻撃やめろってマジで！！」

「うるさいわね！アンタのその面倒くさがる考えをこの場で正すと思えば安いもんよ！！」

「ぜってえええええ高いわああああああああ！！！！」

先程の戦闘以上の破壊を生み出すライナと美琴。呆れ顔の舞夏と黒子含む周りの客は、すでに店の外へ避難を終えていた。ただそれは、襲撃者達には中に置き去りということを示していた。

彼らのすぐ側に雷撃が降り注ぐ。

「のわっ！ち、近くに落ちた！！」

「ぎゃあああ！！？机が体のすぐ側を！？」

「痛ええええええ！腹に・・・腹にくらった・・・」

「死ぬなああああジョージいいいいいい！！！！」

「ぐふあ、ま、まさかこんな所で死ぬとは・・・な、ガクッ」

「おい！ブライアン！お前が死んだら故郷に残してきた彼女はどっするんだああああああ！！」

「も、燃えるような痛みだぜ・・・」

「フレッド！！それは燃えるようなじゃない！実際に発火して燃えてんだよ！！」

「お、俺が今日のために作り上げたチームが・・・まさかこんなにあっさりプルパッ！！」

「ボおおおおおスううううう——ッッ——」

「あはは、なんか花畑が見えるな。あ、向こう側で死んだはずのババアが手を振ってらあ」

「ボブ！その川を渡るんじゃないぞ！船とか近づいてきても蹴り返して、逆に50両ぐらいブンどっちまえ！」

「目があ、目がああああああああああああああ！」

「おのれ！この野郎！こんな非常事態にネタ挟んでくるんじゃないえ——！」

「（俺達が）腐ってやがる！（この店を襲撃しようとしたのが）早過ぎたんだ——」

「てめえもかあああああああああああ——！なんで今それを後悔するんだ——？」

「タスケテクレー、ダレカー——！」

「なんで外国人の振りしてんだよ——！あと、ニホンゴワカリマセンのジェスチャーを無理にしようとするな——！」

地獄絵図

この混沌には、さすがに店の外にいた人々からも同情の眼差しが送られた。……誰も助けに行く者はいなかったが。自分が彼らの二の舞になるわけにはいかないというのが、その場にいた誰もの思だった。それともう一つ疑問が彼らにはあった。

（なんでお前ら、呼び合う名前が外国人の名前でよくありそうなやつなんだ？）

……ただ、例外だったのは現場に到着した警備員アンチスキルの皆さんだっ

た。その中でも女でジャージで巨乳で学校の先生にして警備員アンチスキルが一人、黄泉川愛穂あいはは俄然やる気を出していた。

（話じゃ襲撃者全員鎮圧したそうじゃんだけど、どうやらまだ暴れてる奴がいるようじゃねー）

ニヤリと呼ぶに相応しい笑顔を顔に張り付け、防具を手にとって嵐の中に突入したのだが。

入り口に入った途端、通路で倒れていた男達全員が黄泉川の方を向き、

「「「「「「「助けてくれ！！なんでもするから！！！！！！」」」」」」」

涙目で訴えかけてきたときは、さしもの黄泉川も硬直してしまっ

た。
後ろに続いていた他の隊員達を見やり、彼らの保護を頼む。外にいた風紀委員の生徒からはからは、そいつらが襲撃者であると報告を受けていた。数も揃っている。では、誰が騒ぎを起こしているというのか。

暴れているバカを目で追えば、電撃バチバチ猛攻撃中の超電磁砲レールガンらしき人物と、逃げに徹しているこの学園にしては珍しい年歳の青年が目に入った。

そちらに大声で呼びかける。

「お————いつ——！！お前らあああ——！！私は警備員だ——！！今すぐバカな騒ぎはやめるじゃんよ——！！」

黄泉川の一喝に、美琴とライナはぴたつと行動を止め、そちらを見やった。

ライナはそこで一息つくが、さて、と自分が置かれている状況を考えてみる。

襲撃者達はあっさりと確保され（しかもうち何人かは重傷）、今は自分と美琴が店を壊しまくっており（やったのはほとんど美琴だが）、正体を知られている美琴とは違い、自分はまさに正体不明（カウンターストップ）

うまいこと言った！）。取り調べられただけでもまずい。

「ふ、ふふ、不幸だあああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！」

「美琴お！！ア・ト・ハ・マ・カ・セ・タ♪」
「うえ！？」

（はっはっはー、これが経験の差だよ美琴君。俺が今まで何度非常識な事態に陥ったことか！その経験と行動力を舐めてもらっちゃ困る！！）

避ける間もなく、光の縄は美琴の体に上手に巻き付いて、彼女を行動不能にさせる。

「元と言えばビリビリ、お前の暴走が原因だからな！！じゃあなす！！」

ばしつ）、彼女を店に置き去りにして、警備の少なそうな奥の大きな窓ガラスをパリーントツという音を見事に響かせながら割つて、道へ飛び出て、ダツシュでその場から退散した。

・・・後はここから立ち去るだけさ、なんて安易に考えていた時代もありました、とライナは後でこの時のことを振り返る。

店を飛び出してすぐ聞こえてきた音。――それは何かの駆動音で。

ちらりとライナが後ろを見れば。

・ ・ ・ ・ 先程の警備員のお姉さんが、バイクに乗って向かってくる姿が彼の目には映っていました。

「えっ！？えっ！？なんで！？どうして俺を追っかけてくるの！？」

ライナのごく当たり前の質問に対し、

「はっはー、青年！！あんな惨状を引き起こした重要参考人を逃すわけにはいかないじゃんよーッ！！」

黄泉川愛穂からは至極真つ当な答えが返ってきたのであつて。

逃げ続けなければならなかったライナは、本日2回目である名ゼリフを先程よりも大きな声で叫ぶしかなかった。

[illegible]

ライナが上条宅に辿り着いたのは実にそれから5時間後。

—— 彼らの逃走&追走劇は、最終的に様々な手段を尽くし、あらゆる魔法と体術を駆使したライナが（相手は防具の盾とバイクのみだったのにもかかわらず）、どうにか黄泉川から逃げ切り、後に『雷撃の惨劇亭』と呼ばれたこの事件は幕を閉じたのであった。

第十七章 とあるメイドと事件の終わり（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけた場合はぜひひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

今回は今まで書いてきた中でも一番楽しく書けた気がする（何故なのかは作者にも不明である）。

やっと一段落できたので、次からは本当に2巻に突入します。

第十八章 とある姫巫女とファーストフード？（前書き）

題名を少し逸れてるかもしれませんが・・・

第十八章 とある姫巫女とファーストフード？

学園都市内に張り巡らされた通路の一つで、御坂美琴は頭を捻っていた。何か、大事なことを見落としているようなそんな感覚が先程から体の中をかけずり回って、いらいらを増長させていた。

なぜそんなにも苛^{いら}ついているのか、それは一人の男が原因であった。

（ああー、もうムカツクー！なんなのよアイツ！そりゃ店の大半を壊したのは確かに私だけど、何も置きざりにした挙げ句、私に店の修理代を全額払わせるなんていい度胸してるじゃない！！）

ライナリリユート。美琴を苛つかせている張本人である。学園都市では珍しく青年の部類に入り、いつまでもふざけた格好をしている男。先日の『魅惑の妖精亭』で起きた『雷撃の惨劇亭』事件のほとんど中心人物といっているのだが、今回の彼は完全なる被害者であると言っておきたい。奇^くしくも、いつもの面倒くさがる癖を発揮してしまっただけの不幸な男だったのだと。

まあ、彼は警備員^{アンチスキル}が来たときには、美琴を一人にしてさっさと逃げおおせ、美琴は一人で店の修理費用を払うことになってしまったのだが。彼女自身が常盤台中学へ通えるほどの“お嬢様”金持ちであつたからこそ良かったものの（前半の印象はまったくくないが）、そうでなかったらどうするつもりだったのだろうか。それも計算に入れての逃避だったとしたら、美琴は怒る前に彼に向かって脱帽せねばなるまい。もっとも、本人は逃げるのに必死だっただけに違いないが。

ならば先程から感じているこの違和感は、彼に関することに違いないのだらうと美琴は考える。

ちらりと隣を見れば、髪をツインテールにしている一つ下の後輩、白井黒子も自分と同じように頭を捻っていた。自分のことは棚に上げ、とりあえず聞いてみることにする。

「黒子。どうしたのよ？考え事？」

「うへへへ、次はどうやってお姉様に抱きついたらよいのか・・・」

「

どうやら自分とはまったくかけ離れた方向へと話を展開しているらしい。無言で黒子の頭に雷を落とす。

すると「んぎゃっ」と叫び、しばし悶絶したあと目が覚めたのか、黒子はあまり浮かない顔でこちらを見上げた。

「頭に引つかかっていることがあるんですの。その原因を探っているのですけれど、なかなか思い当たらなくて」

そう言いつつ、またしてもうんと頭を捻りはじめてしまう。自分と似たようなことを黒子は考えているのかもしれない。

「私もなんか気がかりなのよねー。なんかこう重要なことを見落としているような・・・。学園都市ではあり得ないことがあったような感じ・・・。ねえ、それって“アイツ”に関係してるんじゃない？」

「“アイツ”と申しますと？お姉様がおっしゃる“アイツ”は、わたくしの知る限りではお二人いらっしゃって、どちらがそうかわかりませんの」

やれやれと肩をすくめて美琴を見る黒子の目の中には、疑惑しか写っていないかった。美琴も少々、焦って反論してしまうのは避けられなかった。

「ラ、ライナのほうよ！！っていうかライナだけだし、ライナだけだし、ライナ以外はあり得ないのよ三段論法！！」

「思いつきり使い方を間違えてますわよお姉様。しかも本来の三段論法はそんな使い方さえもしいんですの。それにしても最初の二つはまったく同じで、しかも全部断定しか示していないというその慌てぶり……。よほど秘めたるナニかがあるんですのね？」

黒子の目がきらり、いやギリリと美琴に向けられた。

「そ、そんなわけないじゃない！どっちも私が倒すべき敵というだけだし！それよりライナについて引つかかっていることがあるんじゃないの？」

「まあその話は後ほどみっちりいたしましょう。・・・そうですわね。あの殿方に違和感があるようですけど、その口振りだとお姉様も同じ事を考えてますのね？」

「そーなのよ。アイツのどこが変なのかしら？」

お互い立ち止まって、道の真ん中で頭を捻った。

「服・・・は変だけであり得ないワケじゃなし、顔・・・もまあ普通よね。性格・・・は最低だけど、悪いヤツでもない」

「常に眠そうなのも、そこまで変ではないですわよね」

消去法で答えを出そうとしてみるが、こうして総合的な評価を下しているとなんだかライナはあまり“まとも”でないような気がしてくるから不思議だ。

「そうよ！アイツの眼！！あれは例外よね！それになんか魔方陣っぽいバンバン出して攻撃してきたことも！！」

「攻撃・・・といえば、あの殿方の攻撃は能力というより、それこそ魔法という感じでしたわね。電気系に水系、束縛系と割と多種多様だったような・・・まさか」

と、そこまで黒子が言ったところで、二人はある可能性に辿り着いた。驚愕のあまり、二人は同時に青ざめて素っ頓狂な声を出してしまった。

「デュアルスキル多重能力者！！？」

その考えに今まで至らなかったのは、自らの鈍さゆえか。それともまさか、それはあり得ないという思いがあったからだろうか。学園都市に住む230万人のうち約8割が学生で超能力者だというのに、未だ誰もその領域に達した者はいないからだ。むしろ達しているものがあるとするならば、その能力次第ではレベル5に位置づけられてもおかしうはないほどの異常である。

達した結論に、美琴は呆然と呟いた。

「まさか、アイツに限ってそんな多マルチ能力があるわけないじゃない」

「ですけど、実際にこの目で見ましたし、お姉様も闘ったのでしよう？現実問題ですわよこれは」

「な、なんかタネがあるのよきつと」

「あつたとしても！それをお姉様との闘いであれほど応用できるのだとしたら、それは例えトリックであつても真実と同じことですよ」

「能力者じゃないっていう可能性は？」

「否定はできませんけど、可能性は低いと思いますわ。それにわたくしたちと最初に会ったときの言動から察するに、あまりこの街のことは知らないようでしたし、もしかしたら外部の人間かもしれ

ませんわね」

「・・・『外』に私と張り合えるだけのナニかのチカラを持った人間がいる確率っていうのは、果たしてどれほどのもんなのかしらね」

「おそらく天文学的数字になるのは間違いありませんの。とりあえず早急に調べてみる必要がありますわ」

そう言つて、黒子はポーチから携帯を取り出して電話をかけた。

向こうで応対しているのは風紀委員第177支部で待機中の初春に違いない。彼女の間延びた声が美琴の耳にも届いてきたことでそれを確認する。これからライナリリユートという人物に対して個別照合や検索が行われるのだ。それでこの街の人間だったならまだしも、正体不明の不審者^{アンソウン}だったとしたら、どうするつもりだろうか。

美琴はその胸に決意を固めた。すなわち、次にライナに会ったときは必ずいろいろなことを聞くことを。

——それは逆に、ライナにしてみれば不幸以外の何物でもなかった。

「うだー、暑い・・・」

今日は8月8日。まだまだ夏は絶好調のようで、太陽は紫外線の量が気になるほどの熱波をさんさんと降り注いでいた。

当麻、ライナ、インデックスの三人は、そんな暑気楼さえも見える街中を歩いていて。今の声を出したのはライナであり、その言葉に当麻もげんなりとしながら後ろを振り返った。

「ライナ、それ今日で5回目だぞ」

彼の片手には本が一冊。それはつい先程、本屋で買ってきた問題集（一冊3600円）である。例えば記憶があるうとも無かるうとも、上条のスペックは変わらない。土御門、青髪ピアスと共に“デルタフォースクラス”の三バカ”と言われるほどの頭脳の持ち主だ。必然的に、家の中の本は漫画だけであるという状況を打破するべく、こうして炎天下の中、珍妙な二人を引き連れてわざわざ買いに行っただのである。

「だつてさ、まさかこんなに暑いとは思わなかったんだよ。せっかく科学が発達してんだから、この暑さを除去する発明とかしろよ科学者！！」

「どこに向かつて吠えてんだよ・・・」

「あ、こんなことなら当麻の部屋でクーラーをつけっ放しにしたまま寝てりゃ良かった」

「お前そんな無駄遣いしてると、電気代だけで何円かかると思ってたんだよ！？特に夏は半端なく消費するもんだから、上条さんは毎年家計のやりくりが大変なのですよ！？それを今年は三人も一緒に住むことになって、わたくし上条が補習で学校行ってる間もお前らが電化製品をずっと使用してるから、もう今年の夏は越えられない

気がします・・・」

だからこそ上条は今日、ライナとインデックスも連れ出して、少しでも電気代を浮かそうと画策したのだ。

「それに食費とかも最近が多いし・・・」

ちらり、と上条が目を向けたのは、男のライナではなく、女の子のインデックスである。

「む、どうしてそこで私を見るのとうま。それは言外に『お前が一番食べてるんだよ!』とでも言いたいのか!」

「なんだ違うのか?俺はてっきりそう思ってたんだけど。ライナはどう思う?」

「うゝん、まあ俺も人並みには食べるけど、確かにインデックスには遠く及ばないな。いや、さすがと言うべきブラックホールを持つ胃袋」

「らいなあゝ、とうまの肩を持つ気なの!?それと女の子に対して言い方が失礼なんだよ!」

ギリリと、インデックスが歯を見せるようにして口を開いたのを見て、ライナは即座に防衛機能を働かす。

「いやいや、確かに食べることで自体は悪い事じゃないから!むしろ当麻がお金持ちだったら解決できる問題だよこれは!」

「うえ!?俺のせい?インデックスのあり得ない胃袋を糾弾する話じゃなくて!」

はっ、と上条が自らの失言に気づいたときにはすでに時は遅く、インデックスは空中にいて。

跳んだ勢いのまま、上条の頭にしっかりと齒形をつけるように、噛み付き攻撃を食らわせていた。

・・・まだ真昼だというのに、なぜか夜に幽霊を直に見てしまったときほどの絶叫が、辺りには響いたという。

「素敵にお楽しみなところ邪魔するようで悪いんやけど、ちなみにその二人は誰なんカミヤん？」

他人から見れば素敵に見えていたらしいやりとりを三人の耳に、そんなエセ関西弁が聞こえてきた。

その声の主に見当がついた上条は少々「げっ！」という顔をしながら、声のほうに顔を向け、つられるようにライナとインデックスも目を向けたその先には。

——青い髪にピアスな怪しい人物、もとい怪人、いや青髪ピアスが立っていた。

「ぱつと見たところ、そっちの小つこい方は外国人の子みたいやし、もう一人は冒険者にしか見えへんねんけどなあー」

爆弾発言かつ！と思いつつインデックスをおそろおそろ見た上条だが、彼女は“小つこい”という言葉にピクリとも反応しなかった。言われ続けてある程度の耐性がついているのだろっ。さて、どう紹介したものが、と上条は思案する。

「二人とも、父さんの知り合いの子だ。ほら、俺の父さんは出張とかで現地でいろいろな人と知り合いになる機会があるらしくって、今回はその知り合った人たちの子が俺の家にホームステイしてきてるんだよ」

我ながら、なかなか完璧な返答を返すことができたと内心でガツツポーズする上条。

「なんやと！？そしたらカミヤんの家にはこの銀髪のかawaii子ちゃんが今は住んでるってことなん？つまり居候的存在！？羨ましがってるっ！！」

だが、その言葉の中のあるキーワードに瞬時に反応するのは、さすが青髪ピアスといったところか。しかも男のライナはノータッチで、インデックスだけに焦点を当てているところが彼らしい。

「どこに反応してんだよ！？だいたい最近じゃホームステイなんて普通だろ？」

上条の冷静な指摘に、がふつと青髪ピアスは吐血した。

「その可能性を考えへんかったあああああああああ！
！・・・あれ？でもここは学園都市やから、『外』の人間が気軽に入って来れるところとちゃうで？」

「あゝ、それはその・・・」

言葉を泳がせる上条に、思わぬ助け船を出した男がいた。そう、存在を忘れられてたライナである。

「そのことなんだけど、上条の父さんはこの学園都市の、理事会のメンバーの一人である親船最中っていう人と親しいらしいから、その“つて”で珍しく俺達はホームステイが認められたんだよ」

上条驚愕。なんで親船最中を知ってるんだという上条の思いはさておき、青髪ピアスは納得したようだった。

「ふん。親船さんかいな。あの人やったらあり得るなあ。せやったら僕もぜひ話し合いをしに行かなあかんわ！」

早いうちに、親船さんとやらには事情を説明しに行っておいたほうがいいかもしれない。目の前で俄然やる気を見せている青髪ピアスを見れば、そう思わずにはいられない上条達だった。その前に、

（おい当麻！こいつはお前の友達か！？お前はこんなのと仲良しこよししてんのか！？）

（そーだよとうま！明らかに思考がオカしい人なんだよ。このままじゃ私、ヤラレちゃうかも！？）

（ぐ、それを言われると立つ瀬がないけど、根はいい奴なんだぜ？）

（根は良くても、性癖に癖がありすぎるだろーがああ！？俺もさんざんシオンやフェリスに変態色情狂だの何だの言われたことはあるけど、こいつはその上を行っている気がする！！）

（変態色情狂！？やっぱリライナ、そんな趣味があるの！？）

（ねーよ！俺は無実だ！！それは奴らが勝手に言い始めた事なんだ！）

（でも火のないところに煙は立たぬって言うよな！？）

（バカやろー当麻！！奴らは火のないところでも平気で煙を立てるし、むしろ自ら火を起こしにくタイプなんだぞ！？しかも何故か周りの奴は全員その妄言を信じ込みやがったし！）

（最悪だなそれ・・・）

（うん。もう生きていけないほどだね）

（いけるよ！！生きることぐらいできたよ！！）

（そっか、そのせいで現実逃避が多くなっちゃったんだね？）

（俺の崇高かつ幸福な昼寝を馬鹿にすんなああああああああああああ！！！！！！！！）

「お取り込み中に悪いんやけどな？なんや中間部分に僕と同じような趣味の子がいるように聞こえたんやけど？」

「それはライナなんだよ」

二人同時にハモリつつ、ライナ生け贄を指さす。さらばライナ、お達者でと上条とインデックスは祈りを捧げた。

「なんやと！よろしくマイフレンド我が同士よ！！」

「俺が？違うつてまじで！！ってかそんなところだけ聞くなああああああああ！！」

抱きついてこようとする馬鹿青髪のアスを必死の形相で撃退するライナ。ところどころ、ばれないようになんと魔法まで駆使し、どうにか５メートルほどの距離を取った。

彼の生命力は恐ろしく、端はたで見えていた上条たちが思わずゾンビか！！とツツコミたくなるほどだったらしい。

ただでさえなけなしの体力を使い果たしたライナの切実な希望で（というより実際、ライナはマジでどこかで休みたかったのと、インデックスは「あくまで修道女なんだから暑さなんか平気だし大丈夫だよ」姿勢を崩そうとはせずにアイスを要求するという高度な技を繰り出そうとしたのだが失敗し、上条とライナにスルーされかけたので慌てて「ファーストフードのお店でいいから！」と懇願することになったのだが、まあ上条も涼しい所で休みたい思いは一緒だったので、近くのファーストフードの店に立ち寄ることにした。

最も、青髪ピアスは二度と起きあがってこないようライナが徹底的に撃退したので、そのまま捨ててきた。この炎天下の下で、干物にでもなってくれと思ったライナである。

三人が立ち寄った店はまたも人気がある店なのか混んでおり、シイクをずうずうしくも3つほど上条に奢らせたインデックスと男2名（こちらは普通に一つずつ買った）は、相席を余儀なくされることとなった。その状況に、ライナは既視感を覚える。

（あれ？確か前にも相席したあと、不幸があつたような・・・？いや、さすがに美琴達がそうそうこんな店にいるわけないよね）

もし、ちらつとも姿を見かけたら全速力で逃走しようと心に決めたライナだが、インデックスが目をつけたのは、ちょうど4人掛けのテーブルを1人で使っているらしい女の子が座っている席だった。

こちらが何か言う前に、すでにインデックスは相席の断りを相手の女の子に言う前に席に座り、自分たちを手招きしていたのだが、男2人はなぜかその足を止めていた。

原因は、先に席に座っていた女の子にあった。曰く、

（何で！？何であのテーブルには大量のハンバーガーが乗ってるんだ！？）

（それによく見る当麻！！明らかに巫女服のようなものを着てるぞ！？いや、それは人にとにかく言う資格はないけど、でもあの子机に突っ伏してるし！）

触らぬ神に祟りなしとはよく言ったものだが、既に時は遅く。インデックスが勝手に相席しやがったことにより、関わらないという選択肢は消えてしまった。

嫌な予感と共に、しびしびといったように席に座ったライナと当麻だが、その突っ伏している巫女さんは顔すら上げなかった。

（おい！当麻！インデックス！ここはお前らが聞けよ！）

（それは私のセリフなんだよ！ここは男の子が毅然とした態度で接してあげるのがいいかも）

（馬鹿言っくなよっ！！俺はやりたくねーぞ！）

（知らないのか当麻？人にはどういつ時のために“勇気”というものが備わっているかを！！）

（そうだよ！語尾に“勇気”を付けたら、どんな言葉も格好良く聞こえるんだよ！？例えば、“とうまが女の子に話しかける勇気”とか）

（何で俺限定なんだよ！？誰でもできるだろうし、あとその表現はどこかで聞いたことがある気がする！！）

（お前にしか頼めないことなんだ）

（いいセリフだけど！！ライナ！それで今まで何人の英雄が散っていったか！！）

（この子は俺が引き受ける！だから、インデックス、ライナは先へ行ってくれ！！）

（人のセリフを捏造^{ねつぞう}すんじゃないね————ッッ！！！！それにそのセリフは完全に死亡フラグだよな！？俺ってば死んじゃうよね？）

ひそひそ話をしながら、怒ったりツツコんだりするということはなかなか難しいとライナは思っただが、上条にはその感性センスがあるようだった。せいぜい場を盛り上げるときにしか役に立たないが。

そんな無駄なひそひそ話を当の本人の前で盛大に繰り広げていたせいか、当然のように巫女さんにも聞こえていたらしい。ふふ、という笑い声が聞こえてきた。

その彼女に、じゃんけんで当たり前のように負けた上条が問いかけることとなった。

「えゝ・・・と、なあお嬢さん、何をしてるんだね？」

上条は最後に少し茶化して聞いたが、彼女には意外とツボにはまったらしく、その肩が小刻みに震えたのをライナは見た。意外に笑い上戸なのかもしれないと勝手な憶測を持ちつつ、答えを待っていると――三秒後、

「――、食い倒れた」

その間の抜けた返答には、インデックスも上条もライナも咄嗟にリアクションをとることは難しかった。

ただし、上条の頭は、つい最近に自分の家のベランダでだいたい正反対のような言葉を聞いたことを思い出した。その時の女の子は日本語をぺらぺらに話すことができるシスターさんであって、今も上条の隣りにいる人物、つまりはインデックスであるのだが、今度は日本人であって当然のように日本語ぺらぺらな巫女さんである。
・・・もはや巻き込まれた感じがしなかった。

学園都市にあるビルの、とある一室。

ドアもなければ窓もなく、階段もエレベーターも存在しないそのビルは、大能力者である空間移動レベル4
テレポートがなければ出入りすることができない、まさに難攻不落の要塞である。

その中で、一人の神父、いや魔術師は一人の『人間』と向き合っていた。

あらゆる機械にその生存機能を任せ、ナニかに満たされた容器の中で逆さまに浮いているその『人間』は、この学園都市ではトップの地位である、学園都市統括理事長アレイスター。ひとたび彼（男にも女にも子どもにも大人にも老人にも見えるため、この人称は適切ではないが、あえてこう置いておく）が指令を下せば、それはす

ぐさま実行されるであろうほどの、強大な権力を持っている『人間』。彼が何歳であるのかもどんな過去を持っているのかは誰も知らず、もちろん彼の考えさえもわかるはずがない。

その彼と向き合っている魔術師の名は、ステイル・マグヌス。
オカルトなぜ魔術が領域のステイルが、学園都市を訪れているのか。

「『ディーブブラッド吸血殺し』ですか？」

ステイルの口から漏れたその言葉は、一見すると価値ある情報ではないかもしれない。だが、その方面が専門の者が耳にすれば、たちまち顔色を変えることだろう。そして、ステイルからすれば到底許容できないものであった。その能力自体が、ではなく、その能力が発揮“される”側の存在は。

「ああ、少々まずい事になった」

科学サイドを統べる長がいうほどの状況とは、決して生易しいものではない。アレイスターに対し、自然に敬語を使っているステイルからしても、そのくらいは察することができる。

「あれは——その能力が本物ということになれば、必然に“あの生き物”を肯定することになってしまいますが、・・・我々としては困るのですよ」

「ふむ。吸血鬼の存在が、か」

むしろオカルトの面から言えば、決して否定されるものではないし、一般人も噂とか怪談話で『吸血鬼』の話ぐらいいは聞いたことがあるだろうとはステイルも思う。しかし、何より問題なのは・・・彼らが持つその“無尽蔵”の魔力だ。どんな物質にも底はあるのに・・・だ。

「ええ。しかし、今回は我々魔術師が関わっているようですね」
「そうだとも。私はこの街で起きたこの街の住人の事件なら、それを解決・隠蔽する手法など、7万と632程度の手段は揃えてある。しかし、今回は君たち側の人間が起こしたことだ。それが意味するところは君ならわかるだろう？」

そんなことは当たり前だ。仮にも魔術師が魔術師の領域で事件を起こしたのなら、魔術師達だけで対応すればいい。だが魔術師が、科学の領域で事件を起こした場合は厄介なこととなる。科学サイドとしては早く排除し、また魔術師から魔術サイドの情報を得ることが出来るかもしれないし、魔術サイドとしては、そんなことはさせられない。だからこそ、魔術師は魔術師の手で、それも教会の者の手で処分しなければならぬのだ。

ステイルがここに呼ばれたのはそういう理由があったからである。

「で、事件についての情報はもう集まっているのですか？」

「ああ、場所は三沢塾だ。詳しいことはその資料に書いてあるから読めばいい」

アレイスターの手足となって動いている機械のうち1台が、ステイルのもとに薄い紙の束を運んできた。それを手にとって一瞥してから、アレイスターにできるかぎり早く片を付けることを宣言して、ステイルは踵^{かかひす}を返す。その背中にアレイスターが最後に声を掛けてきた。

「あの右手を使うといい。『^{イマジンプレイカー}幻想殺し』は君たちにとっては天敵のようなものだろう？それに安心していい。アレは無能力^{レベル0}にであり、たいした情報は持っていない。魔術師と共に行動したところでこちら側の情報が漏れる恐れはないし、アレはそちらの技術を理解し、

再現する脳もないからな。それと私としては別にあの『眼』のほうでも構わない。アレはどちらのサイドにも属していない。まあそちらにとっては危険な存在かもしれないがな」

「・・・あなたがそうおっしゃるのでしたら、せいぜい使わさせていただきますしょう」

最後に一礼し、今度は本当にこの場からステイルは立ち去った。彼が消えた後、アレイスターは一人、虚空に目を向ける。

「——さて。ディーフブラッド吸血殺しが吸血鬼の存在を証明したと言うならば、果たしてあの幻想殺しと複写眼は一体何を証明してくれるのだか、ね」

第十八章 とある姫巫女とファーストフード？（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

前半で無駄に頑張ってしまった・・・

そしてここに来て、インデックスが当麻の名前を言うときは『とうま』という平仮名だと気づいて、修正しました。凡ミス凡ミス（汗）今回は姫神秋沙登場！！でも名前すら出す余裕無かった！！あと青髪ピアスの処遇が悪かったです・・・。

次こそ姫が・・・あれ？ステイルと上条が頑張る話です。

第十九章 とある姫巫女とファーストフード？（前書き）

続きです～

第十九章 とある姫巫女とファーストフード？

「――、食い倒れた」

“ 食い倒れる ” との少女の言葉に、上条一行はリアクションが取れなかった。確かに、ここはファーストフード店であるからして、ついつい食べ過ぎてしまうことならあるだろう。しかし食い倒れるほど食べる馬鹿がどこにいるというのか。いや、その馬鹿はいたのだ。上条達の前に。

テーブルの上に置かれたハンバーガーの山を見て、上条とライナはげっそりとした（インデックスだけは目をランランと輝かせ、そのハンバーガーを見つめていたが）。

その少女はその一言だけ呟き、再度黙ってしまったが、何か聞いてほしいようなオーラを放っていた。

仕方なく上条が口を開く。

「・・・えーと、食い倒れたって何ぞましょ？」

「・・・この店のハンバーガーのクーポンがたくさん手に入ったから、もったいないから全部使ってしまったのだけれど、そのせいで帰りの電車賃が100円足りなくなってしまった。・・・だからやけ食い」

ホントの馬鹿だよこの子、と男二人は嘆き、それを聞いたインデックスは「ねーねー！じゃあ3個もらってもいい！？」と大喜びで少女に問いかけていた。

それに少女は顔をテーブルに伏せたまま器用に頷いてみせた。途端にインデックスの手は無造作にそのハンバーガーの山へと伸ばされ、素早い動きで取った1個にかぶりついた。

上条ははあ、と息をつき、少女の顔の横に自らの財布から取り

だした100円玉を置いた。

それを横目で見た少女は驚いて顔を上げた。黒いストレートの髪が一瞬ふわりと浮き上がり元に戻る。その少女はまさしく大和撫子を体現している子であった。

「・・・どうして100円をくれるの？」

「そりやお前、こいつが、インデックスお前が買ったハンバーガーを3個も食べようとしてるからさ」

インデックスを指さしながら上条は答えた。そう、上条さんは不幸ではあるが、れっきとした常識人なのだ。むやみやたらと寝ようとなんてしないし（ライナをちらっと見て）、暴飲暴食・噛み付き攻撃（インデックスをちらっと見て）なんてのももちろんしない。インデックスがハンバーガーを目の前の少女から貰うなら、それに見合った対価ぐらいは払わなければならないという常識はきちんと持ち合わせているのだ。

だが、少女は尊敬の眼差しを上条に向けた。

「・・・あなた、いい人」

たかが100円ぐらいで何を大げさなと言いたいが、まあ悪い気はしない上条である。

「私の名前は姫神秋沙。ひめがみ あいさあなたは？」

すると、そんな彼女から名前を聞かれた。当然三人はそれぞれに名乗る。

「俺の名前は上条当麻だ」

「私はインデックス。正式名称はIndex-Library」

- Prohibitorum。こちらの言葉では“禁書目録”って意味かな」

続いてライナが名前を言う前に、姫神から質問が出た。

「それ偽名？」

「む。偽名なんかじゃないんだよ！むしろ、あいさはなんでそんな巫女さんの格好してるのか、教えてほしいかも！ちなみに、私はイギリス清教、『必要悪の教会』^{ネセサリウス}所属のシスターだからこんな修道服を着てるの！」

「イギリス清教？ネセサリウス？・・・それが何なのかは知らないけれど、修道服って・・・その針ネズミが？」

「むかつ！針ネズミなんかじゃないんだよ！！これは一時の補強であつて、本来はきちんとした一分の隙もない神聖な修道服なんだから」

「そう。なら私は魔法使いだから」

ぽつかーんとインデックスは口を開けた。あろうことが魔術サイドで大きな力を持った自分の目の前で、まさかの“魔法使い”発言をする者などいなかったからである。すぐさまムツとして反論する。

「魔法使い！？この科学とかいうのが発展した学園都市で魔法使いなんて職業あつたんだ！！てつきり三十路を過ぎた二ートでオタクなおじさんが言うもんだとばかり思ってたかも！へー、ふーん」

「私はそんなのとは違うけれど、あなたは同じ職業じゃないの？」

「シスターはそんな存在じゃない——————ッッ！！！！！！

！」

ぺらぺらと自分の素性を話すインデックスと、意外と鋭いツツコミをする冷静な姫神には、上条もライナも頭を抱えた。それにイン

デックスは、やはりオタクだのニートだのぐらいいは知っていたらしい。侮る無かれ魔導図書館といったところか。

まだ自己紹介さえしていないライナは、インデックスの絶叫を好機と見て会話に滑り込んだ。

「落ち着けよインデックス。あゝ、女神。俺の名前はライナリ
ユート。趣味は昼寝だからよろしく」

「あなたも、妙な服装をしてる。いわゆる魔法使い？」

「会話の流れから言えば違う！だが、大まかにこっちの事情から言えばその通りだ！！」

魔法が使えるのは変わりはないし、あながち魔法使いではないとは言ひ切れないライナであつた。

「確かに雰囲気は違うかもしれない。でも本当に趣味が昼寝だとしたら、私の言葉は将来的に事実を指しているのでは？」

「反論できねええええええええ！？」

よく考えればその通りだったことに、ライナは軽くシヨックを受けた。

そうか、俺の将来はこのままいけば“魔法使い”なのか・・・、と悲観するライナをよそに、姫神は会話を切り上げて帰ることに決め、席を立て出ていこうとしたのだが、誰かに手を引つ張られたせいで足を止めた。そちらを見れば、彼女の手を掴んでいたのは上条であつた。

軽く目を見張り、姫神は上条のほうに向いた。

「
・
・
・
なに？」

「いや、なんかお前がさ、寂しそうに見えたもんだからつい……」

特に上条にその行動をした理由はなかった。ただ、そう、帰ろうとした姫神がなぜか寂しげに、憂いを帯びていたような気がしたから、思わず手を取ってしまっていたのだ。

こちらを向いた彼女の顔は無表情であったが、その中に少し嬉しげな感情が読みとれたのは上条だけではない。ライナもまた、振り向いた彼女が少なくとも嫌な気分ではなさそうなのを確実に感じ取った。何しろ、上条とは違い、ライナの相棒はマジで無表情だったから。無表情以外の顔なんてほとんど見たことがなかったぐらいである。そんな相棒の喜怒哀楽を見分けつつあったライナだから、姫神の感情を読みとるのは容易かった。

「じゃあ当麻。これからどっかに遊びにいくか？ 姫神も連れてさ！」

「そうしようよ！ 秋沙と一緒になのは微妙なとこだけど、遊びに行くのは賛成かも！」

「ナイスな提案だな！ よし、今回は俺のおごりだ！ もっともライナとインデックスにはいつもおごってばかりだけだな！」

「え？・・・いいの？」

「なんだ行きたくないのか？」

「そういうわけじゃないけど・・・」

「じゃあ何が問題なんだ？」

「私の能力が・・・『デュープブラッド吸血殺し』のチカラがあなた達に迷惑をかけるかもしれない・・・」

「『吸血殺し』？ 詳しくは知らないけどそんなこと気にするなつて。迷惑だと思っただけで誘うわけないだろ！？ なあ、ライナにインデックス？」

「「そつだよ（ぞ）！！」」

その言葉に、姫神は少しだけ頭を下げて何かに耐えるようにして

いた。

何を思っているのかは当人しか知らない。だが、葛藤が、苦悩が、期待が、好奇心が、心の中に渦巻いているのは間違いない。

最後のもう一押しが必要だなと上条は感じた。

「くよくよしてたって、物語は始まらねえぜ？いつかは踏み出す一歩が、今この瞬間に訪れただけのことだ。どんな信念を持って、どう決断し、どんな物語を作り上げるのかは姫神、お前の自由だけど、お前次第で決まることもある。時には横道に逸れてバカみたいにはしゃぐ余裕だって必要だろ？なあ、後悔しない方を選んでみるよ」

その言葉に何を思ったか。これもまた当人しか知る由もないが、確実に分かることが一つだけある。

顔を上げた姫神は晴れ晴れとした笑みを浮かべていた。

「じゃあ、よろしくお願いしようかな」

目元には何か光るものがあつたがそれはスルー。

「まったく、最初からそう言えればいいんだよ。だけどまあ最後に言っておくと、俺らは姫神とは今この場所で初めて出逢った仲だけど、それでも俺達は・・・」

3人は姫神に声を揃えて言った。

「・・・もう友達だろ（よね）？」「・・・」

「あ、ありがとう」

姫神の声は消えそうなほど小さかったが、端から見ても彼女は嬉

しそっだった。

と、ここでライナが急に声を上げた。

「さて、そうと決まったら早速行こうぜ！外は暑いからできれば涼しいところを希望するけど、どこかにあるか当麻？」

「そっだねー、この店の前のショッピングモールなら何でも揃ってると思うし、確かゲームセンターも最近導入したって話だからそこに行ってみるか？」

「『賛成』！！！！」

「じゃあ俺はこのハンバーガーを店員さんに袋を貰って持つていくから、お前らは先に行っててくれ」

なぜかライナがそう言ったら、上条とインデックスが驚いたようにライナを見た。顔を青ざめさせ、わなわなと口に手をやり戦おののいている二人。

「ん？どうした？」

ライナが聞くと二人ともおそろるおそろる言い返してきた。

「ライナこそどうしたの・・・！？いつもなら『面倒だ』とか何とか言って、そんなことしないのに！！」

「そっだそっだ！なんだ？暑さにでもやられて頭にウジ虫でもわいたのか！？」

「いやいやお前ら、人のことを何だと思ってるんだよ・・・」

「昼寝王」

「めんどくせー男」

「ちよつと待て！確かにインデックスのほうはまだ自覚があるが、おい当麻！？その言い方だと性格がアレな男みたいじゃねえか！！『めんどくせー』のはただの口癖だ！！ってか、んなことはどうで

もいからほらさつさと先に行けって！」

「……わかった」

ライナは手も使って追い出すようにしてと席から姫神を含む三人を追い払い、出口へと向かわせた。出口を出るまでその姿を見届け、はあく息を吐く。

「で、さつきからそこに居るお前らは誰だ？」

混雑しているファーストフード店において、大の大人が3人もいれば普通は目立つ。しかも学園都市では大人の数は少ない。なれば必然的に大人が数人も集まっていれば周囲の目を引くはずなのに。

その男達は、全身をきつちりとした黒のスーツで覆いながら、誰にも意識されることなくそこにいた。ライナの座っている席の周りを囲むように。

数は10人程度。何をするというわけでもなさそうだが、サンダラスの奥にある瞳がライナをじつと見つめていた。

「おい？話さないのか？それとも“話せない”のか？」

一種の異様な状態。まずこれだけの人数の者が集まっているが、認識障害の魔術でも使っているのか、周囲の者は特に気にすることもなく食事を続けている。まるで目の前にいる男達が目に入っていないかのように。店を出ていった上条達も、その男達には気づいていないようだった。唯一、姫神は彼らのほうをちらっと見たような気もするが。

「さつきから姫神ばかりを見てたな。あの子を誘拐しに来たのか、それとも連れ戻しに来たのかどうかは知らないし、もしかしたら姫

神とお前らは面識があるのかもしれないけど、あいつの好きなようにさせてやれ」

そう、その男達の狙いは自分でも、上条でも、インデックスでもない。姫神だった。だからライナは気配を察知した後、殺気を飛ばして威嚇しつつ、上条達を先に行かせたのだ。

アルファ・ステイグマイマジンブレイカー 魔導図書館
(こいつら1人1人は対して強くなさそうだけど、店内で襲ってこられると少しまずいよなあ)

上条もインデックスも、もしこいつらと争いになってしまったら、戦力不足どころか足手まといになる危険性があつた。なら姫神を連れて先に行かせたほうがまだ安全だというものだ。

(それにしても話す意志は無し・・・か。誰かに操られていると見るべきだよな)

「そのことを帰って主にでも伝えておけよ。姫神が戻りたいと思うのならちゃんと送り届けてやるから。まあそれがどこになるかは知らねえけどな」

ライナの言葉を聞いて、男達は一瞬だけ間をおいた後、店を出ていった。

それにまたはあゝ、と息を吐き、店員さんから袋を貰ってハンバーガーをそれに詰めて、店を出た。

(めんどくせー・・・、とにかく、インデックスと当麻の言うとおりだな。俺がこんなことを進んでやりたいと思うわけないじゃん)

損な役回りだと思うし、帰って寝たいところだが、残念ながらも

だやることはある。
とりあえず。

「奴らの後をつけるか」

隠密行動にかけて、ライナはプロである。自らの気配を消す術はしつかりと叩き込まれてある。あんな黒スーツでサングラスな集団には勘付かれるはずもない。

（上条達と合流するのは遅くなりそうだなあ〜）

ハンバーガーも思いの外、行動の邪魔だ。

さつさと男達の主もしくはアジトだけでも確認して戻ること決め、消えつつある気配を追い始めた。

第十九章 とある姫巫女とファーストフード？（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

メリークリスマス・・・は少し過ぎましたが投稿しておきます。

文章の書き方〓不安定・・・（泣）

シリアスな部分が薄いし軽いことに筆者自身失望しつつ、また笑いのセンスの低さも筆者自身嘆いているところでございますが、何卒温かな目で見守っていただきたく思います・・・。

つらつらと文章を書いておりましたら、今回はなぜか最後にこんな展開に。

先に言っておきますが、ライナは三沢塾には（尾行時には）乗り込みませんのであしからず！。

第二十章 とある集団と追跡先 (前書き)

短めです

第二十章 とある集団と追跡先

追う者と追われる者。

この場合、追う者はライナで、追われるものは黒服の男達である。尾行において、いかに気づかれなくするかということについては、幾つかの方法がある。

こちらが集団だと意外と簡単だ。相手に不審に思われたら、途中で違う者と後退すればいいし、車やバイクなどの移動手段があれば、なお気づかれにくい。人そのものが変わるのだから。たとえば下手な尾行でも、途中で別人と交替すればほとんど大丈夫だと言ってよいだろう。

問題なのは一人で尾行する場合だ。

1回でも、自分の存在に気づかれでもすればそこで撒かれるか、反撃されるか――。どちらにせよ終わりであるからだ。罠を張られる危険性も高まる。

だから、自分一人しかない場合、頼るべきものは自らの技術と経験のみだ。いかにして気配を絶ち周りにとけ込めるか、どのような人物を装うべきか、相手との距離はどの程度がベストなのか、相手の力量はどうか、などである。

今、ライナが追っている男達。

技術はやはりあまり高くないようだ。認識障害の魔術が掛かつているような気がするが、感じることはできない。つまりは複写眼アルファ・ステイグマで読み取れないもの――例えば超能力のような――か、もしくは眼に見えないところで発動しているものなのかもしれない。

しかし、彼らの動きに乱れは無かった。あの人数で動こうとすれ

は必ずどこかに綻びが出そうもののなのに。まるで、同じ動きをすることを要求されているような、命令されているような兵士の雰囲気だった。

車も使わず走り続け、彼らは一つのビルに到着した。

（ふん、さっきの店から30分程度つてどこか）

入り口の自動ドアを抜け、そのまま何食わぬ顔で入っていった。さすがにライナはその後をつけて行かなかった。それよりも気になったことがあったからだ。

——強烈な違和感。どこがおかしいのかわからないが、本能に何かが訴えかけている。普通に出たり入ったりしている“生徒”はいるのだけれど何かおかしい。

「なんだ？この建物・・・」

思わず複写眼アルファ・ステイグマを発動させ、その違和感を探る。眼に赤い五方星が浮き上がり、その異質な建物を視た。

とたん、ぐつと眼に強烈なプレッシャーを感じた。

「おいおい、マジでふざけんなよ・・・有りか？こんなの・・・」

さすがのライナも呆然とした。

ビル全体を覆うようにして発動されている——“魔術”。魔術の発動については普通のことだ。ここが学園都市ならばおかしい現象だと言えるが、それは先日スタイルとかとやり合ったことを含めても、まああり得る話である。

だが、目の前にあるのは・・・度合いが半端じゃない。

全くの別物、別次元のものだった。

イノケンティウス

ステイルの得意な魔術である『魔女狩りの王』も、確かに厄介で強いが、ライナからすれば面倒な相手であるというだけだったのに、どこの誰かは知らないが、デタラメに強力で、ある意味最強な魔術を発動しているようだ。規模が大きすぎる。おそらく、今のこの建物にはどんな攻撃も通用しないに違いない。

同じ魔術が使えるならば対抗できる余地はあるのかもしれないが。

アルファ・ステイグマ

「複写眼でも全部は読み取り切れねえよ」

インデックスの首輪も“理解”はできた。

（でも、目の前のこれは・・・）

明らかにやばい。細かい所々の術式は解析できるが、どうにかできるもんじやない。少なくとも自分一人では。

これに姫神秋沙ひめがみあいさが関わってくるとなると・・・。

（あゝ、少々どころか、だいぶめんどくせーことになりそうだ）

「あの黒服ども、ぜってえ親玉に言いつけるだろうしなあゝ」

早急に、対策を練る必要があった。

一方その頃。
何事も無く、ファーストフード店の対面にあるショッピングモ

ルへと移動した上条一行はというと。

「ライナってば遅いね」

一しきり店内を回った後、カフェで休憩していた。

「そうだな。まあ、あいつのことだ。店に残ったままテーブルで寝てるのかもしれないぞ」

「うう、否定できない・・・」

姫神ともども、失礼なことを言っていたが、と、そこで姫神が不安そうに口を開いた。

「もしかしたら危険な目に遭ってるんじゃない・・・」

「それはない」

やっぱり失礼だった。二人の即答に姫神も目をぱちくりさせた。

「何でそんなに自信があるの？」

「1つは、あいつの実力は本物だってことだ。そこいらの超能力者に引けはどらないと思うぜ？」

「うん。私もそう思う。見た目は眠そうだけど、ライナはやる時はやる男なんだよ」

「まあ何か起こったら警備員も出動してるだろうし、大丈夫だろ」
アンチスキル

そう・・・、と姫神は納得した様子を見せた。でも顔色は悪いのは変わらない。

（上条君やこの子からは信頼されてるようだなライナさんは。あの人”に遭ってないといいけど・・・）

それより、とインデックスが口を開いた。

「とうまは男に対しては意外とあっさりしてるかも」

「はあ！？んなことねーだろっ！！」

「だって、もしこれが私や秋沙だったら、絶対に様子見に行くよね！？」

「ぐ……」

「ほらあゝ。反論できてないよ？」

「そんなことはないぞ！ライナは実力があるから自分のことは自分でできると思っただけであって、わたくし上条さんは決して見捨てたりしてないですよ？」

「ふゝん、じゃあもし私達の部屋の隣に住んでる、舞夏の兄は？」

「土御門の奴か……ふつ、余裕で見捨てます」

「それは私も予想してない答えだったかも！！酷いよとうま！」

「気にすんなよ。あいつも自分でどうにかする奴だからさ」

「じゃあ舞夏だったら？」

「えっ？余裕で助けに行くけど？」

「何でそんな、さも当たり前のように言っの！？この落差は何！？」

「なんかそうやって言われると、確かに差別してるよな俺って……」

「とうまが開き直った！？」

このやりとりの間、姫神は途中で訝しげな表情をした瞬間があった。

一応、会話の途切れたのを狙って二人に聞いた。

「ちょっと気になることが聞こえたのだけれど、二人って一緒に住んでいるの？」

「え！？」

「なあ！？」

「その反応は当たりのようだね。ふふ、若いうちからお熱いんだな」

普通はここで上条に怪訝な目を向けるはずが、姫神は素直に笑っただけだった。世間に疎いところがあるのかもしれない。

「違うから！いや、確かに一緒には住んでるけどライナも一緒だから！」

「そうなんだよ！行くところがないからお邪魔させてもらってるだけなんだよ！」

「つまり、同棲？」

「「あつさり言われた！？」」

「でもコトには及んでないと」

「「その通り！」」

・・・世間に疎いという考えは改めなければいけないかもしれない。立派に現代人だった。

と、そこへ。

「よゝ、何を楽しく騒いでんの？」

やっとライナがやって来た。上条とインデックスを見て何やら呆れている。

「「いや、ちょっと・・・」」

さつきから、上条とインデックスのシンクロ率が半端じゃない。

自分の“熱愛”発言もあながち間違っていないのではないかと、姫神が考えるほどだった。

「あ、お姉さん、コーヒーマーティー」

勝手に頼んで四人席の空いている席に座るライナ。疲れているように、椅子に座った途端上半身をぐでぐでとテーブルに投げ出した。

「どうしたの？ハンバーガーが重かった？」

「んなわけねえだろ！？どんな非力だよ！」

「じゃあ何があったんだ？」

いや、とライナは頭を掻きながら、言うべきかどうか迷い、姫神に目を向けた。

そうすると、姫神は心当たりでもあったのか静かに首を横に振った。どうやら何も言っただけらしい。

それを見てライナは溜め息を吐きながら二人に言った。

「いろいろあったんだよ。まあ、たいしたことじゃないさ」

二人は納得できないようだったが、ライナがこれ以上何も言いそうにないので諦め、これからの行動について話し合いを始めた。

ライナは二人に感づかれないように姫神の耳へと、顔を寄せた。

（おい！何で言っちゃいけないんだよ！）

（それよりもまず、あなたは何を知ったの？）

（お前らが店を出るときに近寄ってきていた黒服の男達がいたんだろ？明らかに怪しかったから、立ち去った後にそいつらを追跡したんだよ。）

(それで?)

(1つのビルへと辿り着いて、そいつらはそこに入っていった。
名前は確か・・・『三沢塾』^{みさわじゅく}だったな)

(ッ!?入ったの!?)

(いや、それも考えたんだけど、何か違和感があつたからやめて
おいた。一般人も出入りしてたけど、どこかおかしかったからなあ
)

ライナもどこまで正直に話していいのかわからない。姫神は明らかに学園都市の人間だった。ならば魔術サイドの話を簡単に話すわけにはいかないだろうし、巻き込むわけにもいかない。

(それでいい・・・関わる必要は無い)

(お前はその関係者か?何を知ってたよ)

(話すことはできない。あなたを巻き込むことになる)

(黒服どもにいちやもんつけておいたから、もう無理かもな)

向こうから介入してくる気かもしないぜ?)

(!?それを分かっていながらどうして?)

(上条ほどじゃないけど、困ってる奴を助けられないのも寝覚めが悪い。特に俺ってば昼寝が大好きなわけじゃん?)

(そう・・・)

姫神は若干引いているようだ。

(それに、だ。もしかしたら俺らなら解決できるかもしれないぞ?
俺も当麻もインデックスも、それぞれ特殊な秘密を持ってるから
な)

にやっとライナは笑う。愉快に、^{のどか}長閑に、楽しそうに。

（死ぬかもしれない。それでも聞きたい？）

（死なねえさ。誰も。ここにいる奴らは全員生きてまた遊ぶ。んで、寝るし！）

（ふふっ、あなたはおもしろい人でもあるようだな。わかった。

そこまで言うなら私の知っている全てを話す）

（上等だ）

ライナと姫神は知らず知らずのうちに巻き込まれた二人を見やる。まだ夫婦漫才を続けているようだが、そろそろ現実に目を向けてもらおうしよう。

あの建物に掛けられていた魔術。

姫神の言葉。

そしてインデックスの知識。

それだけあれば、現状を、いや幻想を打破することも可能だろう。

こちらには幻想殺しイマジンブレイカーさえあるのだから。

寒気がするほどの強敵も、一人しかいないならば、集団で反撃すればいい。

こちらは遥かに有利で遥かに磐石。

それはあの黒服どもの比ではない。

知識があり、チカラがあり、そして“意志”もあるのだから。

『三沢塾』。

そこがどんな場所かは姫神が教えてくれるだろう。

危険には違いない。

だけど、そこで立ち止まりなどはしない。諦めはしない。もの凄くめんどくせえだろうけど。

（どうにかするしかないってな）

ライナの口から苦笑が漏れた。

「さあ、じゃあ教えてくれよ姫神。お前が知ってることを」

上条とインデックスがいきなりの言葉にぽかんと呆けているが、無視してライナは姫神を見た。

第二十章 とある集団と追跡先（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。見つけました場合はぜひ、ご指摘いただけますようお願い申し上げます。】

いかがでしたでしょうか。

ぜんぜん進みませんが、どうぞご了承ください・・・（泣）

そしてあけましておめでとございます！

本年もどうぞよろしく願います！！

第二十一章 とある知識と三沢塾（前書き）

お久しぶりです。

更新が遅くなってしまう申し訳ありません。

今回は少くしシリアスな感じです。

第二十一章 とある知識と三沢塾

「……まず最初に言っておくことがある」

姫神は話を切り出す前に、目の前にいる三人、インデックス、上条、ライナに向けてそう言った。

「私は『三沢塾』に捕らわれていたわけではない。“今”はあくまで私の意志でそこにいる」

つまり、誘拐や監禁の類では無いということなのだろう。『三沢塾』が如何なる物かは知らないが、こうして一応の自由は姫神には与えられているようなのは明らかで、ライナを含めた三人も理解できた。“今”を強調するように言ったのは気に掛かるところだが。

「じゃあその『三沢塾』ってのはどんな所なんだ？」

と、上条は聞く。

塾——と言うからには、当然のごとくこの街の生徒も通っていることになる。しかし、あの建物に仕掛けられていたのは魔術……。二つの繋がりがわからない。

「……『三沢塾』は、“元”はこの国ではシェア一位の進学塾だったらしい。学習方法を盗む為に、学園都市第十七学区に支店を置いていたみたい」

そこまでは、どこにでもあるような話だ。だが、三沢塾はどん

んおかしくなつていったらしい。

置かれた支店は、半端に能力開発を知ったせいで「これを知る自分達は選ばれた」と思い込み、カルト宗教もどきと化し、その『教義』に従い建物内に多数存在している隠し部屋に、姫神を拉致監禁したそうだ。

ただ単に、姫神が珍しい能力を持っていたから欲しただけかもしれない。はたまた、『巫女』としての役割を持たせていただけない。

しかし、その姫神——おそらく吸血殺^{ディーブラッド}しのチカラ——を狙つて、一人の魔術師が三沢塾を破壊せずそのまま乗っ取ってしまった為、事態がややこしくなったようだ。

その魔術師の名前は——

「アウレオルス・イザード」

「……誰？」

「ッ!？」

この名前にライナと上条は首を捻つた。当たり前のことだが、二人は魔術サイドには詳しくないからだ。そんな中、インデックスだけがその名前に反応した。

「その名前は……」

「何だ？インデックス、知ってるのか？」

「う、うん。パラケルススの末裔たる、チューリッヒ学派の錬金術師なんだよ。元ローマ正教の『隠秘記録官』で、隠秘記録官中最速筆で知られていたらしくって、彼は不眠不休で取り掛かれれば薄い物なら3日、分厚くても一ヶ月で書き上げられたみたい」

やたらと詳しいのはインデックスならではの言ったところか。

「それも知識として知ってたのか？」

上条が少し驚いたように聞いた。

「・・・そうだけど？」

「ホントすげーなお前は。何でも知ってるな」

「何でもは知らないかも。魔術のことだけ」

「あー確かに前、科学はさっぱりだもんな」

「・・・ちなみに彼の容姿は、緑色に染めた髪をオールバックにしている長身の男」

「緑色か。それって趣味なのかな」

さすがにライナの世界にも緑色の髪をしている奴はいなかったと思う。赤髪のバカならシオンの側にいるのを見かけたことはあるが。

「それにしても錬金術師って何だ？黄金を生み出したりする人のことか？」

「大まかには間違っていないけど、錬金術は完成されたものじゃないんだよ。・・・特に後期のチューリッヒ学派の錬金術っていうのは、ヘルメス学っていう学問の亜流なの。錬金術師の本質は『創る』ことではなくてその過程を『知る』こと。魔術バラケルス医師の末裔とされる彼は、『人が、人としての姿と尊厳を保ったまま』どこまで昇り詰めることができるかを、人生の目的としていたって聞いたことがある」

「じゃあ今回はどうして、こんな科学の街に足を突っ込んできたんだ？」

「それは――」

「・・・少しならその理由を聞いた。私から説明する。」

と、姫神は本人から直接聞いたのであろう、その理由とやらを上

条達に話した。さらには姫神が持つ吸血殺しのチカラと、自身の血塗られた過去も。

姫神の話を聞いた三人は三者三様、苦渋の表情を浮かべた。

ライナは、姫神の過去が自身の昔と重なり。

インデックスは吸血鬼が存在する証明が目の前にいることに驚き。

上条はアウレオルス^{ディーフブラッド}「イザード」の、吸血殺しのチカラを求めた彼の気持ちに共感できた。

「一人の少女を救うために―――か」

「あんな魔術を使つて、しかもこの街を敵に回す可能性もあるのに、なあゝ……」

「吸血鬼なんて存在を呼び寄せて、もしかしたら人をやめることも厭わないのかもしれないね」

はあ……。と上条、ライナ、インデックスは息を吐いた。

そして、錬金術師の側にいるこの少女も。

彼女は彼女なりの苦悩があつて、魔術師（詳しく言えば錬金術師だが）に救いを求めたのだらう。

「じゃあ姫神、アウレオルスが救いたい奴の名前とか、そいつが使う魔術とかって何か知らないのか？」

自分たちでも協力できることがあるかもしれないし、このまま敵対しても大丈夫なように、相手の魔術はある程度知っておいたほうがいい。

だが、姫神は残念そうに首を横に振った。

「ごめん。私はそれ以上のことは知らない」

そうか、と上条達も頷き、会話が止まる。

姫神を含めた4人とも、この時点ではその錬金術師が基本的に悪い人ではないと考えていた。ローマ正教を抜け出して敵に回してまで、地位を捨ててまで・・・彼にはしなければならぬ事があったのだから。それが一人の少女を助けることならば——彼にはまだ情状酌量の余地はある気がする。

ならば、話を聞きに行くべきだろう。そうして一緒に問題を解決すれば、この件は丸く収まるはずだ。

しかし、問題が残る。

「あの魔術はやばい」

それは“視”てきたライナの発言だ。ライナの複写眼に写った魔術は半端なものではなかった。元の世界で言えば、一国の城に仕掛けられている防御魔方阵と同規模であった。三沢塾の場合、4つのビルそれぞれに強力な魔術がかかっており、たとえこちらの世界の核ミサイルとやらでも破壊できそうにないほどのもの。

インデックスにそのことを話してみると、彼女は口をぽかんと開けた。

「ま、さか。——金色のアルス＝マグナ？」

「は！？何それ？」

「錬金術師のことはさっきも説明したけど、彼らには究極の目的が存在する」

それはね、とインデックスは一呼吸を空けて、

「——世界の全てをシミュレートすること。」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

世界の法則を全て理解すれば、頭の中でそれを完全にシミュレートすることができる。逆に、莫大な『法則』の1つでも間違っていれば、それだけで頭の中の世界は歪になる。

インデックスが言った黄金錬成とは、その頭の中に描いた世界を表の世界へと引っ張り出す魔術だそう。自らの理想の世界を創り出す魔術、アルス・マグナ黄金錬成。完成していたら、おそらく手も足も出ないだろう。

「でも、そんな簡単にできることじゃないんだよ」
「まあ、そうだろうな」

上条が相槌をうった。何せ、世界を自分のいいように変えられる魔術だ。学園都市だろうと、他のどんな宗教であろうと潰すことは簡単なのだから。

「理論は、呪文自体は完成してる。でも時間が掛かりすぎるのが問題なんだよね」

「ざっと、どれぐらい？」

「・・・1000年は軽く必要だと思う」

だからこそ普通なら完成するはずがないんだけどね、とインデックスは困ったような笑みを浮かべた。

「・・・勝てる見込みゼロだよな」

「うん、まず間違いないんだよ」

「ライナ、お前が視たのは本当に黄金錬成アルス・マグナだったのか？」

「たぶんそうだと思うぞ。確信は持てねえけど、あり得る話なんだよな」

「ちなみに、視たってことはその魔術“使える”ようになったのか？」

「・・・視たから理論上では可能そうだけど、俺が使ったらすぐに精神異常を起こしそうだ」

「精神異常？」

「だって考えてもみろよ。自分の頭の中で世界を構成するんだぜ？使うときには全ての法則を意識しながらやらないといけねえし、頭が持つわけがねえよ」

「まったく、反則だとライナは毒づいた。

おそらく相手はよほどの精神力の持ち主に違いない。もしくは精神を保つ魔術でも使ってるのか。何にせよ、あのビルにだけは入るべきではない。

「・・・だとしたら疑問がある」

「ここまで、頷くぐらいですつと沈黙を保っていた姫神が言った。

「そんな凄い魔術を使えるならどうして——彼は少女を救わない？」

「「「あつ！」「」」

そう、確かに姫神の言うとおりだ。アルス・マグナ黄金鍊成は、話に聞いたとおりだと、神にも等しい力を持っていることになる。

「それに吸血鬼を呼び寄せる必要もない」
「そうだよな」

当然、存在すら疑われている吸血鬼を呼び寄せるまでもない。姫神の能力を欲する必要もない。ならば何故なのか。

あるいはそれこそ彼の完璧な魔術の欠点なのだろうか。
何でもできて不可能はないはずなのに。

「付け込む隙はそこかな」

「まあ、まだ敵対してるわけじゃねーけどな」

「じゃあ、これからどうするの？」

「・・・私があの人所に戻らないと何が起こるかわからない」

学園都市に住む何も知らない一般人にも被害が及ぶかもしれない、と姫神は暗い顔をしていた。

「でも、このまま行かせるのも危険だしな」

「ああ。何かあつたら一瞬で殺されるぜ？姫神」

「そーだよ危ないよ！」

「・・・でも！私は自分のせいで他人が傷つくところを見たくない。まだ私には利用価値がまだある。三沢塾に戻って、さっき私たちが話してたことを彼に聞いてみる必要がある・・・」

「そりゃこのまま話しても真相はわからないけどさ」

「むしろ謎は深まるばかりだよな」

「じゃあ秋沙、私たちも付いていくかも！！1人だと心配だもん！」

「え、でも部外者のあなたたちが手を出すとまずいんじゃない？」

「気にするなよそんなこと。どーせライナが怪しげな男達を追い返した時点で、向こうは俺らに良い感情なんて持ってねーだろ」

「素直に謝りに言ったら許してくれると思うか？あゝ、何でも知ってるインデックスさん？」

ライナは基本、腰の低い男なのだ（むしろ彼の場合は毎日のように寝てるから、腰どころか全身低い男なのかもしれないが）。

「何でもは知らないって言ってるんだよ！！相手のこともよく知らないからわからないけど、もしそこにいたのがライナやとうまだったりしたら許してくれるんじゃない？」

「・・・否定できねえ」

女の子には基本弱い男二人組である。ライナも上条も「むむ、女難の相が出ておるぞ・・・」とか占いの婆に言われるに違いなかった。その後どうせ「その子らは力を持つておるが故に、お主達では太刀打ちできんじやろう、ほっほっほ」とか馬鹿笑い付きに決まっている。上条はインデックスや美琴に対し、ライナはフェリス対して弱い。彼女たちは、女の子にしてはいささか暴力的と言わざるを得ない存在だ。“いささか”で済めばラッキーなほうである。

「何か今、私に対して失礼なことを考えてなかった？とうま、ライナ？」

「「ないです！滅相もございませんインデックス様！！」」

全力で首を横に振った男どもである。しかし、インデックスに聞こえないようにぼそつと「事実しか考えてねーけどな・・・」と呟いたのはせめてもの反抗だ。

4人はそこで会話を切り上げた。

男達を追い返してから、だいぶ時間が経っている。

今まで何も襲ってこなかったのは僥倖としか言えない。

が、明らかにアウレオルス・イザードと直接会って、話をする必要があった。

ビルには入らないようにして、しかも本人と出逢うためには。

「手紙でも渡して呼び出すか？生徒は普通に出入りしてたから、途中で誰か教師にでも渡してもらえば、アウレオルスに行き着くんじゃね？」

「まあ、携帯で電話―なんて番号知らないから無理だしな」

「学園都市で手紙のやりとり・・・、とても原始的な感じ」

「仕方ないかも！でも気を付けないとね！」

ローマ正教を抜けた彼に、追っ手がかかってもいるはずだし、“学園都市”の『三沢塾』を乗っ取った今、統括理事長が何も対策を講じないわけがない。

事態は動いているはずだ。

ライナは密かにため息をついた。
今日も寝るのが遅くなりそうだ・・・と。

第二十一章 とある知識と三沢塾（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひひご指摘いただけますようお願い申し上げます。

短いような気もしますが、次からはいよいよアウレオルス^{II}イザードと出逢います。

はたして彼が取る行動とは！？

原作のようなえげつない攻撃をしてくるのか――
それとも・・・？

第二十二章 とある計画と前哨戦

「黄金鍊成か^{アルス・マグナ}。んなもん持ってたら、毎日寝てばかりでも暮らしていけるよな。・・・むしろ全員で昼寝することも夢じゃねえ！！」

緊張感に欠け、さらに人としてもどこか欠けているのかもしれない、ライナの発言である。ただ寝たいんだよ、と周囲から呆れた目を向けられそうだが、本人は至って気にしない性格なのであるからして問題はない。

「平和にはなりそうだけどよ、なんか人として終わりそうだよなそれって・・・」

上条からの指摘に、ライナはふふんと鼻で笑って見せた。

「甘いな、当麻！寝ることの素晴らしさを、身を以て理解してないからそんな呑気なことが言えるんだよ。失って初めて気づく大切なものの一つとして、君臨してる存在だぞ！？つかお前だって、なんか願いがらいあるんじゃないのか？」

「あるにはあるな。例えば不幸体質を治したいだとか・・・」

「切実だなそれ・・・」

こうして歩いているだけでも、頭に鳥のフンが降ってきたり、足の裏に誰かが捨てたガムが引っ付いたり、日常茶飯事に不幸が訪れている上条を、ライナは心の底から哀れに思えた。

今は、三沢塾へと計画を遂行しに行っている途中である。
前を上条とライナが歩き、後ろをインデックスと姫神が連れ立つ

て歩いていた。

「お前はどんなんだ？インデックス？」

ライナが後ろを振り返って銀髪シスターに、上条にした質問を尋ねる。

「わたし？わたしの場合は・・・とうまやライナとできるだけ長い間、一緒にいられることかな？」

感動する台詞である。インデックスの口から、まさかそんな答えが返ってくると思わなかった男二人は驚いた。

「うえ！？マジでもの凄くまともな答えなんだけど！？」

と、ライナが叫べば、

「俺はてつきり『お腹一杯ご飯が食べたいかも、それも毎日！できれば焼き肉がいいな』って言うかと思ってたぜ・・・」

上条も意外そうな顔をインデックスに向けた。

「乙女に対して失礼なんだよ、とうまっ！！それと、何気に今のわたしの物真似が似ていた事に驚きかも！！」

「確かに今のは似てたよな。姫神もそう思うだろ？」

「・・・否定はしない」

とか言いつつも、まるで笑いを堪えているかのように顔の筋肉をぶるぶる言わせているので、どうやらツボにはまったらしい。まあ、爆笑する姫神を想像することは難しいが。

「で、姫神は？」
「……私は『吸血殺し』^{ディーブブラッド}のチカラを、失うか封じ込めるかしてほしい」

痛々しげな表情を浮かべて、姫神はそう呟いた。

「でも、もし本当にそれができるなら、彼はこの街にとって脅威の存在になるかもしれない」

能力者の個人それぞれが持つチカラを、失わせる——。そう
なると、この街に彼の敵はいなくなってしまう。超電磁砲^{レベルガン}による一
撃を放つ以前の問題だ。超能力者^{レベル5}だった能力者が、一転して無能力^{レベル0}
者になるのだから。

『黄金鍊成』^{アルス・マグナ}はそれを可能にする魔術である。学園都市を一瞬で
機能停止に追いやることさえできるのではなからうか。

「——どこにいるかと思って探していたら、案外近くにいる
驚いたよ。上条当麻、それにライナ・リユート」

沈黙が舞い降りていた場に、割り込んできた男の声。
声をした方に振り向けば、赤髪刺青神父が煙草を吹かしながら立
っていた。何でお前がこんなところに？という疑問もそこそこに、
インデックスはその男——ステイル・マグナスに向かって手を振
って挨拶をした。

途端に、それまで無然としていた表情が崩れるのが見て取れたのを、腹立たしく感じる面々（主に上条とライナである）。

と、インデックスに笑みを向けていたステイルはライナ達と一緒にいた姫神に目を向け、驚いたように目を見開いた。

「まさか、既に救出済みとはね。行動が早いのは良いことだ」

その言葉に上条が反応する。

「救出ってことは、この姫神のことか？三沢塾に捕らえられていた？」

「そうだとも。いやあ、せいぜい罔ぐらいいはできるんじゃないかと思つて君達と一緒に連れて行こうと考えていたけど、これは少し意外だったよ」

「罔つてお前な・・・」

「まあ話はその子から聞いているんだろう？三沢塾の変貌と、アウレオルス・イザードという錬金術師について」

「ああ、聞いたことには聞いたけど、それよりもなんでステイルがここに？」

「僕かい？僕の場合は学園都市側から依頼・・・というか要請されてね。相手が魔術師だから、その相手は魔術師がしないといけないのは君にもわかるはずだけど？」

「魔術サイドの情報が、科学サイドに漏れるのがまずいからだろう？」

「ご名答。さすがに学習していたようで何よりだ。で、僕の目的はさっきも言ったように、三沢塾に捕らえられている姫神秋沙の救出と、アウレオルス・イザードの抹殺さ」

「抹殺？」

「当たり前だろう？ここでバカな騒ぎを起こしているヤツを、このまま放置しておくわけにもいかないんだよ。せめて学園都市から

は退出してもらわないとね」

そういうことか、と上条達はステイルの言葉に納得した。で、話が一段落したところで、ライナが今から自分たちが行おうとしていることをステイルに話した。

「君たちはお人好しなのか？」というのが、その計画を聞き終えたステイルが漏らした言葉であつたのだが。

とりあえず放っておくわけにもいかないと、ステイルも同行することになり、三沢塾までの道のりを、学生、シスター、神父、巫女、冒険者といった、見た目にも個性豊かな面々が街を練り歩いたことで、道行く学生達はその集団を避けるようにして、尚かつできる限り目を合わせないように歩かなければならなかつたそうだった。

その目立ちに目立つ一同が、目的地に着いたのは夕方に差し掛かつたところである。三沢塾の正面にちょうど設置されていた木製のベンチに座り、ステイルを含める5人は目の前に聳え立つ三沢塾を見上げていた。

正面入り口からは、受講が終わつた生徒や、これから受けようと思つている生徒達が行き来しており、それは注視しなければ普通の塾と遜色ないものであつた。少なくとも、如何にも魔術といった雰囲気は醸し出されてはいない。

だが、ここには魔術のプロフェッショナル達がいた。インデックスを筆頭に、ステイルとライナ。そして三沢塾内に入つたことがある姫神がそうだった。残念ながら、残る一人である上条当麻には特殊な力などというものは右手以外にはないわけだ。

事態をまったく把握していない上条は、目の前の塾を所在なさげに見上げるしかすることがなく、彼の背中には哀愁が漂つていたとかいなかつたとか。

上条以外は、比較的真剣な目をして、議論を交わし合つていた。

「姫神と言ったね。アウレオルスは最上階にいて考えていいのかな？」

「たぶん。通路で出会うことはほとんどなかったし、彼がこの建物を出たところを、私は見たことがないから」

「だとすると、確実にこちらの侵入がばれてしまうようだ。厄介だな」

「だからさあステイル、お手紙作戦でいいじゃねえか。ここで無理矢理、事を荒立てて向こうが誤解するのもまずいし」

「うん、ライナが言うとおりかも。彼が本当にあの魔術を使えるなら、私たちに勝ち目はないしね」

「・・・私もそれがいいと思う。彼はむやみに人を襲うような人間ではない。少なくとも、私を丁寧に扱ってくれた」

「ふむ。まあ今のところそれしか手はないかな。僕の任務は一応、姫神秋沙の救出も含まれてるから、現時点で半分は達成したようなものだからね。ただ、できる限り、危険な行為は頼むから避けてくれよ」

・・・本当は先に姫神は安全な場所に連れて行っておきたいとステイルは考えているのだが、当人はアウレオルスとの交渉役としてこの場に残る気にいる。ここ最近でその錬金術師に面識があるのは自分だけだから、というのが彼女の言い分だ。

それをいうならば、ステイルこそ彼とは姫神よりも前にすでに会っているのだが、言う必要もないかとステイルは気楽に考え、沈黙を保つ。

そして危険な事が起きれば、ステイルはインデックスの身の安全だけを最優先にしようと誓っているのだから、彼女以外の誰かが窮地に陥ったとしても助ける義務はない。イマジンプレイカー
アルファ・ステイグマ幻想殺しと複写眼が揃っているのだから、まず彼らに頑張ってもらおうと思っている。

上条とライナが聞いたら、迷わず殴りにかかるであろう考えであった。

と、そんな会話を続けていた——上条は蚊帳の外だった——
のだが、

「——自然。部下の報告で表に怪しげな集団がいるということ
だったが。なるほど。吸血殺しディープブラッドを攫ったのは貴様らと言うわけか」

三沢塾の玄関。ライナ達からおよそ10メートルほどの距離をあ
けて、その男はいた。黒色のスーツに身を包む男達を後ろに控えさ
せ、鋭い視線でこちらを睨へいげいんでいる。どことなく偉そうに、こちら
を睥睨へいげいしているような気がしてならないが、彼の視線と言葉遣いが
そうさせているのだろうとライナは勝手に結論付けた。

緑に染めたオールバックの、長身の男。インデックスが言ってい
たとおりである。

「アウレオルス・イズガード……」

そう呟いたのは誰であつたか。

緊張せずにはいられない圧力とでもいうべきものが放たれている
ようにライナは感じた。

間違つても弱者ではない。

ステイルの話だと、たいした相手ではないような印象を受けたが、
これは認識を改めなければならぬだろう。

いつでも魔術を放てるよう準備を整える。

「『吸血殺しディープブラッド』を置いて去れ。その者の呪縛を解くことができるの
は私だけだ。貴様らでは何もできない」

アウレオルスの冷静な声が耳朵を打つ。

彼の言い分には一理ある。自分たちでどうこうできるものでない

かもしれない。

だがそこで、上条が反論した。

「ふざけんな、てめえ！！お前は姫神をただ利用しようとしてるだけじゃねえか！！」

「当然。価値がない者を手元に招き入れる必要はないからな」

「ッ！？じゃあ吸血鬼を呼び寄せてどうする気だよ！？」

上条の言葉に、何故かアウレオルスは眉根を寄せ、ライナにはそれがまるで困惑しているように見えた。

「・・・貴様に話す義務はない」

「ああ、そうか。だったらこっちも姫神を渡すわけにはいかねえな」

「ほう。つまりは私に刃向かうと？」

「当たり前だ！！」

交渉決裂とばかりに、上条は拳を握りしめて錬金術師へと一步を踏み出した。

それを見たのか、アウレオルスも後ろの男達に指示を出し、自分は後方へと下がった。

（あいつ・・・。様子見でもする気か）

ライナは現状を確認する。

「おいステイル！人払いの刻印は？」

「すでに済ませてあるよ。何せこれから攻め入ろうとしていたんだからね。周りへの被害は最小限のほうがいい」

・・・仕事が速いようで何よりだ。だが、これで思う存分戦える。時間的にはまだ塾の中にも勉強している生徒はいそだったが、出てくる気配はない。

「ステイルはインデックスを守れ！当麻は姫神を連れて後ろへ下がってろ！ここは俺に任せてさ」

上条よりも前に出て、そう指示を飛ばした。それぞれの配置は、ライナなりの考えがあったからだ。自分はそれなりにどんな事態にも対応できるが、上条と姫神はそうはいかないだろうし、かと言って上条一人でインデックスや姫神を守らせるのも心細い。ならば、インデックスが大好きなステイルに任せれば、己の命を賭してでも守るだろう。そして彼らは魔術側の人間でもあるので、何かいいアドバイスをくれるかもしれない。

「さあて、さっさと終わらせるか」

（この程度なら、せいぜい3分あれば終わるな）

ライナには確信があった。目の前に立つ10人の男達を時間内に倒せるという。

「『我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す』！！」

エスタブル王国の魔法を唱え、身体能力を上昇させる。そしてサン格拉斯越しに、生気のない目をしている男達を一瞥して、

「はあゝ、めんどくせー」

お決まりの台詞を吐いた。

第二十二章 とある計画と前哨戦（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。」

あれ？

前哨戦とか言いつつ闘いすらまだ始まってないような（汗）
次回で頑張ります！！

このところ忙しくて更新できずに申し訳ないです。

あと、全く進まない——・・・。

諦めずに付いてきてくださると幸いです〜！

第二十三章 とある目的と瞬間錬金（リメン＝マゲナ）

・・・結果からして、男達はやはりたいして強くはなかった。

統制された連携攻撃は少々厄介だったものの、彼らの攻撃には意志が宿っていなかった。有り体に言えば“重さ”がない。見かけ倒しと言うべきか。玄人が見せる技や醸し出す雰囲気は彼らにはなかった。

エスタブルの魔法を使わなくても勝てたかもなあ、とライナはそんなことを考える。

ちなみに、ライナに向かってきたのは7人ほどだ。

まずは4人を掌底やら回し蹴りやらでぶっ飛ばしたあと、様子を見ていた3人に瞬時に近づきこれまた気絶させた。

伊達に毎日寝て過ごしているわけではないのだ。いや、寝ていれば逆に動けねーだろ！？との疑問が、上条やインデックスから発せられそうだが、まあライナはやる時はやる男なのである。

黒服達を倒すのに掛かった時間はせいぜい30秒ぐらいだ。後ろで上条と姫神とが驚いている気配が伝わってきたが、それよりも残る三人が向かったスタイル達を、ライナは観察していた。

（スタイルって、近接戦闘できるのか・・・？）

近距離が得意な魔術師なんて、とそこまで考えたところでライナは天草式十字凄教の女教皇プリエステスの姿を思い出した。

（ああ、あいつはもの凄く得意そうだったよな）

なんだそんな魔術師、意外と近くにいたじゃねーかと納得させて、炎剣を出して攻撃するステイルを見やる。

それにしても炎の剣の攻撃をくらった日には、重度の火傷か死しか待ってないような気がするが。

そんな凶器を振り回して、意外にあっさりとステイルは3人を下した。手加減したらしくまだ息のあるやつらに、ライナが魔法を掛けておく。

「『求めるは癒し手>>>・疲射つしゃ』つと。・・・さて、残るは前だけだぜ？」

戦闘が終わり、残るただ一人の男——鍊金術師アウレオルス「イザードに視線を向けた。倒れ伏しているのは相手方ばかりで、こちらは健在。」

——だというのに、アウレオルスは笑みを浮かべていた。

「——悄然。所詮はこの程度か。ある程度は使える奴らかとは思っていたが、全く役に立たないようだ」

少しも残念そうな顔をせず、そんな事をアウレオルスは言う。

「判然。それは最初から分かっていたことだ。こやつら程度では本職の魔術師には勝てんことはな。私が直々に戦わなくてはならないようだ」

あまりにあっさりと、それまで仲間であった者達を見捨てた。そしてどこからか金色の鏝が先端についている鎖を取りだした。

(?なんだアレ?もの凄く嫌な予感が・・・)

無造作に、アウレオルスは“それ”をライナに向けて射出した。

「ッ!？」

思わず掴んで止めようとする手を必死で押さえつけ、跳んできた“それ”をしゃがみ込んでかわす。

「ほう。避けたか。いい勘だ」

その声に、“それ”が通り過ぎていった方に振り向けば、ライナは自分の行動が正しかったことを悟った。

ついさっきまでであったもの。ライナ達が少しの間座っていたベンチ。それが――溶けていた。酸でもかけられてゆっくりと溶けるのではなく、まさに一瞬で。

ベンチだったものは、溶けた灼熱の黄金へと姿を変えていたのだ。どろっと。それこそ釜で煮ているかのように、ぽこぽこ泡を出しながら。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あまりのことに、ライナは声が出ない。それは、黄金へと変わったベンチの横にいた上条と姫神も同じだった。

黄金を一瞬で精製する。

如何ほどの技術があればそんなことができるのか3人にはわからないが、凄い事であるのは理解できた。ただ、もしそれが人に当た

った場合も同じようなことが起こるのだとしたら。

（まじでやばい）

呆然としているライナ達を目にして、いつの間にかベンチを黄金へと変えた“それ”を手元に引き戻していたアウレオルスは、愉快で堪らないようだった。

「どうだ？ わずかでも傷つけたモノを即座に純金へと強制変換する。防御は無効、逃避も不可能だ。凄いだろう？ 我が錬金は！ 我が^{リメン＝マゲナ}瞬間錬金」の威力は！！」

確かに、と思うライナ達。だが、対するようにステイルとインデックスはなぜか呆れた表情をしていた。ステイルは加えて嘲笑の笑みさえも浮かべながら、口を開いた。

「アウレオルス＝イザード。君はそれ、本気で言っているのかい？」

インデックス以外は、ステイルの問いの意味がわからない。言葉をかけられた当人でさえも。

「何をワケが分からないというような顔をしてるんだ？ ライナ、上条、君達だってインデックスから聞いているんだろう？——
錬金術師の存在意義ぐらいは」

ライナ達は、はっと気づく。錬金術師の究極の目的は“真理の探究”であるということ。

「『^{リメン＝マゲナ}瞬間錬金』という魔術自体は確かに便利なものだとは僕も思

うさ。鉛を純金に変換する業は、現在の科学技術を使っても日本円で7兆円近い費用と、時間にして3年以上の期間が必要だからね。だけど、それだけだ。リメン＝マグナ瞬間錬金？強酸をぶちまけて溶かしているのと何の違いがある？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

錬金術師は無言。事実を言われ答えに窮しているのか。

と、ここまでステイルに言うのを任せていたインデックスが補足するように言う。

「それ、基礎物質にケルト十字を使ったテレズマの塊だね。いかにもローマ正教の司祭らしいマニアックな造形かも。ライナの眼でも読みとれるんじゃない？」

アルファ・ステイグマ言われて複写眼を発動させる。朱の五方星が浮き上がった眼で、鎖を見た。

魔法のすべての構成を読みとる。

「あゝ、確かに読みとれたわ。俺でも使えそうだなこれ」
「君ならもう一つのこと読みとれるんじゃないかい？」

ステイルに言われ、ライナは視線を彷徨わせる。

(ん？『リメン＝マグナ瞬間錬金』以外に、アウレオルスってなんか道具使ってたっけ？)

と、すぐに眼が反応した。・・・アウレオルス＝イザード自身に。

「は？どうなってんだ？なんで複写眼で読みとれるんだ？」

人なのに、と続けようとした言葉は、ステイルに遮られた。

「ああ、やっぱりそうだったみたいだね。なあアウレオルス？お前はどうかやら偽物のというお墨付きが出たぞ？」

「間然。貴様ら、何を言っている？」

「ライナの眼の能力は、相手の魔術を読みとってそれを使えるようになるというモノなんだよ」

インデックスの的確な説明。

「そう、そして彼の眼はすでに君が持っている瞬間錬金リメンシマグナを読みとってるんだ。ちょっと使ってくれるかな？」

「いいけど？」

ステイルに言われるがまま、とりあえずは手にそれを出して見せた。

錬金術師はそれを見て驚く。

「バカな。そんな簡単に使えるはずが・・・」

「だからそういう能力だって言ってるだろう？」

「で、ライナの眼はもう一つ、魔術の痕跡を見つけた」

「・・・自然。何を視たと言っただ？」

「——お前自身が魔道具の一つに過ぎないということわざだろう？ライナ」

ライナは無言で頷いた。目の前にいるのは“普通”に見る限りは全くどこにでもいそうな人間。だが、複写眼アルファ・ステイグマで視ると、それが創られたものであることがわかる。

それが錬金術師には信じられない。いや、自分が実はただの道具

であるなんて誰が信じられるというのか。

「ッ！——必然。私が偽物であるはずがない！！私がアウレオルス^{アウレオルス}ィイザードだ！！」

「違うな錬金術師の真似事？だったらお前が吸血鬼を求める理由は何だ？」

偽物は答えることができない。自分の中にあるはずの答えが出てこない。

「ほら、答えられないだろう？本物が己の信念を曲げてやろうとしていることが、あらかじめ入力されている偽物^{インフット}にはわからない」

そんなものを本物の錬金術師と呼べやしない。見た目をいくら似せ、口調を真似たところで、本人の記憶や意志はわからない。過去に何があつたのかを伺い知ることはできない。

「そっぴや君たちに言つてなかつたことがあつたのを忘れてたよ」

呆然とする偽物をよそに、ステイルはライナ達に向き直つた。

「彼——といっても本物の錬金術師のほうだが、彼は3年前にインデックスのパートナーだったことがある。役割は『先生』だったようだ」

ちなみに2年前は僕だったんだけどね、とステイルはにやりと笑つた。

インデックスと姫神はただ驚いただけだったが、ライナと上条はアウレオルス^{アウレオルス}ィイザードの気持ちがあつたような気がした。同時に、彼が吸血鬼を求める理由も。“人外”のモノに頼ろうとしたワ

ケも。

「3年も人里を離れてどっかに籠もってれば、そりゃあ世情にも疎くなるはずさ」

「なるほど、そういうことね」

「やり方は間違ってるというか言えないけどな」

ライナと上条はふむつと頷き、ステイルと視線を交わした。

救い出そうとする側にしかわからない連帯感とでも言うべきものが、ここに成立した。

当然、インデックスと姫神にはわからない。

「つかステイルさ、それを知ってるならもつと先に言えよな」

「すまないね。何しろ急にダミーが現れたからね。話す機会を逃したんだよ」

「なんかすげえあっさりと理由がわかつちまったし。そうするとアウレオルス^{II}ダミーも被害者だよな」

「もつとも、彼の場合はほとんど三沢塾内で発動されている聖域から力を貰っているようだから、本物が術式を解けばそのうち消えてしまっただろうね」

「・・・なんか嫌だなそういうの」

「仕方ないさ。それよりも、そろそろ偽物が何か言いたそうだ」

ステイルの言葉に再びダミーに全員が目を向ければ、

「ハッ、ハハハ！そうかそうだったのか！！どうりで答えを持ち合わせていないはずだハハハハハハハハハハ！！」

彼は狂い始めていた。唾を飛ばし、目をぎらつかせライナ達を見

やる。

「インデックス禁書目録か！！我の本当の目的は！！ハハハハ！そんな小娘を助けるために我は全てを捨てたとはなああああ！！」

激昂しながらめちやくちやに鎖を振り回し始めた錬金術師に、ライナは手に持った同じ武器で必死にそれを抑えようとする。当然、周りは次々と黄金へと化していく。

（ちつ、自棄になつて周りが見えていねえし。俺は相手の得物に弾道を合わせるので精一杯だつての！）

と、そこでライナは後ろに魔術に対する天敵がいることを思い出した。

上条の右手が有する幻想殺しを。イマジンプレイカー

「当麻！お前の伝家の宝刀、いや黄金の右手の出番だ！俺がお前の方向へアイツの鏃を弾くから、やじり幻想殺しで破壊しろ！！」イマジンプレイカー

その言葉に、上条が愕然として言い返す。

「うまいこと言つてんじゃねえよ！それに馬鹿かライナ！そんな高速で射出されてるもんを右手で上手く当てる事なんてできねえよっ！」

「他に方法がねーんだから仕方ねえだろ！！いくぞ！」

さーん、にー、いちーと勝手にカウントダウンを始め、予定どおりに上条へ偽物の瞬間錬金を弾いた。ダミーリメンヒマゲナ

驚愕しながらもお前はやるときはホントにやる男だなと、どこか諦めながら自らへ迫ってきたソレを右手で殴り飛ばした。

「痛ええええ——ツツ——！」

上条が自分の手をみると、なんと切れているではないか。ぱつくりと開いた切り傷からは、包丁使って料理作ってる途中でミスして切っちゃった♪時の倍以上の血が流れ落ち、インデックスを助けて以降あんまり縁がなかった自分の血に、なんとなく全身から血が抜けていつているのではないかと上条に思わせた。

「ライナあああ！——てめえのせいで手が切れたじゃねーか！」

「うるせえよ！しっかりと効果はあったからいいだろ！？見るよ、アイツの魔道具ってば砕け散ったぜ？」

やるなお前、という風にサムズアップ&青少年の笑みを浮かべるライナ。

ライナの言うように、アウレオルス「ダミー」が使っていた鎖は砕け散り霧散していた。

「ハハ、なんだその右手は！我が瞬間錬金リメン＝マゲナを、黄金へと強制変換されることなく破壊するとは面白い——！もっと、見せてみる！」

さらに懷から新しい鎖を取り出そうとする偽物。また右手を心配をする上条。

だがそれより早く、ライナが地を蹴って後ろへと回り込んでいた。そうして繰り出した蹴りは、ダミーをステイルの方へと吹き飛ばした。

待ちかまえるは赤髪の不良神父。

「『灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字』……さよならだ偽物」
AshToAsh DustToDust Squeamish BloodyRoad

「ぐっ！」

せめてもの抵抗なのか、まだ離さず持っていた鎖をステイルへと放とうとして。

その無理な体勢からの無様な一撃を、ステイルは余裕を持って避け、炎剣を叩き込もうとして、

——気づく。

後ろにいたインデックスへと伸びていく瞬間錬金に。

咄嗟にダミーの腕を斬り飛ばすが、それはわずかに軌道を変えただけで。

インデックスの身体能力では避けられないであろうスピードで飛んでいく黄金の鏃。

ステイルがライナが上条が、そして姫神さえもインデックスへと走る。

（間に合^{ない}わねえッ！！）

己へ迫る死に、インデックスはただ呆然と立っていることしかできず。

そうして灼熱の黄金へと変換する凶器がインデックスに当たろうとして、

「止まれ」

アウレオルス^{II} イザード
本物の錬金術師の声が響いた。

第二十三章 とある目的と瞬間鍊金（リメン＝マゲナ）（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。」

投稿が遅くなりました。

こうして文章を書くとき、原作の著者さんが描く文章の緻密さや構成が本当に凄いものだの実感できます。

ちよつと疑問なのが、瞬間鍊金は実体のないモノ——例えば『魔女狩りの王』とか——も黄金に変えるのでしょうか。

原作ではそれが実行されるところはなかったので不明ですが。

あと、アウレオルス＝ダミーは上条の右手で殴られても原作では消えなかった。・・・黄金鍊成で創られたものであるにも関わらず・・・。

その点はどうしようかと思いましたよ。

結局ライナ任せにしましたが（笑）

第二十四章 とある誓いと黄金錬成（アルスⅡマゲナ）（前書き）

短めです、すいませんー・・・><

第二十四章 とある誓いと黄金鍊成（アルスⅡマゲナ）

「止まれ」

どこからか聞こえてきたその声によって、アウレオルスⅡ「ダミーの動き」——いや、正確には「ダミー」がインデックスへと射出した瞬間、鍊金も含めた全て——が止まった。いや、これも間違いで、実際は強引に強制的に止めさせられたと言ったほうが相応しいだろう。

それに比べ、ライナ達の体はどこも止まっておらず、インデックスの元に駆けつけることができた。それは突然乱入してきた何者かが、まるでインデックスを害されようとしていたから止めたとしてもいうように。

事実、声の主の思惑は自分が考えるとおりだったのだらうとライナは思う。ステイルから聞かされた内容を考えれば、“彼”がそのような行為に出るのはまさに必然だったから。

「自然。偽者とはいえ、まさかこの私自身がインデックスを傷つけようなどするとはな。」

今まで相対していた「ダミー」と全く同じ声。だが、感じられる威圧感、偽者を遙かに上回っていた。

「ッ！？貴様は・・・！？」

動きは止められていても会話はできるらしいダミーが、目だけを横へと向けた。

ライナ達もその視線を追うようにして、自分たち以外は誰もいないはずの道へと目をやったそこに。

——本物はいた。

「判然。すでにわかっているのだろうか？貴様は私が創り出した私自身の偽者だと、さつきステイルやインデックスから聞いたはずだが」

そう言つて、本物は偽物へと簡潔に命じた。

「砕けよ」

ただその一言で、何をする間もなくアウレオルス^Ⅱダミーの一生は幕を閉じた。

それを一目見た錬金術師は興味を失ったようにさつとこちらを、おそらくはインデックスを見て。

「久しいなインデックス。いや初めましてと言つべきか？ふつ、改めて自己紹介をしておくことにしよう。我が名はアウレオルス^Ⅱイザード。カインの末裔にして、錬金術師の究極の目的である黄金^{アルス}錬成を完成させ、そして過去にお前のパートナーであつた男だ」

悲しそうに、それでいてインデックスに今日ここで会えたことを喜ぶように、大げさな身振りと共にアウレオルスはそう言い終えた。首に長くて細い鍼を刺しながらだったが。

三年の月日しか経つてはいないとはいえ、たったそれだけの期間

でインデックスのためにこんな魔術を身につけた一人の錬金術師の姿がそこにはあった。

「・・・それはさっきも聞いたかも。あなたは私の先生役だったみたいだね」

「そうだとも。あの時の君は、今まで教えてきた生徒の誰よりも優秀だったと記憶している。必然、完全記憶能力のおかげも多少はあったが、些細なことだ」

「そっか。ありがとう」

久々の会話を楽しむように、饒舌にアウレオルスは語る。記憶が無いにもかかわらず、しかし目の前の男から伝わってくる愛情に、インデックスも感じるものがあつたようだ。

「しかしいきなりこのような場所で再開するとは、さすがの私も予期していなかったぞ。見たところインデックス、君の周りにいるのは知り合い達か？」

「そうだよ。私の右隣にるのがステイルで、左隣にるのが当麻」

左右に位置し、姫でも守ってるつもりなのか、自らを庇うような形で立っている神父と少年にインデックスは顔を向けた。

「それから秋沙の近くにいるのがライナ——とは言っても、ステイルとなら昔にすでに会ってるはずだよね」

「ふむ、確かに久しいな。今はどうしているのかは知らないが」

敵でも味方でもないただの知り合いだとしても言いたげなアウレオルスの態度に、ステイルはふんと鼻で笑い、煙草を取り出した。

「あいにくと、イギリス清教の一組織、必要悪の教会に属しているよ。ちなみに君の次にインデックスのパートナーとなったのは知っているかい？」

「・・・さてな。――それがどうした？」

己の目的に関係することだというのに錬金術師は齒牙にも掛ける様子はなかった。まるで自分しか、その目的は達成できないとも言うように。

だがその答えに、ステイルは今度こそ笑った。このタイミングで笑うのは明らかに相手を馬鹿にしているとしかライナには思えなかったのだが、それはアウレオルスも同じようだった。

「判然としないが。貴様、自殺願望でもあるのか？」

「いやなに、ただ可笑しくってね。君が一人で空回ってただけだというのに、まだそれに気づいてないようだったからさ。ああ、でも気にしないでくれ。僕だって君には同情してるし、こんなバカな奴にそんなことができるなんて微塵も、それこそミジンコほど思ってたなかったからね」

「・・・何の話をしている」

そろそろ相手の我慢も限界に近づきつつあるようだ。インデックスは気の毒そうな目で彼を見ている。上条はステイルにバカにされたことに思わずツツコンでいた。姫神も無言。彼女もすでに事情は知っているので、当たり前前の反応だろう。

ライナだって、

（はっ、ステイルの言葉に思わず頷くところだったぜ。ふゝアブねえな。ってかステイルって冗談言うんだな、いや寒いけど。意味は伝わるけどそれだけだし？）

などと非情で場にそぐわないことは・・・それこそミジンコほども考えていなかったと思いたい（寒）。

「いい加減に気づけよ。まあわかりやすく説明すると、なぜ今のこの時期にインデックスにすでにこれだけの“友達”がいるのか考えてみればいい」

スタイル
魔術師の無慈悲な言葉は、錬金術師の心をいともたやすく貫く。

三年という月日を重ね、究極の一である黄金錬成アルス・マゲナを使うことができるようになるほどの、その強靱なる心を。

「・・・友達？・・・時期・・・儀式・・・
・記憶喪失・・・
ナー？・・・馬鹿な・・・いや・・・でもあり得ないわけでは・・・まさか！？」

暴れる心を押さえつけるがごとく、再度首に鍼を刺しながら、それでもアウレオルスの声は先程よりも大きいものだった。

その驚愕を笑いながらスタイルは頷くことで肯定する。

「そうさ。やっと気づいたのか？ここにいるインデックスに付けられていた『首輪』はすでに壊れているんだよ。上条当麻という馬鹿と、ライナリリウトという昼寝野郎によつてな」

少しは僕とそれから神裂も協力したけど、とスタイルは笑みを深めた。インデックスがそれを見て呆れつつ注意していたが、あいにく目の前の男にその光景をのほほんと見ている余裕はないようだった。

上条と言えば、「誰が馬鹿だって・・・？」とクラスの者に聞いたらお前だよとしか言い返されないであろう真実に、スタイルあと

で殴ると心で固く誓っていた。

「ステイルの言うとおりで、今年は俺とライナがパートナーだった。タイムリミットはギリギリだったけど、運良くどうにかインデックスを救えたってわけなんだよ。な、ライナ？」

「ああ。んで、あとは友達として当然仲良くやってるんだよね」

いやあホント何とかできてよかったな、と今でもしみじみと思う。まだあれからそれほど経ってはいないが、それでも過去の話には違いなかった。

改めてステイルが口を挟む。

「君がローマ正教を抜けてどこかで隠れ住んでいる間、おそらくは外界のことなんて興味を示さなかったんだろう？アウレオルス・イザード。だからこそ今回の事も知らないままで、こんな馬鹿な計画を企てたんだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

だから僕は笑ったのさ、とステイルは理路整然とした説明をした。それよりも、と前置きして、悪役面を保ったままエセ神父はさらに黙ったままの錬金術師に問いかける。

「疑問に思ったことがあるんだけど、どうして君はその黄金錬成アルス・マグナを完成したならすぐに使わなかったんだい？さっきの偽者を消すときだって、君はたった一言を呟いただけだった。なのに、じゃあ何故それをインデックスのへとすぐに使わなかったんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうして吸血鬼に頼ったりした？呼ばずとも創り出せばいい。姫神の持つ能力なんて使わなくても今の君になら余裕のはずなのにさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ステイルが紡ぐ言葉は、ライナも疑問に思っていたことだった。
アルス・マゲナ
黄金鍊金という魔術は、世界の全てを呪文と化し、それを詠唱完了することで行使可能となる鍊金術の到達点であり、神や悪魔を含む『世界の全て』を己の手足として使役する事ができるはずだ。

（ただ命じるだけで全てを歪めることができるはずだろ？だとすれば、インデックスの記憶障害なんて一発で治っただろうなあ）

しかし現実として、それは行われなかった。インデックスは自分たちで救い、そして今の彼は吸血鬼にその救う方法を見いだそうとしている。

「少し弱点があると思うのが正解かな？どう思うインデックス？」

「うん。合ってると思うよ。・・・ねえアウレオルス、どうしてなの？」

「ッ!？」

救うべきだった対象に問いかけられ、目の前に無言で経っていた男は言葉に詰まったようだった。そしてゆっくりと顔を伏せ、しだいに口角を吊り上げ、狂気したように笑い始めるまさにその直前。

「でもね・・・ありがとう」

先程の会話とは比較にならない程の親しみが、心が込められたその言葉。

——インデックスが発したそれは、男に正気を取り戻さるほどのものだった。

直後男の顔に、怒りや泣き、嫉妬や憎しみ、そして愛しさなどがにじみ出たのをライナは確かに見た。

インデックスが無事で平和に過ごしている事への安堵、それを成したのが自分ではないという事実、今まで自分が魔術の研究に費やした日々とその代償、完成した最強で究極な自らの魔術における欠点。

おそらくは様々な感情が胸の内では渦巻いているに違いないと推測する。

それでも、まさにこの瞬間から孤独な錬金術師は哀れではなくなったのだという、どこか漠然とした感覚がライナの心を占めていた。否、ライナだけでなく、上条も、姫神も、インデックスも、そしてあのステイルでさえそう心のどこかで感じていた。

しばらくしてアウレオルス・イザードは一つ大きくため息を吐いた。

それら一切の感情を払い落とし、流し、そして受け入れるための

ようにライナには思えた。

どこからか出した鍼を首に刺すのではなく、ただ自らの感情を確かめるかのように深く長いため息を――。

第二十四章 とある誓いと黄金鍊成（アルスⅡマゲナ）（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。」

いい内容にできたと個人的には思います。

もっとも、いつものとおり文章力は皆無なのですが、なんかこう雰囲気……ね？

投稿日がいぶ空いてしまい申し訳ないです。時間が足りないのです（泣）

第二十五章　とある狂気と二つの道

——長いため息を、アウレオルス・イザードは吐いた。
何を思っていたのかは伺い知ることはできない。ただ、ライナの
目には、憑き物が落ちたような穏やかな顔をしているように見えた。

（つてか、狂う寸前じゃなかったかこいつ？）

危ねえ危ねえ、とほっと一安心してみるライナ。

（さすがはインデックス！惚れられてるなあ……）

最後の一言が、彼を正気に踏み止まらせたのだとしたら、やはり
インデックスは人を惹き付ける何かを持っているのだろう。

「ありがとう……か。——自然。久しく言われていない
言葉だ」

と、ここでアウレオルスはインデックスに向かって話しかけた。

「君が“すでに救われている”という可能性を考えていなかった
私自身はどうやら馬鹿らしい。こんな一介の錬金術師ですら君の為
に動こうとしたのだ。ならば他の者も君を救おうとするのは……
ふむ。まさに必然だったか」

「そんなことはないよ！・・・確かに、今の私はすでに救われている身だけど、偶然が重ならなかったら——それこそ奇跡と言いつてもいいけど、それが起こらなかったら今の私は存在していない、あなたに救われたかもしれないなかったし」

だから決して無駄な事じゃなかったんだよ、と言つてインデックスは嬉しそうに笑った。

男の使う魔術は、究極的で凶悪的で奇跡的なものだけけれど。

彼はまだ誰一人として殺してはいない。

一人の女の子のために、まだ他の人間を犠牲にしてはいない。ならばまだそこには救いがあるのだらう、とライナは思う。

「ありがとうインデックス。そして良かった。君のそんな顔を見るために私は今まで努力してきたのだから。——ハハ、こんなに愉快で最高な日は生まれて初めてだとは思わないかステイル？」

唐突に、アウレオルスは似た過去を辿った神父に同意を求めた。しかし錬金術師の元同僚は、ばつさりと切り捨てた。

「浮かれているところ水を差すようだけど、その気持ちは僕はすでに何日も前に味わっているからね。さらにインデックスを助ける時に僕と神裂は立ち会っているから、君よりも感じたモノは何倍も違うさ。少し残念なのは、インデックスを救ったのは僕ではなく、そこに突っ立って無様な姿をさらしているただの高校生だってことさ」

ツンツン頭のただの高校生である上条当麻を思いきり指さし、ステイルは心底嫌そうに告げた。事実、本心からそう思っているのに違いない。

で、指を指された当人はというと、

「誰が無様な姿を晒してるってんだステイル！？確かに、私こと
上条さんは、右手以外は使い物にならないただの高校生だっつーこ
とは俺自身が一番理解してるけどよ、こうしてこの場にいるという
勇気ぐらいいは認めてくれてもいいだろ！？」

「ふん、無茶と無謀は違うんだよ上条当麻」

「むきーっ！！ぶん殴るぞお前！！」

「・・・大丈夫。私はあなたの勇氣、認めてあげる」

「・・・なんか上から目線なのが気になりますが？姫神さん？」

「・・・だつてさつき戦ったのはライナと神父さんだし」

「ぬがぁ！！まさに正論。反論のしようがねえ！！」

「とうまは今回は役立たず、だつたね」

「インデックスまで！？だつてライナが引き受けたから任せただ
けだつて！」

「なんとそのなんの変哲もない少年が、インデックスを救ったと
いうのか・・・。待て、先程の瞬間^{リメン＝マナ}鍊金をその右手は防いでいたな
だとする、実に興味深いことだ。もしや聖域の秘術でも内包して
いるのではあるまいな。どうだ少年、私の実験に付き合ってみない
か？」

「黙れ鍊金術師！！今の上条さんはそれどころじゃないのですよ
！！俺は今のところ自分だけの現実なんて持つてないけど、それで
も今確実に上条さんのアイデンティティーが崩壊せしめているとこ
ろなんだから！！」

「そうか、それは残念だ。建設的な付き合いができと思ったの
だな」

「そうだね、意外といい提案かもしれないよ上条当麻？前に聞いた話だとその幻想殺し^{イマジンブレイカー}、正体が明らかになっていないんだろ？な
らいい機会じゃないのかい？」

「うっ、それを言われると確かに調べてみたい気もするな我が右
手・・・」

「わからないことをそのままにしておくのは良くないよとうま！」

「そうそう、インデックスの世話に僕たちに任せておいてどこへなりともアウレオルスと行ってきて構わないさ。・・・まあ戻って来なくても構わないけどね」

「それが本心かつ！このエセ神父！！」

「・・・私は魔法使い」

「知ってるし！そしてそれが嘘だということも知ってたよ姫神！！」

先程まで緊張の糸が張りつめていた場合は、次にどうやら混沌^{カオス}が立ちこめているようだった。

それを一步引いたところで傍観するライナ。

・・・正直面倒だったというのが大きい。一仕事終えた後には、何よりもまず休憩を求めるライナであるからして、自ら上条を援護するようなことを言うわけもなく、周りに散らばる黄金をどうしようかな、売ろうかななどと考えているほどだった。

何にせよ、

（普通に終わってよかったああああああ！！）

インデックスの時以上の規模ではあったものの、被害といえば創られし偽者が一人と、あとは転がっている黒服の男達だけだ。

学園都市を崩壊させることができるかもしれない魔術、黄金錬成^{アルス・マグナ}、それを相手にこの程度の被害で済んだ（とはいえ一人の？命が失われたわけだが）のは、僥倖といえるんじゃない？とその弛み切った頭で考える。

（でも確認しておくことはあるよな）

と、まだギャーギャー騒いでいるのに目を向け、

「で、これからアウレオルスはどうするんだ？」

と聞いた。

この事件の中心的人物に。

ステイルがわざわざ学園都市統括理事長の指令を受けて、アウレオルスを排除しに来たのも、元はと言えばこの学園都市に魔術師サイドの人間が侵入していたからだった。

さらに塾を占拠したことでますます事態は悪化したのだ。

つまりはアウレオルスさえ学園都市の外へと出れば、この事件は解決したようなものである。

もっとも、その見方は学園都市側のものに過ぎず、実際は都市の外に出た時点でローマ正教も含めた様々な魔術結社から命を狙われることになるかもしれない。

だが、インデックスも魔術サイドの人間であるからして、例外として認められればあるいは――、

「それはおそらくは無理だろうね」

ライナが考えているのが聞こえていたかのように、ステイルはそう言葉を紡いだ。

「あのアレイスターが、・・・仮にも統括理事長の場にいるモノが、インデックスに許している立場をアウレオルスに与えるはずがない」

「なんでそう言い切れるんだ？」

「ライナ、君はアレイスターに会ったことがないからこの感覚はわからないだろうけど、窓のないビルの中で生命活動のほとんどを機械に彼は頼っている」

突然のアレイスターについての話に、ライナは何と言っているかわからない。そう、アレイスターに会ったことがないライナに出来ることは相槌を打つくらいだった。

そんなライナに、ステイルは皮肉気に笑いながら、

「まあ“彼”と呼ぶのもふさわしいかどうか僕もわかりはしないんだが、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』である彼は、正直に言って僕では手も足も出ない。これから如何なる修練を積んだところで、研鑽を磨いたところで、アレイスターには敵わないと、僕にそう思わせるだけの存在なんだ」

生命維持装置に頼っているのは、そうするしか生きられないのではなく、生きるのにそうしたほうが都合がいいからに過ぎない。

「今回も、アウレオルスを排除する方法自体は持ち合わせているようだった。ただ体裁の関係でしなかったただけだろうさ。それができるほどのチカラが彼にはある」

ステイルにこうまで言わせるとは如何ほどの“人物”なのだろうか、とライナは思った。おそらくは上条もインデックスも、そして姫神やアウレオルス当人さえ、同じ感想を抱いているだろうなという確信さえ、ライナにはあった。

「で、だからどうしてそれが、アウレオルスをこの学園都市から出て行かせなければいけないことに繋がるんだ？インデックスだって魔術サイドの人間なんだし」

「インデックスだから大丈夫なのさ。魔導図書館としての役割を担っているインデックスに魔術は使えない。あるのはあくまでも“魔術”についての知識のみだ」

「・・・学園都市に被害は出ないって？」

「そういうことだ。むしろ学園都市の外に出して誘拐でもされて魔導書の原点でも盗み写されたほうが、アレイスターにとっては困るんじゃないかな」

「インデックスはこの学園都市内にいる方が安全だった？」

「僕らみたいな魔術師なんてめったに入ってくることはできないからね。そういう意味ではここは実に安全な場所だよ」

「じゃあアウレオルスは？」

「さつき君が言ったとおり、アウレオルスだと学園都市に被害が出る可能性が“ある”^{アルス・マグナ}。黄金鍊成はほとんど究極な魔術だから、まず間違いなくそこいらの能力者にやられはしないだろう。でも同時に、それは能力者を倒すことのできる人間でもあるというわけさ」

そんな危険な人物を野放しにするほど、彼の危機管理能力は衰えてはいないんだ、とステイルは締めくくった。

「ッ！じゃあアウレオルスは学園都市の外の方がまだ安全ってか？」

「——断然。危険度は同じぐらいだろう。ただ、学園都市内での敗北はどちらの世界においても悪影響しか及ぼさん。せめて魔術師相手に生き延びるほうが良いとも言えるな」

少し達観しているような雰囲気醸し出しながら、アウレオルスは淡々と言った。

「それに死ぬと決まっているわけでもあるまい。インデックスに会いに来ることはいつでもできることだ。私は退散する道を選ぶとしよう」

困ったらいつでもこれに連絡してくれ、とその鍊金術師は言って、インデックスに何やらメモのような物を手渡す。

インデックスの方も理解したようで、一度頷いた途端、その紙はポッと音を立てて燃え落ちた。

（魔術師同士の秘密回線か？こっちの世界の魔術ってホント便利だよな）

一人場違いな感想を抱いたライナである。

「姫神、お前の吸血殺しの能力を消すという約束は、今この場で果たすでしょう。我が目的が潰えた今となつては、それしか残つてはいないからな」

どこからか鍼を取り出しながら、アウレオルスは姫神へと微笑んだ。

「・・・ありがとう」

「なに、別に気にすることではない。・・・能力を魔術で失った結果がどのような結末になるか判然としないが、それでもいいのだな？」

「・・・うん。もう、この血はいらないから」

「アレイスターも、姫神を清浄で正常な人間へと戻すこの行動ぐらひは黙認してもらいたいものだ。それが吸血鬼を喚び寄せるといふ希有な能力であつたとしてもな。・・・では、実行するでしょう」

忌み嫌つた能力と失うというのに、姫神は心の底から笑みを浮かべていた。

自らの血との決別が、何を意味し、自らの人生をどう変えるかもわからない。だが、一步前進してみようと彼女は思ったのだ。上条と同じ無能力者となるのも省みず、吸血鬼という存在の者達を殺さなくてもすむような、そんな世界に彼女は生きていきたいと願つた。

そして、アウレオルスは首に鍼を刺しながら
一言、

「——治れ」

とだけ言った。

第二十五章 とある狂気と二つの道（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。」

長らくお待たせいたしました。

最近はずいぶん忙しくて、思うように筆が進みませんで申し訳ないです。書いているうちに様々なことを考えてしまって、今回のような内容となりました。

そろそろ2巻は終わりですね！！><

第二十六章　とある希望とローマ正教？

・・・錬金術師アウレオルス・イザードは、約束を果たしてくれ
た。

いや、それは約束ではなく、彼なりの善意だったのだろう。

彼の目的は果たされることはなく、しかし願いはすでに叶っていたのだから。

だから、やはり私が忌み嫌うチカラを、魔術で以てして失わせてくれるのは。

彼がきつと優しい人間なのだろう——と。

自分のチカラが失われたのか、それとも未だに残っているのか。
確かめる術はないにも等しい。

もう二度と吸血鬼となった人々を殺したくないのだから。

だからしばらくは様子を見よう。

医者に行つて異常が無いか調べてもらうのもいいかもしれない。

一応、能力封じのお守りでもインデックスから貰つておこうかな
んてコトを考えてみる。

まさか多重能力者になつたりしないだろうか。

・・・それはそれで怖い。

果たして自分がどうなるのかなんて、

まったくわからないけれど。

インデックスも上条君もライナもいるんだから。

なんとかなる事を祈ろう。

アルス・マギナ

黄金錬成によって自らの“願い”が果たされたであろう少女、姫

めがみあいさ
神秋沙は。

——そう思った。

「……うまくいったのか？」

魔術を使い終えたアウレオルスへと問いかけてきたのは上条だった。

「当然————と言いたところだが、何しろ私でも初めての試みであるが故に確証は持てん。私がどこまで自らの魔術^{創造}を信じることができたのかに懸かっている」

（超能力を魔術で打ち消すことなど————もとい、魔術サイ

ドが科学サイドに関わるなどということは本来あってはならないことだ)

アウレオルス自身でさえも、三沢塾には手を出したとはいえ誰一人として殺してはいない。

戦争を引き起こしたいわけでもなかったのだ。大切に想う一人の少女さえ救うことができるなら、それで良かった。

だが、今アウレオルスが行ったことはその範疇を越えている。姫神との約束は実行するつもりではあったものの、これを機に学園都市統括理事長が何か手を使ってくるかもしれない。

「後悔はしていないが、禍根は残りそうだ」

吐く息とともに、彼はそう周りの者に告げた。

危険が迫るかもしれない、最悪の場合は命を落とす事態にまで発展するかもしれない、と。

「それに関しては確かにそのとおりだね。僕やアウレオルスは自分の身を守る術ぐらいはあるけど、姫神や無能力者君には少々危ないかもしれないな」

あと君の側にいるインデックスもだ、とイギリス清教の魔術師ステイル・マグヌスは、アウレオルスの言葉に賛同した。

その言葉に、

「そんな心配すんなって！インデックスも姫神も俺が守ってやるからさ」

と頼もしい発言を返したのは、本日役立たずであつた上条当麻その人である。

「……どこからそんな自信が出てくるんだい？」

「……私も知りたいものだな」

呆れた調子で煙草に火を付けるスタイルに、今度はアウレオルスが同意した。

（少年の右手は侮れないものがあるが、おそらくは魔術に対してのみだろう。物理攻撃に対し、普通に傷ついていたのがその証拠だ。……心配しか残らないか）

「だ、大丈夫なんだよ！とうまはやる時はやる男の子なんだから！」

「……うん、そう」

インデックスの必死のフォローも、何か取って付けたような印象しか感じないのは何故だろうか。

愛らしいことには違いないが、その彼女をイマジンプレイカー幻想殺しの少年に任せてきりなのも不安だった。

で、錬金術師が目を付けたのは、

「その眠そうな青年。君は先ほどの戦いではいい動きだった。どうせなら君にインデックスを任せておきたい」

ライナハリユートだった。

少なくとも体術では並みの者に遅れを取ることはないだろう。幾らかの魔術も使えるようではあるから、まだマシな人選だとステイルでさえ思った。

「ええ、俺？俺って誰かに頼りにされるような奴じゃないんだ

けどなあ。まあ友達だし、できる範囲でなら守ろうかな」

・・・不安。

なんというやる気の無さ。

いつそステイルにでもインデックスを連れ去ってもらおうかとも考えたアウレオルスであった。

「・・・インデックスにもしも何かあったときは、命が無いもの
と思え」

「右に同じく」

（こいつら、インデックスのことになると意気投合するよな）

先ほど気の抜けた返答をしたライナ＝リユートは、つくづくそう思った。

（まあ、どっちでもいいか）

エスタブル王国の身体強化の魔法を使ったせいで、どつと疲れ
ているのが自分でもわかった。

今日のところはさっさと上条の家に帰って、ゆっくりと休み――
——もとい、眠りたい。

「わかったわかったから。上条と力を合わせてどうにかするって
なあ？」

「ああ！ そうだなライナ。まあ俺一人の力なんてたかが知れてる
けどな――！」

「威張れねえよそれ……。とりあえず、用事も済んだことだし
帰ろうぜ？ 疲れたし」

「そうするか」

じゃあ、ステイルとアウレオルスに別れの挨拶でもしろ、と上条
はインデックスへと振り返って言った。

「世話にかけたな、インデックス。」

「ううん。こっちこそありがとつ。しばらくは会えないかもだけ
ど元気でね」

「姫神も、私の目的の為とはいえ巻き込んでしまつてすまなかつ
た」

「・・・いい。気にすることじゃない。私もあなたに救ってもらえたようなもんだから」

アウレオルスの慈愛に満ちた言葉を、インデックスは朗らかな笑顔で受け止め、姫神は相変わらぬ無表情を少しだけ崩した微笑を見せた。

「僕はまだまだ縁がありそうだから、その時はよろしく頼むことになる」

ステイルの皮肉にも、インデックスは笑いながら「わかった」言葉を返す。

「ではまた会おう」

「・・・気をつけて」

「また連絡するから」

そうしてアウレオルスは最後に、三沢塾に掛けていた術式を解こうとし――、

「貴様がアウレオルス＝イザードだな？」

人払いの結界を通り抜け、そしてその人物の名を答える人間は限られていた。

学園都市の上層部の者か。

いや、違う。

学園都市の人間が。

西洋の全身鎧など身に着けているわけがない。

流線的なフォルムはどこか現代的な——そう、戦闘機に見られるような計算ずくな機能美があり、銀光を放つ素材もただの鉄ではないような気がする。

手には全長80センチはあるだろう巨大な弓が握られ、その切っ先はアウレオスをぴたりと狙っていた。

声から判断すると性別は男のようで、右腕には『parsifal』と刻まれているのが見て取れた。

誰だとライナや上条がいぶかしむ中、インデックスが口を開いた。

「せじゅつがい施術鎧による加護と天弓のレプリカ——あなた、ローマ正教の13騎士団の人だね？」

「インデックスご名答。わが名は『パルツイバル』。……察するに君が彼の禁書目録とやらか。名は伊達ではないとみえる」

今度はステイルが煙草の煙を吐きながら、男へと呼びかける。

「で、そういう君は裏切り者の首でも取りに来たのかい？」

「これまた正解だ、イギリス清教の魔術師よ。君は手を出してくれるなよ。これは私の仕事だからな。で、大人しく死んでくれないか錬金術師？」

鎧の中で男——パルツイバルがどんな表情をしているのかはわからない。だが、殺意だけはひしひしと伝わってきた。

もつとも、アウレオルスの答えも決まっている。

「それはできない相談と言っものだ」

素早く針を取り出しながら、錬金術師は騎士へと鋭い目を向けた。

「それは残念だ」

視線を受け止めるようにしてパルツイバルは一歩足を踏み出し、手をさつと挙げて、

「やれ!!」

瞬間、光弓から放たれた4本もの魔力で編まれた弓が、アウレオルスへと殺到した。

第二十六章 とある希望とローマ正教？（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。見つけました場合はぜひ、ご指摘いただけますようお願い申し上げます。】

短めです。そして終わらず。無念です。まさかのここでローマ正教出現です。次こそは決着を。

3月11日に発生しました東北関東大震災では、多くの人々震災に遭われ、またその中には、命を落とされた方もいらっしやいます。拙い文章ではございますが、そのような方々にお悔やみ申し上げますとともに、避難生活を送っていらっしゃる方々にも、一刻も早く救済があることをお祈りしております。

第二十七章 とある希望とローマ正教？ (前書き)

久々の投稿です・・・><

第二十七章 とある希望とローマ正教？

突如としてパルツイバルの背後から飛来した4本の矢は、しかし錬金術師の身に届きはしなかった。

「――消えろ」

ただその一言で、アウレオルスの眼前まで迫ってきていたそれらの攻撃は、一瞬でかき消された。

「ふむ。私の黄金アルスリマグナ錬成を知っているならば、そのような攻撃など不毛なだけに過ぎん」

「ちつ、やはり完成させていたのか貴様！！」

パルツイバルはアウレオルスの情報を少しは知っていたようだった。もしこれが初見だとすると、まず間違いなく理解不能な事態にパニックを起こすはずだからだ。

ライナの見立てでは、背後に潜む西洋鎧に身を包む騎士達は、そこそこ場数を踏んでいるようだった。素人然とした気配ではない。自らが戦えばある程度苦戦しそうな雰囲気を彼らは持っていた。

だが、今のこちらにはその程度の人数でやられるようなことはあり得ないと言ってもいい。それよりもアウレオルスを本当に捕縛、もしくは抹殺しようと思ったならば、軽く一個中隊以上の戦力を投入すべきだ。それでも勝率は限りなく低いだろうが。

「おい、アウレオルス。先に言っておくけどこいつら殺したりするなよ」

相手は殺しに来ているのに、こちらからは殺すなというライナのセリフ。少し前のアウレオルスなら確実に無視したに違いないが、今の彼はその口元に自然な笑みを浮かべていた。

「なに、どうせこやつらを殺したところで、別の部隊が出てくるだけだろうからな。貴様の意見をここは尊重するでしょう。・・・インデックスもいるからな」

「おお、さすが話がわかるなアウレオルス!!」

「・・・心がけは大事」

「うん、無闇に殺すのは良くないかも」

上条や姫神、インデックスからも評判は上々のようだった。

「貴様!! 我らを愚弄するか!!」

どうやら気に障ったのは相手の方らしかった。

先ほどよりも殺気の密度が濃くなるのをライナは肌で感じた。そつと姫神を庇うように立ち、上条へと目配せをする。それを受けた上条も、頷きながら背後にインデックスがいるように動いた。

「やれやれ。そう殺気立たれると僕としても居心地が悪い。それにまさかインデックスを巻き込むつもりなら容赦はしないよ?」

ステイルが軽薄な口調で挑発する。相変わらず煙草を吸っているので敵意は感じられないが、それでもインデックスに少しでも危険が迫るようなら瞬時に目の前にいる敵を殺すに違いない。

「ならばさつさと下がらせるこの魔術師風情が！！我らは裏切り者の錬金術師にしか興味はない！！」

激昂するパルツイバルに、ステイルは冷徹な目を向けた。

「君は僕ら魔術師に喧嘩を売ってるのかい？ローマ正教にだって魔術師はごろごろいるだろうに」

「いいから黙っている！いや、ついでに貴様らも殺している！」

その子供のような発言に、ステイルも呆れたようだった。

「血の気の多い騎士のようだね君は。さぞかし仲間から嫌われ者だったのだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それが引き金となったのかどうかはわからない。

だが無言となったパルツイバルが大きく後ろに下がったことで、何かを起こそうとしているのがわかった。

そしてその隣にはいつの間にか、他の者と同じような装備をした男が立っていた。同じような装備とは言っても、その新しく現れた男のほうが、他の者よりも意匠が凝られた鎧を着ていた。

（おそらくはパルツイバルよりも位が高い男だ・・・）

彼は何をしに出てきたのか。

ライナ以外の者にもそれは分からなかった。

「私の名はローマ十三騎士団の一人、『ランスロット』のビットリオ・ガゼラである。貴様らには、悪いがここで死んでもらう」

「必然。この街に住む能力者を巻き込むつもりか？」

「貴様とて同じ立場にいたはずであるアウレオルス・イザード。

先ほどの会話は聞かせてもらった。すでに彼らは貴様と無関係な関係ではなくったのである。ならば殺すしかあるまい」

「それが騎士のやることかテメエ！！」

会話に割り込み、上条が咆える。彼にとって、騎士とは忠節を尽くし、礼節を尊ぶ勇敢な者たちのことだ。それなのに目の前の男は関わった人間すべてを皆殺しにしようとしているのだ。これを許せるほど、彼は寛容でも温厚でもなかった。

「さっきまでの話を聞いてたならわかるはずだろ！？こいつはもう悪いことはしねえ。つまりそれはお前らにとって敵じゃなくなっただけだ！！」

「小僧のくせに威勢だけはいいのであるな。だが、これは我々に下された指令。任務を遂行することこそが我々の本分であるがゆえに」

「ッ！！頭がカテーんだよ。人を守ることは騎士の本分じゃねえってのか？」

「・・・騎士とはいえ、善人ではない。ましてや我々はローマ正教の保護下にある身。然れば当然任務は果たされるのだよ」

ビットリオからすればそれが当然のことなのだろう。

「・・・流される血は全て、明日の礎^{いしすえ}になると思え」

それがローマ正教の騎士団が掲げる理想。

——明日のため。

ただそれだけが、彼らの根底にはあった。

「釈然としないが。まあ私とて昔はローマ正教にいた者だから、気持ちにはわからないでもない。だが、今は違うがな」

「僕としても理解しかできないね。指令なんかより大事なことはあるし」

ちらり、とインデックスに目を向ける錬金術師と魔術師。

（いや、愛されてるな、マジで）

まあその考えはライナも同じだ。

かつてローランド最高の魔術師と呼ばれたものの、隠成師だった頃は任務を放棄したことは数知れず、他人の任務を妨害したことでだって両手に余るほどだからだ。

「一応、そちらが本気で来るといふのなら、魔法名を名乗っておこう」

敬意を表す意味でも、魔法名は重要だ。もっとも、ほとんどの場合は殺し名として扱うのが一般的だが、今日は目の前にいる敵を殺さないと決めているので、形式的なものに過ぎない。

「我が名譽は世界のために」^{H o n o r s 6 2 8}

「我が名が最強である理由をここに証明する」^{F o r t i s 9 3 1}

「じゃあ私も。——献身的な子羊は強者の知識を守る」^{d e d i c a t u s 5 5 4 5}

ちなみに最後に言ったのはインデックスだ。ライナも上条も、彼女の魔法名を聞くのはこれが初めてであり、少し新鮮さを感じた。

「ふん、余計なことを。死ね貴様ら！！」

ビットリオは腰に下げた大剣を一度天井へと掲げた。大剣が淡い赤色に輝く。

（まるで何かのアンテナみたいだな）

と、ライナは思った。

そう、まるでキファがエスタブルの魔法騎士団を呼び寄せるときに使った魔法のような――。

ライナの第六感が頭の中で警鐘を鳴らした。

「これは――・・・」

何かを感じ取ったのか、インデックスの口から呟きが漏れる。アウレオルスやステイルも同様に驚きを隠せない様子だった。

嫌な胸騒ぎを感じたライナである。

「なあ、どうしたんだインデックス？それにステイルとかも。ビットリオが何したかわかるのか？」

「グレゴリオの聖歌隊による聖呪爆撃・・・」

答えたのはインデックスだった。信じられないものを見るような目で、彼女は説明を続けた。

「背信者の塔。バチカンの大聖堂という世界最高の霊地を用意し、3333人分もの聖呪を用いて、世界中のいかなる地域も正確に灰へ還す神技なんだよ」

「ちっ、まさか『真・聖歌隊』グレゴリオ＝クアイアを使うとはね。少数だったから何か裏があるとは思っていたけど、こんな手段を用意していたとは迂闊だったよ」

さすがにその魔術の威力を知っているのか、インケンディウス魔女狩りの王を出そうとはしない。出しても無駄だということなのか。

「それってやばくね？」

「やばいかも」

「俺達、もしかして死んじゃう？」

「・・・かもしれないね」

「どうする？」

「とうまの右手か、幻想殺しアウレオルスのアルス・マゲナ黄金練成に頼るのは？」

「・・・それがやっぱりベストな案だよな」

ライナは話に上った二人を見る。上条は不安そうに右手を見ているのに対し、アウレオルスは冷静さを失ってはいないようだった。ともかく。

「なんとかしてくれ！！」

アルファ・ステイグマ非力な複写眼では、構成を解析するぐらいしかできそうになかった。

（３３３３人がかりの魔術なんて、解析できても使えるかああああああ！！！！）

規模がでけえよバカ！と思わず突っ込んでしまったほどだ。

この間、実に一分に満たず。

悶えるライナの耳に、ビットリオのとつとつ訥々とした声が聞こえてきたのは、もう悪夢としか思えなかった。

「ヨハネもくしろうく黙示録第八章第七節より抜粋——」
まるで何かの合図のように。

「――第一の御使、^{みつかい}その手に滅びの管楽器の音^ねをここに再現せよ！」

魔術の効果なのか、遠吠えのように、淡く輝く大剣はラッパみたいな音を夜空に響かせ、

瞬間、あらゆる音が消えた。

夜空に切れ切れに漂っていた雲が、根こそぎ吹き飛ばされたように見えた。

それは、傍目に見れば巨大な雷に見えただろう。天上から下界に向けて放たれた、太く巨大な光の柱。だが、その雷は血のように赤い。何百何千と束ねられた赤い火矢が、束ねられ融合し、一つの巨大な槍と化して。

――紅蓮の神槍は、三沢塾の前に立つライナ達に振り下ろされた。

第二十七章 とある希望とローマ正教？（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。見つけました場合はぜひ、ご指摘いただけますようお願い申し上げます。」

終わらない。

なぜだ、なぜなんだ！？

不可解な現象に頭を悩ませている青年の姿がそこにはあった。

というか僕だった。

次こそは終わらせたいな——ってミサカはミサカは幻想を抱いてみる！！（笑）

頑張ります。

でも四月からはホントに忙しくなりそうで、おそらく今までパソコンからの投稿だったのが、携帯からに変わるでしょうし、次に投稿できるのは5月入ってからだったりするかもしれません。

マジですみません！！

ですが、そのまま放置なんてことは絶対にいたしませんので、心優しき読者の皆さんにはご了承していただけたらと思います・・・。

第二十八章 とある希望とローマ正教？

ローマ正教が誇る『真・聖歌隊』グレゴリオ・クア・アイア。

紅に彩られた閃光と膨大な質量を伴ったその魔術は、見上げていたライナ達へ轟音とともに降り注いだ。

アルファ・ステイグマ
複写眼で解析してみるも、その魔術を止めることはできない。
できるのは――、

「うおおおおおおー！！」

上条当麻。

彼がその右手に持つ『イマジンプレイカー幻想殺し』。

それを天からの閃光に対抗するかのよう、上空へと突き上げ――

一瞬の後、その右手と魔術がぶつかり合った。

しかし片方は333人によるチカラで、もう片方は1人によるチカラだ。

拮抗は難しかった。

「おい！物量が大きすぎて相殺できてねえ！このままだと押しつぶされるぞ！！」

光に押しつぶされないように自らの手を掲げつつ、上条が叫ぶ。

「当然。このままでは我らは消し飛ばされるのみだろう」

その上条の右隣に立っていたアウレオルスが、どこ吹く風で上条に言葉を返した。まだ彼は何もしようとしていない。いやそれどころか目を閉じて悠然と構えているだけだ。

「てめえアウレオルス！なにボケーっと突っ立ってんだ！！『消し飛ばされるのみだろう・・・』なんてクールに考察してないで、さっさと黄金錬成を使えよ！！」

「そうだぞ今は生きるか死ぬかの瀬戸際なんだぞ！！」

上条に便乗するようにライナも声を張り上げた。その彼は、自信アルファ・ステイグマの複写眼で解析した真・聖歌隊の魔術に対する反魔法を発動し、できる限り多くの魔術を相殺しようとして努力しているのだ。今も、上条と同じようにして掲げられた腕の先には巨大な魔方陣が展開され、魔術を吸収・破壊している。

それなのに！とアウレオルスに対して文句の一つでも言いたくなるはずである。

「いや、我が魔術を使うのはいいが、どういう対処をすべきか迷っているのだけに過ぎん。・・・ふむ。やはりここは自業自得という言葉に即してこの魔術、そっくり術者の元へ送り返してやるう」

「待てええええええええい！！」

上条とライナの声がかぶった。

「どんな非人道的な思考をしてるんだよ！？フツーに考えて術者の皆さん消滅しちゃうだろーがっ！！」

「当麻の言うとおりだ！さすがにそれはまずいって！な、インデックス達もそう思うだろ？」

身を縮こめて、攻撃に当たらないように地面にしゃがみ込んでいたインデックスと姫神は、その言葉を聞いて首を縦に振った。

「しかし・・・因果応報ともいうだろう？敵意の無い我々に対し、周囲のことも考えず魔術を仕掛けてくるヤツラの方がよほど非人道的ではないか？」

「いいから！それは禁止でっ！頼むからさっさとこの魔術を消してくれよ！そろそろ右手がやばい！」

途切れることの無い真・聖歌隊莫大な光の奔流によって、すでに上条の右手は限界を迎えていた。さらには裁ききれなくなってきた魔術の一部が顔や腕を掠め、そこから血が流れ出していた。それはライナも似たような状況だった。

「ならばとりあえずは当麻、お前の言に従うとしよう」

インデックスも賛成していたようだしな、と言付け加えて、アウレオルスは懷から一本の鍼を取り出す。

それを自分の首筋に向けて一直線に突き刺し、目を閉じる。

りん、と錬金術師の周りだけ空気が変わった。

あたかも嵐が起こる前のような、それでいて奇跡が起きる時のようなそんな感覚が辺りに放出される。

超然と、冷然と、純然と、森然と、自然と――。

「――消える」

ただ一言。それ以上の言葉は必要なかった。

「消す」という作業はこの錬金術師にとってさほど難しいことではない。例えば人を1人消そうとしても必ずどこかで実行が困難になるか、もしくは実行できたとしても、不備があつてその事が公の事となってしまうことがほとんどだというのに。

時間にして数秒。

それだけあれば完全に「消せる」のだアウレオルス。イザードは。

唱えられた言葉に従い、圧倒的な脅威だったローマ正教の大規模術式はいとも簡単に霧散した。

3333人も的人数で構成されていた魔術が1人の魔術によって消滅したのだ。

と、今までずっと腕を掲げていた上条とライナが、気の抜けたようにばたりとその場に倒れ付した。

上条は仰向けとなつてゼーゼーと肩で息をしており、ライナの方も「もう無理まじ面倒くさいってこのまま寝ようかそうしょくか・」などと呟きながら目を閉じ、夢の世界へと旅立つ準備を整えていた。

心配に思い駆け寄ったインデックスと姫神も、ライナの態度には呆れた。

「ライナってば、まだローマ正教の人は残ってるんだよ？」

「・・・彼らにはあまり上条君は役に立ちそうに無い。つまりあなたかアウレオルスしか動けないってこと」

「うえ？まじで？まだあいつら残ってるの？もういいって無視だ無視。あとはアウレオルスにでも任して傷の手当てをどこかでやって帰ろうぜ」

自分の治癒魔術でさえもう使いたくないとばかりに気だるげな態度で言うライナ。

「ただの高校生、にして無能力者^{レベロ}である、わたくしめには、もう、仕事はないと、いうことで、ございますか・・・？」

ライナを最後の仕事に駆り出そうとしている二人の様子に、ほつとしていいのか空しくなればいいのかわからない上条である。その息も絶え絶えな姿はライナから見てどこことなく残念そうだった。

「貴様！我らが魔術を消しただと・・・？一体何をしたツ！？」

そんな会話の最中に割り込んできた大声に、ライナ達は意識を向けた。

見れば、ビットリオやパルツイバルを含めたローマ正教の騎士達が、一斉に腰の大剣を引き抜き、アウレオルスに向かって突きつけ

それは勇氣ある果敢な行動というよりは、目の前で起こった現象が理解できなかったが故の恐怖を感じての行動に近かった。

もちろん一部始終を見ていた彼らである。最後にアウレオルスが行った行動が、魔術が消された原因であると直感した。したのだが、しかしそれだと理解ができない。あくまでも自分達は敵の抹殺を目的として放った攻撃であり、それはどうしようと抗えないもののはずだった。

事実、真・聖歌隊が放たれた時点で、騎士達は勝利を確信していたというのに。見事その予想は裏切られたのである。

「何をしただと？それすら知らずに私を抹殺しに来たというのなら、即刻君達は立ち去るべきだと忠告しておこう。少し前の私なら問答無用で皆殺しにしたかもしれないが、これでも変わったのだな。慈悲ぐらいは与えてやってもいい」

傲岸不遜な物言いに加え騎士達を見下した態度に、怒りを覚えな
い者はいなかった。

「偉そうな口を利くなこの裏切り者が！私は何をしたのかと聞いたのだ！」

「その質問に、今まで素直に答えてくれた者がいたのか？」

「ッ！？小癩な……！全員かかれえええええ！」

激昂したリーダーの合図を機に、一斉に剣を錬金術師の体につき立てようと疾駆する騎士達。

だがその動きよりも、アウレオルスの発した言葉のほうが何倍も速かった。

「……ここで起きたことは全て忘れろ」

ぶつんと。

今まで猛然と駆けていた騎士達の体から力が抜け、のそのそと剣を仕舞い始めた。

先程までの感情を強制的に忘れさせられた者の末路。

人形のような動作で撤収作業をする彼らに、アウレオルスはさらに言葉を続けた。

「いや、忘れずとも良い。ただし、“錬金術師アウレオルス”イザードは自分達の手によって抹殺した”と上に報告しろ”」

……さすがにこの言葉を聞いたとき、ライナ達は（便利す

ぎるだろ（だよね）と思ったとか思わなかったとか。

ともかく、全てが終わった。

アウレオルスは現場の修理をしたあと、学園都市を出て旅をするとの考えを変えずインデックスやその他の面々と挨拶を交わして1人街を出て行つたし、姫神についてはいろいろあつて小萌先生が世話をすることになり、更には上条の学校に転向することが決まつた。

上条とライナは噂で腕のいい医者がいるという病院に行き、カエル顔の担当医を見てに大いに驚いた。が、しかし！世界にはぬらりひよんのような頭を持つじじいがあるそうなので（事実かどうかは不明だ）、それと比べればただ顔がカエルに似ているというのは大した問題じゃない！という結論に至つた二人である。ちなみに学園都市に住民登録をしていないライナについても、特に追求せずに治療してくれたのは幸運なことで、また、「怪我をしたならまた診せに来なさい。生きている限りはどんなに重症だろうと治してみせるよ」と言い切つた彼が格好よく見えた、ライナは後に語っている・
・。

第二十八章 とある希望とローマ正教？（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。見つけました場合はぜひ、ご指摘いただけますようお願い申し上げます。】

どうもお久しぶりです！

最後の投稿で言ったとおり、五月に入ってからからの投稿となっていました。

楽しみになさってくださいっている方々、本当に申し訳ありません・
・！><

正直、飛ばしすぎた感が否めません。もう少し文章を増やすべきだったかと。

時間がもつとあればいいのと思うのは私だけでしょうか？

とりあえずはこれでまた一段落です。

まだ書いてない話があるので、できる限り早くその話を投稿できればいいのですが。

次がいつになるかはわからないので、気長に待っていていただければと思います！

第二十九章 とある過去と超電磁砲（レールガン）？

夕方となり、そろそろ日も暮れようかという時間帯に、その男は一人歩いていった。

行きかう若者たちはまだ歳が若いからか、それとも学校が終わり自由な時間となったからか、その足取りは男からすれば軽やかに見えた。聞こえてくる話し声にも楽しい響きが混ざっているようであおさら男はうんざりする。とはいえ、自分も今はとあるマンションに帰宅途中なのであつて、さつさとシャワーでも浴びて寝てしまえることを考えると、もうそんな周りの雑踏すら気にならなくなってくるのだから不思議だ。

姫神の一件が終わって、インデックスとスーパーで何か買ってから帰る上条と別れ、帰路についている男——ライナ＝リユートは、そんなことを考えていた。

——「ぱちん」という音が聞こえた。いや、「ぱちん」だったかもしれない。ともかく、何やら空気が帯電しているような気配。

（俺の知り合いで、電撃系の能力者ね……はは、一人しかないや）

ライナは嫌な予感とともに、溜息をつきながら気だるげに振り返った。

「はあ。やっぱりお前か。・・・ビリビリ」
「ビリビリ言っな!!」

私の名前は御坂美琴だつて何度言えば分かるのよ、うがー!と、
前髪からビリビリ言わせながら吠える美琴。これでも電撃使いにし
て、学園都市3位の超能力者にして、超電磁砲レールガンの異名を持つ常盤台
中学のお嬢様である。

「だつてビリビリ言ってるしさ。つてそんなことはどうでもいいや。俺に何か用か?・・・黒子も一緒のようだけど」

美琴の後ろに付き従うようにしていた黒子にも、ライナはその緩んだ瞳を向けた。俺は今猛烈に眠たいんだという意志を込めて。そうすると美琴は不思議そうに首を傾げた。

「あんたつていつも眠たそうにしてるけど、今日はなおさらひどいわね」

「ふん、所詮は昼寝男ですの。気遣いは無用ですわよお姉様。では、さつさと本題に入りましょうか」

美琴の呆れた様子よりもひどい事を言つた黒子は、そこで大きく一息吸つて、

「あなたは何者ですの?」

と聞いてきた。

「あなたは何者ですか？」

隣に立っていた黒子がライナにそう言った。

御坂美琴と白井黒子は、ライナに対して疑問を持ってから今までずっと当の本人を探していたのだ。生憎というか、幸いというか、ライナの服はとも目立つ。本人はあまり気にしていないようだが、学生である自分たちの目から見れば明らかに周囲から浮きまくりである。名物と化しそうなほどに。まあ、おかげで見つけるのは意外と簡単だったわけだが。

「何者って？名前はライナ＝リユートだって言ってるじゃん」

「それはとづくに知ってますわー！！」

どこまでも怠惰で飄々としたライナの態度に、黒子が苛立っている。

「知りたいのはあなたの能力ですわ。お姉様との戦いでもそうでしたけれど、ライナはいくつかの属性を使いこなしていましたよね？ここ学園都市ではそのような事はできませんの。ええ、絶対にできませんわよ？あくまで属性は一人に一つだけ。わたくしであればテレポート『空間移動』、お姉様であれば電撃系統の能力といった具合に」

「できるのはそれを応用することだけよ。だから私たちはあんたを探し回ってたってわけ。黒子によると、あんたの能力は書庫バンクにも

なかったみたいだし。もしくはもつと上の権限を持つてたら見られるところにあるのかもれないけどねー。・・・どのみち怪しいことには変わらない」

この間、ライナは終始無言。というより目が泳ぎ、冷や汗を垂らしているようで。相手の痛いところを突いたらしいと美琴は確信した。やはりこの男は何かを隠している。

「で、何から教えてくれるのかしら？」

腕を組み、片目で相手を見やる。黒子も逃がすまいと一歩近寄り、ライナに圧力をかける。

「えー、何この状況。話すこと前提？俺ってば今まさにピンチ！
？話していいのかこれ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

目の前の男も何やら困っていた。しかし、

「おーい誰かー。この状況だし面倒なことになる前に俺のこと話しちゃうぞー。いいのかー？いいよなよし話そう」

ものすごく適当だった。秘密のことなのではなかったのか？

（まあ話してくれるならいいわ何でも）

おそらく自分たちは呆気にとられた顔をしていたのだろう。ライナが訝しげにこちらを見た。

「お前ら、俺と一戦交える気じゃなかっただろっな？」

「え、えつと・・・はは、そんなわけないじゃない。ねえ？黒子？」

「お姉様はライナと戦える口実になると言って悪意ある笑みを浮かべておりましたわ」

「こおんの裏切り者——ッ！」

自分に忠実なはずの黒子がまさかここで裏切りをするとは思わなかった。たまには反旗を翻すことがあるらしい。

（よし。後でお仕置きね）

ぐぬぬ、と息巻いていた美琴を見て、ライナはまた溜息をついた。

「はあ、まあいいや。で、どこで話そうか？」

教えてくれるというなら有難い。美琴と黒子は互いに頷き、近くのカフェを指差した。

「長い話になりそうだし、あそこで話しましょ」

「代金はそっち持ちな。ってか話してもいいけど後悔はするなよ？お前らとは文字通り違う世界の話だからな。明るい内容じゃないぜ？」

どうやら一応は心配してくれているらしい。意外とやさしい一面があるのかお感心しつつ、美琴は口元に笑みを浮かべた。

「臨むところよ」

不敵な笑みだと自分でも思った。

第二十九章 とある過去と超電磁砲（レールガン）？（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。」

お久しぶりでございます。

楽しみにしてくれている方々にはお待たせしました。

4月以降、パソコンに触れる機会がなくなり、こうした時間のあいた投稿となってしまうてすみません。

次の話では、ついに美琴にライナ的能力がばれます（笑）

まあばれてどうなるというわけでもありませんので、次の話は今回以上に短くなるかと。

ご了承ください。

第三十章 とある過去と超電磁砲（レールガン）？

そこは洒落たカフェだった。学園都市製であることを思わせる座り心地が最高な椅子とシックなテーブルは明るく、それでいて落ち着いた雰囲気醸し出しており、頭上にあるライトからはオレンジ色の穏やかな光が漏れ、店内を居心地の良いものとさせていた。

そんな店内のとある一角で、コーヒーを片手にライナは、相変わらずの寝ぼけ眼はそのままに自らがいた世界のことを語っていた。

いわく、メノリス大陸のこと、ローランド帝国のこと、王様となつたシオンや相棒のフェリスのこと、アルファ・ステイクマ『複写眼』のこと。そしてキ

ファヤタイルやトニーについても・・・みずからの恥ずかしい二つ名は黒歴史として封印しておくとして、ライナはほとんどのことを目の前に座っている二人の少女——御坂美琴と白井黒子に話した。なぜそこまで話そうと思ったのかは自分でもわからない。

（でも、信頼も信用もできそうだしな）

当麻やインデックスに通じるものを彼女たちから感じ取ったからだろうか。ライナはぼんやりとそんなことを考えていた。

語り終えてみると、彼女達は困ったような悲痛な表情をしていた。例えるならそう、まだ読んでいなかったミステリー小説の内容を友達に聞いたら、予想以上に暗かったというべきか。

良い思い出というのは学生時代のことか、フェリスと一緒に旅をしたことぐらいじゃないかもしれないかもしれない。

「ん？どうかしたのか？」

あえて彼女達にそう聞いてみる。

（そりや俺が話した内容はとてもじゃないけど楽しめるものじゃないよな）

これでもし笑われたら、そいつは人格破綻者か、精神異常者か、ともかくこれ以上関わるべきでないのは明らかだ。即、友達をやめるべきだろう。

「いや、あんたってさ、意外と人生ブラックなんだなと思って」

「そうですね。正直に言くと驚きましたわ。・・・もし仮にその話が作り話だったのなら、小説家になることをお勧めいたしますぐらいに。ですが違うのでしょうか？」

「そうだな、全部ホントの話だ」

「で、その『複写眼』とやらの力でいろいろな魔法を使えるのよね？」

「そうそう。ほら、俺の目をよく見てみる。うつすらと五亡星が浮き上がってるだろ？これがそうなんだよな」

疫病神ともいえる瞳をライナは2人に見せる。鮮やかな真紅の五亡星を。それを見て美琴たちは感嘆の息を漏らした。

「へえー、よく見てみるとすごいわね。見事なもんだわ」

「向こうの世界じゃ言われなかったセリフだぜそれ。・・・恐くないのか？危険性はさつき説明しただろ？」

暴走。それが『アルファ・ステイグマ複写眼』の代償だった。一度暴走すればあとは破

壊の限りを尽くしたあと、魔法騎士団などによって殺される運命にある。唯一の例外として、暴走しても元に戻ることができるのがライナだった。その特異性により、一時監禁生活を強いられたがそれでも幸運の部類に入るぐらいだ。当時のローランド帝国の情勢下ではなおさら。

「んー、そりゃ暴走？したらアレだけど、よほどのことじゃないとそうならないんでしょ？それにこの世界・・・というよりも学園都市だって相当オカシイし、化け物みたいな能力者だっていれば兵器だつてごろごろしてるんだから、『アルファ・ステイグマ複写眼』ぐらい大したことじゃないわよ。」

「ジャッジメント風紀委員の立場であるわたくしからしても、特に危険性が高いわけではないように感じますの。要は、ライナ。あなたのその瞳の使い方次第ですわね。今のところ捕まえたりはいたしませんので、どうぞご安心を」

「・・・有難い話なのかわからないな」

向こうの世界とはえらく差があるようだった。それは同時にこの世界にも、いやこの街にすらそれだけ危険が満ちているということでもある。当麻やインデックス。それに美琴たちも住んでいるこの街に。

ただ、今のところは十分平和であるわけで、

「んじゃま、そういうことならこれからよろしく頼むな」

とりあえずは昼寝——ではなく、普通に帰って寝ることにした。いつの間にか夜になっていることもあり、当麻たちが自分の帰りが遅い事に心配してくれているかもしれない。

カフェを出て夜道をぶらぶらと歩きながら、ライナは一人上条宅を目指すのであった・・・。

ライナの後方で美琴が「そっぴえばあんなって今どこに住んでるのよ!？」という衝撃的事実に気付き、こちらに叫んできたが、めんどくさかつ――・夜で大声を出すと近所迷惑になるなと思い、代わりに手をひらひらと振ってその場をあとにしたライナである。

第三十章 とある過去と超電磁砲（レールガン）？（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。」

連続投稿！文章は短いですが・・・（汗）

こちらも一段落がつかしました。

ちよつとした小話程度感覚ですね。

さてさて、まだまだ私は暇ではないのです。

次に投稿できるのはいつになるのやらわかりません！！えっへん！！
・・・すみません。まったく威張れませんよね。

またいつか投稿するので楽しみに♪

第三十一章 とある相棒と一つの夢

――緩やかなまどろみの中から、声が聞こえた。

「ライナ」

「・・・zzz」

「おい、ライナ起きろ」

「んゝzzz」

「起きろと言っておるのだバカ者ッ!!」

ヒュオツという風切り音。

「ぬおおおお!!?」

無機質に振り下ろされた剣を体ごと捻るようにして回避する。

「な、何だ！？敵襲か！？」

慌てて跳ね起きて周囲を見渡すライナ。

（危機をマジで感じたぜ今の……。避けなかったら確実に俺の首と胴体がサヨナラする軌道だった）

果たして、敵は目の前に無表情に立っていた。
そいつはふとライナを品定めするかのように見てこう言った。

「ふむ。久しぶりだな、ライナ」

……。その端麗な容姿、その透き通るような声に、ライナは驚きを隠せなかった。何故なら――

「え？え？お前、フェリスか？」

もうしばらくは会えないと思っていたフェリスがそのいたのだから。

「……。どうやらまだ寝ぼけているらしいな。私のような美人は世界を探してもいないぞ！」

「スケールでかつー！！」

（世界って……。でも、確かに昔フェリスとこんな会話してたよな）

「……。冗談だ」

ぽつと頬を赤らめて呟くフェリス。ライナは彼女が本物の本人であることを確信した。

ちなみに、彼の頬には別に何の変化もなかった。

「じゃあ、マジでフェリス？何でお前がここに？つつーか、ここ何処だよ？」

ライナが驚きつつ辺りを見渡せば、一面に見事に咲き誇る花があり、遠くには海らしきものまで見える。どこかの崖の上だろうかとも思う光景であった。少なくとも、自分はこの景色を知らないし、わざわざ来た覚えもない。

「愚問だなライナ。私は今まで「愚問」というのはグッドモーニングの略かと思っていたが、どうやらこういう時に使らしいな」「危ないから！その台詞はお前の頭的にも、そしてこの作品にも危ないからよすんだっ！！」

何を平然と爆弾発言をしているのか。

「ふん。とにかくここは当然お前の夢の中だ」

「夢？しかも当然俺のなのかよ」

「そうだ。兄様に頼み込んで探してもらっているのだが、兄様の力を以てしてもお前を探すのは難しいらしい。何でも、違う世界に飛ばされたそうだからだ」

「おお？」

（そこまでわかるのか。さすがはエリス家の長男だな）

「そうなのかライナ？」

「ああ、その通りみたいだ。何せこつちには魔法は一般人には知られてなくて、でもきちんと魔術として存在するし、今俺がいる学園都市ってところでは『科学』っていうのがもの凄い発展してるんだ。んで、能力者つてのを育成してる」

「カガク？ノウリヨクシャ？何だそれは？」

「あゝ。そうだな。『科学』は、一概には言えないけど、思考や実験を繰り返して、機械や電気系統の技術を駆使して、豊かで便利な生活を生み出すもの・・・かな？で、『ノウリヨクシャ』つてのは、魔術師とか魔法使いに似たような存在で、俺ら魔法使いにはいくつかの属性の魔法が使える。それに対して『能力者』は、自分だけの^{パーソナル・リ}現実を見出して、何か一つの系統の能力が使える者のことだ。効果は魔法と似てるし、そいつの努力次第ではいろいろな事に応用もできる。」

「理解しづらいな。それにアバウトだ」

「仕方ねえだろ。でもとにかく凄いんだよ。人を殺すための武器には銃や爆弾なんていう厄介なものもあれば、空を飛ぶためには飛行機とかジェット機とかいろいろあるんだぜ？しかもどれも魔法的な要素は一切なし」

本当、一言では言い表せない。

「理解不能だライナ」

「まあ、こればかりは実物を見ないとわからないだろうな。ま、そんなことはおいといて。何でお前が俺の夢の中に出てくるんだ？」

「兄様がな、夢の共有ならいろいろと準備をして行えばできないこともないらしい」

「凄すぎだろッ！？」

（何て奴だ・・・。やっぱり、俺以上の化け物なのかあいつは？）

「なあライナ・・・お前は元気でやってるのか？」

なんだかフェリスが自分を心配してくれているような気がした。
少しは寂しがってくれているのかもしれない。

「まあ、どうにかな。こっちの世界でも親切にしてくれる奴と出会えたし、今はそいつのところに居候してるんだよ。名前は『上条当麻』。黒のツンツン頭してて馬鹿で不幸な男だけど、善い人間だつてのは保障できる」

「・・・そうか、どこかで無様に野たれ死んでいるんじゃないのか」

「それ夢に出てこれねえだろーがっ！！え？心配してくれてるんじゃないかった！？」

「何でお前の心配をこの私がしなければならんだ。そんなことを考えるぐらいなら、如何にウィニット団子店の店舗を増やすべきか考えたほうが世界のためだ！」

つん、と横を向きながら慔然とするフェリス。

（それにしても、世界のためにはなるかもしれないが、人の命の心配よりも団子って・・・。相変わらずフェリスはフェリスだな）

ただ、少し期待した自分が恥ずかしいと思うライナである。

「まあ、それならいい。とりあえずは大丈夫なんだな」

「ああ。こっちはこっちで危険に満ちてて、もしかするとそっちよりも危ないかもしれねえけど、少なくとも俺の複写眼アルファ・ステイグマの事を知るやつはほとんどいないから、どうにかやっていけそうだし」

当麻も含めて、何人かには『眼』のことは話しているが、それで

怖がられたり攻撃をされたこともない。むしろ興味深そうに眼を覗き込んでくる始末だから困っているぐらいだった。それにあいつらなら、この秘密を誰かにばらすこともないはずだ。

「ふむ、そうか。では最後に一つだけ言っておこう」

そう言っ、フェリスは居住まいを正すようにして、一度顔を伏せて咳を一つした。兄のルシルのチカラも無限ではないのだろう。そろそろ夢が覚めようとしているのかもしれない。

「何だ？」

対するライナもどことなしか緊張しながらフェリスに相對する。さらに10秒ほど時間をおいて、意を決したようにフェリスは口を開いた。

「ライナ、私はお前を心配している」

「どっちだよ！？さっきと言ってることが真逆じゃねーかつ！！」
・・・とはライナは言えなかった。
だってその表情が――

「だから、いつか必ずお前に会いに行こうと思う。どんな手段を使ってもだ」

「最後に一つと言いつつ、一つじゃないよな!？」ともツツめなかった。

だってその仕草が――

「だからお前は私が会いに行くまで死ぬ気で頑張っている。眠く
たってしっかりと働いておけ。それが無事に生きて帰ってこい。だ
って、私は――」

言葉がだんだんと消えていくようだった。世界が何かに吸い込まれているかのように遠ざかっていく。色彩豊かな世界が純白の光へと飲み込まれていく。

それでも、フェリスの声だけは不思議と響き渡っていて、

「私はお前の相棒だからだ」

ライナの意識が遠くなる。最後に、彼女はこう言ったように聞
えた。

「また、一緒に団子を食べよう」

その言葉は痛いほどライナの胸に突き刺さった。ああ、自分ほんなにも心配されているのかと思って、温かな気持ちになる。

「ああ、必ずな」

その、ライナの言葉がフェリスに届いたかどうかはわからなかったが。

意識の片隅で、夢の中の彼女が少し笑ったような気がした。

第三十一章 とある相棒と一つの夢（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。

見つけました場合はぜひぜひご指摘いただけますようお願い申し上げます。」

お久しぶりです！><

久々の投稿となりました。

待たせた方には申し訳ありません！！

次がいつできるかわかりませんが、またこうして話を載せようと思っております。

第三十二章 とある日常と超電磁砲（レールガン）

「良い夢だったなあ」

久しぶりに見たフェリスの姿。何も変わっていないくてほっとした。さすがにライナもあれが悪い夢だったとは言えない。

「ん？どうしたって？」

朝食を食べている当麻が聞いてきた。学校の制服を着ているところから察すると、どうやら相変わらず補習授業に行くらしい。

（すると・・・つまりまだ朝なのか）

そういえば朝日が目に眩しいし、窓の外を見れば青空が広がって

いる。

「いや、何でもねえよ」

「嘘付け！昔の『相棒』とやらが夢に出てきたんじゃないのか？」

「うお！？無能力者で不幸な当麻がついにエスパーを開眼しただと！？」

「うるせえ！しかも不幸は余計だろうが。・・・当てずっぽうで言ってみただけだって」

「そうか。残念だったな」

「別にエスパーになれなくてもいいから！ってか、そんな夢マジで見たのかよ。どんな内容だったんだ？」

そう言われて、ライナは先ほどの光景を思い出してみた。

「簡単にいえば、話しただけだ」

「普通かよ！！」

「何を期待してるんだよお前は・・・」

そんなこんなでギヤーギヤー言い争っていたせいか、

「とうまー？いつまでご飯食べてるのー？今すぐ学校に出かけないと「ちこく」すると思うんだよ」

インデックスからそんな言葉がかけられ、はつとする当麻。すぐさま時計に目を向ければ、それは無残に時を刻んでいた。

顔を青ざめさせる不幸少年は、「うわああー、やべええー！ーッッ！ー」という残響を響かせながらダッシュで自宅を飛び出していった・・・。

「ご愁傷様」

手を合わせる居候の二人。
何というか、いつもの日常だった。

「何の目的もなく家を出てきたが・・・ふああ、やっぱり眠いな
」。よし、どうか寝る場所探そう！」

あのまま寝るのも何故かできず、なんとなくじっとしていられなくなつて、インデックスを一人残し、今は街中をぶらぶらと歩いている最中である。

そしてどうでもいい事にやる気を見せていた。
と、そんなライナの耳に、

「うおーい。ライナ「リユートじゃないか」」

のんびりとした声が聞こえた。

（この声は・・・そう、上条宅の隣に位置する部屋の住人にして上条のクラスメイト、土御門元春の義妹のもの！）

「ん？どうした舞夏」

ライナとは時々こうしてばったり出会う程度の仲だ。

振り向いたライナの前には、予想通り学園都市製お掃除ロボに正座姿で乗り、自分のほうへ向かってくる舞夏がいた。

（どうしてそんなロボを意のままに操って移動ができるんだよ。

つか、俺にも教えてほしいくらいだ

ぐっ！いや、

でもそれだと大の大人が小さなロボットに器用に座って移動しているという、他人の目に触れれば即、警備員アンチスキルが風紀委員ジャッジメントに通報されち

まう事に！！）

メイドさんはなんでも着こなせて、そして器用になんでもこなせるといのか——！とライナが驚愕しつつ馬鹿な事を考えている間に、舞夏はライナの元へ辿りついた。

「いや別にー。メイド修業中に偶然通りがかったら、こんな朝からは起きていないはずの人物を見かけたからさー、一応声を掛けてみたってわけなのだよ」

ちよつと失礼な奴だった。皮肉か！？・・・いや、事実だけだな。

「なんか夢を見てさ。それに起こされたってわけでもないけど、

目が覚めちまってよ。まあ、今はどこか眠れる場所を探し中だけだな」

空は晴天。

夏の日差しは最近は特に絶好調のようで、ひっきりなしに熱波を浴びせかけてくるもんだから、自分が吸血鬼とかゾンビとかいう存在だったら今頃燃えたり干からびたりして死んでいるんじゃないかとすら思う。

「ふーん。ならあっちの公園にいい具合に木陰のベンチがあったから、そこならマシだと思うぞー」

「なぬ！？それはナイスな情報だっ！！」

さっそく行ってみることにしよう。このままだとマジで倒れそうだった。

「じゃあな舞夏！そこ行ってみるわ！お前の金髪グラサンの兄貴にもよろしく言っておいてくれ！」

「相変わらずライナの睡眠欲は人の何十倍もあるよなー。感心しているのか悪いのかわかんないけど、まあいっか。またなー」

そう言うのと、舞夏は足の下の機械を扱って、どこかへと去って行った。未練とか名残惜しさとか、あっさりと断ち切るタイプなのかもしれない。

まあ、それだけライナとの会話にそれほど中身がなかったこともあるだろうが。

ライナも舞夏の教えてくれた方向へと足を向けた。図書館とかも空調設備が整っていて、外よりも格段に寝やすいだろうが場所がちょっと遠いし、ここは素直に公園のベンチに寝転ぶのも悪くはないに違いない。

誰かがそこにいたら蹴散らすほどの気迫を放ちながら、ライナはそこへと向かったのだった。

舞夏と別れて歩くこと数分。目的のベンチはもうすぐそこに見えるていた。

近くには自動販売機もあるようで、中には冷たそうなジュースが並んでいる。

後で飲もうと決め、やっとこさライナはベンチで休もうと手をかけ――

「あれ？そんな変な格好してる奴、誰かと思えばやっぱりライナ？」

――た姿勢で固まってしまった。

冷や汗が背を伝う。

おかしいな今は夏なのに・・・なんていうジョークさえ思いつかない。

先ほどは無害な舞夏の声であったが、今回のこの声の主は・・・。

（ちつ。さつきの奴には振り向いても良かったが、こいつは別格！こっちは・・・）

「いいえ、人違いです」

冷然とした態度で告げ、見向きもしないのが正解！・・・だこのときのライナは半ば本気で思っていた。

軽く、『ぷちん』。

「あれ？何か背後でいかにも堪忍袋の緒が切れたような音が？またまた、そんな沸点の奴がおりますかっての。ははははは、んな馬鹿な！？」

ぱつと振り向いたライナの目に映るは、雷撃をその全身から放ちながら此方を今まさに雷撃の槍で身を貫かんとする常盤台中学のお嬢様の姿。

ちつともお嬢様じゃない態度と攻撃性を示すかのように、怒る彼女は無抵抗な悪魔ライナに鉄槌を下そうとして。

「馬鹿はアンタだあああああああ
ツツ！！！！」

文字通り目が覚めるような、いや覚めすぎてそのままの世にでも行きそうなぐらいの光の奔流をライナにぶつけてきた。

ビリビリッ、ズガンッ！！

「うおお！？」

首をとっさに捻り、迫りくる雷撃をかわす。
すり抜けていったソレは公園の幹に当たり、まるで落雷にでも当

たつたような末路を辿った。そんなものを人の頭に無造作に放ってくる奴なんて、ライナの知り合いには一人しかいない。

「おいビリビリ！危ねえだろ！」

泣き目になりながら言うと、美琴は唇の端を吊り上げ、

「もう一発いつとく？」

脅しをかけてきた。

「わかったから美琴！とりあえず落ち着けて！！」

なんで出会い頭に殺されかけなくてはならないのか。

いつから俺の日常はそんな危険に満ちたものになってしまったのだろうか。

原因は目の前にいる奴のせいなのは明白だったが。

「ちゃんと手加減はしといたつての。アンタが無視しようとするから悪いんじゃない」

わかってないみたいな表情でかぶりを振る美琴。

「木を一本ダメにしといて手加減もクソもあるかあああー
ーッ！！」

「まあいいじゃない。しかもどうせアンタなら死なないでしょう？その服の効果とかで」

「いや、頭に直撃すりゃ死ぬから！ったく、まったくもって嫌な信頼関係だな。で、お前はこんなところで何をしてるんだ？俺が居候させてもらってる当麻・・・いや、学生はとくに学校に行

ったけど？」

「・・・ちよつといろいろあるのよ。そんな馬鹿なヤツと一緒にしないでくれる？ 大方そいつは授業サボってたとか頭が悪いとかで補習に行ったのかもしれないけど、私はむしろ優秀な方なんだから。伊達に常盤台中学で超能力者^{レベル5}やってないわ」

「さすがだな。随分と余裕みたいで何よりだよ。名実ともにってやつかねえ。・・・あとは性格さえ良けりゃいいのに」

「なんか言った!？」

「ベツニナニモ」

し。
上条が不憫でならないライナである。なまじ核心を突いている

御坂美琴との出会い。

それは新たな物語の幕開けだった。

第三十二章 とある日常と超電磁砲（レールガン）（後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。見つけました場合はぜひ、ご指摘いただけますようお願い申し上げます。】

お久しぶりです（ ー ）
なかなか更新できませんが、頑張りますので、気長にお待ちください
ー い（ ー ー ー ）

第三十三章 とある日常と超電磁砲（レールガン）？

「で、アンタってばどこで居候させてもらってるのよ？ライナみたいな変人を快く泊めてくれる学生なんてあまりいないはずだけど」

美琴からすれば当たり前の疑問だった。服装もおかしければ年齢だつて学生を既に超えており、ライナが怪しい人物であることは客観的にみても明らかなのである。

いくらその学生がいい奴だったとしても、まずは警備員に話をするのが普通だ。
アンチスキル

「それについては俺も同感かな。そいつがお人好しだったものもあるけど、まあ出会いが印象的だったし？・・・不幸な少年はいろいろな揉め事に巻き込まれる運命なのかねえ」

その言葉の中にふと、気になる単語があつた。

「不幸ってどういうことよ」

「ん？文字どおりの意味なんだけどさ、そいつってば事あることに不幸な出来事が起こるってゆーか？何か端から見てても呪われてんじゃないかっていうぐらい」

かわいそうな少年もいるものね、と美琴はちよつと同情してみた。

「で、誰よそれ？」

「ええ」と・・・、まあ、その、秘密つてことで・・・ダメ？」

「ダメに決まってるじゃない。いざという時にはアンタの居場所を知っておかなくちゃ困るかもしれないじゃない」

「どんな時だよ？」

「ん」と、そうねえ・・・。例えばアンタが私との月一の約束をすっぱかした場合とか？」

「怖っ！？まさかその時には襲撃してくるつもりか！？」

「さすがに人様に迷惑は掛けないわよ。用があるのはライナだけだしね。」

「お前の性格から考えて、穏便に済むはずないと思うけどなあ」

「何か言った？」

「ベツニナニモ」

失礼な男である。別に美琴だつて怒りたくて怒っているわけではないし、好きで電撃を撒き散らしているわけでもない。ただ、相手がむかつくからやるだけである。・・・それについてはもう少し精進する必要があるとは自身も思っているが。

「不幸っていうと、まさかあの黒髪ツンツン頭のヤツのところにいたりして・・・ね」

ふと苦笑気味に呟いた美琴だったが、その言葉にライナが緊張した雰囲気を見せた。何やら額には汗をかいている気がするし、視線も急に落ち着きをなくしたような気がする。

はつきり言つて挙動不審だった。

「ふん。もしかして当たりだった？」

にやっとした笑みを浮かべ、ライナの顔を覗き込んでみた。
目と目が合う。

もし、本当にその男のところにライナが居候させてもらっていたならば、美琴にとってはとてもおもしろい結果が生じたことになる。

何せどちらにも倒すべき仇敵だからだ。

美琴の出した答えが正解であれば、今のライナの胸中では穏やかではないだろうと察する。

（なんで私がそいつの事を知ってるのかという疑問と、言ったら最後、家に押しかけられるのは目に見えてるでしょうし）

自分の考えなのに少し笑い出したくなる。
バトルジャンキー 戦闘狂とか言われてもある意味では仕方ないのかもしれない。

（目標の打破か、ストレスの発散かもしれないけど、あるいはただ単純に楽しいからだったりしてね）

自分のことながら、あまり分らない。
はつきりとした答えが出ないまま、ライナの答えを待ちわびる。

そしてやはり、ライナの胸中は穏やかではなかった。

（な、何！？まさか当麻も美琴と知り合いだったのかよ！？まあ、当麻は不幸だもんな。そういうことはあり得たことだけど、しかし！ここではれたら厄介なことに！！）

あの馬鹿のことである。美琴と一戦もやらかしていないはずがない。

つまりここは、余裕の笑みで断るしかない。

「ハハハ、何を言ってるんだ美琴？そ、そんな奴とは全然知り合
いじゃねーよ」

やばい。ちよっとどもってしまった。

「ホントに？」

美琴がジト目で自分を睨んでくる。心苦しいし、思いっきり不審がられている気がする。

（目をそらすな俺！ここが男の見せ時だ！！）

「ホ、ホントだって！」

じつと美琴の目を見返して固まる。

時間にして数秒か数分か。ライナには途方もなく長い時間を感じられた。

実際には数秒後、美琴がふつと苦笑して視線を逸らした。

「・・・まあ、いいわよ。とりあえず今日のところはここまでにしといてあげる」

言い方に含みがあるような気がするが、これ以上追及されないのは有難い。

小さく息を吐く。

そうして思いのほか自分が緊張していたのに気がついた。

何だって、こんな必死に否定しなきゃいけないのかねえ、と美琴には聞こえないように口の中で呟いたライナである。

「それにしてもライナ、やっぱりアンタの瞳ってホントに綺麗な五方星よねー。普段でも目を凝らしたらうつすらと見えるし、さっきみたいに覗き込んでみるとよく見えるわ。学園都市製のコンタクトでも再現できないんじゃないかと思えるぐらいには」

「・・・褒め言葉として受け取っておくよ」

モノがモノだけに素直には喜べないが、この忌み嫌われる複写眼アルファ・ステイグマを綺麗だと言ってくれる人はそういない。

案外、性根は心優しい奴のなのかもしれない。・・・フェリスのよう。

（まあ、たしかに見た目だけは綺麗かもしれないな）

「さて、じゃあ私はもう行こうかな」

「じゃあ、俺もそのベンチで昼寝するか」

「・・・アンタはもう少しその自堕落な生活と性格をどうにかすべきだと忠告しとく。またね」

軽く此方に手を振りながら、美琴は立ち去って行った。

ライナもベンチの上にごろんと寝転がる。

視界に広がるは蒼穹の空。

少々暑いことには変わらないが、木陰でじっとしている分には絶好の昼寝日和と言えなくもなかった。

第三十三章 とある日常と超電磁砲（レールガン）？ （後書き）

【誤文、散文、誤字、脱字、誤表現】などなど多くのミスが予測されます。見つけました場合はぜひ、ご指摘いただけますようお願い申し上げます。】

もつと中身を増やしたいところでしたが、やはりまだ時間がないのでここまでにしておきます。

二月以降になればもつと増やせると思いますのでしばしお待ちを・・。

次はいよいよ御坂妹が登場！

本作とは少し流れが違つかもしれませんが、楽しんでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4561/>

とある伝説の勇者と禁書目録

2011年11月27日11時49分発行